

國學院大學学術情報リポジトリ

折口信夫の生成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 博明, Matsumoto, Hiroaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002443

はじめに

折口信夫研究にとつて、その基礎作業となるテキストの評価と確定の現状は誠に厳しい状況といわなければならない。

筆者が折口博士記念古代研究所において、新全集編纂が始まる以前から、正確に言えば平成二年から平成十年にかけて行つて来た自筆原稿の比定と資料解読、さらには資料評価とテキストクリティシズムの段階から、恐らくほとんど進展していない。研究者にその重要性が理解されなかったためでもあり、また折口信夫研究の大勢が彼の作品を近代文学のテキストとしてとらえる視点が欠けていたからに他ならない。

折口の仕事は古代から同時代作品までを見通す営為であつたし、確かに民俗学、言語学、宗教学といった領域にも容易に浸潤する内容を持つてはいた。それが「折口学」という大きな体系的考え方の中で読み込まれ、又解読され、評価されてきたことは、確かに大きな成果であつた。が、しかしそれとてよく考えてみれば、日本の近代が問いかけた『文学研究』という課題でありまた解答であつたことに変わりはない。加えて彼がもつとも心に留めたのは文学、とりわけ短歌を中心とする律文学であり、短歌の滅亡をあのように予見しながら、ついに最後までその境涯に付き合おうとした、短歌創作への執着を見ても、彼から発せられたテキストはあくまで近代文学の作品としてとらえるべきことは、もつと前から認識されてきてもよかつたはずである。しかし、折口信夫を近代文学のテキストとして措定しその中で評価するという仕事はほとんど行われてこなかつたといつても過言ではない。

最近、一部の近代文学研究者によつて、折口をやつと近代文学の中に解き放つ試みが行われているが、しかしそれを行うのであれば、その前提としてやつておかなければならない重要な基礎作業がある。それは近代文学に限らず文

学を研究する者であれば当然考えなければならない本文評価の問題である。しかし申し上げたように、折口の本文は、多く厳密な評価をくぐっていないのが現状である。現在もとも信頼されるべき本文である新編集決定版『折口信夫全集』（中央公論新社、一九九六年から刊行、以下『新全集』）においてもそれは十全になされたとは言いがたい。中央公論社という一般書肆による全集出版という営業政策にかかわる制約、編纂チームの専門領域の問題など、テキスト評価とその成果をどのような形で世に問うかという課題は、常に頭上にある。ましてや、折口という対象そのものが、甚しく多様な、そして読み解きがたきテキストをこの世に残して逝ってしまったことを考えると、折口信夫の本文確定という仕事は容易ならぬ課題なのである。しかしそれをないがしろにして何ごとかを言っても、それこそ砂上の楼閣になりかねない。

こうした折口テキストの評価という問題に関して、最初に直面するのが、彼の多様な自筆資料および関連資料群の存在である。

先述したように、『新全集』編纂前の『折口博士記念古代研究所紀要別冊資料集』（第一輯と第二輯、いずれも折口博士記念古代研究所発行）編集に先立って、相当量の折口テキスト関連資料の解説を行ったが、そこで実感したことはその種類と質の多様さである。それは彼の執筆形態の複雑さからくるものであるが、一方執筆する内容や時代によっても異なるという事情がある。

彼のテキスト関連資料は大きく分けて以下の三通りに分類される。

- ① 折口信夫自筆資料（原稿、ノート、手帳その他） □ 第一次資料
- ② 折口信夫加筆資料（原稿、ノート、抜き刷り、校正刷り、切り抜き、図書資料その他） □ 第二次資料
- ③ 他筆原稿（清書原稿、講演筆記、授業ノート、放送筆記その他） □ 第三次資料

これは当初筆者が膨大なしかも未整理の自筆資料を解説分類する際に用いた便宜上のものであるが、しかし後に考

えてみると、この分類のあり方以外に折口の原稿執筆の過程を抱え込むのは難しいと思われる。折口のテキスト関連資料はおおかたこのカテゴリーに収まる。

①は言うまでもなく自ら筆を取り原稿用紙あるいはノート、手帳などに記述したものの。初期の論考の多くがこういう形で執筆されたが、それがそのまま成稿になったものもそうでないものがある。初期の論考においても『古代研究』民俗篇二などでは、伊勢清志、北野博美、牛島軍平をはじめとする弟子や周辺編集者への口述筆記原稿が主要なテキストになったことは、『古代研究』の「追ひ書き」に次のような記述があることから知れる。

口だての筆記文が、大分交つてゐる。これでは随分、友人北野博美さんのおせは、になつてゐる。其雑誌の為に、私の講義・座談を書きつづめて、めんどろな私の発想法に即きつ離れつして、大抵の人に決る程度にして下された友情を、あり難く思ふ。かうでもして頂かぬと、発表し洩る私なのである。國學院雑誌記者時代の、宮西惟喬さんを煩した物も二三ある。

古い物では、家の鈴木金太郎や、油絵の伊原宇三郎さん・水木直箭さん・牛島軍平さん・三上永人さん・今泉忠義さんなどにおしつけて、筆記や、書き替へをして貰うた横著の記憶がある。

自分では「横著」といつているが、彼のおびただしい手帳やメモ類、さらに数次にわたる書き直しを施された原稿を見れば、彼が横着だなどと信ずるものはいない。思考が展開をする毎に改稿を重ね、ついに成稿に至らない、という事実を確認できるだけだ。

折口が最初に言及した北野博美は、折口の筆跡を極めて上手に真似たものらしく、民俗関係の原稿の中には、折口のものと同様に酷似した筆跡ながら自筆とするには疑義のあるものが散見される。また折口の述懐にある牛島軍平、鈴木金太郎などの手になる清書原稿も相当数残存する。

『古代研究』から、加筆、清書資料が次第に増えていくが、このことは発表の場所が次第に増えてきたこと、恐ら

くそれと関連して弟子達の口述筆記、清書という事態が増えたことと無縁ではない。加筆清書原稿の多さ、それだけを取り上げてみれば、巷間言われるように、折口は専ら口述筆記で原稿を書いたという証左になりそうだが、実はそうではない。口述筆記に至るまでのいわばメモ書き、走り書き、目安、断片のたぐいがおびただしく残されていて、それらが、自筆原稿や清書原稿の一部を成しているということがしばしば認められる。すなわち、ある一つの論考、あるいは作品を取り上げてみても、彼のテキストはその定稿化の過程で極めてバラエティに富んだ形で存在し、またそれらが互いに複雑に入り組みながら展開しているという状況を示しているのである。彼の執筆形態は多様であり、執筆内容や事情によって自筆原稿がそのまま定稿になることもあるが、そこから開始されて、加筆訂正を繰り返す中に、ある段階で定稿化するという過程も考えられ、一定しないからである。そのあたりをきちんと調査分析し、評価しない限り、彼の作品に関しては何も言えない。

もう十二年も前になるが、『イロニア』第八号（平成七年五月、新学社）に「さまざまなテキスト」と題して、そのバラエティに富んだ原稿の様子とそれらを比較分析する基礎研究の重要性について述べておいたが、その後資料そのものを披見できなかったこともあり、また筆者の怠慢もあって、それは十分に果たされずにいる。

折口のオリジナル原稿は、私が折口全集編纂に関わって整理した段階で二二八の原稿が表題を与えられている。（まだ十分に資料評価をしていないものも含まれる。したがって、資料名については仮の名をつけてあるものもある）また、三三一点の手帖のうち百点ほどはまだ未解説である。

この段階で整理を中断し、一次資料については、あらあらの情報を入れたデータベースを作っているが、それは一連のまとめを持ったものに限られ、それ以外の未定稿、断片のたぐいは未整理、未評価のものが多く残されている。これらの未整理資料の解説と評価が、『新全集』において定めたテキストの本文評価という側面から言えば、極めて重要な意味を担っていることは疑えない。

自筆資料については、もうひとつ重要な要素がある。それは、自筆原稿自体の様態の問題である。

折口の自筆原稿の特徴は、筆跡が一樣でない事である。加えて、極めて良好な筆跡から割合スムーズに読み解ける原稿と、思考や発想の固定に難渋し尽くしたかのようなほとんど何が書いてあるか分らないような原稿とが並存する。また、全く別の人の筆跡と見紛うようなまるで異なった筆跡をもつ原稿もある。一方いかにも折口の字と思われるものが、字個々の運筆や癖を比較してみるとどうも折口の手ではないと思われるものもあつて、気を抜くことができない。また手帖、メモのように彼自身の手控えのために書かれたものは、判ずるには技術と時間を要する。加筆原稿についても、書籍などに加筆した場合はその余白を利用して書かれた字はゴマ粒の様に細かい。さらに使用するペンの問題がある。さまざまな色、太さのペン、鉛筆が使われており、時に墨で加筆してある場合もある。みず色、ピンク色のインクは脱色が激しく、判読するのにはなはだ苦勞する。

例えば『新全集』第九卷に載せた『迢空万葉集』は、文會堂版国文口訳叢書『口訳万葉集』の余白に橙色のインクを用いて訂正加筆しており、ほぼ二ミリ程度の大きさの字に解読が難渋し、また字がつぶれているものもあつて完読にほぼ三ヶ月を要したほどである。

ことこのように、折口信夫の資料研究は、折口信夫研究の基礎となるべきものだが、しかしその実態はこれから本格的な作業に入るといふ実態なのである。こうした作業を経て蓄積された資料が、今後の折口研究、ひいては日本近代文学研究に果たしうる役割は大きいといわなければならない。

蓄積された資料を前にして、折口信夫研究の一つの方法として彼の残した草稿類をテキストとして読み直すこと、一つのテーマに向けて書かれたおびただしい「さまざまなテキスト」を整理しその位置関係をつかむことで、折口の手稿執筆の過程およびその思考の展開を跡付けることが重要であろう。

と言いながらも、今までここに書き記してきたことは、まさに本書に収録した原稿を書き継ぎながら、折口信夫と

いう存在とどのように向き合っていくか、模索してきた結果である。初期の論考は、かなり「折口学」という枠組にとりこまれているのを痛感する。読み返してみれば、堂々めぐりのどうにもならない論もくどくどしい論もあえて収録した。それは、ここに収録した論考を書き継いでこなければ、恐らくは折口信夫と対峙する覚悟もできなかつたし、今の考えの場には立てなかつたと思うからである。

ここにきて、初めて私は折口テキストの多様性と重要性をこの身に引き受け、そのテキストを近代文学の対象として改めて置き直し、正面から切り込む覚悟が出来たと考えている。そういう意味で、この書を折口信夫の生成論的研究を展開するための反省として、そして一つのステップとして位置付けさせていただきたいと思う。

折口信夫の生成
目次

はじめに

第一章 短歌の行方——様式・非短歌・生活・律・虚構

第一節 旅——短歌と学問とを架橋するもの

「黒衣の旅びと」……………15 昭和五年東北探訪——やがて一人旅へ……………17

実感から創作・論文へ……………21

三信遠の旅と「かそけさ」「ひそけさ」の境地……………30

第二節 「叙事詩」と「語部」について——「折口語彙」の相対化

折口ワールドからの離脱……………36 「折口語彙」の相対化……………38

『帝国文学』と「叙事詩」……………41

「叙事詩」の発見と再生・創造……………44 国民的叙事詩……………46 叙事詩としての「平家物語」……………50

第三節 詩の形式と内容

折口用語法の揺らぎ……………58 内容的音律……………60 「和歌批判の範疇」……………61

形式内容の問題と生活律……………67

第四節 釈迢空「非短歌」の意味

短歌形式への懷疑……………73 句読点、字あけ……………77 「非短歌」へ……………81

第五節 「非短歌」と東北探訪

はじめに……………85 昭和五年頃の東北……………86 短歌形式からの離陸……………90

第六節 「うみやまのあひだ」の変相

はじめに……………97 「うみやまのあひだ」の本文……………98 テクストの位相……………102

「うみやまのあひだ」という問題……………108 仮のとりじめ……………115

第七節	分節する歌集——『天地に宣る』論	
歌集『天地に宣る』	……	119
『天地に宣る』とは何か	……	128
問題の所在	……	120
『天地に宣る』の構造	……	122
第八節	未刊行本『歌虚言』——「虚構」の問題	
未刊行本『歌虚言』	……	133
『歌虚言』の構成	……	134
『歌虚言』の内容	……	139
折口春洋追慕の書	……	141
『歌虚言』の編集	……	143
草稿の形態	……	147
『歌虚言』とは何か	……	153
虚構としての歌物語	……	156
第二章	折口信夫——小説の意味——視覚と聴覚の交錯	
第一節	「生き口を問ふ女」の構想	
怪談咄	……	163
新たな自筆原稿	……	165
「生き口を問ふ女」の構想	……	170
「生き口を問ふ女」の系譜	……	174
第二節	自伝的小説の系譜	
「生き口を問ふ女」以前	……	179
第三節	「生き口を問ふ女」の続稿	
本文小説の本文評価過程	……	187
欠落を補う続稿	……	190
第四節	「生き口を問ふ女」と「神の嫁」	
視線の横溢	……	197
まなざしから聴覚へ	……	200
「家へ来る女」とは何か	……	203
第五節	「死者の書」のテキストとその生成	

「死者の書」のテキスト……………	210	章段の改変……………	212	分節するイメージ……………	215
推敲の現場……………	218				
第三章 『古代研究』への道					
第一節 「語部論」の揺籃——折口信夫の発生					
はじめに……………	229	折口信夫と『帝国文学』……………	230	「語部論」の揺籃と周縁への志向性と……………	238
「万葉談義」……………	241	「語部考」の内容……………	244	ノート「語部の説」……………	247
「国民詩史論」……………	254				
第二節 「わかしとおゆと」——折口信夫と金澤庄三郎					
「わかしとおゆと」と「用言の発展」……………	260	一つの「わかしとおゆと」……………	263	二枚の絵葉書……………	268
第三節 「古代研究」と国学の再興——折口信夫と柳田國男					
折口信夫宛柳田國男書簡……………	273	柳田國男の道筋……………	279	折口信夫の真意……………	282
国学の再興ということ……………	285				
第四節 昭和五年の折口信夫——東北・新野探訪の意味					
『古代研究』民俗学篇第二……………	291	雑誌『民俗学』……………	295	柳田國男の立場……………	296
北上山地探訪・新野探訪手帖の目安……………	299	目安の意味……………	305		
第五節 柳田國男の「郷土」と折口信夫の「郷土」					
「郷土」の概念……………	310	折口信夫「郷土と神社及び郷土芸術」……………	312		
柳田國男と折口信夫の「郷土」——雑誌『郷土研究』と『土俗と伝説』……………	317				

	「郷土研究」から「郷土文学」へ……………	325
第六節	「古代生活の研究」本文成立をめぐって	
はじめに……………	329	
	「日本文学の発生」から「古代生活の研究」へ……………	333
「古代生活の研究」本文の原態……………	335	
	『古代研究』生成論に向けて……………	340
終章	生成論研究の地平へ	
初出一覧		372
あとがき		375

第一章

短歌の行方

——様式・非短歌・生活・律・虚構

第一節 旅——短歌と学問とを架橋するもの

「黒衣の旅びと」

北原白秋が、その詩人的直感から、折口信夫、釋迢空の羈旅歌から受けるその旅のありようを「黒衣の旅びと」と称したように、いかにも折口の旅は、「黒衣」をまとうて自らを律するような旅であったようだ。

北原白秋は次のように書いている。

若しこういう旅びとと山奥の径や深い林の中で遭遇したら、それは明るい日射の下ではあっても、冷々とした黒い毛ごろもの気色や初めて触れて来るたましいの圧迫を感じずには、すれちがえない或るものがあるう。

（北原白秋「黒衣の旅びと」、中央公論社『折口信夫回想』、昭和四十三年 二四〇頁）

この「或るもの」とは何か。折口信夫の旅を考える上で、この白秋の言う「或るもの」を無視できない。それは単に作家の個人的な「気迫」とか「情念」とかいふものにとどまらない。「すごみ」を帯びたまなざし、あるいは他者の精神にたやすく同期してゆく心性というものに他ならないのだが、そうしたまなざし・心性を自らの身内に沈めて、彼は一生涯旅を続けてきたといえる。

もちろん旅といっても、例えば講演をするためのもの、公務によるものなどさまざまであっただろう。そういう旅をすべて年譜、生涯六百余首にのぼる短歌作品、あるいは『新全集』四十一巻、『ノート編全集』二十三巻に収められたおびただしい数の論文講義などから拾って来て、それを日本地図上に落としてみると、たしかに見事なぐらい立て続けに旅に出、そしてその行き先も全国に及んでいる。

しかし、折口の旅は、こういう実際の「旅」という概念だけでは抱えきれない要素を持っている。つまり空間的移動だけではない、「時空」を超えたものとも言おうか、それも折口の旅を考える上で、重要なテーマであると思われる。

時空を超えた旅というのは、簡単に言ってしまうえば、旅先で出あうあらゆるものの中に歴史を発見するということだ。ここでいう歴史とは、単にその場所でのどのような事件が起きたかとか、いかなる歴史的事実があったかとかいう、そういう一回性の出来事をさすのではない。その地に生まれ、生き、去ったおびたしい人の、それぞれの生の営み、あるいは苦しい流離の末に死した旅人の境涯、そうした人々の生を支えていた情熱や喜びあるいは悲しみというもの、歴史的事実や民俗伝承、あるいは文学というものをある方向にいざなっていく。それぞれの生の営みの中にはもちろんそれぞれの心があるけれど、それらはまったくばらばらに動いているわけではなく、底深いところで繋がっているある感情の力によって、一つの方向に導かれている。折口の語彙「発生」ということばにつながる要素だが、そうした「発生」の内実を実感する旅でもあったわけである。古人と旅先で交感する、つまり「遠つ人の心」を自らの心によみがえらせること、それが折口の旅の本義であったろう。そこに、先程言ったまなざしと心性とが発揮されてくる。その結果として短歌が作られ、その交感のありようをじつと伶俐に見つめるまなざしがかれの学説を形作っていった。

そう考えていくと、年譜に記載されてある旅は、そうした旅の足跡のほんの一部分にすぎないわけであって、いわば折口の一生涯が、そしてその作品、論文すべてが旅であったといえる。「黒衣の旅びと」とは、そうした折口の生涯の生き方そのものに冠せられるべき謂いであるだろうし、白秋は折口の歌の背後にそのような広大な地平を垣間見たのだ。

折口信夫は生涯にわたって数多くの旅を続けてきた。しかし、その中でも明治四十五年（一九一三）から昭和五年

(一九三〇)にかけての旅は、折口にとって創作と学問とが、交互に織り成しながら成立していった時期と重なって重要なものであるといえる。特にこの時期の、歌を残こした旅は、かれの生涯の中でも特別な意味を持っていたと考えられる。

繰り返すようだが、折口信夫の旅、それは彼の学問の基層を成す部分を固めていくことと大きく関わっている。したがって、彼が何を見、何を実感したかということが重要な意味を持つてくる。それとともに、こういう時期に、優れた歌が多く作られている場合が多いということも言える。したがって、折口信夫の生涯にわたった旅の中で、短歌を作っている旅と、学問を形作っていった旅とは、ある程度重なってくる。彼の短歌創作あるいは小説などの創作と、学問の成立とは、旅という行為で結ばれた不可分の関係なのである。

昭和五年東北探訪―やがて一人旅へ

まずは、昭和五年(一九三〇)の夏に行われた東北探訪について取り上げよう。

折口は、昭和五年八月三十一日に遠野に入り、その後約四日で北上山地を縦断する。同行者はかつて『遠野物語』の素材を柳田に語った佐々木喜善だった。病中の佐々木を促して大変な苦行の旅を続け、久慈に至っている。いま考えると正気の沙汰とは思えないのだが、そこからさらに津軽まで足を延ばしている。その後堰を切ったように折口は翌年も、さらにその翌年にも東北地方を旅する。昭和五年というのは、折口信夫が北へまなざしを向ける契機となった年と言える。

不思議なことに、折口は昭和五年まで東北には一度も本格的に足を踏み入れていない。『古代研究』の「追ひ書き」にもあるように、『石神問答』をはじめとして『遠野物語』『後狩詞記』など柳田國男の初期の著作に大きな影響を受けて、自らの進むべき道、学問上の方法を見つけていった折口だが、そのことを考えると、逆になぜもつと気軽に遠

野へ赴かなかつたのか、という疑問が以前からあった。よく言われるように、師の学問的出発を促した「遠野」というフィールドを侵すことを避けたのか、それともほかに理由があったのか、それは定かにはわからないが、ただ、昭和五年という年は、折口にとって、学問上の大きな契機であったことだけはいえる。

この年の六月に、最初の論文集である『古代研究』全三巻が、民俗学篇第二の刊行をもって完結する。柳田にも贈っているのだが、この柳田から六月二十九日付けで、折口の学問はフオークロアとはいえない、という手厳しい叱正の手紙を受け取る。折口がはじめて遠野に足を踏み入れるのはこの直後のことで、当然この柳田の批判とは無縁ではあるまい。折口は『古代研究』の「追ひ書き」に

学問の上の恩徳を報謝するためには、柳田國男先生に献るのが、順道らしく考へないではない。でも、その為には、もつと努力して、よい本を書いてからにせねばならぬ気がする。其ほど、先生の学問のおかげを、深く蒙つてゐるのである。先生の表現法を模倣する事によつて、その学問を、全的にとりこまうと努めた。先生の態度を鵜呑みして、其感受力を、自分の内に活かさうとした。私の学問に、若し万が一、新鮮と芳烈とを具へてゐる処があるとしたら、其は、先生の口うつしに過ぎないのである。又、私の学問に、独自の境地・発見があると見えるものがあつたなら、其も亦、先生の『石神問答』前後から引き続いた、長い研究から受けた暗示の、具体化したに過ぎないのである。

『新全集』第三巻 四六五頁

と書いて、『古代研究』全三巻は、柳田の方法から学び、それを踏襲してきた宮為の集大成であることを吐露しているが、それに対して結果的に柳田から一見予想外の非難を受けてしまうのである。

しかし、折口は柳田のこの批判を半ば予期していたふしがあつて、おなじく「追ひ書き」に

先生の益俸まぬ精励が、我々の及ばぬ処までも、段々進んで行つて居られ、新しく門下に参じる人たちも、殖え

てゆく一方である。或は心理学的に、社会的に、日々新しい研究法を加へて行かれる姿がある。発足点から知つた私自身は、一次・二次のものに、固執してゐるかも知れない。使徒の中、最も愚鈍な者の伝へた教義が、私
の持する民俗学態度かも知れない。 (同)

と語り、柳田の方向性とその方法が、初期のものから次第に変化してきて、自らの行く道とは異なる方向へ進んでいつていることを寂しがっている。

柳田はこの頃、民俗学を科学として自立させることに苦心しており、それはとりもなおさず柳田自身がそれまで抱えていた方法、つまりは『遠野物語』や『後狩詞記』などで行つていた方法を切り落とさなければならぬ事態を意味していた。

つまり、結果的に『古代研究』全三巻は、好むと好まざるとにかかわらず、折口信夫にとつて柳田への惜別の書になつたといえる。もちろん柳田への報謝の思いは、その後も生涯にわたつて持ち続けられるわけだが、この時点では折口は自らを育てた親からとりあえず自立する道を選んだ。そして、自らの学問の初発に彼を駆り立てた方法に、再び乗り出そうとしていた。それが昭和五年（一九三〇）の遠野の旅であり、その後繰り返し行われる東北探訪の意味であつたらうと考える。(第三章第四節参照)

さて、この約一五〇キロを踏破する北上山地の旅でも折口は多くの歌を詠んでいる。昭和七年（一九三二）十二月『短歌研究』第一巻第三号に発表された「猿个石川」という連作。

猿个石川に ひとすら沿ひのぼり、水上^{ユヅカミ}ふかきたぎちを 見たり

みちのくの 幾重かさなる荒山の あらくれ土^{ツチ}も、芝をかつけり

山なかは 賑はへど、音澄みにけり。遠野の町にあがる 花火

峠三つ 越ゆる道なり。昼たけて、縣巫^{イタコ}の馬を 追ひこしにけり

日のうちに 山いくつ越ゆる旅ごころ まれに行きあふ人に もの言はず

みちのくの 九ノ戸の町に やどりつゝ、この夜すごさむ——。心たらひに

みちのくの 九ノ戸の町の霧朝に、聴きわきがたき 人の声ごゑ

山深き家にやどりて、心疼し。せはしくはたらく 家むすめかも

それぞれの歌をみると、折口信夫の歌というものは、単に旅の情景や風景、あるいは旅で感じた情感を写實的にこして歌っているだけではない。ここでも、折口のまなざし、見ているもの、聞いているものは、賑わう町に上がる花火であるとか、あるいは出会った縣巫の馬であるとか、宿で働く家むすめであるといったように、かの地に暮らす人々の生の営みと、それが映し出すものに着実に五感が届いている。苦難・苦行の旅の中、ゆくりなく出会う人の生活に届くまなざし。そうした旅のありかた、あるいは旅先における自らの歌のあり方というものを、この頃折口はしきりに振り返っている。

昭和五年九月刊の『現代短歌全集』（改造社）第十三卷所収の「釋遙空集」というアンソロジーの「追ひ書き」で折口は、自らの旅をこなふうに述懐している。東北探訪とちようど同じ頃に書かれた文章である。

私は、町人の子である。人事に、心を動されることが、頗深い。若くから自然に狎れきつて、海山の間の遊行を娛しんだ。けれども、山も海も見る為ではなかつた。そこに営まれるひそかな人生に触れたかつた為らしい。旧制約の下に、肅然と整頓した社会を見たかつたものと思ふ。

（釋遙空集追ひ書き）『新全集』第三十一卷 三二三～四頁

文章の中ほどにある「けれども」という語が重要なポイントだろう。山も海も見ると、単なる物見遊山の旅をしていただけではないのだ。単に写実をつくっていたのでもない。そこに営まれるひそかな人生に触れたかつたのだ、と言う。実はこの部分が遙空短歌の本質であって、また同時に折口信夫の学問と底でつながっているということになる。

『古代研究』の「追ひ書き」ではさらに次のように述べる。

私は、過去三十年の間に、長短、数へきれぬほど旅をして来た。その中でも、近い十五年は、旅をする用意が変つて来た。民間伝承を採訪する事の外、地方生活を実感的にとりこまうと努めた。私の記憶は、採訪記録に載せきれないものを残してある。山村・海邑の人々の伝へた古い感覚を、緻密に印象してえた事は、事実である。書物を読めば、此印象が実感を起す。旅に居て、その地の民俗の刺戟に遭へば、書齋での知識の聯想が、実感化せられて来る。

『新全集』第三卷 四六九〜七〇頁

折口における民俗学の成果は報告書という体裁をほとんどとらない。ではここで言う「採訪記録に載せきれないもの」はどう記述されたのだろうか、折口は言う。「民俗の刺戟に遭へば、書齋での知識の聯想が、実感化されてくる」と。それは歌によつて果たされていたというべきだろう。ここで言うように「実感的にとりこまう」とする意図は恐らく、民俗をそのまま記録するためではなく、一度折口の五感を通じて彼の意識の中に抱え込まれた上で、改めて折口の「民俗」として表現されるべきものであったのではないか。つまり、歌を含めた創作とは、折口が「山村・海邑の人々の伝えた古い感覚」を実体験し、そしてそれをそれぞれの様式特性を借りて折口の言葉で改めて語られたものということも出来る。ここに語り部としての折口信夫の姿が垣間見えてくる。

この昭和五年（一九三〇）の時期に、こうした半生における旅が自らの学問と創作と密接に関わっているということとを述懐するということは、先の柳田との一件を思い起こすまでもなく、暗示的だ。

ここにいたるまでの、創作と学問とに織り成された折口の旅、その旅の道すじを改めて辿ってみたい。

実感から創作・論文へ

折口の初期短歌、特に中学生ころから大学生にかけての歌は、その歌風において非常に多様なものが同居している。

新詩社風のものが多い中に、万葉調、王朝物語風、または近代的情調を伴った歌などが混在しており、内容も一定しておらず、未完成という感を強くする。大学入学後、しばらく短歌から遠ざかっているように見えるが、明治四十二年（一九〇九）に根岸短歌会に初めて出席してから、『アララギ』に接近して行く。しかし決して『アララギ』の歌風に拘泥するということはなく、むしろ多くの歌に学ぼうとする姿勢を見せている。

中学から大学にかけて、短歌創作に共通する傾向は、一貫して自己の内面に対峙しようとするもの、しかも相聞という様式においてそれをなそうとする意識の強いことだ。たとえば

むさし野は ゆき行く道のはてもなし。かへれと言へど、遠く来にけり

かれあしに 心しばらくあつまりぬ。みぎはにみつゝ ものをおもへば

大空の鳥も あぐみて落ち来たる。広野にをるが、寂しくなりぬ

山のひだ さやかに見えて、大空に 昏れゆく菟道ウサヂの春をさびしむ

わがさかり おとろへぬらし。月よみの夜ぞらを見れば、涙おち来も

杉むらを とをゝに雪のふりうづむ ふるさと来れど、おもひ出もなし

といった歌。何かしら果たされぬ思いが、彼の歌に「孤愁」あるいは「独白」といった和音を奏でさせているわけでもあるが、こうしたいわば近代的孤愁感というものは、折口のどの時代の短歌にも共通して現れる傾向といえる。これらの歌には、辰馬桂二、伊勢清志といった、彼が特別に愛情を注いだ友人あるいは教え子との生活体験が、色濃く反映していることは事実だろうが、それだけではなく、内省する近代人の姿へのあこがれというべきものでもあったのだろう。

そうした感覚をも内在させながら、根岸短歌会に出稿するようになった翌年、明治四十三年（一九一〇）あたりから、折口の歌から従来の万葉調や新詩社風の歌風が次第に姿を消していく。内容も一つの傾向に定位置して、生活により密

着したものを詠うようになってゆく。たとえば

山原の麻生の夏麻を ひくなべに、けさの朝月 秋とさえたり

という歌。彼の述懐を「自歌自註」から引くと

今迄の私の作品に無かつたものが出てゐる。それは調子が単純になり、内容が簡素化してゐると言ふことである。(中略) 何だかまだ派手なものが残つてゐる。けれどもそのほかに、何だか今迄知らなかつたまとまりが出来かゝつてゐるといふ、喜びに似た安堵であつた。唯此歌の弱点は、どれ一つとして、目に見る真実として生きて来ないことである。だが小さいながら、私の態度らしいものが出て来たといふことに気がついた。これは(中略) 根岸短歌会をとほして表れて来たので、かういふ内輪な歌風が、華やかな新詩社の描いてゐる円周のほかに、も一つ、つゝましく出来上らうとしてゐたのである。

(「自歌自註」『新全集』第三十一卷 二九〇三〇頁)

後年の述懐だが、この述懐を素直に信じれば、新詩社風からさらに一步踏み出して、新たな歌風を試みる折口が存在している。その姿勢は、単純化、簡素化という傾向を伴いながら、より生活の「真実」に寄り添つたものを求めようとする姿として現れている。

折口は『アララギ』に入った理由を、その歌風を学ぶことに求めてはいない。あらゆる歌風から学んできこうとする貪欲な折口がいるだけだ。後年『アララギ』を去る理由もすでにこのときに彼の内面に抱えこまれていたわけだが、いずれにしても明治四十三年が、折口短歌にとつて転換の年であつたことは言える。そしてそこからは、『海やまのあひだ』への着実なあゆみが見えはじめていた。

折口が、『海やまのあひだ』を編む際に、逆編年体を採用したうえで、明治三十七年(一九〇四)から四十三年(一九一〇)までをひとまとめに編んだ意図は、「自歌自註」にもあるように、このころから、彼の歌風が次第に形を

成していったことを、彼自身も十分自覚していたことのあらわれだと考える。

こうした短歌上の転機を、さらに推し進める役割を果たしたのが、明治四十五年（一九一三）の志摩・熊野の旅であった。

今宮中学の二人の教え子伊勢清志、上道清一を伴ってのこの旅、十三日間に亘る旅そのものは、途中から道に迷って二日間絶食するという、ほとんど苦行に近い旅であった。しかしこの旅の途次、折口の実感が捉えたものは非常に大きいものがあつた。旅中で得られた歌を整理した百七十余首が、最初の私家版歌集『安乗帖』としてまとめられている。

この『安乗帖』は更に整理されて、次の私家版歌集『ひとりして』の第四部「うみやまのあひだ」を形成していくわけだが、やがてそれは最初の公刊歌集『海やまのあひだ』の中に主要な部分として取り込まれていく。（その生成プロセスについては本章第六節を参照）そのエッセンスともいえるべき歌群が「奥熊野」二十三首ということになる。

たびごころもろくなり来ぬ。志摩のはて 安乗の埼に、燈の明り見ゆ

旅先の船上で感じる、寄る辺ない気持ち。行く先への不安と動揺とをふと鎮めてくれるかのように灯台の明かりが明滅する。その明かりを目にしたときの心鎮まりを、宿についてから夜のしじまの中で思い返すとき、ふと旅情が揺らぐ思いがして、口をついて出てきたのがこの結句だったということだろう。折口はそれを「簡単に言つてしまった」というほどに、この「たびごころ」のゆらぎに拘泥している。そんな簡単なものではないという。もちろんそこには、彼が評価してやまない、黒人の歌が視野に入っている。

天づたふ日の昏れゆけば、わたの原 蒼茫として 深き風ふく

「自歌自註」には次のようにある。

「天づたふ」の歌は、かうして見ると私の発意のやうに見えるが、どうもこれより前何年か、万葉の中の名歌と

して私に印象してゐた、「たまはやす武庫のわたりに天づたふ日の暮れゆけば家をしぞ思ふ」及びそれをめぐる数首の歌の、瞑想的な気分が、こんな時になつて、私にかういふ歌を作らせたのである。

〔自家自註〕『新全集』第三十一卷 四四頁

ここに言う「たまはやす武庫のわたりに」という歌は、いわゆる「万葉集」巻十七「大伴旅人儂従歌」と呼ばれるもので、天平二年（七三〇）に大伴旅人が大宰帥から大納言に任ぜられた時に、彼の従者たちは海路を京都に向かつて帰るわけだが、そのとき従者たちが詠った歌として残っている。「万葉集」の中で折口はこの歌を、特に高く評価している。この従者たちの歌の中にはさらに次のような歌がある。

家にもたゆたふ命 波の上に浮きてし居れば おくが知らずも

おおうみの おくがもしらずゆくわれを いつきまさんと とひしこらかも

船に乗って従者たちは都へ帰っていくその途次であるわけだけでも、「おくが知らず」という表現に示されるように、これからいったいどういう旅が続くのだろう、旅の行く末を不安と動揺をもって見つめている。そして、この歌の心をそのままに実感して、それと同じように船旅のさなかにやがて日が暮れていくという、夜に向かう心細さと不安とをあわせたのが「天つたふ」の歌であり、また次のような歌であつたわけだ。

わたつみの豊はた雲と あはれなる浮き寝の昼の夢と たゆたふ

波ゆたにあそべり。牟婁の磯にゐて、たゆたふ命 しばし息づく

たま／＼に見えてさびしも。 かぐるなる田曾の迫門より 遠きいさり火

儂従歌そのままに「たゆたふ」と使った表現や「たま／＼に見えるいさり火」などの句に、旅に身をおく自己の不安感が表現されているが、これらの歌に限らずこの「奥熊野」二十三首いずれをとつても、万葉羈旅歌の歌いぶりが色濃く反映しているということが出来る。

人麻呂や黒人、赤人あるいは旅人の僊従歌、そして家持へとつながっていく旅の歌の系譜の中に、折口は「細み」というテーマを見出していく。つぶやくような歌いぶり、これらの歌を概観して言えることは、叙景表現と感傷とが一首の中に渾然と溶け合って、歌の調べを形成しているということであり、それが静かな沈潜した境地をもたらしている。一首の主情表現として、決してその感情を歌い上げるようなことをせず、自然に向かって静かに、まるでため息をつきながらささやくような調子で歌われている。

「細み」すなわち、感傷、沈思、瞑想といった境地の中で、悠久の自然と対峙する「自己」というものを客観的に認識してくる態度を指すといったらよいだろうか。自らの生の漂泊性、ちっぽけな人生をそのままに見つめて、自らの表現にしっかりと定位する心境、そうした心境の歌を万葉の旅の歌の中から発見している。そこからいわば「近代的自己」といふべきものが生まれてきていると、彼は認識しているのだ。

たとえば「たゆたふ命」という言葉に代表されるように、自分たちの行く末がどうなってしまうのか、寄辺なき旅の途中で「自分」というもの、つまり「私」とその「旅—自然」というものとの間に存在する「命」あるいは「魂」のようなものといおうか、そういうものをつかみとって、そのはかなさを、客観的、内省的に見つめながら、そこから静かに歌いだす。この歌いぶりに「細み」を感じていた。悠久の自然に対峙したときに覚えるある根源的な不安、あるいは「漂泊性」。漂泊というのは「旅の漂泊」にとどまらない、人生の漂泊、つまり自己の人生というのはいつ死ぬかわからない、それはまさに漂泊そのものだという「生の漂泊性」というものをも示していることになるわけである。万葉集の中にそうした思想を発見していった過程は、彼が短歌を創作する上で自分自身をその万葉の短歌の「細み」の系統の中に位置づけ同期されていく過程に他ならなかった。

こうした旅の不安、寄辺なき旅の孤独というものを鎮め、解消してくれるものは何か。それはやはり「人」である。自然の中で孤独な漂泊を続ける「われ」と、その「われ」がふとまなざしを交えるもの、「われ」と同じように生を

営み、あるいは嘆きあるいは喜ぶ「他者」の境涯だ。折口が豊かに備えていた「類化性能」は、単に学問的営為にのみ發揮されるものではなく、こうした他者への境涯へ我が身を同期させる能力としても發揮された。

その「他者」と遭遇^{であ}い、そしてその暮らしに接すること。自らは旅に住む人間であるわけだが、旅に住む人間が旅先で「ほう」とするのは、そこに暮らし続けている人の生のあり方に触れ、そこに「われ」と同じような生を営む人が居ることを実感し、その生のひそみに触れたときだろう。こうした旅先でゆくりなく出会う人々の生の営みへのまなざしこそが、彼を民俗学へと誘っていく。折口がなぜ民俗学という学問に惹かれていったのか、それは先ほど見たように「山も海も見見る為ではなかつた。そこに営まれるひそかな人生に触れたかつた」というところに帰結する。

この時期から大正期にかけて、「万葉集」に関する多くの論考が書かれているが、そのまなざしは常に万葉人の「生活」つまり「民俗」に注がれている。このことから、古人の「生活精神」を、時空を超えた形で、実際の自己の旅で出会う「生活」の中に実感しようとする試みが、すでに始まっていた。

ここでもうひとつ重要な旅について触れておかなければならない。それは、大正六年（一九一七）八月、中国・九州の旅である。この年『アララギ』の選歌欄の担当者となった折口は、地方会員のための講演、歌会の旅に出かけている。浜松と久留米で「万葉人の生活」、尾道では「万葉以前の女性」と題して講演するが、この講演にも「生活」という用語が選ばれている。この言葉を仲立として、古代と現代とを時空を超えた形で意識化しようとしていることがうかがえる。

講演の後、折口は再び九州に渡る。その直接の目的は、その前年鹿児島の高校へ入学させた愛弟子伊勢清志に会うためだったと思われるが、しかし伊勢と面会后、宮崎を経て大分まで、九州東海岸を採訪して歩く。そのため一ヶ月にわたって無断欠勤をかさね、勤めていた中学を解雇されるという事態を引き起こす。なぜこのような事態になるまでして九州を歩かなければならなかったのだろうか。この理由を暗示する発言が、「海道^の砂」に残されている。

尾道に来た。山と海との間の細長い空地に、遠く延びた町である。山の上には、寺の薨や畑や田が見えるばかりで、人はまだ幾程も山を領有してゐない。山陽線を西に走るほど、山と海との接近の度が強くなつて来て、この二つの大きな自然に脅かされて蹢躅^{チヂム}つて住んでゐた、祖先の生活が思はれる。柳田先生は、日本を山島と異名してゐられる。わたしは天野家の稍かけづくりの傾きを持つた二階座敷に居⁺て、日本人の恐怖と憧憬^{シヨウキョウ}との精神伝説を書いて見たいと思つた。

すぐ前には、出雲越えの峠が、赤々と夕日に照つてゐる。僅かな峡村の窪地には、真中を細い川が流れてゐて、浦近い事を思はせる様な塩じみた葦の葉が延びて見える。さうした景色をば見おろしながら「わたつみかやまつみか」「妣の国へ常世へ」この二つの創作の題目が胸に浮んで来た。

（海道の砂 その一『新全集』第三十三卷 四九頁）

山と海との間にほんの少し与えられた土地に、静かな境涯を送る祖先の生活、その生活規範をまるで古典のように守り現代に至らしめた人々の暮らし、それは特別な暮らしではなかった。ここに至つて、「海やまのあひだ」という觀念は、日本人が生を営む場として普遍化されている。その実感をさらに確実なものとするために、彼は九州へ赴いたのだから。

この旅においても短歌が作られた。「山および海」と題して『アララギ』（第十卷第十一号、大正六年十一月）に発表されるが、それがやがて大正九年（一九二〇）に『國學院雜誌』（第二十六卷第五号）に再掲された際には、「奥熊野」の連作と合わせて「海やまのあひだ」として一つにまとめられている。このことは、「海やまのあひだ」という觀念を、地域をこえて日本の民俗という枠組みで統合しようとした意思を示すものだと考えることができる。

つまり、奥熊野からこの九州に至る旅の中で、海と山とに暮らす日本人の生活の様式が、折口の中にある実体をもつて見えてきたことである。それは単なる、個別な旅の実感としてではなくて、「海やまのあひだ」に営ま

れてきた、日本人の時空を超えた「生活」そのものへの深い共感と同期というものであった。この旅は「海やまのあひだ」に盛り込まれたさまざまなテーマが、折口の中に具体的に立ち上がってきた重要な旅であったといえる。大正九年（一九二〇）に論文として発表される「岨が国へ・常世へ」が、ここでは創作の題目として意識されていることは注目していいだろう。この旅が、志摩・熊野の旅の実感を反芻するものであったことは明らかだ。しかしそれは結果的に創作の形ではなく論文として発表されるに至った。

旅によって得られた見聞は、実感という装置によってからめとられ、やがて歌という表現様式をくぐった後、彼の中に内在化し、それが再び緻密な類化性能によって整理されたとき、彼の学問が立ちあがってくるということになる。「岨が国へ・常世へ」だけでなく、「異郷意識の進展」「古代生活の研究」など『古代研究』の中の主要な課題である「異郷論」「まれびと論」は、ここから着実な歩みを見せ始める。

この明治四十五年（一九二二）志摩・熊野の旅、そして大正六年（一九一七）の中国・九州の旅、この二つの旅で獲得した成果は、日本人のひそやかな人生とはいったいどのようなものだったのか、それを実感した上で、再び反芻し、緻密な形で改めて論文のかたちでこの世に送り出すことだった。海のかなた山のかなたから時を定めて来たり臨むおとずれ人と、そのおとずれ人のふるさと、さらにはそれに向ける人々の情念を実感したことだった。そのことが、日本人における異郷意識という問題への接近となる。志摩・熊野の旅中、大王ヶ崎の尺端に立ったとき感じた思いを、「はかない詩人氣取りの感傷と卑下する気持ちになれなかつた」といい、そして「懐郷心の間歇遺伝」として捉える心には、また、尾道の旅館で「恐怖と憧憬の精神伝説を書いて見たいと思うた」とする心には、あきらかに古人の心を自らの身に受けて実感しそれを具体化しようとする志が横たわっていたはずである。

三 信遠の旅と「かそけさ」「ひそけさ」の境地

折口信夫のもうひとつの旅を見てみよう。大正九年（一九二〇）信州の旅だ。

この旅は、折口の民俗学成立の上でも重要な契機となるものの一つで、ここから彼の学問が、ある意味では確実な歩みを始めたといってもいい。

『古代研究』のテーマから考えれば、「山のまれびと」ともいべき課題に属するものが、ここからヒントを得て初発していく。時を定めて来るおとずれ人の存在と、そのおとずれ人を待ち望む村の人々の情熱と心のあり処を、折口は自らの心の中に内在化しようと試みている。そうした人々の心を実感して多くの短歌が作られている。

この旅から題材を得た連作、いずれも『海やまのあひだ』所収のものとしていえば「遠州奥領家」（初出『白鳥』一四、大正十一年七月）、「奥遠州」（『日光』第一卷第一号・第五号）、「山住み」（『同』第一卷第二号）、「木地屋の家」（『同』第一卷第四号）、「供養塔」（『同』第一卷第七号いずれも大正十三年）といったところになるが、この一連の作歌の中で、折口の歌の境地は少しずつ変化している。

折口の羈旅歌の中には「さびし」とか「さびしさ」という言葉が頻繁に出てくる。しかしこの「さびし」というのは、単に心細い、もの悲しいという一般的な意味をこえて、旅先で会う人の、生の営みに自らの心が触れて「ほう」と嘆息する心持ち、それが折口という「さびしさ」で、だから孤独とか旅愁とかいうものだけではない、別の意味も抱え込んでいる。

ほがらなる心の人にあひにけり。うや／＼しさの 息をつきたり

この歌について「山の高みにある家を訪問して、家人達に逢った後の印象として、驚くばかり私の心がないのであるのを感じた」と言っている（『自歌自註』）。そして、「初めには出さなかつたが、「山のうへに、かそけく人は住みにけり。

道くだり来る心はなごめり」といふ一首を作った」とある。この「山のうへ」の一首、初出『白鳥』では「さびしき人は住みにけり」となっていたのを、『海やまのあひだ』所収の際に「かそけき」に直している。この変更が、信州の旅以降、彼が実感として得た「さびしき人」を再度内在化したことを示す。その過程で、「さびしき人」では一般的用語例を引きずってあまりにも「孤独感」が勝ちすぎるというので「かそけく」と言う語を発見していったということになる。

それは、単なる歌の推敲というレベルを超えて、彼の民俗学へのまなざしの深まりと関わりがある。山奥の人の境界を皮相的に描写するだけではなく、そこに生きる人々の、悲しみのみならず生の喜びも楽しみも共有しようとする、理解の深まりである。人々が待ち望むおとずれ人の存在、そしてそのおとずれをみな人とともに喜び楽しむ心、そこには単に「さびし」では表現しきれない境地があり、そうした心の情熱と高ぶりを視野に入れたとき、彼の実感は「かそけき」と言う言葉を身に蔵したものといえる。

次に連作「供養塔」から

人も 馬も 道ゆきつかれ死にゝけり。旅寝かさなるほどの かそけき

旅をしている時、ふと道端の供養塔に出あう。その供養塔を見るとき、かつてここで死んだ馬、死んだ人に思いが届く。その人は一体どんな旅を続けてきたのであろうか。「故人の悲しみがよみがえってくる」と折口は言う。なるほどこうも行路では、人も馬も倒れ死にいくものだということがわかるわけであって、それこそ自らも、明日はこの供養塔の下に鎮まる立場になるかもしれないということだ。しかし、馬と人もこの供養塔の下に鎮まって、村の人々によつて花を手向けられ慰撫されているからこそ生かされている。何の変哲もない供養塔だが、そこに鎮まる馬と人、そしてそれを祭る村人の心との交感として実感されてくる。その魂の音響効果ともいえるべき境界に触れることは、長い旅寝を重ねたからいっそう心に響いて来るのである。旅人の一人として、やがてはこういう供養塔の下で供養され

る立場になるに違いないという思い、そこには孤独感というよりも、歴史を介した長い一連の魂の通い合いがあつて、そのことに心が届いているということになる。したがつて

道に死ぬる馬は、仏となりけり。行きとゞまらむ旅ならなくに

邑山の松の木むらに、日はあたり ひそけきかもよ。旅びとの墓

ひそかなる心をもりて をはりけむ。命のきはに、言ふこともなく

ゆきつきて 道にたふるゝ生き物のかそけき墓は、草つゝみたり

というふう唱歌つても、そこにはむしろ清々しい心の鎮まりがある。

そうすると、先ほどの「遠州奥領家」の歌のように、その小在所に住み今生を営んでいる人にゆくりなく出会うというの、同時にそこで亡くなった人の境涯も抱えこむことになる。つまり現在そこに住んで暮らしている人との出会いと、時空を遡つて過去に暮らしていた人、あるいはそこで倒れて亡くなった人との、生の共有を果たしていたということになる。そういうところへ目を届かせることが、「かそけき」とか「ひそけき」の境地ということになるだろう。こうした実感を通じて、孜々として生きる人の魂、そして時を定めて訪れるおとずれ人を待ち望む心に、折口の心は寄り添っていく。

「かそけき」とか「ひそけき」という境地についてももうすこし言うと、大正十四年（一九二五）の「人に預けたるもとの門弟子に寄せて……」（草稿）には次のようにある。

私などは、ひそか・かそかなどゝ言ふ語を「悲し」「さびし」を翻訳する為に、使ひはじめた次第です。

『新全集』第二十九卷 一四六頁

先にも述べたように「さびし」という言葉にはどうにも孤独感が張り付いていて、「さびしき人」とすると、寂然としたイメージがまとわりついてしまう。「さびし」という語は、それだけではなく、もう少し生きるといふことの深

みとか豊かさとかいうものをしみこませた境地なんだ、というのが理由になっている。「翻訳」ということばは安易に見過せないものがある。

『現代短歌全集』第十三卷『釋迢空集』の「追ひ書き」には

新しい歌の発表機関を得た喜びが、創作動機を俊つた為もある。鑑賞を描写して、悲劇的效果を収め得ることを知つた私は、急に世界の明るくなるのを感じた。自由を羈旅の哀感を歌ひ出した。でも、さすがに「さびし」「かなし」を露骨に言ふのを憚つた。「かそけさ」「ひそけさ」なる語に特殊の内容を持たさうとしたのも、其ためである。其でも尚、世間の人事には、「かそけさ」「ひそけさ」の明るい孤独には包みきれない哀傷がある。

『新全集』第三十一卷 三二三頁

『海やまのあひだ』に「奥熊野」を取り込んでいく過程で、また大正九年（一九二〇）の旅以降沖繩・老岐といった旅を重ねるにつれて、「さびし」という内容は次第に「かそけさ」「ひそけさ」に変えられていくわけだが、それは折口が「海やまのあひだ」に生活する人々の信仰にしっかりと垂線を下ろす時期であり、とりもなおさず、彼の民俗学が、内在化した「歌」の表現から飛翔してしつかりした枠組みを言語表現の上で形成してきた、その道すじでもあつたといえる。⁽¹⁾

信州の旅の翌年、折口は最初の沖繩採訪を果たし、その帰路老岐に立ち寄つて、海と山とにかこまれた島の生活を改めて実感するわけだが、その時の印象とそれ以前の旅の実感を統合したともいえる連作「島山」を作っている。この作品については、かつてその作歌場所をめぐって論争が起きたけれども、この連作はある特定の場所においての见闻を詠つたものではなく、明治四十五年（一九二二）から始まった折口の旅の、いわば一つの大きな総合として詠われたと見るべきであろう。むしろそのことにおいて、この作品群は「海やまのあひだ」という観念を個別的情景から、普遍的学問領域へと飛翔させる役割を担つたといえる。

谷々に、家居ちりぼひ ひそけさよ。山の木の間に息づく。われは

日本という国は広い平野がそれほど多くないので、とにかく山の奥まで、谷にはりつくようにして家を建て、そこに田畑をこしらえて暮らしている人々の姿、その風景を目の当たりにして、旅人である私は「ほう」と息づいている。そうした風景は、日本のどの地方にも見られるものだが、目の前の情景の中に、あらゆる日本人の生活のあり方を、そして更にそれを見つめたであろう旅人の姿を見ていることになる。折口はそんな日本人の「かそけき暮らし」を見つめている。

ゆき行きて、かそけさ余る山路かな。ひとりごころは もの言ひにけり

葛の花 踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

「この山道を行きし人あり」とは、「私が旅の山道を行く前におそらくここを通って行った人がいたにちがいない」という単にそれだけの歌だけれども、この歌は時空を超えた拡がりを持っている。今直前にこの道を通って行った人だけではなく、その長い歴史の中でその道を通ったであろう旅人あるいは村人に思いを届かせるといふこと、それはある意味で文学意識の根本だといえる。

こうした文学の発生的拡がりの中に、「生活」という要素を持ち込んできたのが折口の特殊であり、また優れたところであつたといふべきだろう。

連作「島山」に至つて、大正年間の彼の歌の表現はほぼ完成していると考えてもいい。そしてこの連作が、歌集『海やまのあひだ』の巻頭を飾ることになる。

「島山」、つまり日本のありとあらゆる土地に普遍的に見出される光景、海と山とに囲まれた狭い土地に営まれる人の生活とそこをゆくりなく旅をする我が、そこを旅したおびただしい者と交感をする場として、「海やまのあひだ」が選ばれているわけだ。折口信夫が『海やまのあひだ』という歌集で試み、可視化させたことは、そこが日本文学が

古代から抱えてきた文学の主要な領域であったということもできる。折口信夫の旅は、民俗へのまなざしを獲得させただけではなく、それを土台にして文学発生論の舞台と、そしてそこで発せられるはずの語彙を学問研究の中に実体化してゆくのである。

注

- (1) 持田叙子『海やまのあひだ』論―「さびしさ」「かそけさ」「ひそけさ」の生成について(『三田国文』第六号、昭和六十一年十二月、三田国文の会)には、「かそけさ」「ひそけさ」という歌語の生成について、すぐれて緻密な分析がある。本節はその論考に多く教示を受けている。

第二節 「叙事詩」と「語部」について——「折口語彙」の相対化

折口ワールドからの離脱

折口信夫の学問を支えるものとしていわゆる「折口語彙」というものが提示され、それらの語彙の連関性の中に、折口の学問は抱え込まれているという言説がしばしば行なわれてきた。折口語彙は、彼のきわめてユニークな学問ワールドを幻視させるキーワードとして機能し、あるいは機能させられてきたといつてよい。もちろん、そのことごとさら異議を申し立てるつもりはない。折口語彙研究が、膨大かつ広範な折口信夫の業績を極めてコンパクトに解説するという点で、重要な役割を担ったことはいまでもない。

しかし、折口語彙と呼ばれる特定のことばを折口の文脈の中から抽出する行為は、すでに折口信夫のテキストの読みであり、それにもとづいた研究の範疇であったはずである。しかし、その営為あるいは語彙の選ばれ方についてはほとんど異論が述べられていない。それこそ、「折口研究」が、キーワード解説という方法から脱却していない事実を物語る。

さらにいえば、これら折口語彙と呼ばれる語の多くが折口の創造による物ではないこと、それらは明治期における日本及び海外の文化研究の営みから導き出され、あるいはその成果から折口という類まれなる「類化性能学者」によつて新たな意味を付加され、再発見され、やがて体系化されたものであると考えた場合、これらの語にあらかじめ折口語彙などの特権を与え、同時代におけるその語の水準を問わないことは、近代文学領域における折口信夫研究のありかたあるいは折口思想の相対化においてきわめて危うい状況を作り出しているのではないかと思う。

さらに、折口語彙の抽出によって隠蔽される、あるいは無意思に覆い隠されてきた課題もある。例えば、「生」「死」といった普通名詞に託された折口信夫あるいは釈迢空が持つ意義の志向性は、いかなるものだったのかという問題である。それらを考慮することなしに、我々は無批判にテクストを受容してはいないだろうか。折口語彙というならば、「生」「死」といった普通名詞についても応分の扱いが欠かせない。それこそが「折口信夫を読む」ということなのである。

多くの折口論は、折口の方法や思考の中に折口の天才性や獨創性を見出しつつ、その学問的価値を総括してきた。折口名彙というものの解説と、それらを関連づける作業を通じて、いわゆる「折口的学問ワールド」を大正末期から昭和初期の時代相の中に創造し、そのワールドを基盤として、その時代の学問研究や文学状況を高踏的に見ていたきらいがないではない。彼の天才性を保証する年譜事項は事欠かないし、また様々な伝説が彼の生涯を取りまいている。さらに、折口信夫の年譜にはいくつもの不審がある。すでに、以前述べたことでもあるが（「奇妙な符合」⑦）『白鳥』第十卷十号、平成十五年十月）、折口自身の「自選年譜」の恣意性、つまり自らを物語化する特性とその結果書かれなかった事についての疑義、あるいは死後編纂された年譜の持つ伝説性である。年譜がもたした多くの「事実」は、身近にいた一部の弟子たちの見聞によるもの、或はそれをもとに弟子たちの著述したものに多く拠っており、それが仮にすぐれて事実に近いものであったにしても、時にその内容と表現は特権化され、そのことに余人が異論をはさむ余地はほとんど残されていなかったように見える。「伝説 折口信夫」が、そのまま彼の「歴史」年譜の中に埋め込まれ物語化していく可能性が高いのである。年譜作成という営みそのものが、すでにして伝説性を抱え込む「物語作成」というべき性格を有するものである可能性を考えれば（つまり記憶というもののあいまいさ、事後性、あるいは人の述懐といったものの持つ物語性というものを考えれば）、年譜から伝説性を完全に排除することは不可能であろう。しかし、

年譜事項が彼の学問評価のひとつの指標とされるのであるならば、折口においては、年譜事項にすべての出典を明らかにしておかなければ、その事実の検証は不可能となる。年譜事項は、いまだその事実を知るもののみの発言を担保にしたまま、折口ワールドの中で浮遊している。

一方、折口ワールドに入り込めない者、あるいは意図的にそれを拒む者たちは、さながら怨念の呪文ように、折口の学問的方法論的な欠陥・不備、あるいは実態とのかい離、あまりにも情緒的な方法や発言の姿態にその実証性の無さなどを言いたて、折口ワールドの幻想性を指摘し続けてきた。

そうした両端二つながらの方向を持つ折口論が、折口研究の水準を高め、維持してきた事も確かである。しかし「折口信夫研究」といったときに、何か肝腎なことが果たされていないという苛立ちを覚えずにはいられない。

それは、折口信夫が、いったい何からあのような折口ワールドともいえる世界を構築し来たったか、彼の語彙を或は彼の発想を、明治・大正という時代の中に正確に埋め直し、そこから新たに折口を発見する作業が、折口の相対化には不可欠な作業として求められているよう。それこそ折口を近代文学テキストとして読み込む研究が求められる所以である。

「折口語彙」の相対化

折口語彙と呼ばれる彼特有の用語がどのように発見され、どのような方法化されたかについては、あまり深く論じられていないようにみえる。

例えば仮に「発想」ということばをとりあげて、折口語彙の解説と分析に優れた業績である『折口信夫事典』（増補版 平成十年六月 大修館書店）をひもといってみても、岩野泡鳴の影響に言及した長谷川政春の「評伝」（七三一～二頁）には次のようにあるだけである。

岩野泡鳴との出会いもまた、大きな意味があった。「悲痛の哲理」が折口の「民族主義・日本主義」を開眼させたという。(中略)折口の説明によれば、彼が好んで用いた「発想」という語は、もともと泡鳴の造語であったらしい。

「という」というだけで、どのような開眼であったのか、そもそも折口のここである「民族主義・日本主義」とは何かについては具体的には述べられない。「らしい」というのは折口自身が「上代文学解釈法の問題」(『新全集』第五卷三四二頁)の文中でそのように述べているからなのだが、本当に折口のいう通りなのか、まったく検証はなされていない。

同じく、中野尚美の解説(三六一―二頁)はより詳細で実証的ではあるが、そこにも、

泡鳴の著作の表題として発想の語が見られるのは、「新発想論」(『文章世界』明治44年7月)「発想と人格」(『読売新聞』大正5・2・1―3)「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」(『新潮』大7・10)がその主なものである。

その用例でも、発想は、思想と生活に裏打ちされた人格と切り離すことのできないものであると言及している。

「修養時代」の折口信夫は、この思想の生活化という一元論を自身の感覚に引きつけ、重視した。(中略)古代の文学を見据える折口にとって、むしろ泡鳴の言う創作者の実生活、人格からなる発想と意義上の違いを見出すことが、名彙としての独自性を持たせることになる。折口の「泡鳴体験」の成果の一つだと言えよう。

とあって、すでに「泡鳴体験」によって「発想という語が得られた」ということを前提に書かれているように見える。あらかじめ「折口語彙」を設定し、その折口テキストにおける使用法や記述の中からその由来をもとめ、それを再度検証してそこにそのことばがあれば、それを解説して落着くというのは、いかがなものだろうか。

仮に折口が泡鳴から「発想」ということばを学んだにしても、そのことが「発想」という語が泡鳴のオリジナルであることを意味しないし、この時代におけるこの用語の認識水準についても十分に語ったことにはならない。

「事典」の記述であるということ差し引いても、こうした記述は、折口をどこかで特権化し、そこから脈絡をつけられた「折口」の「受容体験物語」を創造するところから引き起こされる事態であり、それは折口の作物を正面から価値評価する方向とはいささか異なつた方向へ研究のありようを誘うことになる。結果折口を外部に開くことなく隔離するものといわなければならぬ。

折口を相対化するためには、明治後期における近代文学あるいは文化研究の状況の中に折口の言説あるいは語彙をもう一度据えなおし、そのうえで近代文学研究・文化研究・国語学研究などに基づく綿密な読みを行った上で、再びその相関検証を行う必要がある。

かつて高橋直治は、『折口信夫の学問形成』（平成三年四月、有精堂出版）の中で、折口の初期の論考である「言語情調論」「異郷意識の進展」及び初期言語論のいくつかを研究の対象とする際、その形成過程を純粹に論考そのものの吟味と把握、その上でその論考内容と当時の学問研究と対比させて、そこに定位される「情調」「常世」といったタームの由来を検証した。この方法は、いわゆる「折口学」の中に閉じ込められていた折口語彙を外部に開放する刺激的な方法を提示したものであり、今後の研究の展開のありかたを十分に予想させるものであった。しかしその後、この方法を模索する研究者はほとんど居らず、相変わらず折口伝説の中で、彼の営為は評価され、語られ続けている。

折口を同時代に新たに据えなおし、そこから折口を解説していくという方法については、従来の折口研究を根底から支えている折口語彙の再検討からはじめられる必要がある。折口研究が折口伝説からの脱皮をなしえないならば、そして折口伝説が折口語彙、あるいは折口名彙と称するものによって形成されたものであるならば、伝説からの脱皮は、折口を取り巻くこの折口語彙生成過程を見極めることが必要となる。折口語彙といわれる言葉の一群を同時代研究の水準の中でとらえ直し、それらがどのようにして折口語彙として生育してきた、進化を遂げてきたかを再検討することである。

時代の潮流が、どのように折口の発想法と思考法を導いていったか、そしてその流れの中でいかに折口が独自の方法をつむいでいったか、解きほぐしていく必要がある。

『帝国文学』と「叙事詩」

『古代研究』の「追ひ書き」に、次のような一節がある。

語部なる部曲については、古史伝以外には、まだ明確な、記述も研究もなかつた。ある時、重野安禪博士の国史綜覧稿の出版に臨んで、何かの意味を持つて催された講演会で、始めて偶像破壊者と謳はれて来てゐた翁の口から、語部の話を聞いた時は、此部曲の職掌について、一点の疑ひもない定説が、発表せられたものだと思つた。

其と共に、我が古代社会の指導力としての詩のあつた事を知つて、心躍りを禁ずる事が出来なかつた。(中略)

文献の上の証拠は、幼稚な比較法によつた語部の職掌や、社会的地位に關した仮説を、殆、覆し尽した。けれども、私の古代研究は、此仮説を具体化しようとする努力に基いてゐる所が多い。⁽¹⁾

『新全集』第三卷 四七四〜七五頁

ここでいう「古代研究」という用語を、『古代研究』三巻本というように狭義にとらえてはならない。むしろ、古代を対象とする彼の学問的営為全体と広義に見ておいたほうがいい。折口がなぜ「古代」へとまなざしを注いで、そこへ分け入つていったか、そのきっかけとして『国史綜覧稿』の「語部考」があると読むべきなのである。

『国史綜覧稿』の「語部考」を検討する前に、宣長の『古事記伝』に端を発する「語部」なる用語が、なぜこの時代に問題意識を伴つてたちあがつてきたのか、それを考えなければならぬ。まず「叙事詩」という問題をみておきたい。按ずるに当時発行されていた雑誌類、特に『帝国文学』にはその用語を考えるヒントがある。

当時の文学研究を実質的に主導した雑誌のひとつであつた『帝国文学』は、明治二十七年、東京帝国大学文科大学

の教員・学生百八十余名が集まつて結成された「帝国文学会」の機関紙として発刊された。この雑誌は、明治国家が近代国家として新たな出発をしようとしていた時代の雰囲気の中で、国民国家という概念・発想を基盤に、それまでの日本の文学、文化を新たな軸の上に再配置していく、本質的にはそういう傾向をもったものであった。近代国家であれば当然保持していなければならない文化的条件を確立する。それを特に西洋の文化を吸収消化することで日本の文化の再構成を果たそうとする方向をとった。その基本的な作業として、当然の事ながら西洋の文化文学思想の紹介ということがまず掲げられた。

『帝国文学』は創刊当時からテーマであった「国民文学の創造と発見」という問題においてひとつの重要なキーワードを一貫して抱え込んでいた。国民に愛唱され、そして国民精神を指導すべき「詩」が国民文学の本質的形態として認識されていたことだ。それを用語として一手に担っていたのが「叙事詩」であった。

「叙事詩」なる用語を最初に繰り返し使用したのは上田敏であろう。上田は『帝国文学』の最初期から、アリストテレスの「詩学」から訳出した「叙事詩」という用語を使って、ホメロスの詩を紹介しながら、それが「叙事詩」として生み出された思想的内実と基盤としての国民性についてくりかえし論じている。

『帝国文学』第一巻第三号に掲載された「希臘思潮を論ず」の中で上田は次のように言う。

ホメエロスの歌の高雅雄逸なるは実に希臘多神教の賜物にして神は人のごとく現世に近く人も神の如く高雅なるを以て、古今に比類なき叙事詩を生じたるなり。

希臘思想は（中略）詩歌風俗に顕はれて秀絶なる観を与ふるものなり。叙事詩ホメエロスに於いて其頂点に達しヘシオドス出で、清秀なる田園の生涯を歌へり。

こうした比類なき叙事詩は優れた国民的思想の体現としてあったのであり、叙事詩「イリアス」「オデッセイ」はギリシャという風土の中で多くの神々のもと健全な精神を発達させてきたギリシャ「国民の歴史」の中から生まれるべ

くして生まれたものであること、その思想は、後にローマをはじめとして近隣各国に及び中世における文芸復興に臨んで手本とされ、ダンテ、ボツカチオといった叙事詩人を生み出したことを強調する。この記述の背後には、ギリシャ思想とそれを体現する「叙事詩」に学ぶことによつて、秀れた思想と「叙事詩」を生むことに「いはんや日本においてをや」という意識が間違いなくあつた。

「叙事詩」と言う用語が抱えるものとしては、ギリシャ詩劇にとどまらず、ダンテの「神曲」、「ローランの歌」、「ジークフリート」、「ニーベルンゲン」、「カレワラ」、ミルトンの「失樂園」までもが数え上げられている。ここにおいては「叙事詩」は作品そのものの内実よりも、そこにいかなる国民的精神性を見るかという問題として顕ち上つてくる。叙事詩とはそうした国民精神を受け伝えるものとして国民に愛唱されている事が条件となるのである。

即ち「叙事詩」という問題は、すくなくとも日本の場合に限つていえば、新興国家日本におけるアイデンティティの問題としてあつた。それは、国民が共有、愛唱し、その精神を内包するものとして近代国家に不可欠のものとして意識され、当然あるべきものとして探された。そしてさらに重要なことは、こうした詩文は、常に「民衆」の側から生れ出てこなければならぬものとしてあつた。そのことは、例えば上田が「文芸世運の連関」〔『帝国文学』第五巻第一号、明治三十二年一月〕の中で王朝の文芸を難じて

歌のみぞ古来の伝を享けたれど、これやがて宮廷の調にして民族の間、伝唱詠和して神話となり伝説となり叙事詩となりしものにあらず、王朝の文芸は漸く民衆より遠かりて或は縉紳が消閑の具となり、或は貴人の嗟嘆のすべとなりぬ。

と書き、また民衆の側において伝承されてきた「俗謡」「伝説」の類に価値を見出そうとするさまざまな言説を見る時、当時叙事詩という問題は、民衆の高い徳性と精神性を基盤として生み出されるものという認識があつたことは疑いようがない。

さらに『帝国文学』第一巻第五号（明治二十八年五月）に載った「文学史編纂方法に就きて」の中で、筆者界川が、伝説や俗謡を評価して「其の文学史に於ける価値は豪も高潔なる詩文に譲る所なきなり」とする部分などは、逆説的に読めば、以下の当時の文学エリートたちが高潔なる詩文というものを意識しながら、それらは国民を構成する民衆の精神性を体現する伝説俗謡の類から学ばなければならないものとして認識されていたことがわかる。一国の文学史の屋台骨を支える重要な骨組みとして、民衆の精神性を体現するところの詩文はなくてはならないものとされてきたのである。これはドイツの思想家ヘルダーの影響を強く受けている。

「民衆」というキーワードを抱え込みながら「叙事詩の発見と再生（或は創造）」ということがこの時期の文学史家あるいは文学者の最大の課題であったということになる。

「叙事詩」の発見と再生・創造

西洋叙事詩を翻訳し日本に紹介し、それを消化することによって日本における力ある詩文の発見を促すというという意志は、二つの方向を生み出している。一つは西洋叙事詩を模倣して日本的叙事詩を創造しようとする事、もう一つは文学史の再検証によって古典の中から叙事詩たるものを発見・再生することである。

叙事詩の創作においては、井上哲次郎「比沼山の歌」、岩野泡鳴「豊太閤」、与謝野鉄幹「長編叙事 源九郎義経」などをあげることができる。叙事詩の創作が盛んに行なわれていたことは、『帝国文学』において創作叙事詩への批評がしばしば紙面を賑わしていたことからもうかがえる。

たとえば大町桂月「詩歌に於ける古語及び俗語」〔『帝国文学』第三巻第四号、明治三十年四月〕は井上哲次郎の「比沼山の歌」を難じて次のように言う。

比沼山うたには俗語混じ、俗語的もしくは散文的の句法多くして、詩的に非ず、未だ全く擬古体の域に進まざる

者也。(中略)拙劣なる小説にも劣りて、余は到底叙事詩を読むの心地せざる也。

あるいは、少し時代は下がるが小山東助「叙事詩の新形式」(『帝国文学』第十一卷第七号、明治三十八年七月)は、何故に成功したる叙事詩は無かりし乎てふ疑問は恐らく容易に解釈せらるゝならん。国語の性質として専ら溫柔なる母韻に富み、自ら硬勁卓抜の感覚を与へ難きのみならず、歌調の変化に乏しくして、長短曲節の妙味を具へざる為め、詩形自ら単調となり、遂に読者をして長く賦誦するに堪へざらしめしは情理明白と謂ふべし。近來筆を叙事詩に染めたる者少なからず、明星一派の「源九郎義経」、白星の「お小夜新七」、泡鳴の「豊太閤」の如き、その一部を取りて読めば、清新の調賦詠に堪へたる者あれども、全体として之を見れば平板放漫、徒らに欠伸の料たるのみ。然らば叙事詩は、遂に新生命を發揮する能はざる乎。

と極めて手厳しい。しかしこのような叙事詩創作の試みは西洋の叙事詩の威容に比肩さるべくもなかつた。その要因は、小山も指摘しているように日本語特有の音調すなわち「調べ」にかかわる問題だつた。そのことは、一方では「曲節」を伴う叙事詩の文学史上での発見という方向へ向き、一方では日本語そのものの語法や音韻を変えなければならぬという方向を支援した。前者は自ずから文学史の再検討を促し、後者は言文一致運動を支えたことはいまでも無い。

こうした中で、明治三十九年、『帝国文学』にて連載された「国民的叙事詩としての平家物語」は、「平家物語」(『帝国文学』第十二卷第三号、五号、明治三十九年三月、五月)を叙事詩として位置付けた最初の論考である。この一編をきつかけとして、堰を切つたように「平家物語叙事詩論」が展開される。

しかしこうした営為は、西洋近代国家に存在する叙事詩が、日本にもあるべきであるという情念において試みられてきたものであり、常に比較文化的に西洋のなにかを念頭におきながら行なわれた「再発見」であつた。だがこのことは、叙事詩という用語の意義の再発見という試みを通過することにより、叙事詩生成のあり方という文学その

ものの発生と機能という一点において、重要な発想をうながす契機になった。即ち叙事詩という問題が、先に述べた「民衆」だけでなく「周縁」「音声」「文学史」といった要素すべてと統合されつつ、国民文学という文化的価値観で串刺しにした形での用語として顕ち上がってきたのである。「平家物語」はそうした諸要素をすべて抱え込むことのできる文学であった。

ただ、「平家物語叙事詩論」の最大の弱点は、なぜ時代が中世であるかということであった。叙事詩問題の最大のテーマは、歴史を貫く精神性の体現としての叙事詩の発見にあるわけだから、上田敏の言説の通り、ダンテ、ボッカチオが学んだホメロスが、日本においても存在しなければならぬ。叙事詩問題は、「平家物語叙事詩論」を通過して、古代文献「古事記」「日本書紀」をどう評価し再発見するかという段階に自ずから移行してゆく。このことはかつて品田悦一が指摘しているように、『万葉集の発明』（平成十三年二月、新曜社）、万葉集の国民歌集としての発見が「民衆歌」あるいは「民謡」という概念の定位によって果たされたことと同じ道筋を辿るものであり、古代から叙事詩をどのように発見してくるかという問題を一気に加速することとなった。

しかしフィールドを古代に置き換えたことで、ここに一つ重大な問題が生じた。それは、音声という要素の処理の問題である。「平家物語」においての音声要素は琵琶法師とその伝える「平曲」の存在が担っていた。しかしながら「古事記」「日本書紀」において、音声はどのように定位することが出来るのか。この思考の延長線上に「語部論」が登場する余地が生まれたのである。

国民的叙事詩

叙事詩とはそもそもいかなる概念規定と捉えたらいいのであろうか。

生田長江「国民的叙事詩としての平家物語」が『平家物語』に叙事詩の称を与えたのは、それが「国民的」であっ

ためである。生田の論は、「平家物語」が叙事詩であるかどうかという点について論及したものではなかった。『平家物語』が「叙事詩」であることはすでに論の前提となっており、それが国民的であるか、芸術的であるかという点との是非に記述の力点が置かれていたのである。

「叙事詩」というものが「国民的」であるかないかという問題がことさら主張されたのには、日露戦争直後の国家的高揚の中、国民国家形成を目指す時代要求を背景として「国民性」を備えた文学作品、特に「叙事詩」を日本の古典の中から発見していくという志向が大きく作用していた。もっと言ってしまうばそのような時代背景の中で受容された「叙事詩」という用語概念が大きく関わっている。はなから「叙事詩」という用語は「国民文学」としての責を担わされる形で登場してきたものと考えられるのである。

生田は、連載三回のうちはじめの二回を、「平家物語」を生んだ奈良・室町時代が、国民的文学を生成する時代であったことを説明するために費やしている。

奈良から江戸時代までの文学を概観して、「外国文学を盲目的に流入してその影響を強くかぶつた時代」とそれを「自国の文化特色を加味して醇化大成した時代」という二つの時代状況を設定している。そうした設定を基盤として、各時代の文学のありかたを見ると、平安時代と江戸時代とが、わが国の固有の特性をもって異邦文化を同化醇化して渾然たる純日本文明を集大成したる二大時期としてあげられるとする。しかしこの二つの時代に文学を担ったのは、それぞれ貴族と町民という階層であることを指摘、国民性という観点からは国民文学とは言いがたいと陳べる。つまり、国民文学というものは、一部の階級の中で生成・享受されるものではなく、国民全体がひとしなみにそれを受容し、それに対して「国民的」感動を覚え、そのことをもって新たな文学生成に影響力を持ちうることで大事であるというのである。

そうしたなかで、鎌倉室町の文学について

貴族の専有にもあらず。平民の専有にもあらず。その専ら交渉するところは貴族と平民との中間に立てる武家僧家の社会なりき。而して此中流階級を基礎として立ちたる文学なれば、自から上下何れにも偏することなく、一面多少の貴族的趣味を加へ、一面また多少の平民的好尚をも具へて、よく社会全体にゆきわたり、よくその全般の興味と傾向とを代表することを得たりし也。

として、さらにその基盤となつた思想については、未曾有の隆盛を極めた仏教があり、それが人心に与えた影響は計り知れないものがあるとし、「平家物語」をはじめとする鎌倉室町時代の軍記物を国民文学の代表とするのである。

このように「国民文学」の定義について周到に外堀を埋めてからおもむろに「国民的叙事詩としての平家物語」と題する章段が用意される。この章段において使われる「叙事詩」という名詞にすべて「国民的」という冠辞がついてゐることは象徴的であろう。つまりこの章段のテーマは、「平家物語」を対象とした「叙事詩」の問題ではなく、「平家物語」を「国民的叙事詩」として認めうるか否かという問題なのである。「叙事詩」とは何かという問題ではなく、むしろ「国民的」とはいかなることかという問題が記述の中心になつてゐる。

「叙事詩」という用語については、すでに述べたように上田敏が「文芸論集」その他の記述の中で、西洋、特にギリシヤの詩篇「イリヤス」「オデッセイ」を紹介する際に使用したのが早い例と考えられる。上田は

希臘古代史を繙て所謂英雄時代を研究し、ホメエロス二大叙事詩を窺ひたる人は、此詩の起源發達伝唱等について幾多の複雑したる学説あるを知るべし。

として「叙事詩」の成立に言及していくつかの学説を紹介する。なかでもカウエルの学説を紹介する中で

イリヤスは始め数編の核ありしも、種々の伝説之を中心として漸く結晶し、終に今日吾等に伝ひたる全編を組織したるものとす。

と述べる。

極めて無造作に使用されてはいるが、この小詩の大成と言う説は、生田の説にも生かされて居る重要な要素のほすなのだが。

生田に戻ろう。生田はイリヤス、オデッセイ、マハーバーラタ、ラマヤナなどを実例としてあげ、これらすべてを

「国民的叙事詩」と規定する。その基本的な枠組みとして

A、国民の全体にわたって興味ある事蹟事実に基づけるもの。

B、国民全体の感情もしくは空想より生まれたるもの。

の二つをあげる。加えて「国民的叙事詩の共通なる約束」として次の五つの条件を掲げている。

1、祖先もしくは勇者の事蹟に係せる神話伝説を以て基礎となすこと。

2、口誦によりて已に久しく世に行はれたる小詩を集めて大成したるものなること。

3、弦楽器などに和して語らるる(エルツェレン)こと。

4、多数の人の手になること、若しくは作者の不明なること。

5、後代の文学に対して甚大なる影響を及ぼすものなること。

この約束をもとに、「平家物語」が「国民的叙事詩」にふさわしいかどうかを吟味する。しかしその検証の進め方はきわめて恣意的である。特に1・2の条件に合致しているか否か、すなわち「平家物語」が「勇者の事蹟に係せる神話伝説を以て基礎」としているか、「口誦によりて已に久しく世に行はれたる小詩を集めて大成したるもの」か、については相当に苦しい弁明を続ける。そのほかの条件については、合致するところは多いが、それは別に「平家物語」に限ったことではない。すなわち「国民詩」と呼ばれる類のものであれば充分にこの条件を有するであろう。しかし「国民的叙事詩」の最大の条件であるところは実は1・2なのであって、3以降ではない。だが生田はここで「国民的叙事詩」ではなく「国民詩」という用語を持ち出し、「平家物語」が広く国民に普及伝播していたから国民

詩としての資格を有していることをさらに主唱し、挙句の果てに

ある叙事詩を取りて、その国民詩なるか、又は芸術詩なるかを判定せむとするに際しては、それが其国の神話伝説に對して如何ばかり親密なる交渉を有するか、もしくは、其作者の唯一人なるか、数人なるか、はたまた不分明なるかなど、是等の問題は必ずしも大に重きを為すものに非ず。吾人は是等の寧ろ枝葉に属する問題を後にして、須らくまず、その叙事詩が果して如何ばかりよく国民性を發揮し、如何ばかりよく国民全体の興味と傾向とを代表したるかを吟味すべき也。

と開き直つてしまふのである。

生田の記述は、「叙事詩」そのものの内実を考察するという行為を置き去りにし、単に「国民的」の条件規定を行つたうえで、それに見合うものとして「平家物語」を提出してきたに過ぎないという事実を露呈している。上述したように「平家物語」が「叙事詩」であるという吟味は一切行われぬ。「叙事詩」はすでに「国民的なるもの」という前提のうえに置かれて提示されているからである。「国民的なるもの」であり上記1〜5の条件に合えば、それをもつて「国民的叙事詩」とされたのである。

叙事詩としての「平家物語」

生田長江の文章が発表された二年後、姉崎正治が「時代の告白としての叙事詩」という論考を発表している。

先の生田の文章に比べて姉崎の文章に特徴的な点は「国民的」という用語がすっかり影を潜めることである。生田が「国民的」ということばに固執したのに対して、姉崎は一見正面から「叙事詩」という問題と取り組もうとしていくように見える。

叙事詩は、事件経過を主とした詩である。(中略) 人の世の事件を歌ふ、日本では種々の戦記物語、ことに平家

物語などいふ叙事詩がある。西洋にはずつと古いところでは、ギリシャのホメロスなど、而して大きな叙事詩は、いずれの国でも、たいい大きな戦争を種にして、一つの種族と他の種族とが天下分目の争をする戦争といふ様なことを土台にして、其間に現はれた種々の事柄を面白く述べて居るのが常である。

「平家物語」は叙事詩であるという前提に立つて記述される文の中で、姉崎は世界には二つの「叙事詩」の時代があるとす。一つはギリシャのホメロスの「叙事詩」、印度のマハーバーラタの時代、そしてもう一つは十三世紀のダントの時代、すなわち文芸復興（ルネサンス）の時代をあげ、その時代と同等のものとして日本の「平家物語」を当然のことに比定しているのである。

そして、「叙事詩」は外面上、つまり素材としては事件や戦争を舞台にするが、その本質は「戦争其ものの成行よりも、戦争をするやうになつた時勢の大いなる変遷に伴つて、人の心が如何に驚き、如何に悲み、又如何なる人が如何なる運命をたどつたか、と云ふやうなことを物語る」のが「叙事詩」の目的であつたとす。国民的といふ冠辭が取れた分だけ「叙事詩」そのものの本質に迫つてはいるが、しかし実際にはこの論理の出発点、目的いづれも「平家物語」の叙事詩としての価値認定にあつて、そこから出發して論理が組み立てられている。單純に「平家物語」と彼の国の詩文とを比較して、そこに共通点を見出して、その共通点こそが「叙事詩」の本質であるといふ論理構造に陥つてゐるのである。

ただ、叙事詩について以下のような定義づけを試みたことは特筆しておいてよい。

叙事詩の価値は、一時代の非常に大きな變動を捕へ、それによつて當時の人心を描き出す点にある。人心の動揺を描くだけでなしに何らかの解釈を与へて居る。ここに叙事詩の力があり、叙事詩が人心を動かす力も、またそれれに人生の解釈を指し示す感化の力も、やはりここにあらう。

さて、姉崎の論文と時を同じくして、岩野泡鳴が「叙事詩としての『平家物語』」（『文章世界』第五卷第十四号、明治

四十三年十一月 『岩野泡鳴全集』第十二卷 一五八〜六四頁）を発表する。この論考には、従前の生田、姉崎にはない独自の叙事詩論が展開されている。岩野が折口に大きな影響を与えたことは知られているが、その叙事詩論については、これまでほとんど分析されてこなかった。岩野の叙事詩論の中で、「叙事詩」とは何かという問題に一定の論拠を与えようとして提示されているのが、「歌う」ということの問題である。この「歌う」ということ、これは折口の叙事詩に対する認識を考える上で避けて通れない問題である。

実は岩野泡鳴「叙事詩としての『平家物語』」も、生田長江や姉崎正治と同じように「叙事詩とは何か」という問題に正面から向き合おうとはしていないように見える。

岩野はまず「平家物語は韻文であるか散文であるか」ということから問い始める。宣長の「歌われるものはすべて韻文」と言う言説と、それに対するWG・アストンの反駁とを引き合いに出しながら、詩とはなにかについて述べていく。宣長もアストンをふくめた歌論家も「歌ふといふことを余に外形的に捉えてゐた」と批判し、散文詩の例を挙げて、詩はかならずしも歌うものではないと述べる。

詩は必らずしも歌ふものに限らない。或音律を捉へてゐるかどうかが問題である。

と詩の定義をおこなう。韻文であろうが散文であろうが関係ない、詩はある音律をもって現れるものであるとする。そしてその音律とは、

詩は詩人の人格である。して詩の内容は音律である。(中略) 人間そのものを傾けた作物には人格があらはれる。その人格に伴ふ音律の響鳴があれば、そこに僕等は詩の面影をたどることが出来るのだ。

つまり詩の音律とは七五調、韻を踏むといった外形的なものではなく、詩の内容、特色、生命、人格が現れるものである。つまり詩とは内容的音律を持って現れたもの（表わされたもの）であるから、一定の外形的音律だけではなく、不定な音律も時に現れる。逆に一定の音律を備えていても詩とはいえない例は、俗曲を見れば理解できるとする。そ

して

以上の見解からして『平家物語』を見ると、全篇が散文だと云ふよりも寧ろ或程度に於ける叙事詩である。

と結論付ける。ここでも詩と叙事詩の境目は明確ではなく、叙事詩はすでにあるものとして了解されている。姉崎は「叙事詩は事件経過を主とした詩である」と一応は定義したが、岩野の言い回しを丹念に読んでいくと、岩野においても「叙事詩」という用語は「叙事」すなわち主要事件、その内容を叙べるといっただけの内容で使用されていることがわかる。そしてさらに

平家物語はかう云ふ句調を以つて、全篇の道行きなり、事件なり、因果なり、内部の心持ちなり、つまり、叙事と抒情とを進行させてゐる。然し一体に叙事の方を努めて、抒情に深入りしてないのは、わが国に限らず、すべて叙事詩の欠点である。

として、叙事を抒情と対比する用語としてのみ使う。そして叙事の詩的生命として「直喩と直情」を、抒情の本体として「隱喩と暗示」とをあげているあたりも、叙事詩という用語に特別な意識を払っているというよりも、一般的な意味としてこの用語をとらえている形跡が窺える。

つまり、岩野のこの論文は、『平家物語』の叙事詩として位置づけを行うのではなく、『平家物語』は詩であるかどうかというところに力点が置かれているのである。そしてその「詩」である証左としての音律が「内容」とともに発露するから、その内容、すなわち「平家の物語」というものが叙事詩にふさわしい内容を持っているから詩なのだという堂々巡りに陥っている。

ここで「或程度に於ける」という言い回しがいささか気にかかる。これを深読みすれば、「叙事詩」というものの規定はこの文脈においては「程度の差」なのである。この「程度の差」を図る基準とは何かと問えば、それは岩野の中にすでに厳然とある典型なのである。典型とすべきものがすでに岩野の中にあり、「平家物語」はその典型に

は到っていないけれども、しかしさまざまに内容を見れば「叙事詩ということが出来る」ということになる。

それは次の一節とあいまって、岩野の立場をいっそう明らかにする。

わが国のことを疎んじて、徒らに外国の事物に偏した研究家等は、詩の方面に於ても、わが国には『イリオス物語』その他の大作がないと云つてゐた。然し、それはわが国民的研究に無学であつたからで——僕は、『万葉集』を論ずるに方つても、ホメーロスの二大作に勝るとも劣らない長所と特色とのあることを認めたが、今、『平家物語』に対してもたゞその外形だけで云つても、『失楽園』や『神曲』よりも長編大作なる、而も『イリオス物語』の如く吟誦されたこの国民的叙事詩（並びにそれから来た長編詩）のあるを世界に誇りたいのである。

いささか長い引用になったが、岩野の意識の根底には、同時代を覆つた、姉崎や生田と同様の「日本において西洋のそれと比するべき国民的叙事詩の発見」ということが、やはり横たわつていたことは否めない。

どうやら長い遠回りをしてきたようだ。同時代の文学者あるいは研究者において、「叙事詩」という問題が、その意義からして問題意識として顕在化していたと思つていたが、どうやらそうではないのである。

「叙事詩」はすでに西洋の文学の中に「イリヤス物語」「神曲」として既定のものとして位置づけられていたのである。それを日本の文学の中に再発見できるかどうかが問題であつた。彼らの意識は「叙事詩」とはなんであるかといった課題に赴くことはない。叙事詩の意味を問うといった意識は最初からなかつたのである。あるのは叙事詩の発見でありその存在のあり方であり、またその内容が西洋の叙事詩と比較するべき内容をもっているかどうかという点にあつた。

だからこそ彼らは、日本の叙事詩が西洋の叙事詩とされるものといささかも異ならないということの証明に躍起になる。その方法として「国民詩」であるかないか、音律を持った詩であるかないか、などといった課題を盛んに論議することになったのである。

管見する限りにおいて、叙事詩という用語について折口以前にその意義や内実について詳細に吟味されることはなかった。それは単に西洋に存在する「イリヤス」「オデッセイア」的なるものとして了解され、そこから国民的叙事詩発見の意志と情熱に乗って、その内実を議論されないままに一人歩きしていったのではないかと考える。

あえて言ってしまうえば、「叙事詩」とは実体のない幻想であった。「存在した」といえば存在したといえるし、「存在しなかった」といえば存在しなかったともいえるもの、それが幻想でなくてなんである。実体がないからこそ融通無碍なる用語として、当時の文学研究の学的情熱といつてもよい日本文学史創造といううねりのなかで水面を浮遊していた用語であったといつてよいだろう。

当時の文学状況を考えれば当たり前だと言われればそれまでであるが、問題は叙事詩の問題ではなかったのである。ではそもそもその問題はなんであったのか。叙事詩発見のために費やされた議論は、実は図らずも別の問題を提示していたことに気づく。それは〈詩とは何か〉ということだったのである。つまり日本の詩がどうあるべきかという問題が、叙事詩発見の問題とパラレルだったのである。あるときは国民詩はどうあるべきかを問い、あるときは叙事詩と抒情詩の融合を論じ、ある時は音律と内容の問題を考え、そして散文と韻文の差異を提示するといったように、その議論の過程は実際〈詩とは何か〉という問題から出発し、そこへ収束していった。そうであつてみれば、叙事詩とは何かという議論はそのまま日本の詩はどうあるべきかという云うことに結びつくだけだったのである。それはつきつめていけば、岩野の記述にも垣間見られるように、「形式」と「内容」との問題であった。

そろそろこのあたりで折口信夫が叙事詩という用語にいかに向き合ったかについて検討していかなければならないが、その前にもう一回遠回りをするをお許しいただきたい。

今言った「形式」と「内容」あるいは「音律」の問題について若干言及しておかなければならない。詩とは何かと

いう問題につながるこの「形式内容論」の地平は、折口の「様式論」の原点であると思われるからだ。岩野は「音律」という問題があまりにも外形的にとらえられることを強く批判している。

詩に主要な音律は、然し兎角に、外形的に考へられ易い。近代の内容詩を解していると自負するらしい人々さへ、その浅見を脱してゐないものが多い。

そして音律は形式ではなく内容であると言い切る。ここに次節で述べる「内容的音律」という用語が提示される。先にも引用したように人間そのものを傾けた作物には人格が現れる、その人格に音律が伴うことで、その詩をその詩人の詩たらしめている、ということになる。これを逆に解釈すれば、詩に響鳴する音律があり、その音律が伴う内容を伴った詩は、詩人の人格をあらわすものだということになる。

この時期の岩野は、この「音律」と「内容」の問題について盛んに論じている。「新体詩の作法」(明治四十年十二月)、読売新聞「文界私議」欄(明治四十年十一月から)で詩の「形式内容論」を展開、『帝國文学』『早稲田文学』を巻き込んだ論争に発展していた。詩のあり方の問題が、新体詩、短歌、叙事詩といった形式を超えて「音楽的」というレベルでその渦に巻き込まれていたといっている。

そんな中、折口の「万葉談義」が発表されている。技巧の超越というテーマで記述される一節は、岩野のこの時期の見解を間違ひなく引きずっている。

感情が極処に達したからとて、情緒がそれに伴うて適当に流出して来るものではない。たとひまた、情緒が至極の域に達したからとて、理想的の形式を捉へるにきまつたことはない。平常の技巧の手腕と情緒とが相俟つて、はじめて立派なものが出来るので、技巧を技巧と感ぜしめない超越的位置に達するには非常の修練を要する。(中略)この至極境に達すれば、作者胸臆中の真は適当な情緒となつて流出し、適当な形式をとらへることが出来る。

(「万葉談義」・明治四十二年八月 『新全集』第六卷 二八五頁)

「万葉談義」は、万葉集巻二に見える日並知皇子尊の死に臨んで舎人たちが歌ったという題詞を持つ二十三首の挽歌が、実は人麻呂の歌ではないかということ論じたものであるが、その手法は、明らかにすぐれた内容に脈々と受け継がれた形式が寄り添っている点に着目し、それを根拠に人麻呂作歌説を展開しているのである。

注

- (1) 重野安禪『国史総覧稿』は、一九〇六年六月静嘉堂文庫から刊行された。「語部考」は同書巻一に収録されている。尚、この折の講演をまとめたものは「神代」として復刻『重野博士史学論文集』中巻（名著出版 平成元年十一月）二五三〜六八頁に収録されている。

第三節 詩の形式と内容

折口用語法の揺らぎ

折口の用語法には独特の揺らぎがある。特に普通名詞を読むときは、その揺らぎにいささか気を払わなければならない。彼の用語そのものに対する鋭敏さによることもあるが、思考形成の過程で、用語にこめる意味内容が変化していると考えられるのである。したがって、通時的な変化に気をつけながら、共時的に他の文脈の中での使われ方を見るところというような作業がしばしば必要になる。

『新全集』編纂が佳境に入る頃、いわゆる折口名彙として整理されている語句は別にして、それ以外の一般的な用語でありながら折口が一般的意味以外に重層的な意味を付加したであろう用語について、通時的索引の作成を企図したことがあった。たとえば生・死・海、山、祭・穢・信仰・ころ・いのち・生活・内容・形式などといったことばを文脈から取り出して解読する試みであった。書肆の編集担当者は、企画としてのももしろさは理解したものの、次の二点から首を縦に振らなかつた。まず内容が膨大すぎて全集の索引としては無理があること、普通名詞の読みは文脈の中で保たれるものであり、それらを一つ一つ読み出していくことを全巻に亘って行うことは、すなわち「折口用語辞典」を作ることであり、それはいつてみれば研究の領域であること。

あの時点での企画は間違つてはいなかつたと思う。しかし別の意味で作らなくてよかつたと今は思っている。それはまさに編集担当者が言う様に、用語は文脈の中で機能するものであり、テキストクリティシズムさえきちんとしておれば、あとの処理は読み手の問題、編集側が手を出すものではない。折口全集をほぼ全巻最初の原稿読みから校了

まで担当してきた人だけに、折口用語をあらたに特権化する危険性に気付いていたのだろう。折口を読み込んでいた人の言には説得力があった。

索引とは諸刃の剣である。膨大な折口の本文から、当該用語と最低限それに関わる前後の文脈だけをとり出してきて、それらの傾向にある意味を付与することは一つの研究の方法である。しかし折口の場合（折口に限ったことではないが）、その方法が力を持てば持つほど、本文の読みを決定的に誤らせてしまう危険をはらんでいる。

すでに述べたことではあるが、折口名彙という一種の索引は、折口研究を普遍化し一定の水準まで高めるに大いに効果があったが、折口の様々なテキストの存在、テキストクリティシズムの重要性を不問に付したまま、安易に一つのコンテキストにおける語句の意味を折口テキストすべてに敷衍した。それは、折口学という思想に支えられた語句の解釈が、テキスト全体を支配することであり、読者の多様な読みのあり方を阻害した可能性を否定できない。折口はこういうものであるという読みの伝説の誕生である。折口という個人だけでなく、本文の読みにも伝説が張り付いてしまったのは、折口の本文研究がほとんど進んでいないためである。

一般的に古典研究などで（もちろん近代文学の研究でも使われる手法であるが）、ある用語について網羅的に検索し、その傾向や使われ方を数値化して、その結果を作者や作品に投影させようとする試みがしばしばおこなわれる。これもまた先述したような理由、つまり様々なテキストの存在を不問にしたまま、テキストクリティシズムさへ行わずに安直に実行されることは、ほとんど意味がない。

「折口用語辞典」を作らなくてよかったというのは、こういう意味である。

折口のテキストは様々な読みの可能性を我々一人ひとりに提供するテキストである。一つの読みに固執することなく、また安易に用語の普遍化数値化を繰り返すことなく、多様なテキストの本文批評を通じて様々な読みが試みられていい。折口のテキストはそれをまた裏切らないだけの頑丈さを有している。

しかしそのためには、きちんとした本文批評のための基礎作業が不可欠である。未解読の原稿類、手帳など古代研究所等に残される多様な資料の解読とテキスト化が早急に求められる。折口の資料は単なる展示物ではないのである。

内容的音律

岩野泡鳴が形式内容論の枠組みで提示してきた「内容的音律」についてももう少し述べておきたい。

この場合の「音律」とは、単なる詩歌の形式的律、たとえばリズムや音の配列といったものを指すのではなく、内容に伴われて出現して来るもの、内容に自ずから響鳴してくるもの、という意味である。本来は「形式」と違って差し支えない問題について、あえて泡鳴が「内容的音律」ということばにこだわっているのは、当時の詩界の状況がある。外延的な形式・音律にのみとらわれて、内容を空疎にしている詩の状況に対するいわば戦略的用語だと理解すべきであろう。だから、ここは「形式」と「内容」とが融合する極地において、詩は整うことになる。

前節でも触れたように、人間そのものを傾けた作物には人格が表れる。その人格に音律が伴うことでその詩をその詩人の詩たらしめている、という泡鳴の考え方に従えば、折口が「万葉談義」において、日並知皇子尊の死に臨んで舍人たちが歌ったという題詞を持つ二十三首の挽歌が人麻呂の歌ではないかと結論づけた根拠は、容易に理解できる。

先にも引いたが、「感情が極処に達したからとて、情緒がそれに伴うて適当に流出して来るもの」ではなく、また「情緒が至極に達したからとて、理想的の形式を捉へる」ものでもない。「平常の技巧と情緒とが相俟つて」はじめた立派な形式が整うということである。舍人の歌二十三首は、内容（ここでは情緒）を技巧が正しく抱え込んだものとして、「主観・客観ともに価値ある完全な作物」としてある。それはとりもなおさず、この作物の作者が、「技巧を超越した技巧」を有していたからに他ならないということになる。そうした経緯を辿ってきた歌に違いがないということである。

「万葉談義」の最後に結論めいた記述として次のような一文が載せられている。

形式内容の上から細やかに研究して行つたならば、これまで無名氏の作として伝へて居つた歌の実際の作者を知ること追々出来る。

この一文が意味するところを解き分けていくと、形式内容を細やかにつきつめていけば作者が特定されるということであり、逆にいえば、形式内容こそが作品を作者のものたらしめている所以ということになる。

「万葉談義」の中で日並知皇子尊の挽歌を人麻呂作ではないかとした根拠を形式内容論の枠組みでは簡単に整理すると次のとおりになる。

形式Ⅱ人麻呂の用語・人麻呂的句法・人麻呂的修辭法が盛んに用いられている。古代歌謡の影響を受けた謹嚴、

高古、雄渾、高踏独歩といふ姿が見えること。

内容Ⅱ脈々たる人麻呂式の温かい情緒が漲っていること。

単純な構図だが、ここで言う用語、句法、修辭という「技法」は単なる技法としての意味ではなく、「これらを超越した」という意味から按ずれば、そうしたものを包含した「ことば」ということになる。この二つの要素を音律が抱え込んでいるということになる。技巧とはそれを感じさせない、それを超越したものの、「ことばとして示された思想」といふべきものでもある。「万葉談義」文中にあるこの至極が「境に達する」とは、とりもなおさず、思想にとばが充てられる極みを指すのであろう。

「和歌批判の範疇」

折口の形式内容論で最も早い段階のものは「和歌批判の範疇」の中の記述である。「和歌批判の範疇」は大日本歌道奨励会機関誌「わか竹」第二巻第五号（明治四十二年五月）に「こころ その一」、同第十一号（明治四十二年十一月）

に「こころ その二」、第三卷第四号(明治四十三年四月)に「こころ その三」と三回にわたって連載された。「和歌批判の範疇」とは、「歌を見、歌を作るうえでの心得」とその冒頭にあるように、読者・作者両方に視点を置いた短歌生成論である。第一章「こころ」その一として述べる部分の要点は次の一節に十分に言い尽くされている。

まず美的情緒が動いて、ある言語形式を捉へると、此処にはじめて、こころが成り立つ。こころは、作者の方に
 おいては之を思想といひ、読者の側からは之を、ある形式を通して受納する意味といふ。繰り返していふと、言
 語形式を俟つて、ある限界が、情緒の内容を為して居る思想(未だ明に思想といふことの出来ない、甚だ混沌た
 る状態にあるもの)の上につけられて、内容が固定してくる(後略)

『新全集』第十二卷 一一―一二頁

ここでいう「ある限界」という用語に注意しよう。別の文脈でも「適切な形式、適切な限界」と使う。これは、「万葉談義」において、「この至極境に達すれば、作者胸臆中の真は適当な情緒となつて流出し、適当な形式をとらへる」の「境」に呼応している。「ある限界」においての「苦心と努力」とが、「こころとことば」、情緒(あるいは内容をなしている思想)と形式の二元を一つにするというのである。簡単に言ってしまうとことばとこころが合致する、どちらが元でどちらが末でというような状態から脱するということなのである。

折口は「和歌批判の範疇」の中で、形式、内容といった用語の関係について、次の様にいくつかの整理を試みてい
 る。

形式の成ると共に、内容が定まる。此処にはじめて、ことばとこころとの対立を見るのである。

形式一つで優れた内容とも、劣つた内容ともあらはれる。

内容は常に、形式の後に生ずる。

こころを本とし、ことばを末だとして、容易く両者に軽重を定めてゐるのは、いま少し考へて見なければならぬ
 と思ふ。

内容は形式を俟つて生ずる。形式は内容に対しての名である。

明確な「ところ」すなわち作者における「思想」と、読者における「意味」が二つながら短歌のなかに込められるためには、形式すなわち「ことば」が必要となる。ことばとところ、言い換えれば形式と内容とはどちらが本でも末でもなく、二つが結合することによって調和ある価値が生まれる。確かに一元論である。しかし「内容は形式のあとに生ずる」という点を繰り返す点に、泡鳴との大きな相違いがある。折口は常に形式から出発して、内容にいたる。しかしそこには歌の作者と読者の立場とが常に意識されている。

折口の形式内容論が、岩野の形式内容一元化論とそれを取り巻く状況の中から生まれしてきたことは確実であろう。しかし岩野が叙事詩の形式論、すなわち音律の問題から内容論を見通しながら、その形骸化を嘆いて内容音律論を持ち出したのに対して、折口は短歌形式から逃れられない歌が、ことさらに意味内容に走る現実から、形式が必然として内容を生み出す形体内容論を唱えた点に違いがあった。

叙事詩、小説創作の中から形式内容論を志向した岩野、それを享けながら短歌から歩み始めた折口、この作家としての立場の違いが、一元論への異なった接近を余儀なくさせたということになる。

「和歌批判の範疇」の問題意識が「言語情調論」にそのまま繋がっていることは、「ところ」その三」が「言語情調論」の第九章にそのまま再録され、「ところ」その二」も「言語情調論」第八章に内容的に重なるところからみても、明らかである。「和歌批判の範疇」は「言語情調論」が構成されるいわば母体になった論考である。その存在は、彼の初期言語論が単なる言語研究に終始するものではなく、短歌という形式につきあつてしまった実作者として研究者としての折口の、いわば二道を行くものの悲しみのなからやむにやまれず胎動してきた問題意識であることを示している。これは先に述べたように、岩野泡鳴体験、あるいは高橋直治や安藤礼二が見出したように、マッハやチャーヘンらの用語や考え方を十分に摂取し、そこから発想したことは事実だとしても、あくまでも短歌実作者としての折口

の発想の根底は揺るがない。そういう意味において、「和歌批判の範疇」と「言語情調論」の二つの論文の位相を検討することが必要だろう。

「和歌批判の範疇」の目的は、冒頭に書かれている一節が示すように、歌を見、作る上において必要な四つの段階的観察点、すなわち批判の範疇としての「こころ」「ことば」「すがた」「しらべ」について詳述しようとしたものである。簡単に言ってしまうえば「こころ＝内容」「ことば＝言語形式」「すがた＝形体」「しらべ＝音律」の論ということになるが、折口の場合、作者と読者〔批評者〕、つまり主客の問題について双方の立場に立ちながらも、折口の中に一体化している（というよりそこを乗り越えた場所からの発言）という事態、また作者と読者との関係が非常に近い言語空間をかたちづくる短歌という文学様式、あるいは時間的経過による現象の変化から来る用語と論理展開の複雑な変相を常に抱えているので、その置き換えにはやや注意を要する。

まず、「こころ その一・その二」では短歌実作者として、短詩形文学、特に短歌における「ことば」と「こころ」の関係を解き明かして、「ことば」すなわち「形式」の優位性について論ずる。

形式の成ると共に、内容が定まる。此処にはじめて、ことばと、こころとの対立を見る。

内容は常に、形式のあとに生ずる。

形式（ことば）が情緒（作者の思想）を絡めとるところにおいて、この二つの取り扱いに間然とするところがあつてはならないとしながら、しかし短歌においては、趣向がつまらなくても、言語による形式美を整えた場合、ことばの優越性から来る価値を持つ場合があるとす。形式、つまりことばの優位性をはつきりと主張している。

折口の場合、「形式はある内容の外因である。ある内容とはある形式の内包である」と一元論的考えを基盤としながら、その叙述をする際には常に二元的な立場、対概念あるいは対立した立場からの言説を試みるから、ややこしくなる。例えば「ことばと情緒の二元の取り扱い」「ことばと、こころの対立」「形式は内容に対しての名」と二項対立

的な記述を繰り返すが、この場合の「対立」というのは、二項が対立関係にあるということではなく「対立的に存在を始める」といった程度の意味である。すなわち「こころ」が先にあるのではなく、「ことば」が情緒に働きかけて初めて「こころ」が生じ、そこではじめて読者に「ことば」と「こころ」という二つの対立的な姿を顕すということである。そこには、時間推移によって主客の間で常に変化を遂げる言語の特性に対しての理解がある。

時間的な推移によって常に流動する（あるいは差異を生じさせる）、主客がともに向き合うことになる感覚領域でのいわゆる音覚、そこから言語情調が生まれてくるのだが、そこで多様に生み出される差異の一群。折口の論理は、常にそうした差異性の発生とそれに伴う対立概念化から発想されている。ある時間では対立関係にありながら、次の場面ではそれが一元に重なっていき、またそれが新たな差異を生み出して対立概念を呼び込むというような動き方。そうしたことは、多様な側面の位相を認めつつ、あるいは二分法の思考をとりつつ、しかし一つに調和した実体を考える。一つの実体を常に別の側面から眺めようとして、あえて分割するという思考のあり方は、それはたとえばフツサールの「根源的差異」への言説と通ずるところがある。一元論といつても、この場合は、常に差異と分割の機運を内包しての一元といった方がよいかもしれない。

内容と思想とが同じ水準では論ずることができないことを、第一次思想、第二次思想という用語を用いて説明しようとする部分は、まさにそうした時間的価値に重きを置いた発想である。

思想がある形式によって制限を加へられたものが内容である。

〔同〕一六頁

それは「思想は動機であり、内容は結果である」とするのと同様に、思想と内容との間に時間的な懸隔を言う。その時間的懸隔の間に横たわっているのが「形式」である。その形式によって、作者の主観は、作者の客観領域、読者の客観領域を通じて、読者の主観領域に写像を描き出す。律文において主客間の觀念の受け渡しを司っているのが音覚をひきずって存在する音の連なりだということになる。

ここでは、実質的内容、形体的内容という二つの用語が新たに用いられる。実質的内容とは、作者の主観、予定すなわち第一次思想から直接来る内容、形体的内容とは予定なくして連ねられた言語（形式）が偶然に内容を有するようになったものとする。この二つから来る空想的仮象と感覚的仮象が読者の観念界において融合（感覚連合）されて初めて形式と内容とが調和したものができるといっているのである。

このことは言語論としてではなく、折口の文学発生論においても重要な意味を持っている。つまり、短歌製作の場面において、作者が予定したものではない方向に言語形式が内容をいざなうて行つて、予定にないものが出来上がつていくという経緯は、音楽的要素をもった宗教的なことばが次第に形を整えていつて律文（長歌）の形式になつていくそのあり方とつながるからである。

形式と内容の問題は、後の論考、たとえば「上代文学解釈法の問題」（昭和十年十二月『学苑』）のなかで再び取り上げられる。

普通歌は、形式と内容等と称して、二者が離れ離れになつてゐるものであるかの様に考へるものもあるが、歌に於てこの二者は別々に存在するものでは決してない。この所謂形と意味を一に結合せしめるものを調子といふので、それは形式の中に思想が入り込み、内容が形式を動かしかめるところの働きを云ふ。

『新全集』第五卷 三四三頁

短歌形式に限定せずに「日本文学の個性」について述べる文脈の中で、和歌以前の音声とリズムとを有する「韻文」について、その発生の場面を述べらるるから、先に引いた「和歌批判の範疇」と異なる物言いになつてゐることは注意を要する。「和歌批判の範疇」は、短歌実作者としての、ある一批評者としての立場からの言語への接近であった。そこには短歌を愛するものが言語をいかに飼ひ慣らすことができるか、あるいは間接的な言語に直接性を感じることができるか、大きな期待感が満ちてゐた。

しかし、三十年の歳月を経て、短歌滅亡論を通過した折口にとって、同じ形式内容論の枠組みの中でも、短歌形式そのものからの発想ではなく、短歌をさらにさかのぼる文学発生の場面に、こうした思想と内容の形式への定着を期待しているかのようである。

ここで「形と意味を一つに結合せしめるもの」「形式の中に思想が入り込み、内容が形式を動かさしめる」ように働き、「形に内容が覆さって生ずる」もの、すなわち「調子」というものが持ちだされている。

調子とは言うまでもなく、作者の生命律が自然に内容と形式とを整えるその際の、言ってみれば偶然の産物として作品を生み出す触媒にあたるものというべきだろう。「和歌批判の範疇」においても「しらべ」の項で詳述されるはずであったものだ。それは、たとえば沖繩のノロクモイが唱える神口やアイヌのユーカラのように、宗教的な叙事詩が、ただだからだと喋っている、あるいは唱えているうちに、「気乗りのするほう」へと次第に任せていくと、調子がだんだん内容と形式とをととのえていく。いわば文学発生の場面を想定すればよい。「形と意味が相絡み合つて一つの調和をなしてくる」それである。

この論文が発表された昭和十年は、折口が短歌製作に執着を持ちながらも、新たな短詩形文学の製作を試みようとする時期である。短歌言語の問題として、「和歌批判の範疇」そして「言語情調論」から出発した折口の形式内容の問題は、短歌という形式(体)を放棄して、文学発生の場面から、改めて言語形式が内容や思想をいかに掴み取っていくかという実験を始めたといっているのではないだろうか。

形式内容の問題と生活律

折口信夫の「追い書き」はこのほか長い。

『海やまのあひだ』にも「この集のすゑに」という長い追い書きが付されている。自らの来し方を語り、時々にお

ける文学思想や作品実作の闘いのなかで直接間接的に影響を受けた人々を引き合いに出して、それらの人々の仕事と
いかに向き合いそして受け止めてきたか。その結果どのような思考的回路をたどって現在の状況に至り着いたか。
言ってみれば折口自らの享受史を諄々と語るその語り口は、『古代研究』や折口春洋歌集『鵠が音』の追い書きにも
共通する。

何ゆえここまで折口は追い書きにこだわるかについては、別に考えなければならぬ問題であるが、追い書きに登
場する人々は、折口 of 思想や短歌表現成立の場において、ある場面では重要な役割を担っていたことが知れる。それ
は単に形式的に内容や方法に関して「影響を受けた」といった単純なものではないだろう。『古代研究』「追い書き」
の中で柳田への報謝を述べるくだりに「全的に取り込まうとした」とあるように、その学問や作品の本質に直接向き
合おうとしている。そのためにかかる享受が彼の作品の表面的実像を劇的に変化させるといふ事態にならず、むしろ
本質的なところに変動をもたらす類のものである点が、要注意なのである。

短歌製作にかかわる折口の姿勢は、長年にわたる折口の享受の積み重ねによって、その影響のあり方というものが
捉らえにくい。たとえば『海やまのあひだ』に至り着いた段階では、すでにそこから想像することが出来ないほどに
時々の影響が混合変質し、基の姿を判別することが出来なくなっているかもしれない。さらに、彼の実作が、本質と
いう意味において常に短歌史の見通しの上になされようと思図されてきたという事態である。言わば、かの「追い書
き」は一つの発生論的文学史のように当該作品を支えている。それこそ、自分の歌や思考の結果を、単に結果から見
つめるのではなく、その変化変容の各場面においても見つめるべきであるとするれば、彼がこのように申し開きのよう
な言葉を連ねる理由がなんとなく分かる。

折口の作品実作、それはとりもなおさず発生のレベルに自らの作品を置き直すということにも繋がるが、そこにお
いて様式の問題というものは、単なる形式の問題ではない。作品を生み出す思想とそれを支える生活律とがおのずから

生み出していく「しらべ」、つまり「ころ」が導く「形体的内容」の進化というものに強い意味を置いている。それは意図的に生み出そうとして果たされるものではなく、いわば時代生活とそこに成長する思想に作家が向き合つて導かれる作家の生活律が、偶然に新しい様式に入つてくるといった、発生のありかたに力点が置かれているのである。

「短歌から発生論的に出た新しい様式」を求めるものも「短歌」という様式から離脱できていない短歌作家の、短歌という様式と格闘する思想や力の衰え、そして「歌」という様式と格闘しようとしないう安易な作歌態度をそこに見出してしまふからである。そうではなくて「短歌」から発生的に離陸しなければならぬもの、新しい様式を心の律動とともに捕捉していかなければならない。そこに彼が「砂けぶり」の時代（大正十二年頃）、「追悲荒年歌」から「水牢」「貧窮問答」などを発表した時代（昭和十年頃）、そして『古代感愛集』の一連の作品製作を経て戦後『日本雑歌集』『遙空歌選』などを編集する時代（昭和二十二年頃）の三つの時代において、「非短歌」という用語にこだわらなければならぬ理由はそこにあつた。このことは第四・五節で詳しく述べる。

これらの作品の生成過程は、確かに折口の「短歌様式」との格闘の歴史であるが、しかしそうであっても、短歌製作を決して止めることのなかつた根底には、新たな律文学は短歌から発生しなければならないという短歌の過現未を見つけてきた者の確信、それゆえの歌へのこだわりがあつた。あれだけ執拗に短歌滅亡論を書きながら、歌に執着する理由はそこにある。短歌以後の様式はどうあつても短歌から出なければならぬという確信が彼にはあつたと言ふべきである。短歌滅亡論とは短歌から発生する新たな様式の律文に対する寿歌にほかならなかつた。

処女短歌『海やまのあひだ』の追い書きである「この集のすゑに」に次のような一節がある。

啄木の影響は、考へて見ると、非常なものであつた。形の上ではさもない様に見えるか知らぬが、私自身の発想法に 翻訳して表して居たのである。生活など言ふ側には、目を瞑り勝ちな私が、歌では、可なりさうしたもので、出てゐるのは、やつぱりそれなのである。同じ生活派でも、善磨さんのは、あまりな特殊と特殊との対立から、

かぶれ様になかつた様に思ふ。而も、私自身も近年始めた新形式の歌には、同氏の影がさして来た様な気がしてならぬ。此人と言ひ、勇さんといひ、歌の上の印象の尠いのは、育つた都会の気持ちに、相容れぬ処がある為と思ふ。

『新全集』第二十四卷 一二三頁 傍線著者

この文節は、「眞実私ほど、他人の影響を受けたものは尠かろう、と思ふ」と述べたあと、新派和歌、服部躬治、正岡子規、与謝野鉄幹、小泉千樞、島木赤彦、そして土屋文明などの作歌を批評しつつ、自らが辿つてきた実作の道程を享受の視点から記述する。引用の箇所はその後を受けて啄木の影響を述べる部分であるが、記述の質量とも他の歌人のそれに勝つていて、折口が言いたかつたことの中心のように思える。彼が自ら「非常なもの」とした啄木の影響は何であつたか。それは明らかに「生活」と「発想」の二つの用語に収斂される何かである。

折口にとつて「批評」とは、「人間生命の裏打ちになつてゐる性格の発生を、さらに自由に、速やかになしゝめるもの」であり、また「人間生活の上の事情を、違つた方角へ導いて、新しい世の中を現じようとする目的」の為にあつた。批評家折口にとつて、先人への批評はまさにこういう意義を有するものとしてあり、またそれは先人の生活に直感同化し全的に取り込むことで果たされるものでもあつた。

「生活には目を瞑り勝ち」であつた折口が「歌ではかなりさうしたものが出てゐる」理由として「私自身の発想法に翻譯して表して居た」(傍線部)という。「発想法に翻譯する」とはいつたいいかなる意味か。

このことはおそらくこの文章の次のテーマ、新しい句詠法の開拓という問題とそれをきつかけとした「短歌様式の固定を自由な推移に導く」為のいくつかの試み、あるいはそこから必然的に生み出されるはずの四句詞形の歌の問題に繋がる。折口は次のように延べる。

自身の呼吸や、思想の休止点を示す必要を感じない、のんきな心を持つて居て貰うては困る。……一層内在して居る拍子を示すのに、出来るだけ骨を折る事が、なぜ問題にもならないのであらう。

長い歴史のなかで様式が固定してきた短歌は、律文系統の流れを引く以上、音律から逃れられない。そこには長い伝統にがんじがらめに縛られた表示法から来る読み方の固定、様式が単なる形式に墮し、その音律によって支配される生活律とそぐわなくなった事態がある。

先にも述べたように、折口においては、短歌実作の場、即ち短歌表現が生み出されるせつなにおいては、形式内容は一元的なものと捉えられている。

形式の中に思想が入り込み、内容が正式を動かしめる働きが「調子」であり、その「調子」によって形式と内容が互いに絡みつきながら作品が生み出されてくるその機能を、折口は表現という言葉を使わず「発想」という用語で示した。「発想」は、常に人々の生活律の中から必然的に生まれ出る拍子によって思想内容を捕捉するものである。いわばその歌がうまれ得る内発的な条件であり、それを折口は「生活」という概念でくくろうとする。

それを別の言い方をするに「生活律動」という語になる。大正六年「ちとりましと」(『アララギ』第十卷第三号『新全集』第十三卷 一八三頁)に使われた後、剽窃と暗合の懸隔を論じる場面において、他人の生活体験を直感、同化できるかどうかが重要であるとして、芭蕉の俳諧を素材に「原作者の情調なり、生活律動なりを直感同化して、他人の経験をも、瞬間に自分の経験界に把り入れることの出来た」と芭蕉の天分を賞賛している。

実作において、形式と内容がこもこも逢着するせつなにおいて、生活律動は調子と深くかわり短歌の本質を左右する重要な要素なのである。結果より動機、作物より人格という物言いには、作品の本質的価値はすでに生活そのものによって約束されており、もつといえれば生活のありようから発せられる「内在的拍子」「生活拍子」というものが「調子」をして作品を決定的にするという事態が想定されている。「調子」が律文系統の音律と相和して「思想の中心」を形作っていく。これが折口のいう「発想」の本体である。「短歌本質成立の時代」では、「内部からする発想法の弾

力」などという言い方もする。

こうした「生活」と「発想」という問題と絡んで、啄木からの影響を強く意識した背景には、この記述が新たな詩形開拓の試みの時代をたどりながらも、短歌実作においては各歌に改めて句読点を施した処女歌集『海やまのあひだ』の追い書きであった点が大きい。

実は啄木の記述にも「生活」と「詩人」の問題において次のような記述が認められる。

詩人は先第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」でなければならぬ。第三に「人」でなければならぬ。(中略) 詩は所謂詩であつては可けない。人間の感情生活(もつと適切な言葉もあらうと思ふが)の変化の厳密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。(中略) 諸君は、詩を詩として新らしいものにしようといふ事に熱心なる余り、自己及び自己の生活を改善するといふ一大事を困却してはゐないか。

(石川啄木「弓町より―食ふべき詩」明治四十二年十一月三十日、十二月二日〜七日「東京毎日新聞」筑摩書房版『啄木全集』

第四卷 一二四〜五頁)

「発想」という問題と併せ考えながら「生活」という用語の位相を検討しなければならない。折口の場合、用語創作のオリジナリティよりも、むしろ既成の用語に新たな意味を付与するという点において、優れて独創的であったといえるからである。

「生活」という用語、明治末年、岩野泡鳴が「思想の生活化」という課題で論じているほか、詩人歌人の間においてもこの用語自体盛んに使われていた。そうした中で折口がこの用語を「発想」「様式」という問題とつなげながらいかに捕捉して、それをわが身につけていったか、折口の短歌実作のあり方、つまり逍空短歌の本質を考える上ではそれを考えてゆくことが必要であろう。

第四節 釈迢空「非短歌」の意味

短歌形式への懷疑

釈迢空（折口信志）の短詩形文学創作の過程を考えると、三度にわたる短歌からの離陸の試みを認めることができる。

その最初は、大正十三年六月と八月に四句詩形の作品「砂けぶり」を発表、短歌がもつ命脈というものに懷疑的になる時代。この時はその二年後に「歌の円寂するとき」を書いて歌の本質と宿命について核心的な予言をした時期でもあった。二度目は、東北へはじめての旅を果たした後、「追悲荒都歌」「水牢」「貧窮問答」といった一連の、しかし「砂けぶり」とは若干形式の異なる複数の作品を試みた時代。そして三度目は、戦後、第二芸術論が隆興して短詩形文学に批判が集まった際に、『日本雑歌集』や『迢空歌選』の編集を試みるとともに、硫黄島に戦死したわが子折口春洋を追悼するため『歌虚言』の編集を企図した時代である。

最初の試みは、大正十二年九月三日、沖繩からの帰途、横浜に上陸した際に見た震災直後の情景と経験が元になっているといわれる。内容からもそれは窺え、迢空がその体験をどうしても作品にしなければならない切迫した思いに駆られていたことが考えられる。しかし、その切実な表現欲求は短歌様式で抱え込む事が出来ずに、新たな詩形を模索させることとなった。

私は、地震直後のすきみきつた心で、町々を行きながら、滑らかな拍子に寄せられない感動を表すものとしての――出来るだけ、歌に近い形を持ちながら――歌の行きつくべきものを考へた。さうして、四句詩形を以てする発想

に考へついた。

（「この集のすゝに」『海やまのあひだ』大正十四年五月 改造社）

「歌に近い形を持ちながら―歌の行きつくべきもの」としての四句詩形、これの最初の表出が「砂けぶり」であった。そこには、岡野弘彦が指摘するように、横浜から品川にかけて、道々見聞した様々な「酸鼻な、残酷な色色の姿を見る目を掩ふ間がなかつた」ほどの体験の裏に、作品内容にも歌われているように、朝鮮人に対する差別や虐殺の事実といった、日本人が持つているあさましい限りのありさまを見聞し、そうした情動を叙事的に表出するときには長い歴史の中で固定化した短歌の様式はどうい抱えきれないということが、すでに彼には了解されていた。

「なめらかな拍子に寄せられない感動」とは、歌が必然的に持っている、五七五七七の調べ、そしてどうしても一句から五句までを、「だらしなない昔の優美をそのまゝついで、自身の呼吸や、思想の休止点を示す必要を、感じない、のんきな心を持つて」「書きもし、読み下しもする為に」おのずから固定してきてしまった「短歌の様式」では表現できないことを、かなり早い段階から自覚していた。その上で日本語という言語の持つ特性に自覚的になって、発言を続けていた。短歌様式に関する言語学的追求にその初発を見ることが出来る。

すでに述べたように迢空の短歌様式からの離陸の機運は、「和歌批判の範疇（二）（三）」（明治四十二年五月・十一月、明治四十三年四月）と、その論考をさらに展開した「言語情調論」（明治四十三年稿）に現れている。

形式の成ると共に、内容が定まる。此処にはじめて、ことばと、ことばとの対立を見る。内容は常に形式の後に生ずる。

という一節が象徴するように、形式（ことば）が情緒（作者の思想、内容）を絡めとるところにおいて、この二つの取り扱いに間然とするところがあつてはならないとし、しかし短歌においては、趣向がつまらなくても、言語による形式美を整えた場合、ことばの優越性から来る価値を持つてしまう場合があること、逆に考えると、形式が内容を凌駕してしまう場合があるがために、内容がつまらないものでも短歌としての価値を持つてしまうという事態である。そ

してその形式を支えているのが、長い歴史の中で日本語とともに育てられてきた短歌の宿命である。

こうして、短歌様式が叙事あるいは叙事脈の内容を表現する上で持つ宿命的な欠点について、逄空はかなり早い時期に意識的であったわけだが、それがはつきりとした形で表出されたのが、「砂けぶり」創作以後、大正十五年ころにかけての時代であった。

宮廷詩なる大歌系統の詩形が、三十一文字に固定して来た間に、小歌即民謡は、限りない変化と、自在なる展開を経て来たのであった。ほとんど、民族文学唯一の形式と思はれて来た短歌が、生活の拍子にすぐわなくなつたのは、単に、近代の事ではない。もう、ほんとうの様式、求心的な発想を持つものが、歌から生れて来てよいはずである。われ／＼の内側の拍子には、遠心的な俳句や、「詩」に任せきれないものが、永久にあると思ふ。『同』と述べるように、「遠心的な俳句や「詩」にまかせきれない」がために、「生活の拍子」に適い、「本当の様式、求心的な発想を持つもの」が短歌の中から生まれ出てこないといけない、その思いが「震災」という経験に触発されて生まれ出たものが「砂けぶり」であったわけだ。

しかし、藤井貞和が「詩の成立」『折口信夫全集』月報―『折口信夫の詩の成立』平成十二年六月 中央公論新社)の中で「砂けぶりに見せた短歌からあふれ出す「非短歌」のいきおいを、短歌そのものへと返すためのエネルギーに一旦し尽している」と指摘したように、大正十二年震災後に作られた「砂けぶり」については、それが新たな様式への展開をみせることなく、逄空の意識は短歌の問題に戻ったということとは確かである。というよりもむしろ、逄空の志向していた問題意識は、新しい文学様式の発生であり、それは短歌様式を基盤にして歌の行きつくべきものとしてなされるはずのものだと言う見通しからすれば、「短歌から「砂けぶり」を往還する彼の営為はいわば必然であったと言ふべきであろう。

それは一方で、「歌の円寂するとき」(大正十五年七月『改造』第八卷第七号)「歌の円寂する時 続篇」(昭和二年一月『近

代風景』第二卷第一号)ほかこの時期の折口の短歌滅亡論と呼応している。

「歌の円寂する時」で迢空は

歌はこの上伸びやうがないと言ふことである。更にも少し臆面ない私見を申し上げれば、歌は既に滅びかけて居ると言ふ事である(『新全集』第二十九卷 十一頁)

と述べ、その理由として「歌の享けた命数」「歌詠みが人間の出来ていないこと」「真の意味の批評ができないということ」の三つをあげる。

「歌の享けた命数」についての問題は短歌様式が旋頭歌から出た歌垣の唱和から発生してきた為に性欲恋愛気分を離れることが出来ず、その長い歴史が宿命的に短歌を抒情詩とした。そのために叙情気分を脱却することが出来ず、叙事詩として不都合な条件をそろえている。啄木のように叙事に進んだものはすべて失敗している。短歌が持つ本質から抜け出ることが出来ないのである。新時代の生活・理論を取り入れることが出来ないで、短歌としての匂いをくゆらせてから初めて取り込まれるから、時代を映す詩形としての命数は尽きていること。命数を伸ばす可能性のある口語歌についても否定的で、永遠の様式としての価値はないと言い切る。

次に「歌詠みが人間の出来て居ないこと」という問題については、短歌そのものが短い詩形である宿命から来る安易な作歌態度、口からのでまかせ、小細工辛苦の塊と言った盲覚を持つていることを批判し、成立の最初からの「即興詩」という意味を誤解していると解く。そして「我々の内生活を咄嗟に整理統一して、単純化してくれる感激を待ち望むことが出来ないとするれば、もつと深い反省、静かな観照から、ひそかな内律をひき出す様にすなわち「生活態度」を安易でない方向に向かわせよと説く。

「深い反省、静かな観照から、ひそかな内律をひき出す」という時の「内律」とは、後の「生活律」という用語につながるものであるが、それ以前に第三節で引いた啄木の次のような主張としっかり呼応している。

詩人は第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」でなければならぬ。第三に「人」でなければならぬ。(中略) 詩は所謂詩であつては可けない。人間の感情生活(もつと適当な言葉もあらうと思ふが)の変化の厳密なる報告、正直なる日記でなければならぬ。(中略) 我々の要求する詩は、現在の日本に生活し、現在の日本語を使い、現在の日本を了解してゐるところの日本人に依つて歌はれた詩でなければならぬ。(中略) 諸君は、詩を詩として新しいものにしよふ事といふ事に熱心なる余り、自己及び自己の生活を改善するといふ一大事を困却してはゐないか。(石川啄木「弓町より―食ふべき詩」明治四十二年十一月三十日、十二月二日〜七日「東京毎日新聞」傍線筆者)

生活派の面目躍如たる主張であるが、遑空も、そのことについては肯定的に次のように述べる。繰り返しになるが改めて引いておこう。

啄木の影響は、考へて見ると、非常なものだつた。形の上ではさもない様に見えるか知らぬが、私自身の発想法に翻訳して表して居たのである。生活など言ふ側には、目を瞑り勝な私が、歌では、かなりさうしたものゝ出てゐるのは、やつぱりそれなのである。同じ生活派でも、善磨さんのは、あまりな特殊と特殊との対立から、かぶれ様がなかつた様に思ふ。而も、私自身も近年始めた新形式の歌には、同氏の影がさしてきた様な気がしてならぬ。(この集のすゑに)『海やまのあひだ』(この集のすゑに)、大正十四年五月 同)

と書くように、啄木からの影響を隠すことはない。そのことは、「思想・生活」(つまりは生活)という作家側の意識の問題だけでなく、啄木が試みた三行分かち書き、句読点を施すという営為にももちろん及んでゐる。

句読点、字あけ

さて、述べたように「和歌批判の範疇」「言語情調論」に説かれた短歌の持つ宿命的な言語様相が基盤とされている。三十一文字の短詩形文学が短い律文であるがゆえに宿命的に持つてしまふ登場の仕方。つまりことばと言う形式との

瞬時の対決と言う場における「こころ」(思想・生活)のあり方がこゝでは問われている。

短歌滅亡論は、滅亡する短歌への挽歌ではなく、新たに短歌から発生する様式に対する呪歌ともいえるのである。彼の視線は常に短歌の問題そのものに注がれており、それをどのように救い上げることかという問題に終始していた。新たな詩形の開発が、やがてその試みをめくり返すようにふたたび短歌に向かう時、その結果が「海やまのあひだ」に施された句点、読点、字空けの表記であったことは藤井の指摘の通りである。

しかし、逍空の句点、読点、字あけの試みは、藤井が言うように、「砂けぶり」という非短歌作品を通して歌集『海やまのあひだ』に始めて試みられたものかというところ、そうではない。

大正二年七月十・十七日の『日刊不二新聞』に掲載された「逍空集——海山のあひだ」十一首、九首の計二十首において、既に読点が試みられている。読点はやがて字明けとなり、その字あけの数を増すという試みに至り、ついに自選歌集『ひとりして』の加筆において、句点、字明け、読点をすべて使って短歌表記をするという事態に至る。すなわち短歌の五七五七七という様式に対して、その形式によっておのずから抱え込まれる作歌上、或は表示法から来る読解上の規制、つまり音のつながり、句跨ぎなどの問題を、開放しようという試みが一連の展開を見せているのである。

また、「ひとりして」自筆原稿においては、字明けを指示する記号や、句読点を試みては消している営為がなされて居る。(「ひとりして」折口所蔵本など)これらを見ると、この問題が極めて早い時期から逍空の短歌制作と短歌様式の発生という問題と絡みながら彼の中に内在化していたことを示すものである。

『海やまのあひだ』の後書きに示される逍空の「われわれの内側の拍子」には、遠心的な俳句や、「詩」に任せきれないものが、永久にあると思ふ。という記述は、やはり「生活律」という課題と関わりながら、短歌が長い間に日本文学の流心を歩んできたことへの短歌に対する信頼と、そこから離陸するべき新しい様式への期待が込められてい

る。そして彼の作品が「詩」でないことを物語っている。

逋空の試みは、「自然の拍子は既に変つて居ても、やはり、句跨ぎと思ひ思い、読んだり、感じたりして居る。これは表示法から来る読み方の固定」(この集のすゑに)からの脱却、すなわち句読点、字あけを施すという作業である。もちろんそれ以前に、短歌の命脈とこれからの短歌の「詩として」進むべき道を必死で模索していた時期があった。それは、明治の終わりのころ句点、読点、字あけを自作に施し始めるという試みである。短歌に句読点を入れるという営為は、逋空に始まったことではなく、与謝野鉄幹が『東西南北』の自作に句読点を施しているし、逋空の短歌の師でもある服部躬治も同じような試みをしている。逋空の句読点はこの服部から学んだものである。

こうした経緯から、「砂けぶり」は生れ出たのであるが、彼が言う「こうした様式の歌」の「こうした」は、具体的にどのような詩形をイメージしているのかは明らかでない。

池田彌三郎は沖繩の八八八六の琉歌形式を手本にしたと書く。(琉球文学の本土への刺戟―逋空短歌の場合)、『わが師わが学』昭和四十二年一月、桜楓社) また、藤井貞和は同じく沖繩の五・四・五・四あるいは五・三・五・三のリズムで進行するクエーナ形式、或はニーリ、アীগといった宮古島に伝わる祭祀歌謡のリズムをベースにして、その抑揚と破調とを繰り返しながら進む調子に導かれたものという見解を示す。(『新全集』月報、後『折口信夫の詩の成立』平成十二年七月、中央公論新社)

また一方、この新形式の歌には啄木の影響が色濃く反映していることも事実である。先に引用した一節の中にある「新形式の歌」が「砂けぶり」を含む一連の創作を指し、また「そうしたもの」というのが「生活」を指すことは明かである。それが、啄木の影響、特に生活面を基盤とした発想法に大きな影響をこうむっていることを示している。

既に述べたように、句読点、分ち書きの詩形(啄木は三行、逋空は四行ではあるが)など、啄木と逋空の類似点はとて多い。例えば、様式の問題については

私の歌を見ていたゞいて、第一に、かはった感じのしようと思ふのは、句読法の上にあるだらう。私の友だちはみな、つまらない努力だ。そんなにして、やつと訣る様な歌なら、技巧が不完全なのだと言ふ。けれども此点では、私は、極めて不遜である。私が、歌にきれ目を入れる事は、そんな事の為ばかりではない。文字に表される文学としては、当然とるべき形式として、皆で試みなければならぬ事を、人々が怠つて居るだけなのである。(中略) だらしない昔の優美をそのまゝついで、自身の呼吸や、思想の休止点を示す必要を感じない、のんきな心を持つて居て貰うては困る。(中略) 内在して居る拍子を示すのに、出来るだけ骨を折る事が、なぜ問題にもならないのであらう。

それに又、私の、かうしたじれつたい、面倒な為事にいたつく理由が、も一つあるのである。其は、歌の様式の固定を、自由な推移に導く予期から出てゐる。五七五七七の形を基準にして、書きもし、読み下しもする為に、自然の拍子は既に変つて居ても、やはり、句跨りと思ひ、讀んだり、感じたりして居る。此は表示法から来る読み方の固定なのである。私どもはどうしても、此だけは、我々の時代の協力によつて救ひ出さなければならぬ。歌の生命の為である。我々の愛執を持つ詩形の、自在なる發生の為である。(この集のすゑに『海やまのあひだ』『新全集』 一三三〜四頁)

と一言説は、傍線部を比較するだけでも

たとへば歌にしてもさうである。我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて来た。其処でこれは歌それ／＼の調子に依つて、或歌は二行に或歌は三行に書くことにすれば可い。よしそれが歌の調子そのものを破ると言はれるにしながら、その在来の調子それ自身が我々の感情にしつくりそぐはなくなつて来たのである。何も遠慮する必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはどし／＼字あまりもやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか歌にならないとかいふ勝手な拘束を罷めてしま

つて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へば可い。かうしてさへ行けば、忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない。(石川啄木「歌のいろ〜」明治四十三年十二月二十日「東京朝日新聞」)

という時の啄木の言説に極めて近似している(傍線部)。また、「生活」という観点においても逡空が「さうしたもの」といい「内側の拍子」と表現するものは、まさに啄木が言うところの「生活」という用語とはつきりと呼応しているのである。

「非短歌」へ

第二の場面は、昭和九年から十年にかけて発表された「水牢」「貧窮問答」の時代である。

「水牢」は、本人の言葉を借りて言えば、

中産の家に生ひ立つたものの謂れない軽侮をはね返す気持ちが出て居れば、満足である。(『短歌文学全集』(昭和

十二年一月、第一書房)当該作品の解説)

という解説を残しているが、そこに表わされているのは「生活」という事態への親和である。そしてもう一つここに「虚構性」という課題が顔を見せてくる。

このときも、逡空は「水牢」を発表した翌年の一月に、次のように述べて、東北の冷害の現状を歌うプロレタリア短歌作家たちの作品を批判して次のように述べる。

それ等の人たち(筆者注||短歌新興主義諸派の階級生活に主題をおいた作者群)が、階級生活或は、地方生活の歴史に對して、甚しく認識不足であつた点が、作物を極めて搏力の弱いものとしてゐるのだ。今年の東北数県に於ける、所謂冷害問題を取り扱ふ新聞記者たちの觀察力を註釈とすれば、かうした傾向の作家の、根本に於ける理會力が

思はせられる。「短歌将来の形式に関する一つの暗示」『日本短歌』第四卷第一号、昭和十年一月、後『短歌文学全集』に再録、『新全集』第二十九卷 二七〇頁)

私は第二・第三を押しなべて、「非短歌」と言つてゐる。「短歌に非ざる短歌」の義である。連歌から出て「誹諧」、誹諧から出て発句が成立した以上は、短歌から出て、「短歌」であつてよいのだらうかと言ひたくなる。「非短歌」は、一時の便宜に従つた仮り名である。別物だと言ふ事を示してゐるが、侮蔑を含んでは居ない。各自名分を明らかにし、守る所を諱かにするのが、至当だと思ふ。今は、第二派の脇の動力だつた第三派沈淪時代だから、自他共に心を騒す響きがなくなつた訣だ。此際、思ひを潜めて、短歌と言ふものゝ現在における姿を見るのは、どの方面へも、よい効果を持ち来す事になるだらう。

(「短歌の世界」、『くまひ』第十一卷第二号、昭和十年二月『新全集』第三十三卷 四三七〜八頁)

この時迢空は、「非短歌」という用語を初めて用いてゐる。「短歌に非らざる短歌」を示す義の「仮名」であるといながら、その後もこの「非短歌」という用語は使われ続ける。

この記述の中の「第二」とは新形式派、すなわち前田夕暮(水源地帯)や土岐善麿たちの自由律短歌をさすものと思われる。「第三」は「貧窮派」と言つてゐるが、プロレタリア短歌の系列、石川啄木、美木行雄、坪野哲久などを意識していると思われ、この場合の「非短歌」という用語は「一時の便宜上の名」として、むしろ「短歌」という様式(形式ではなく様式、すなわち思想、生活律を含めた本質に関わるものとして)に固執している者への批判的な言葉として使われている。

そして最後の試みは、戦後、短歌様式に対して桑原武夫をはじめとして第二芸術論を標榜する側からの批判が強くなつてきつつある時代に、そうした批判に一步先んじるようにして迢空は再び短歌からの離陸を試みる。その嘗為は、『日本雑歌集』の編纂と処女歌集『海やまのあひだ』をすべて四句詩形に改めて『迢空歌選』として刊行する試みと

なつて表出される。さらにこれと呼応するようにして、『短歌文学全集』を改作して『歌虚言』なる書籍を刊行しようとしており、こうした営為はすべて、短歌の命脈に関わる、短歌再興の試みととらえる事が出来るだろう。

『日本雑歌集』（昭和二十二年八月刊行）には「非短歌」として五首が収録された。「芸謡集」として「叙事詩曲 大仏開眼」、長唄「飛鳥」、舞台台本「花の松」と並べられて「雑歌」としているところを考えたい。長唄、叙事詩曲、舞台台本と言った叙事的なる内容を表現する様式と同列に並べることで、律文系統の様式の発生という営みの中で、図らずも出来上がった、「短歌から出て別の様式を整え」ようとして出来上がったもの、という程度の意味で使用されているのではないか。

『逍空歌選』（昭和二十二年十二月刊行）にも最後に「砂けぶり」と題して「砂けぶり」一・二、「水牢」「貧窮問答」「東京を侮辱するもの」の五首が集録されている。『逍空歌選』はそれまでの逍空の短歌作品を新たなテーマで再構成し、一行書きをすべて四行分かち書きとし、句読点、字あけを施したものである。短歌の命脈を意識しながら短歌から図らずも生まれ出たもの、短歌からいかなる詩形が可能であるか、歌にこだわり続けながら作品化して行つた集成の意味をも持つものであった。構成も応分に変えており、この営為が、かつての「海やまのあひだ」の律を解体して再び四句詩形に書き直すことによってこの歌群に叙事的な意味を持たせようとした逍空の目的と考えられる。そのことは、刊行を企図していた『歌虚言』の編纂の在り方とも符合する。

このように、逍空にとつて、いずれの時代も（悲短歌）の試みと、短歌様式への懐疑、そして短歌様式すなわち抒情からの離脱の試み、それはとりもなおさず「叙事」的発想の様式上の再生ということでもあるが、そうした試みが同期してあらわれていると言ふことができる。そして、すでに『海やまのあひだ』のあとがきに暗示されるように「虚構性」の問題が、その課題と並走するように、逍空の創作の重要な基盤にあったといふべきであろう。

こうした一連の「非短歌」への試みを通じたのち、はじめて逍空は『古代感愛集』への道を歩み始めたといつて

いい。戦後刊行された二つの特異であり顧みられない作品集『日本雑歌集』『逍空歌選』、さらに刊行を企図していた「歌虚言」の三冊は、短歌から離陸する（発生させる）新しい様式の作品への試みのそれぞれの集成として同じ意義を有するものと考えたい。そしてそれは、逍空最後の「短歌」再生への試みでもあった。

逍空の作品製作（別の言い方をすれば、それはとりもなおさず発生のレベルに自らの作品制作をおきなおすということ）において、様式の問題と言うのは、単なる形式の問題にとどまらない。作品を生み出す思想とそれを支える生活律とがおのづから生み出していく「しらべ」、つまり「心」が導く「形体的内容」の進化というものに強い意識を置いている。それは意図的に生み出そうとして生み出されるものではなく、いわば時代の思想や生活に作家が向き合っており、それともなつて作家の生活律が新しい様式に入ってくるといった、文学発生のありかたに力点が置かれているのである。

つまり「短歌から発生論的に出た新しい様式」でなければならなかった。だからこそ、「自由律短歌」でも「口語短歌」でもいけなかった。それは「短歌」という様式から離脱できていない、短歌作家の短歌という様式と格闘する思想や力の衰え、そして「歌」という様式と格闘しようとしないう安易な作家態度を見るからであった。そうではなくて「短歌」から発生的に離陸しなければならないもの、新しい様式を心の律動とともに補足していかなければならない。そこに「非短歌」という用語のもつこだわりがあった。それゆえに、逍空は「短歌様式」と格闘しなければならなかった。彼が短歌にこだわった理由はそこにあつたのである。あれだけ執拗に短歌滅亡論を書きながら、短歌に執着するのはそこにある。短歌以後の様式はどうあつても短歌から出なければならぬという確信が彼にはあつたと言ふべきである。こうした逍空の決意は、最初の歌集である『海やまのあひだ』のあとがきに既に強く主張されていたのである。

「非短歌」とは、そうした営為から出たいわば試作品としてあつた。

第五節 「非短歌」と東北探訪

はじめに

釋迢空（折口信夫）は昭和五年（一九三〇）から九年（一九三四）にかけて、五回にわたって東北地方を訪れた。

それまで東北に足を踏み入れなかった折口が、何ゆえその禁を破って東北の地を踏み、以後まるで堰をきつたように東北を旅して歩いたのか。⁽¹⁾

その理由の一端については、折口の民俗事象に対する相対の姿勢、つまりは方法論と調査手法の問題に関わる柳田國男に対する親和と相克のない交ぜになった感情を基礎にして、『古代研究』刊行を境にした折口民俗学の自立という観点から第三章第四節で論じている。

しかし、この一連の東北探訪が、単に民俗学に対する彼の向き合い方の問題にとどまらず、作品製作の場においても重要な転機をもたらしたのではないかと考えている。昭和五年にはじまるこの旅は、その後毎年のように続けられるが、その見聞が作品化されていくのは、昭和七年（一九三二）の短歌連作「津軽」が最初と見られる。これを機に、前節でも述べたように昭和九年から十年（一九三五）にかけて、迢空は関東大震災直後に「砂けぶり」によって一度挑戦した「非短歌」と称する詩形作品を改めて試みている。「水牢」「貧窮問答」「東京を侮辱するもの」等の作品であるが、やがてそれは『古代感愛集』に収録されることになる一連の作品に見られる新たな表現形式を一方で選び取っていく中で、自らの血肉としてある短歌様式を根底から突き動かす「生活」「思想」「詩発想」の盲動として意識化されていたのではなかったか。

昭和五年からはじまり昭和九年まで続いた東北探訪、そこでの見聞と実感が彼の作品製作とその理論にどのように抱え込まれ、後の遙空作品の展開を促しそして意義を決定づけたか。本節では、その前後における遙空の記述と作品のありかたを検討しながら、その道筋を辿ることにしたい。

昭和五年頃の東北

釋遙空の数次にわたる東北探訪の過程を、その時期東北地方の社会状況を傍らに見ながら、改めて検証しておこう。昭和五年八月二十九日、実質初めて仙台以北に足を踏み入れた遙空は、花巻温泉に一泊した後、翌三十日遠野を訪れる。留守宅を守る鈴木金太郎に宛て投函された書簡には、「村のをどりを長時間見せて貰うた」という記述がある(『新全集』第三十四卷 中央公論社 平成十年八月 一四二頁)。八月三十日付の『岩手日報』によると、岩手県は折から来県していた秩父宮雍人親王の歓迎一色で、遠野では二十九日から県連合青年団主催の各種大会が開かれていた。なかでも多賀座・吉野座では南部囃子など九つにおよぶ演目で郷土芸術大会が催されている。遙空は恐らくこの芸能大会を見学したのであろう。佐々木喜善宅に一泊した後、翌九月一日から九月四日まで、喜善を伴い徒歩と自動車を使って北上山地を縦断する。現在の国道三八八号線を北上し、川井から茂市へ入り、岩泉へ、そこから安家、陸中野田へと抜け久慈市鮫の本田旅館に投宿、その後恐山へと到っている。

昭和五年といえば、その前年十一月二十四日のニューヨーク株式の暴落に端を発した世界恐慌が、東北の農村を直撃した年である。生糸価格の暴落にひきずられるようにして農産品価格が軒並み下落、米価も前年に比べて玄米一石あたり一〇円近くも下落して、昭和五年十月には一九円となった。昭和六年(一九三二)の年明けはさらに下落を続け一七円六五銭の最安値を記録している(『日本農業年報』第一輯 日本農業研究会 昭和七年九月。尚、本稿で使用した当該年度毎の農業関係データはすべて本誌に処る)。

米だけでなく数少ない現金収入の途であった生糸、木炭などの商品市況も下がり、未曾有の大不況が到来する中で、経済基盤の弱い東北の農家は八方塞りの状況に陥り、娘の身売りや、食事も事欠く児童の増加が現実化しつつあった。そんな折、逕空は昭和六年八月三一日から二度目の東北探訪。岩谷堂、花巻に一泊した後、沼宮内から小本街道を車で葛巻へ（九月一日）。そこから馬淵川沿いに荒沢口、さらに鈴峠を越えて坂本、安家へと抜けそこで二泊（九月二・三日）。その後久慈・鮫へ出て一泊（九月四日）。翌五日には古間木（現三沢市）から十和田を経て蕨温泉で一泊。六日は蕨から十和田湖の南岸を通って毛馬内（現鹿角市）を経て大館で一泊。その後大鰐、青森を経て九月七日に三厩泊。そこから竜飛埼を廻って小泊、五所川原、秋田へと出ている。

この探訪で岩泉、特に安家に対しての執着が芽生えたのである。逕空は時を置かずして同年九月二十五日二度目の探訪に出立する。花巻から馬淵へ、再び馬淵川沿いの上つて岩泉へ向う。波多郁太郎の日記に「二十三日、先生からお電話、明後日安家へ立つかも知れぬが一緒に行かぬか」、「二十九日、花巻で先生とお別れし」とあるから、二十九日までは波多郁太郎と同行。その後、単身安家に入ったものと見られる。ひと月に続けて二度訪問した理由は、おそらく金太郎宛の書簡に「こんな不思議な絵馬浮世絵の展覽場が、陸中の奥山家にあらうとは思はなかつた。欲しかったが、へたを言うて、とりかへせぬ事をしてはと言ひ出しぞこねて戻つた。又の機会を考へて……」（『新全集』第三十四巻 一四八頁）。とあるように、馬淵川の上流荒沢口の社で見た元禄時代の役者絵を描いた絵馬など、山深い山間地に思いもかけない美を発見した感激だったかもしれない。

昭和五年から六年にかけての三回にわたる探訪で、この北上高地の地政学的な問題が彼の実感の中に刻み込まれたとみていい。特に昭和六年は九月の訪問であったが、「凧見たいな風でした」（『同』一四七頁）「峠向うから霧のあり様で続いて来た雨がいよ／＼本ぶりになった」（『同』一四九頁）などと書き送っているように、冷涼な夏を肌と感じ、峠越えでは東から押し寄せるヤマセを実見している。

この年の北東北は春先から湿ったヤマセが吹き付けて雨が多く、育苗期から低温寡照になって、苗の生育が質・量とも落ちた。悪天候によるヤマセは八月まで続き、一端天候が回復したが、再び冷涼な日が続いて、北海道と岩手、青森、秋田の三県は大正十五年（一九二六）以来の冷害に見舞われた。

東北地方で最も被害が大きかったのは青森県で、減収率四六%、次いで秋田県が一九%、岩手県が一二%であった。数字の上では青森県を除いて決定的な凶作には見えないが、この年の冷害は、前年の大恐慌の余波を受けて農産物価格が暴落、米の価格が大正八年（一九一九）を一〇〇とした場合昭和六年（一九三二）が三九という状況の中で引き起こされたものだった。米価暴落に冷害による減収が追い討ちをかけ、石あたり平均生産費が二三円一九銭にたいして米価は一八円四六銭と大幅な赤字、農家の借金は雪だるま式に増え、東北地方はまさに農業恐慌というべき惨状を呈していた。こうした事態は秋が深まるにつれてより深刻化し、娘の身売り、日々の食事にも事欠く状態が日常化する。在京各紙は、冷害が襲った北東北各県と北海道に特派員を送り、その現状をつぶさに取材、その報告が紙面をにぎわすことになった。当然逡空もこうした情報を見つめていた一人であった。

逡空が歩いた九月はまだその惨状が目に見えるものではなかったはずだが、村人達の様子や冷涼な夏の様子を肌で感じながら歩いた折口には、その情景が当然思い起こされていたであろう。しかし逡空はそのことについてはこの段階で一切触れずにいる。まだ折口の中でこの地の状況は必ずしも深い実感として受け止められていなかったところがある。

昭和七年九月 四度目の探訪。岩谷堂から岩手県内を廻り、尻内（八戸）から南下して陸羽東線で鳴子、酒田、鶴岡とたどって秋田で講演。

この年にはじめて東北に取材した連作「津軽」を『中央公論』（第四十七巻第三号）に発表している。内容から見て昭和六年、青森から三厩を経て小泊、五所川原と津軽半島を一周したときの見聞を基にしたものと思われる。また

十二月に『短歌研究』に発表した「猿ヶ石川」は、昭和五年と昭和六年の両方の旅の実感を重ねて創作されたと思われる。作品化まで時間がかかっていること、作品の内容も、人々の暮らした目には届いているものの、そこに表出されているのはやはり旅の見聞に基づく抒情であって、東北の惨状そのものに対する折口の感慨や思想は歌の中からは感じることができない。

昭和六年の凶作の影響は翌昭和七年にも及んだが、昭和八年（一九三三）は一転して大豊作となり、東北地方の農家はつかのまの安堵感を味わっていたが、しかしそれは次に来る大凶作の序奏に過ぎなかった。

昭和九年は早春から異常な気象が続いた。『昭和九年 岩手県凶作誌』（岩手県 昭和十二年十二月）によると、四月三十日から五月一日にかけて季節はずれの大雪となり、さらに五月は日照がほとんどなく低温状態が続き、五月三十一日に遅霜を記録した。「七月中旬に入ると共に北方より襲来せる冷気流は、南海上に滞留せる暖気流と抗争して豪雨を醸成し、且つ漸次南下するに及んで本県は其の冷気圏内に包容された為遂に低温となり、稲の育成上最も重要なる七・八両月及び九月上旬に至る間低温・多雨・寡照の悲観すべき気象状態を継続した」とある。宮城、山形北部を含む北東北一帯は、平年比一〇%以上の日照不足になった。こうした気象状態に加えて室戸台風が追い討ちをかけた。九月二十一日早朝に高知県室戸岬に上陸した台風は、その後日本海に抜け北上し、秋田県に再上陸、秋田岩手を横断して宮古市北方から千島沖に抜けた。冷害、台風、台風、霜害、雹害などが加わった典型的な複合凶作であった。この年の被害は岩手県が最も大きく、減収率五五%、青森県、山形県が四六%という惨状で、特に中山間地に被害が集中した。岩手県では県内二三六町村のうち減収率が三〇%未満ですんだのはわずか一二町村、残りの町村はすべて六〇%を越えるありさまであった。

一方この年の米価は、端境期の四月になって急騰した。借金返済のために飯米までも売り払っていた農家は、自ら食べる米を買うことができず、苦境に陥った。そこを襲った冷害である。

在京各紙が昭和六年と同様特派員を派遣、この冷害の現況を報じ始めたのが十月頃。一部新聞は八月頃から米価の高騰と農民達の苦境を伝え始めてはいたが、凶作が現実のものとなると、『東京日日新聞』が十月二十八日付け朝刊で東北振興会が大凶作救援のための義捐金募集に着手した事を伝えたのを嚆矢に、十一月は東北救援の大号令記事が紙面をにぎわせることとなる。

十一月九日付けの『東京日日新聞』が「過去一年間に六万人が離村 売られ行く東北の娘」と娘の身売りが常態化していることを報道、その後各紙連日婦女子の身売りや悪徳斡旋業者の所業などが報じられた。

逕空が、「水牢」を『短歌研究』に守谷豹司の名前で発表したのはそんな状況下、昭和九年の十月であった。「水牢」は、口語対句形式を一聯とし十三聯から成る作品である。関東大震災後に試みられた「砂けぶり」が四句をもつて一聯とするのと異なり、逕空にとつては初めて試みる形式であった。

「水牢」発表の翌月、昭和九年十一月、逕空は北東北へ五度目の探訪に旅立つ。仙台での講演の後、平泉で延年舞。大迫で大償、岳の早池峰神樂を見学、石鳥谷へ出てそこで同行していた北野博美、西角井正慶と別れて八戸へ。その後しばらく津軽半島を歩く。この旅はそれまでと異なって、十一月、まさに北東北が凶作の惨状を全国に訴えかけているそのさなかの訪問であった。

この訪問は仙台での講演予定にあわせてのものだったが、仙台から帰らずにそのまま北東北を歩いて回ったことは、偶然とはいえ刈上げの時期に訪問したこととあわせて、凶作の状況をつぶさに実感するという決定的な経験を遙空に与えた。歩行のさなか出精村の仏師に水虎像の複製を依頼したのはこの年である。⁽²⁾

短歌形式からの離陸

すでに第四節で述べたことではあるが改めて釈逕空の短歌創作史を概観しておこう。そこには、三回に及ぶ短歌形

式からの離陸の試みを確認することができる。

一、「砂けぶり」の時代（大正十二年（一九二三）から十四年（一九二五）にいたる頃）

二、「水牢」「貧窮問答」「東京を侮辱するもの」から「追悲荒年歌」を生み出すに至る時代（昭和十年頃）

三、『日本雑歌集』『遙空歌選』刊行と『歌虚言』編集の時代（戦後昭和二十一年（一九四六）頃）

遙空の短歌形式あるいはその本質に対する懐疑は、夙に「和歌批判の範疇（一）（二）（三）」（明治四十二年（一九〇九）五月・十一月、明治四十三年（一九一〇）四月）と、その論考をさらに展開した「言語情調論」（明治四十三年稿）に述べられる、短歌様式に関する言語学的追求にその初発を見ることが出来る。短歌を形式・内容の一元論的立場から分析する過程で得られた認識によって、三十一文字という字数の定着とそれを読み下す際に抱えてしまう特殊情調に短歌の宿命的問題点を見出していった。さらには短歌が本質的に抱えてしまう抒情味、さらには作者の事実に対する甘えや「読者の生活が訣つてゐるところから来る変態な観賞」（「時代の口」出現への要望）・『短歌雑誌』第十三卷第八号 昭和五年八月、『新全集』第二十九卷 一七五頁）に、遙空は短歌形式の限界を感じていたのである。

大地震の当時には三十一文字の歌を作る気分になれないで、四句一聯の短歌的小曲とでもいつたものが、自然に胸を溢れ出るやうに五十首も出てきたと思ふ。『同』一七五―六頁）

関東地震のあつた翌々日夜、横浜に著いた。上陸したのは、其翌正午だ。道々酸鼻な、残酷な色々の姿を見る目を掩う間がなかつた。歩きとほして、品川から芝橋へかゝつたのが黄昏で、其からは焼け野だ。自警団の咎めが嚴重で、人間に凄まじさ・あさましさを痛感した。此気持ちは三ヶ月や半年、元通りにならなかつた。かうした様式の歌の出来たのも、其時であつた。

（「砂けぶり」自注『短歌文学全集 釈遙空篇』第一書房 昭和十二年一月、『新全集』第三十三卷 四六九頁）

挙げていけばきりがないほど、後に名付けられる「非短歌」様式に対する言及は多い。大地震によって激烈に作者

の心に印象した人の「凄まじさ・あさましき」を表現するには短歌はあまりにも抒情味をまといつかせすぎ、「時代としての力を失っている。「砂けぶり」は、こうした抒情からの離陸という意志に支えられて、文学として人々の生活を激しく揺さぶる出来事に作者が遭遇したとき、「悲しみの心躍り」を喜びとともに作品内に抱え込む力、悲劇精神、悲劇のために緊張するという心の姿を表現する器を取り戻すための、いわば「盲動」から発するやむにやまれぬものとして誕生したのであった。⁽³⁾

しかし逕空はこれら一連の作物を「概念的なものになり、回顧いつてんばりになつて居る『同』」として打ち捨てることとなる。捨てるといってもそれはことさらのものではない。藤井貞和が「詩の成立」(『折口信夫の詩の成立』平成十二年六月 中央公論新社)の中で「砂けぶり」に見せた短歌からあふれ出す「非短歌」のいきおいを、短歌そのものへとつて返すためのエネルギーに一旦し尽くしている」と指摘したように、「砂けぶり」については、それが新たな様式への「固定」を見ることなく、短歌の問題に戻ったにすぎない。逕空の意識は「不甲斐なく地震の印象を喪失してつたものが、日本人の幽霊たる短歌の本質的な味ひに未練を取り戻して来た」(『短歌小論』『日本短歌』第三巻 第一号 昭和九年一月)ということになる。この「味ひ」こそが、『海やまのあひだ』に旺盛に示されるひそけさ、かそけさという用語に代表される「生の悲しみ」を見つめる観照態度であったということになる。しかしその歌集の追い書き(『この集のすゑに』)にも、

私は、かうして、いろ／＼な休止点を表示してゐる中に、自然に、次の詩形の、短歌から生れて来るのを、易く見出す事が出来相に思うてゐる。

とあって、短歌から新たな詩形へと赴く意志がまだ潰えていないことを吐露している。むしろ、逕空の志向していた問題意識は、新しい文学様式の発生であり、それは短歌様式を基盤にしてなされるはずのものだと言う見通しからすれば、短歌から「砂けぶり」への道、すなわち彼の短歌と非短歌との往還はいわば必然であったと言うべきであろう。

遙空は決して短歌・非短歌どちらかの様式に固定させることを求めていたのではない。むしろ「どのみち、創作は盲動でなければならぬ」（本質に触れた改革『短歌春秋』第四卷第四号 昭和九年四月）「一寸新しい歌をやつても、今までの歌から得て来た喜びを失つてしまふから、また後戻りして丁ふ。かういふことを繰り返しく／＼してゐるうちに、何かゞ出来てくる。（中略）最も力強いものは、盲目滅法動いてゆく時に生れる……もがいてゐるうちに何かゞ生れてくる」（『短歌小論』）というように、形式はたまたま後になつて付いてきたに過ぎない。遙空が求めていたのは、まさに「時代の口^{トキ}」であり、地震という未曾有の社会的出来事に遭遇したときに、それに向き合う文学がいかに新たな生活心理を開拓するか、その力であつた。

「歌の円寂するとき」（『改造』第八卷第七号 大正十五年七月）、「歌の円寂する時 続篇」（『近代風景』第二卷第一号 昭和二年一月）ほかこの時期の遙空の短歌滅亡論は、滅亡を積極的に予期、受容したものでは決してなく、短歌から生み出される新たな文学への呪詞とみるべきであらう。

そして、昭和十年。遙空の短歌からの離陸の試みは、度重なる東北採訪において見聞した北の台地の人々の悲劇をきっかけにして再び顔を覗かせる。守谷豹司の名で発表される三つの作品「水牢」「貧窮問答」「東京を侮辱するもの」が、「砂けぶり」の時代に放棄した「時代の口^{トキ}」への盲動を改めて遙空に促した作品といえる。その証左に、既に引用しているように、彼はこの作品発表に前後して再び短歌形式への疑問と新たな詩形への呪詞を改めて口にし始めている。それは明らかに、プロレタリア短歌に代表される作品への批判と、東北大凶作を始めとする農民達の痛苦に付き合うことであつた。

三つの「非短歌」作品の自注とあわせて見ると、この作品がいかに東北の悲劇と関わっているか、悲劇に律動した遙空の盲動の姿を見ることが出来る。

昭和九年十月「水牢」発表。

中産の家に生ひ立つたものゝ謂れない軽侮を跳ね返す気持ちが出て居れば、満足である（「水牢」自注）。

昭和十年一月「短歌将来の形式に関する一つの暗示」発表。

それ等の人たち（筆者注Ⅱ短歌新興主義諸派の階級生活に主題をおいた作者群）が、階級生活或は、地方生活の歴史に對して、甚しく認識不足であつた点が、作物を極めて謂搏の弱いものとしてゐるのだ。今年の東北数県に於ける、所謂冷害問題を取り扱ふ新聞記者たちの観察力を註釈とすれば、かうした傾向の作家の、根本に於ける理會力は思はせられる。

昭和十年三月「貧窮問答」発表。

昭和五年以後、屢奥州・出羽へ行くやうになつた。殊に農村荒廢の噂の高かつた地方ばかりを、偶然にもあるくことが多かつた。さうして、東京での報道や議論が、可なり空なものだと知つた。寂しいのは昔からであり、荒れてゐるのは、土地自体の歴史的事実だつたことを思うて、事好む人たちの実のない濟世論は、竟に細民生活と、没交渉なることが告げなくなつた（「貧窮問答」自注）。

（後略）

昭和十年四月「東京を侮辱するもの」を発表。

昭和十年十一月 連作「凶年」を発表。

短歌様式から再び新たな詩形への模索、そして往還は、東北の大凶作による北の台地に生きる人々の悲劇に強く触發されてのことであり、しかもそれを十分に受け止められない不甲斐なさは、「水牢」に登場する「中産階級」の教授の姿に仮託されている。文学者としてこの悲劇をどう表現するか、その模索の中に、再び「非短歌」が試された。

その形式は「砂けぶり」とはずいぶんと異なるものになつてはいるが、守谷豹司という名で発表された二句相對詩形という今までにない形式で発表された作品は、やがて「追悲荒年歌」を生み出し、それが『古代感愛集』の冒頭を飾

ることになるのは、決して偶然ではないのである。

「追悲荒年歌」の自注には次のように記される。

初めて(?) 発表した長歌。昭和十年。『短歌研究』「静けき空」の中。反歌は、後に加へた。此前年、東北凶作の事、頻りに新聞に伝へ、虚実常に相半して居た。だが、奥州の農民の貧寒に苦しむ事は、菊多・白河の関より奥に、空閑を開いた昔からの事で、経済世態が進むにつれて、痛苦の激しく感じられるのは、当然である。其を思ふと、生を其国々の而も、水冷かに山掩ふ里陰に享けた人々を、いとほしまずには居られない。此歌は、数度漂遊した印象から出た空想である。

〔追悲荒年歌〕自注『短歌文学全集 釈迢空篇』第一書房 昭和十二年一月『新全集』第三十三卷 四七五頁(傍線筆者)

東北での見聞、大凶作に見舞われた東北をいとおしむ心、それをいかなる様式で表現しようとしたか、その盲動の先に、初めての長歌様式が生み出された。「初めて」のあとに付された「(?)」は、折口の模索の歴史を物語っているだろう。

注

(1) 大正八年に、鹿児島造士館に在籍していた伊勢清志の恋愛を耳にし、伊勢に会うことを決心し、その旅費工面のために教え子梶喜一のいる会津若松に立ち寄ったのが最初の東北入りであるが、これはあくまで金策のためであり実質的な質問とは言い難いため、勘定には入れていない。

(2) この水虎像は、東京大井出石の寓居の玄関に安置され、折口によって手厚く祀られていたことはよく知られる。その心意の背後に、空閑を開いたときから貧苦と度重なる凶作に見舞われ、命落とした東北の農民達への鎮魂の思いが籠められてはいたのではないか。

(3) 折口のこうした様式に対する向きあい方は、当然震災後の日本の歌壇、詩壇、文壇の動向と無縁ではない。短歌における新興短歌・プロレタリア短歌の興隆、詩における様式改革の機運などとの交錯は当然考えなければならない。

第六節 「うみやまのあひだ」の変相

はじめに

釋迢空（折口信夫）の処女公刊歌集である改造社版『海やまのあひだ』には、明治三十七年、作者が中学生時代に作った歌から始めて、大正十四年に至るまでに製作された短歌六九一首が、逆編年体で配列され収められている。

歌集の表題である「海やまのあひだ」という名称は、作者にとって極めて重要な意味を持つものであった。

公刊歌集刊行の十二年前、私家版歌集『ひとりして』を自ら編集製作する際、その第四部として八十八首の歌を集めた部立ての表題に「うみやまのあひだ」と命名したのをはじめとして、大正二年三月に「國學院大學同窓会雑誌『穂』（第二年三月号）」に二十五首の連作を発表した際にも、また大正二年七月から八月にかけて『不二新聞』に四回にわたって都合二十九首の羈旅連作を発表した際にも、その表題に「うみやまのあひだ」と名づけている。

こうした一連の「うみやまのあひだ」という名辞を抱えこむ主題のさきがけとなったのが、迢空最初の私家版歌集『安乗帖』であったことは、すでに明らかにされている。

『安乗帖』を初発とする釋迢空の「うみやまのあひだ」にかかわる問題は、この『安乗帖』成立のきっかけになった明治四十五年の伊勢熊野の旅において、折口が実感したといわれる「異郷意識」の問題と絡めて、迢空のその後の学問研究における、初発としての彼のまなざしを定位する見解が専らである。

たとえば、キーワードを中心に手堅い整理解説を行っている『折口信夫事典』の中で持田叙子、伊藤好英は

地方に住む人間の一人一人の内面のさびしさを自己の内面に繋げ、その感傷を歌の形に表わそうとするとところから「海やまのあひだ」は出発した。(中略)しかし「海やまのあひだ」は、そこだけに留まるものではない。さらに、学問・創作両面に大きな広がりを見せ展開してゆく。⁽¹⁾

と述べる。また伊藤肇は

熊野行の体験から形成されて来た遙空の始原的靈的(旅心)は、「海やまのあひだ」という語を単に志摩・熊野の風土の特徴を表わす語として限定することから飛躍して、柳田の「山島」の概念を導入しつつ、日本という風土全体を表わす語・概念へと象徴せしめたと考えることができる。⁽²⁾

と述べ、いずれも以後の遙空の旅を「うみやまのあひだ」という主題追求と結びつけている。確かに、「うみやまのあひだ」の問題には、後年「異郷意識の進展」などに展開する民族の異郷観あるいは靈魂観の問題と、海と山とに囲まれ生を営む人々への限りない関心からくる、民俗学的基盤に立った折口信夫の学問的テーマ追及のまなざしが抱え込まれていくのは事実である。しかし、大正二年から初発した「海やまのあひだ」という問題が、首尾一貫して折口の学問的テーマ追及の軌道にあってと考えるのは、はたして可能なのか。

本節では、そうした問題意識に立ちながら、『安乗帖』から『海やまのあひだ』に至る、それぞれのテキストのうち主要なテキストについて、当該「うみやまのあひだ」と名付けられた本文を比較分析し、短歌作成と推敲の様子及び歌集への編纂過程、各本文の位相を探りながら、十二年間に亘って釋遙空の執意が集約された「うみやまのあひだ」という問題に接近し、その内実を探ろうと思う。

「うみやまのあひだ」の本文

『安乗帖』は、大正元年八月、当時教職にあった今宮中学の教え子、伊勢清志、上道清一の二人を伴って、伊勢か

ら熊野まで十三日間の苦行の旅をした際、その途次で生まれた短歌百七十七首を集めた逍空最初の私家版歌集である。⁽³⁾この百七十七首の歌の中から、逍空自身の意志によって選択され、改作を受け、また配列を異にした一連の作品が、まずは國學院大學同窓会雑誌『穂』に載せられ、次いで『不二新聞』に発表されるわけである。

それと同時に、第二の私家版歌集『ひとりして』の編集製作が進んでいた。その過程で、『安乗帖』収録歌のうち八十八首が、やはり推敲、改作を受けて、『ひとりして』の第四部「うみやまのあひだ」に受け継がれていく。⁽⁴⁾

『ひとりして』は、『不二新聞』発表後、ほぼ半年をかけて作られた歌集である。現在確認できる本文は四本、友人の田端憲之助、吉村洪一、武田祐吉にそれぞれ贈呈した本（以後これらを『ひとりして』の「田端本」「吉村本」「武田本」と呼び、またこの三本を総称して「贈呈三本」と呼ぶ）のほか、逍空自身が所蔵していた自筆書き入れ本（以後「折口旧蔵本」とあり、本文にそれぞれに若干の異同がある）。

また、旧全集の原稿には、この四つの本文とは全く異なる校異が「自筆」として示されており、旧全集編纂時には、現存する諸本とは別の一本が参照されていたことが確認される。現在は所在がわからない。この幻の一本は、配列は贈呈三本とほぼ同じであるが、個々の短歌表現の在り方から、「贈呈三本」より『安乗帖』に近い形を示しており、「自筆草稿本」とでも名付けられるべき一本であることが推定される。（以後「草稿本」と呼ぶ）さらに折口旧蔵本には、二次にわたる逍空の書入れが施されているので、『ひとりして』の本文は基本的に七種類あるということになる。⁽⁵⁾

このほか、「うみやまのあひだ」に関わる本文としては、安藤英方に贈った一本がある。この本は、「うみやまのあひだ」と題された自筆の原稿を綴じたものである。後年刊行された複製本（昭和三十九年一月発行）の解説に、「小分けすれば、十八枚、二十二枚、十二枚になるのを一つに綴じたもの」と書かれているところから、一本として自装されたものではなく、原稿用紙に部立て毎に書かれた一綴りということになる。他の本でいえば、第四部「うみやまのあひだ」に収められている六十八首を冒頭に据え、その後に「小鳥の歌」から八十六首、「酒ののち」から四十七首

の計二百一首で構成されている。ただ、この構成順序については、複製本作成の際なされたものである可能性が高く、全面的に信用するわけにはいかない。全編にわたって部立て名が明記されておらず、表題として「うみやまのあひだ」と題されているが、先の諸本から一步進んだもの、あるいは『ひとりして』の抄録といった性格がうかがえる。

この他に、「うみやまのあひだ」を考える上で欠かせない本文がいくつか存在する。國學院大學同窓会雑誌『穂』と『不二新聞』それから『國學院雑誌』である。

『穂』には「うみやまのあひだ」と題して二十五首を載せている。『不二新聞』には大正二年七月十日に「迢空集 海山のあひだ」として十一首、七月十七日に九首、八月三日に五首、八月五日に「迢空集」と題して四首と、四回に分けて都合二十九首が掲載されている。

『國學院雑誌』には、第二十一巻六号（大正四年六月）に十九首、同七号（同七月）に二十二首の計四十二首が、それぞれ「海やまのあひだ」(一)(二)と題して掲載されている。

以上述べた「うみやまのあひだ」に関わる本文と収録歌数を整理すると以下のようなになる。

- A 折口古代研究所蔵『安乗帖』（大正元年十二月）百七十七首
- B （旧全集編纂時に参照したと思われる『安乗帖』原本）同
- C 「うみやまのあひだ」『穂』第二年三号、大正二年三月）二十五首
- D 「迢空集 海山のあひだ」『不二新聞』大正二年七月・八月）二十九首
- E 「海山のあひだ」『國學院雑誌』第二十一巻第六・七号、大正四年六月・七月）四十二首
- F 「うみやまのあひだ」（田端憲之助贈呈本『ひとりして』所載、大正二年十月贈呈）八十六首
- G 「うみやまのあひだ」（吉村洪一贈呈本『ひとりして』所載、大正二年十二月贈呈）八十八首
- H 「うみやまのあひだ」（武田祐吉贈呈本『ひとりして』所載、大正三年四月贈呈）八十八首

- I (旧全集編纂時に参照したと思われる『ひとりして』(草稿本) 所載) 八十九首
 J 折口古代研究所所蔵自筆書き入れ本『ひとりして』(折口旧蔵本) 原部分 八十八首
 K 同『ひとりして』加筆1 同
 L 同『ひとりして』加筆2 ×を除いた数 四十三首
 M 安藤英方本『うみやまのあひだ』(大正四年春から夏頃贈呈) 六十八首
 N 「熊野」(『アララギ』第十卷第一号、大正六年一月) 八首
 O 「海山のあひだ」(『日光』第一卷第七号、大正十三年十月) 二十二首
 P 改造社版『海やまのあひだ』所収(大正十四年五月) 二十三首

この本文の種類と数から窺える逍空の圧倒的なこだわりを見れば、國學院大學の同窓会雑誌『穂』に初めて二十五首を「うみやまのあひだ」と題して発表して以来約十三年間、「うみやまのあひだ」という名称およびその抱える問題が、釋逍空の短歌製作を支える重要な主題の一つであったことは明らかである。

このように、逍空の初期短歌における重要な意味を持つ作品群、テキスト群でありながら、これらの本文については、従来一部を除いてほとんど分析がなされてこなかった。そのため「うみやまのあひだ」にかかわる各テキストの成立年代、推敲過程、構成のあり方など、作品成立上の位相については、ほとんど明らかではない。⁽⁷⁾また諸本間の比較と分析は、逍空の初期短歌表現の推敲を考える上で欠かせない作業であるはずだが、一部の歌についてそれがなされている以外、今まではほとんど省みられることがなかった。この時期の逍空の短歌製作の方法を探るには、それぞれの本文においての表現の推敲過程、歌の構成の在り方など、テキスト内部に立ち入って分析する以外に無い。

テキストの位相

先に述べたように、「うみやまのあひだ」にかかわるテキストは、書き込みなどを含めると十六種類を認めることが出来る。うち、特に重要な本文として『安乗帖』『ひとりして』『海やまのあひだ』の自装私家版を含めた歌集とそれにかかわるもの、ならびにこれら歌集製作の過程で雑誌発表されたいくつかの連作、特に『穂』『不二新聞』『國學院雑誌』発表のものをあげることが出来る。

歌そのもののありようでは『安乗帖』から『ひとりして』を経て改造社版収録の「奥熊野」二十三首に収斂されていく過程、一方「うみやまのあひだ」というテーマが歌集全体を抱え込む形で拡大化していく過程それぞれにおいて、「うみやまのあひだ」という問題が、どのような課題として追空の中で内在していたか。そしてその内在の仕方は首尾一貫したものであったか。「うみやまのあひだ」にかかわる各テキストの位相を検討することによって、その差異性、共通性を捉えながら、「海やまのあひだ」というテーマがどのように変相し、どのように表現変容していったか、まずはそれを検証してゆきたい。

手始めに各諸本が、どのような関係性を有しているか、試みに主要テキスト十一種類について、収録歌の構成状況を検討する。「うみやまのあひだ」に関わる連作について、その冒頭歌から歌ごとに通し番号を付した上で、『安乗帖』の構成順を基準として、他のテキストがどのように構成上変更をうけたかを示したのが、表1である。^③

表の番号は、『安乗帖』の配列順に従って振つてある。例えば、『安乗帖』の冒頭歌(番号1)が他のテキストでどの位置に配列されたかを示している。また「K」「L」の「X」は「J」に施された記号で、折口の自選評価の結果と思われる。「X」「XX」の二種類が振られている。

表1: 『うみやまのあひだ』各テキストにおける歌の配列

各テキストの番号はすべて『安乗帖』の配列順を基準としている。

×は (J) に加筆された「×」を示す。

『不二新聞』: a 7月10日 b 7月17日 c 8月3日 d 8月5日付

『國學院雑誌』: b大正4年7月号 『ひとりして』: 「抜」は欠落頁の分と想定される歌

『安乗帖』 (A)	『穂』 所収(C)	『不二新聞』 所収(D)	『ひとりして』所収					『うみやまのあひだ』 所収(M)	『國學院雑誌』 所収(E)	『海やまのあひだ』 刊行本所収(P)
			吉村本 T2/12 (G)	武田本 T3/4 (H)	草稿本 (I)	折口所 蔵本 (J)	同折口 加筆 (K・L)			
T1 (M45) /12	T2/3	T2/ 7.8								
1	1	1a	1	1	1	1		1	1	1
2			51	51	51	41		41		
3		7a	4	4	4	4		4	4	
4		3a	3	3	3	3		3	3	3
5			52	52	52	17	××	17	26b	
6			59	抜	59	18	××	18	27b	
11						70				20
13			61	61	60	22		22	18	8
14			62	62	61	13		13	11	5
15			63	63	62	37	××	37	41b	
17	5	16b	16	16	16	57		57	10	18
18			64	64	63	36		36	40b	11
19		27d	28	28	28	69				
21	7	12b	14	14	12	55		55		17
22			73	72	73	30		30	34b	
25	13	5a	7	6	7	9		9	12	
26			56	56	56	39	××	39	13	
27		26d	27	27	27	68		68		
28			55	55	55	40	××	40		
29	10	4a	6	6	6	6	×	6	20b	
30			31	31	31	71	××			
31			60	抜		87				
35	6	25c	25	25	25	67		67		19
37			65	65	64	38	××	38	42b	
38	15	13b	15	15	13	56	××	56		
40	3	8a	5	5	5	5	×	5	5	

第六節 「うみやまのあひだ」の変相 104

41	11	11a	11	11	11	53	××	53	8	
42			33	33	33	72	××			
43			66	66	66	20	××	20	28b	
44			32	32	32					
45			67	67	66	35	××	35	39b	
48			70	70	67	32	××	32	36b	
52						73	××			
56			34	34	34					
57			68	68	68	34	××	34	38b	
58		29d	30	30	30					
59			69	69	69	33	××	33	37b	
60			35	35	35					
62	16	17b	17	17	17	58	××	58		
63	18	19b	19	19	19	60	××	60		
64	19	20b	20	20	20	61	××	61		
65	20	21c	21	21	21	62	××	62		
66			37	37	37					
67			38	38	39					
68			序	序	序	序	×	序		
70						74	××			
71	2	2a	2	2	2	2		2	2	2
73			36	36	36					
74	22	23c	23	23	23	64	××	64		
75	21	22c	22	22	22	63	××	63		
78			48	48	49	45		45		13
79			47	47	48	46	××	46		
80			39	39	39					
81			41	41	41	85				23
82			40	40	40	75	××			
83			26	26	26	66	×	66		
86						86				
88			42	42	42	50		50	7	15
94	12	6a	8	8	8	51		51	6	16
95						84				
96	25	24c	24	24	24	65		65	17	
102						83				22
103	8	9a	9	9	9	10		10		
105	23	15b	13	13	15	15		15	24b	6
106						82	××			
109			76	76	76	28	××	28	32b	
110			75	75	75	27	××	27	31b	

111			43	43	43	49	××	49		
113	17	18b	18	18	18	59	××	59		
115						78	××			
117			77	77	77	25	××	25	30b	
119	9	10a	10	10	10	52		52		
121	24	14b	12	12	14	54	×	54	9	
127		28d	29	29	29	76	××			
129			50	50	50	43	××	43		
133			49	49	44	44		44		12
136			44	44	45	12		12	22b	4
150			72	73	72	31	××	31	35b	
153			71	71	71	29	××	29	33b	
156			74	74	74	21	×	21	14	
158			46	46	47	47		47		
159			79	79	79	24	×→ 改稿	24	29b	9
167						81				
169			58	抜	58					
171			78	78	78	26		26		10
175						79				21
176						80	×			
			81	81	81	7	××	7	21b	
			87	87	84	8	××	8	15	
			57	抜	57	11	××	11	19	
			80	80	80	14	××	14	23b	
			82	82	82	16	×→ イキ	16	25b	7
			53	53	53	19	××	19	16	
			83	87	83	23	×	23		
			54	54	54	42	××	42		
			45	45	46	48		48		14
			86	86	87	77	××			
			84	84	85					
			85	85	86					
					70					

『安乗帖』に収録された歌が、後のテキストにおいてどのように再構成され、その構成のあり方が各本文においてどのような差異を示しているかをみることによって、迢空の中で「うみやまのあひだ」というテーマがどのように変容したかの一端を窺い知ることができよう。この表によって、各テキストの位相に関して判明したことを、以下に網羅的に示そう。

(1) 『安乗帖』から二十五首を抜き出して『穂』所収の「うみやまのあひだ」が構成された。その後新たに『安乗帖』から四首を加えたものが『不二新聞』所収の「迢空集 海山のあひだ」である。『不二新聞』所収の冒頭二十五首は構成は若干異なるものの『穂』所収の歌と同じである。

(2) 『不二新聞』発表の歌二十九首は、一首を除いて、『ひとりして』贈呈三本の冒頭三十首にほぼそのままの形で流用された。つまり、『穂』『不二新聞』『ひとりして』贈呈三本は、構成上きわめて類似した性格を有していたことになる。『穂』『不二新聞』は、ともに私家版歌集『ひとりして』製作を念頭に置き、それを導く本文であったことは明らかである。

(3) 『ひとりして』には『安乗帖』に収録されていない歌が十三首新たに加えられている。

(4) 『ひとりして』贈呈三本と折口旧蔵本との間には、所収された歌は同じであるものの、構成上大きな相違が認められる。一見するとほとんど別の歌集といつてよい。贈呈三本の製作時期は、それぞれの記録などによって、昭和二年十二月から昭和三年四月までの時期であることが確認されており、このことから昭和三年四月以降に『ひとりして』贈呈三本の構成を変更して異なった性格の新たな歌集を模索した時期があったことを示している。

(5) 安藤本「うみやまのあひだ」六十八首の構成は、『ひとりして』折口旧蔵本とほとんど同等の姿を示している。このことから、安藤本「うみやまのあひだ」は折口旧蔵本と密接な関係にある本文であることが窺える。あえ

たとえば、安藤本の贈呈が大正四年春という点を考慮すると、折口旧蔵本『ひとりして』の成立もこれに遠からぬ時期とするのが穏当だろう。

(6) 「折口旧蔵本」には、二次にわたる書き込みがなされているが、そのうち、黒インクで各歌に×を振った書き込みがある。これは、ある段階で歌の自選評価、取捨選択を行ったことを示していると思われる。×を振った歌で、改造社版『海やまのあひだ』に採られた歌は認められない⁽⁹⁾。つまり、折口旧蔵本の二次書き入れは、改造社版製作に向けて施された可能性が高い。

(7) 『國學院雜誌』の構成は、他の諸本と非常に異なるごとくであるが、一つ重要な特徴が認められる。それは、『不二新聞』に発表した歌の多くが『國學院雜誌』発表時に捨てられていることである。このことは、『不二新聞』発表時と、『國學院雜誌』発表時において、「うみやまのあひだ」という問題に対する意識に、あるいはそれを構成する企画に懸隔が生じていたということを窺わせている。

(8) 『日光』所載の「海山のあひだ」は、それまでこの表題をもって発表されてきた連作と全く異なる本文である。「奥熊野」十一首、「蟹の村 老岐」十一首によって構成される連作だが、それらは改造社版冒頭において連作「島山」「蟹の村」に再構成される歌群である。ここにおいて「うみやまのあひだ」という問題が、『安乗帖』『ひとりして』と続いてきた本文とは別種の本文を抱え新しい展開を見せはじめる、その最初の本文であるといえることができる。

(9) 改造社版『海やまのあひだ』は、『安乗帖』から「うみやまのあひだ」というテーマでくりかえし再構成されつづけてきた歌群を、「奥熊野」二十三首の中に封印した後に、そのテーマを改めて歌集全体に及ぼすことで、「うみやまのあひだ」に二重性をもたらしている。

以上のことを総合すると、連作「うみやまのあひだ」の本文は、その構成上の相違を検討した場合、成立順に以下

の六種類に分類することができる。

『安乗帖』

『穂』『不二新聞』『ひとりして』(草稿本・贈呈三本)

『ひとりして』(折口旧蔵本)、『うみやまのあひだ』(安藤本)

『ひとりして』(折口旧蔵本書き入れ)

『日光』所収「海やまのあひだ」

改造社版『海やまのあひだ』

何ゆえ各テキストにおいてこのような本文構成上の懸隔が生じたのか、テキスト本文内部に立ち入ることで「うみやまのあひだ」という問題、特にここでは『穂』『不二新聞』『ひとりして』という三つの本文が持つ位相を検討しながら、その変相について考えてゆこう。

「うみやまのあひだ」という問題

「うみやまのあひだ」という問題に対する作者の意識が、十三年間を通じて、つまり『安乗帖』を初発とし『穂』によつてはじめて「うみやまのあひだ」という名を与えられてから、改造社版『海やまのあひだ』において公刊歌集として世に問われるまで、終始一貫していたと考えるのは早計であろう。それこそうしておびただしいテキストが生み出された根源のもの、手を変え品を変えてこの主題から歌を改め続けた彼の熱意とそれに拠るテキストの変相こそが、「うみやまのあひだ」成立の本質的意味なのではないかと考える。

『不二新聞』以降登場する『海山のあひだ』ということばとそれが内包する問題は、『安乗帖』の方向性と直接結び合っているのではなく、そこに作者のなんらかの意志が介在していることが窺える。

『安乗帖』にはなかった歌で、『ひとりして』製作の際に加えられた歌は十三首ある。(一〇五頁表1の下段参照)このうち以下の四首が、他の九首と異つて連作内部へとりこまれている。

57 はたごやの廂をぐらく よそぎぬし乾し菜のかけをおもふ タやけ

53 なごみごち旅にえてけり 髪かれば 日かげものどに 臍に落ちて来て

54 底の国 よみの曙 牟婁の江に 今ほの白み 青き波よる

45 旅ごころ ものなつかしも 夜まつりをつかふる浦の 人出にまじる(数字は贈呈三本における配列番号)

たとえば57は、『安乗帖』の番号で言えば、26番歌「奥牟婁の山くもり日の濡れ色に青みて寒く蝸のなく」と169番歌「あかあかと夕日さし入る 青海の勝浦の町の 病院のまど」にはさまれる形で56・57・58の順に配列されている。他の三首いづれも、この周辺に挿入されている。これら四首を挿入することにより、『ひとりして』の配列順45番歌から58番歌までの十四首において、遙空の孤愁がより一層強化される構成になっている。

また次の九首は、それぞれの諸本末尾に以下の配列で追加されている。(本文表記は吉村本に拠る。)

80 高山のかけりかなし^{まがね}み たそがれて^{まがね}蝸^{まがね}なく

81 かたし国 木の長島に 舟が^{まがね}りして とふ巫女のくちの かなし^{まがね}さ(贈呈三本は「かたし国」武田本は「かたし」

を「おきつ」に訂正)

82 二本の海 迫門のふなのり わだつみの 入日の濤に 涙おとさむ

83 いさなとり 夜明の磯に 大地の子 船から見おろし 海の 幸耀る

84 よれしなへ 穂麦をかげろふひるの道 舌吐く犬の かなし^{まがね}かりけり

85 命さへ もはら あへなく見え来つる かなし^{まがね}き旅もをはり近づく

86 そゝや この夜のまどすぎつ しらじらと 板戸の闇にまどへり 木ぬれ

87 身をけづるこのわづらひは 誰知らむ 旅籠の暮に 夕顔をきる

70 白毛櫂の木と 梅と枝さしこもりたるわたくし闇になげ入れぬ身を(草稿本のみ所載)

(数字は贈呈三本及び草稿本における配列順。傍線は筆者。)

これらの歌は、『安乗帖』を再構成して『ひとりして』を製作した際に、「うみやまのあひだ」という思想の下に新たに付け加えられたものと見ることが出来る。しかも、これらの歌を見て即座に気づくことは、「かなし」という語の多用、そしてそれに基づく歌境の変化である。それについては後に述べるが、ある意味では、この九首の歌の追加こそが、道行きのな性格を持った羈旅歌集であった『安乗帖』を別の意図を持った歌集『ひとりして』へと展開させた特徴的な営為のひとつだったということが出来る。

一方、贈呈三本において末尾に追加された九首は、折口旧蔵本においては末尾から切りはなされて、歌集内部にそれぞれ埋めこまれてゆく。その様子を表にしたのが次頁の表2である。これを見ると、1番歌から6番歌までの歌をそのままの配列にして、その後贈呈三本の81・87番歌を引き上げ、再び贈呈三本の歌7・9番歌を二首続けたあととは、完全に解体した様相を示している。

この一連の配列を見れば、この折口旧蔵本の本文が意図するものはおのずから見えてくる。ここには明らかに黒人の羈旅歌の思想を踏襲しつつ、新たな近代的羈旅の歌を探る意図が窺える。つまり、『ひとりして』は、贈呈三本と折口旧蔵本とは、その構成、歌集のあり方、コンセプトが大きく異なっているということがいえる。

さて、折口旧蔵本において、冒頭部に吸い寄せられる形で再構成された、折口旧蔵本の配列番号でいうと7(贈呈三本の配列番号では81)・8(同87)・11(同57)・14(同80)・16(同82)・19(同53)・23(同83)番歌は、贈呈三本においては末尾追加の歌であった(表1参照)。なかでも

表2

『ひとりして』冒頭25首の配列	
折口旧蔵本	贈呈三本
1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
7	81
8	87
9	7
10	9
11	57
12	44
13	62
14	80
15	13
16	82
17	52
18	59
19	53
20	66
21	74
22	61
23	83
24	79

この二首は、先に引いた贈呈三本のなかで読むと、次のような解釈をもって読める。
 ここで言う「身をけづるこのわずらひ」とはなにか。おそらくそれは「巫女のくちをとふ」直接的な原因とも思われる。「入り日の波に」すら涙落とし、「たそがれに鳴く鯛やまめまはしの声」に感傷的になっていく作者の姿がそこにはある。そのやるせない思いをいかんともし難い作者の心は、「巫女のくち」によっても真昼の明るい道に出会う「舌はく犬」によっても、また大地の子ひしめく夜明けのせり場の情景によってもやはり解消されることなく、むしろ「たれしらむ」わずらひを持ちつつ旅を終わらせなければならぬ「かなしき」に通じている。贈呈三本末尾に追加された歌群は、『ひとりして』の表題がただちに示すごとく、旅において感じた悲傷、それは単に漠然とした悲傷という類のものではなく、自らを孤独の淵へと追いこんだある具体的な対象をともなつての悲傷と見るのが妥当だろう。

81 おきつ国 木の長島に 船がゝりして とふ巫女のくちの かなしき
 87 身をけづるこのわずらひは たれしらむ 旅籠のくれに 夕顔をきる

しかもそれは旅の終わりにあたつて「いのちさへもはらあへなくみえ来る」ようなもの、さらには「闇になげ入れぬ身」としてあつた。

このように読むと、これら末尾追加九首の歌群は、『ひとりして』という表題が示すごとく、旅のおわりに孤愁におののく作者の悲しみをあらわに表出したものであり、『ひとりして』の末尾を飾る、一つの旅の終わりを告げる歌群としてふさわしいものであつた。

つまり、九首追加の意味は、この旅によつて感じた悲傷と、それをいかんともしがたいまま旅と惜別しなければならぬ思いを、ことさらに付加しようとしたものと解釈できるのではないか。

しかし一方折口旧所蔵本においては、それらの歌を解体して、特に冒頭部に配列し、寄る辺なき海の旅を続けて後船どまりする情景、その港において旅の不安を解消するがごとき「巫女のくち」を問うといった鎮魂を行った後に、旅の泊まりの鎮魂歌として連ねているのである。

贈呈三本末尾に据えられた歌が示すところの「悲傷」とはいったい何か。ここで『ひとりして』に先立つて発表された『穂』および『不二新聞』を見てみよう。

『穂』と『不二新聞』とに所収する「うみやまのあひだ」は、全く配列の異なつた連作のように見えるが、しかし、実態は『不二新聞』所収の冒頭二十五首は、『穂』発表の歌の配列を若干入れ替えてそのまま発表したものである。『穂』所収の「うみやまのあひだ」は、「うみやまのあひだ」という表題の下に二十五首の歌をすべて抱え込んでいる。それに対して、『不二新聞』は、数首ごとに発表配列を入れ替えている。ただ、この二つの本文には重要な類似点が存在する。それは両者においてまったく同じ構成をもつ一群の歌の存在である。

ほの白う子らが頬見ゆれ 夕月夜 雫おち来る峽に草しく

さをなるかげおとす木によりかゝり われらは 今日行きくれをいふ

やゝほそりて 子らが見ゆるにいとかなし わが若き日のまのあたりして

ゐろりに 櫓さしかこみ はかな顔してうちもだし 子らがむかへる

胸ひろに かきはだけたる子らが服 すきて脈うつ 櫓のあかりに

爐火あかし はかなき夢に多める顔 二つ前にし さしぐまれつゝ

ねむる子の 眉のあたりにたゞよひし夢より さめてやすく粟はむ

他の歌は大きく配列を変更しながら、この七首については両本文ともにまったく変更を加えていない。それは、この七首がこの配列のままの一群で作者にとつて重要な意味を持つていたことを示してしよう。これら七首が何を歌つたものであるかは、あえて言うまでも無いだろう。ここに言う「子ら」とは明治四十五年の旅に同行した教え子、伊勢清志、上道清一にほかならない。

『穂』連作二十五首は、船上歌「たびごとくもろくなり来ぬ 志摩のはて安乗の埼に 赤き灯の見ゆ」から歌いだされ、「わだつみの豊はた雲のあはれなる浮き寝の昼の夢と たゆたふ」をうけつつ、行く先知れぬ旅の、折口のことばを借れば「動揺」するところを歌い継ぐ。ここにいう「行く先知れぬ思い」とは、いったいなにか。それは、確かに、萬葉集から始めて遣新羅使人の歌や大伴旅人の従者の歌などに代表される、「ほそみ」という境地に寄り添つて歌われているという見解もあるだろうが、単にそれだけではなからう。むしろその「奥が知らずも」とする「動揺」は、明らかに遙空自身の心の内実から、ある具体的切実さを伴つて切り出されたものであつて、それ以外ではない。ここに歌われている内実とは、「うみやまのあひだ」に息づく「我」であり、その「我」の感傷である。『穂』あるいは『不二新聞』発表の歌から、どう見ても後世遙空が述懐する学問的要素は直接的には見えてこない。「うみやまのあひだ」にあるものは、私の不確かな命、行く末おぼろげなる心を照らす自然への感傷であり、その感傷を充足させるものは、他でもない「子ら」の存在である。行き先しれぬ旅の途上にある「我」と「我が子ら」の境涯であり、

それはやがて学問的色彩を帯びて彼の発想の基盤に定位されるであろう要素を抱えてはいるが、しかし、そのことよりも、むしろ遥空の個的な悲傷こそ、そこに読み取りたい。この「悲傷」に同期する一首が、この一連の子らをつめる歌の前に据えられているのは象徴的である。

北牟婁の奥の小村にわく水の かなしき記憶来る午後かな

まるで、子らの歌七首を導く序歌の如く据えられているこの一首の意味は何か。「かなしき記憶」とはそもそも何か。これこそ、富岡多恵子が『釋遥空ノート』（平成十二年十月、岩波書店）の中で指摘したように、遥空のこころの奥底にしまわれた、かつての性にかかわる記憶であったことは容易に推測できる。山中彷徨という生きるか死ぬかの現実に行き逢ったとき、まさに心をよぎった「かなしき記憶」とは、彼がかつて愛し、愛されたに違いない者との心の交流の記憶であつたらう。そしてそのかなしさにおそらく寄り添ってくれるものは、眼前にいる子らに違いない。そのかなしき記憶こそが、「子ら」への熱いまなざしを呼びこんでいる。

『穂』と『不二新聞』所収の連作は、こうした経験、三人が諸共に命果てるかもしれないというぎりぎりの状況の中で、ふと恋情が頂点に達したとき、よみがえってくるあの確かな記憶からふとまなざしを転じて、子らの寝姿にほろりと息づく、その瞬間は、もしかしたらこのまま三人で死ぬのだ、という何よりも代えがたい至福の瞬間を、はつきりと抱えこんだ連作であつた。「うみやまのあひだ」に息づく生とは、遥空と二人の子らのそれに他ならなかったのである。この連作は、この段階においては「異郷意識の進展」などといった学問的まなざしを直接的には抱え込んではいない。また、後年、彼が、おそらくは柳田民俗学との出会いの中で獲得してゆくはずの、「うみやまとの狭い土地にひそやかに息づく他生」に対する透徹したまなざしも、ここにはまだ無い。

「うみやまのあひだ」の初発は、明治四十五年、志摩・熊野の旅の途次に、遥空の心に刻み込まれたきわめて個的な孤傷、その孤傷をどのように客観化して歌に閉じ込めるかという主題であつた。二人の子、あえていえば伊勢清志

とのつかの間の時間をいらい込めるために、企図されたものであったといえるのである。

仮のとりじめ

見てきたように、「うみやまのあひだ」の問題は、遥空の個人的な恋情の思いを内包した形で初発した。そのことは、『穂』『不二新聞』の「うみやまのあひだ」の構成が明らかに物語っている。しかし、その個人的な感傷は、「うみやまのあひだ」に生きる他のひそやかなる生への限りない共感という回路を通して、次第に浄化され普遍化されて、彼の学問的営為の背骨を形成するテーマへと持ち上げられていった。

しかしその初発、「うみやまのあひだ」という名称に抱え込まれた遥空の思いは、それぞれの歌集のどこかに、濃淡はあれ痕跡を残しながら、公刊歌集の名称へと流れ込んでいた。いや、跡を残したというのは適切ではない。むしろ、そうした個人的な思いを普遍化する方法も見出した、その隠された根源として、「うみやまのあひだ」という問題は常に胚胎する「夏の思ひ出」へと常に血が通っていたのである。

『ひとりして』所収「うみやまのあひだ」の冒頭には、『安乗帖』から一首が選ばれて序歌として据えられている。

あはれにもうちかがふかな 山草の たぶさにしめる 夏の思ひ出

そしてその歌を継ぐようにして記述された次のような前書き。

人 折口信夫・伊勢清志・上道清一

時 大正おほみものおもひの年八月

処 志摩の国より紀伊日高まで

この序歌の存在、そして前書きが示すものは、「うみやまのあひだ」という問題が、贈呈本『ひとりして』の段階においては、遥空の個人的「思ひ出」にかづかれ、抱え込まれるものであったことを示している。

そして、大正十五年改造社から公刊された歌集の冒頭には、次のような一首がすえられている。

この集を、まず与へむと思ふ子らあるに

かの子らや われに知られぬ妻とりて 生きのひそけさに わびつつをるむ

この一首をもって『海やまのあひだ』が「語り」始められていることは、逖空の個人的な恋情への鎮魂として初発しながら、それを普遍的な生への鎮魂歌へと昇華させた『海やまのあひだ』という問題において、象徴的であったといえるのである。

注

(1) 持田叙子、伊藤好英「海やまのあひだ」『折口信夫事典』西村亨編、大修館書店、昭和六十三年七月)

(2) 伊藤肇『海やまのあひだ』の主題『国文学』第三十卷第一号、昭和六十年一月)

(3) 逖空は後年「自ら葑蕀版に附して少数者に傾つたことがある」と述べ、複数のテキストの存在が推定されるが、管見する限り、折口博士記念古代研究所が所蔵する折口旧蔵のものと、旧全集編纂の際の原稿作成の際に参照されたと思われるもの、この二つを認めるのみである。後者は、それが誰の所蔵でどのような種類のものであるか、詳細は不明である。

折口博士記念古代研究所に残される旧全集の原稿によってその存在のみが推定される。

(4) 収録歌数は、製作が最も早いと思われる田端本は八十六首。吉村本、武田本、折口所蔵本はともに八十八首と同じであるが、それぞれ収録歌が異なっている。

(5) 「田端憲之助贈呈本」は、國學院大學の同窓で、紀伊日高に帰郷していた田端憲之助に贈られたものである。その扉には「三冊を分け、一、田端君に、二、祐吉に、三、吉村君ならびに同夫人に」と記されている。『安乗帖』成立のきっかけとなった明治四十五年の志摩熊野の旅の帰路、折口は紀伊の田端家に立ち寄り、二人の生徒とともに二泊している。

田端だけでなく「同夫人に」と記されているのは、その際のもてなしに対するものか。原本は縦十六・二行、横十・四行、縦書き十二行野のノート六十四枚にペン書きで記されている。第四部「うみやまのあひだ」八十六首を含め二百十首が納められている。「田端憲之助年譜」(藺民也編、昭和四十一年三月二十日)によれば、逄空から『ひとりして』を贈られたのは大正十二年十月とされている。残念ながら当該テキストについては実物、複写とも披見することが出来なかった。ただ、本テキストの詳細が堀内民一「釋逄空先生自筆歌集補遺」(『短歌』第二巻第五号、昭和三十年五月、角川書店)に紹介されているので、それに拠った。

「吉村洪一贈呈本」は、大阪天王寺中学の同窓であった吉村洪一に贈られたもので、若干縦長のノートを使用して作られ、第四部には八十八首が収録されているが、収録歌の構成が他とかなり異なっている。末尾に、「献辞 吉村兄 たてまつり候 大正二年十二月」と四行分ち書きで記されている。また、それぞれの歌の上部に、その歌の漢字に振るべきルビがカタカナで指示されているのが特徴である。本テキストは昭和四十一年に近畿逄空会例会百回記念として同会から復刻版が出版されている。本稿では、これに拠った。

「武田祐吉贈呈本」は、やはり天王寺中学の同窓で、当時すでに國學院大學の専任になっていた武田祐吉に贈られたもの。末尾には、「大正三年四月 折口信夫君所贈 武田祐吉」という識語が記されている。原本は現在散逸して行方がわからない。旧全集編纂の際、岡野弘彦が武田家において書写したものが唯一のテキストである。書写本は、一字あけなどの表記、絵なども忠実に書写されており、原本の形をそのまま写したものと信賴できる。ただ、中程の四首分を書写した一枚が抜け落ちているのが惜しまれる。

「草稿本」は現在行方がわからない。『折口信夫全集』(旧全集)第二十二巻(昭和三十一年十二月五日)編集時に作成された原稿には、贈呈三本、折口旧蔵本以外の校異が参照されている。この校異は、『安乗帖』に近く、「贈呈三本」と『安乗帖』とのあいだをつなぐ本文として「草稿本」と名付けた。

「折口旧蔵本」は、十四・五^ナ×十一・二センチの手帳型ノート十四頁を使用して書かれたもので、原部分は黒色のペンで書かれ、そこに緑色ペンと桃色鉛筆によって二次にわたる加筆訂正が施されている。収録歌数は全部で三百八十四首、そのうち「安乗帖」から多くの歌が採用されている第四部「うみやまのあひだ」は序歌を含めて八十八首がとられている。

いずれの本も、「酒のゝち」「かの日のために」「小鳥の歌」「うみやまのあひだ」の四部構成で、安乗帖から採用した歌がそれぞれの本で若干異なっているほか、その構成にも大きな違いがある。これらの詳細は、拙稿「釋道空 初期短歌表現の変移（資料編）―「安乗帖」「ひとりして」（海やまのあひだ）校異」、『古典評論』第二次第三号、平成十二年七月、古典評論の会）を参照されたい。

(6) 『穂』は國學院大學校史資料室（現校史・學術資産研究センター）に所蔵されている。

(7) 長谷川政春『海やまのあひだ』論（『国文学』解釈と教材の研究 第二十二卷第七号、学燈社、昭和五十二年六月）、持田叙子『海やまのあひだ』論―「さびしさ」「かそけき」「ひそけさ」の生成について―（『三田国文』第六号、昭和六十一年十二月、慶應義塾大学三田国文の会）などに、それぞれの命題に即した言及があるが、数首の表現変容の分析にとどまっている。

(8) 表作成に採用したテキストは、『安乗帖』國學院大學折口博士記念古代研究所蔵、『穂』所載「うみやまのあひだ」、『二新聞』所載「海山のあひだ」、『ひとりして』のうち「吉村本」「草稿本」「折口旧蔵本」「同二次書き込み」、『安藤本うみやまのあひだ』、『國學院雑誌』所載「海山のあひだ」、『海やまのあひだ』（改造社刊）。

(9) 「X」を振った歌のうち、見せけちにしたもの、改稿を試みてあるものについては、公刊本『海やまのあひだ』に収録されている。

第七節 分節する歌集——『天地に宣る』論

歌集『天地に宣る』

歌集『天地に宣る』は、『海やまのあひだ』『春のことぶれ』につづく釈逕空の第三公刊歌集である。十章二十九連作一八〇首の歌から構成され、巻末には『古代風詠集』として『たづが音』『月しろの旗』『道の幻』の三つの詩を併録している。刊行は昭和十七年九月二十日、出版元は日本評論社であった。⁽¹⁾

他の歌集に比べて鑑賞される機会も少なく、その評価は必ずしも高いとは言えない。戦時下の世相を背景にした出版状況、戦争を讃美したとも受取れる歌が多く収録されていたことが理由といわれるが、戦後のGHQ検閲を逃れるために逕空自らによって歌集そのものが解体され、その約半数が『遠やまひこ』『倭をぐな』へ分散収録されるといふ経緯をたどったことも、彼の歌集の中でほとんど顧みられない不幸な歌集になった一因である。

しかし、ここに収められている歌々は、確かに昭和十二年から十七年にかけて逕空自身によって創作され、また明らかにある意図を持って『天地に宣る』として編集されたものであり、その内実は決して軽いものとは言えない。その分析は、戦中の逕空折口信夫の創作・研究のありようを窺う上で重要な作業であると考ええる。

本節では、こうした視座に立ち、戦争歌集といわれる『天地に宣る』に関して、まずは基礎的な接近を試み、この歌集の意義を明らかにすることを目的とした。

問題の所在

『天地に宣る』に関する先行研究では、巻末に「古代風詠集」として付載された詩「たづが音」「月しろの旗」については比較的言及されることが多い。⁽²⁾しかし短歌に関しては、先述したような歌集に対する評価の低さもあいまってそれほど多くない。それも、収録短歌の中の半分が、後に歌集『遠やまひこ』『倭をぐな』に分割収録されたことであって、この二つの歌集に関しての研究の中で言及されるのがほとんどである。

こうした先行研究において、『天地に宣る』一巻の評価は二つに分かれると言つてよい。

まずは一般的な評価と同じく、この歌集を釋迢空の歌集の中でも低調な歌集であるとし、その原因を戦時下の特殊事情に求めようとする考えと、一方、この歌集を、戦後の一連の作品へと続くものとして捉え、積極的に評価しようとする考えである。

『天地に宣る』収録歌に関しては、梶木剛が極めて否定的に論じている。梶木は、『天地に宣る』一巻を「迢空の作歌的不幸といふべきものを鮮やかに象徴するものとしての詩歌集」と位置づけ、その不幸の原因を「戦争の濃厚な影」と当時手を染め始めた「詩作や小説への熱中」に求める。昭和十年代の迢空の短歌製作を、「戦争状況に吸引されて我が特色をかなぐり捨てた短歌形式があるだけである」と断じる(『折口信夫の世界—まれびとの存在』砂子屋書房昭和五十七年十月)。

これに対して岩田正は、『天地に宣る』には、戦争を観念的に捉え、さながら戦争讚美に似た絶叫と戦争を肯定的に捉えたような語彙とにちりばめられたリアリティーに乏しい歌々と、自らのヒューマニズムの苦悶を示しながら、人間性の灯りをこめた歌々とが並存している点に着目する。迢空において戦争そのものが含む負の要素が、外部から自らの文学を威圧しはじめたことに対して、「大君」「大神」などとその前にひれ伏すが如く語彙を多用しながらも、

逆にその戦争を抽象化して歌うことを得たと述べる。そして、「戦争は遙空にとって一つの啓示であり、遙空に新境地をひらかせた」とする『釈遙空』紀伊国屋書店 昭和四十七年一月）。

また、岩松研吉郎は、『天地に宣る』収録歌のほぼ半分が『倭をぐな』『遠やまひこ』とに分割再録されることから、その重なり部分のあり方に着目すべきであるとする。遙空が戦後にあっても、戦争詩や戦争短歌を、検閲という外部的な関門をくぐることで出来るならば抹消する考えがなかったのではないかと指摘し、その行為はむしろ戦争を戦後の短歌・学問の中に改めて刻み直すことで、戦争責任の自認、免責の範囲の確定を自らに課したのではないかと述べる（『倭をぐな論―その周辺』学燈社 『国文学』第二十二卷第七号 昭和五十二年六月）。この考えは、『天地に宣る』の戦後の分割採録を評価し、それを戦後の遙空の学問的営為、特に「国学」あるいは「神道の宗教化」の問題などの考えと積極的に接続しようとする考えである。こうした方向は、岡野弘彦『短歌』第二十卷第十三号 角川書店 昭和四十八年十一月）や長谷川政春（『折口信夫年譜抄』『現代詩手帖』第十六卷第六号 思潮社 昭和四十八年六月）などにも見られる考えである。

一方、奈良橋善司は、まったく別の観点から『天地に宣る』について論及する。『天地に宣る』における戦争讃美と『近代悲傷集』における新憲法讃美をうたう遙空の無恥への批判は単純すぎ、むしろ『天地に宣る』大部分の背後を支えている明治近代共同体の宿命的な誤謬、その心的共同体から戦中の遙空がどのように展じていったかについて言及すべきである、とする（『折口信夫の敗戦』『國學院雑誌』第七十九卷十一号 國學院大學 昭和五十三年十一月）。

最も歌の内実に即して論じているのは武川忠一であろう。武川は、昭和十二年から十六年までの作品あるいは藤井春洋関連歌に的を絞って、それらが、「若者への傷心以外の何物でもなく、また『供養塔』以来の挽歌でもあり、たとえ戦争歌といえども、当時の戦争讃美に与した多くの歌人とは別次元の世界を包んだ、最も深い悲傷の作たり得た」作品と絶賛する。ただ、武川が対象とした歌は、ほとんどその後『遠やまひこ』『倭をぐな』に採録されるものであ

るから、武川の論は、「折口戦争歌論」と位置づけられるものである（「逖空折口信夫における戦争—短歌を中心に」学燈社『国文学』第二十二卷第七号 昭和五十二年六月）。

いずれにしても、『天地に宣る』は逖空の戦中・戦後の歌作を考えるうえで重要な歌集『遠やまひこ』『倭をぐな』を対象とする際、どうしても欠かせない歌集として言及される場合は有るものの、『天地に宣る』一巻をどのように分析評価するかということに関しての先行研究は乏しいといわなければならない。『天地に宣る』が、上記二集に戦後分割分散されたことを考えれば、ある意味致し方のないことであるが、しかしもう少しこの一巻の生成に寄り添って、その内実に迫ることができないだろうか。

『天地に宣る』の構造

『天地に宣る』はどのような構造を有した歌集であるか、先ずはそのことについて考えてみる。この歌集がたとえ書肆に促されて製作したものであったとしても、逖空自身によって構成された歌集の構造は、この歌集の性格を知る上で欠かせないと思われるからである。そのために、まず収録歌の初出年月及び初出誌紙（不明の場合は、当該歌を再録歌として収める『鳥船』によって補った）を連作毎に整理し、またそれらの歌、あるいは歌群がどのように『遠やまひこ』『倭をぐな』に分散されたかその状況を調べてみる。『天地に宣る』の目次順に、発表年月、初出段階の連作の表題【一】内】を示す。○数字は初出連作から何首がとられたかをしめす。「倭—1」「倭—4」などは、そこから更に『倭をぐな』へ何首再録されたかを示す。

「天地に宣る」

- 「天地に宣る」⑧（昭和十七年五月【神怒】—昭和十六年十二月作）⑧
 「今し断じて伐たざるべからず」⑤

(昭和十六年十二月【今し断じて討たざるべからず】) ⑤

「海山のまつりごと」⑥ (昭和十七年一月【同】—昭和十六年十二月作) ⑤

(昭和十七年七月【天ノ瓊矛】) ①

「満州国建国十周年を祝う日に詠める歌」③ (昭和十七年五月【同】) ③

「還らぬ海」④ (昭和十七年七月【若き神】)

(昭和十七年八月【戦場公私往来】)

「新嘉坡落つ」⑩ (昭和十七年二月【新嘉坡を戦ひとれり】)

⑤↓倭1

(昭和十七年三月【日々の感激】) ⑤

「捷報」

「捷報」⑫ (昭和十七年一月【伴隼雄】) ⑥↓倭3

(昭和十七年一月【戦ふ者】) ①↓倭1

(昭和十七年九月【撃ちてし止まむ】) ①↓倭1

(昭和十七年三月【機翼】) ②↓倭2

「撃ちてし止まむ」④ (昭和十七年九月【撃ちてし止まむ】) ④

「南を望みて」⑤ (昭和十七年一月【戦ふ春】) ④

(昭和十七年五月【神怒】) ①

「海表」

「海表」⑯ (昭和十七年一月【故宮の草】ほか) ⑫↓倭12

〔昭和十七年三月【日々の感激】〕④↓倭4

〔刹那〕

〔刹那〕④〔昭和十四年一月【刹那】〕④

〔機翼の中〕⑥〔昭和十七年三月【機翼】〕⑤↓倭1

〔戦時羈旅〕

〔霜風ぎ〕④〔昭和十三年一月【霜風ぎ】〕③

〔昭和十三年一月【冬の葉】〕①

〔たゞ憑む〕

〔たゞ憑む〕③〔昭和十三年一月【冬の葉】〕③

〔戦ふ春〕

〔戦ふ春〕⑥〔昭和十三年一月【苦しき海山】〕②

〔昭和十三年一月【春王正月】〕②

〔山の端〕⑦〔昭和十三年四月【山の端】〕⑦

〔春寂び〕③〔昭和十三年五月【春寂び】〕③

〔草莽〕

〔湘南鉄道を降りて〕④〔昭和十三年七月【犬儒集・湘南鉄道を降りて】〕④

〔微賤〕⑦〔昭和十三年七月【犬儒集・草莽】〕⑦

〔黙禱す〕

「陸軍中尉佐藤正弘、びるま、しつたん河に敵勢を探る。云々」⑩

(昭和十二年十二月【萱山】) ②

(昭和十三年一月【秋霜】) ⑤

(昭和十三年一月【はためく空】) ①

「箱根明神に迷ふ。十二月一日、月無き宵なり」② (昭和十三年一月【はためく空】) ②

「十二月六日夜」⑥ (昭和十三年一月【はためく空】) ③

(昭和十三年一月【冬の葉】) ③

「影あり」

「影あり」⑧ (昭和十三年一月【冬の葉】) ③

(昭和十四年一月【刹那】)

「子夜男歌」⑦ (昭和十四年一月【子夜男歌】) ⑤

(昭和十七年八月【戦場公私往来】) ②

「にっぽん還る」③ (昭和十四年十月【海と空の記憶】) ③

「感謝」⑤ (昭和十四年十二月【感謝】) ④

「春王正月」

「春王正月」⑧ (昭和十六年一月【春王正月】) ③

(昭和十六年一月【寂けき春】) ①

(昭和十六年一月【春鳴く鳥】) ②

(昭和十六年二月【春歌追憶】) ①

(昭和十六年五月【犬儒吟詠集一日々の机】) ①

「春の思ひ」⑤ (昭和十四年一月【春の思ひ】) ⑤

「留り守る」

「留り守る」⑤ (昭和十二年十二月【萱山】) ⑤

(昭和十三年一月【近境】) ① (重複)

「苦しき海山」⑤ (昭和十三年一月【苦しき海山】) ①

(昭和十三年八月【しらけたる日々】) ③

これを見て、以下のことがわかる。

まず、歌の配列のあり方について、最も新しく創作された歌が歌集の冒頭に置かれるという構成上の特徴があると
いうことである。このスタイルは、第一歌集『海やまのあひだ』で採用された構成の方法であった。ただ『海やまの
あひだ』は完全な逆編年体で構成されており、『天地に宣る』とは若干異なるが、最新歌を冒頭に据えるという志向
では共通している。この方法を採用した理由について迢空ははっきりとは語っていない。ただ『海やまのあひだ』の
「この集のすゑに」のなかでは次のように述べている。

あまり時のかけ離れ過ぎたものは、今のいきかたから見れば、寧ろ作りかへても、物にはならぬのである。だか
ら、さうした古い部分のものには、出来るだけ目を塞いで、手を入れずに置いた。わりあひに今の心もちにはひ
つて居る近年の分だけは、自由にしてもよいと言ふ考へから、直して見たものも、可なりにある。(中略) 私一
人の歌心の展開を示すには、少しは役に立つかと思ふ。

『旧全集』第二十四卷 一一一頁

つまり、冒頭に最新歌を置き、そこから逆編年体で構成して行くスタイルは、他からの影響を受けやすい自身の歌
心のありようを見つめて、自らが最も手をいれ易くものになりそうな最近の歌、つまり「これから」につながる歌を

冒頭に据え、そこに到る歌心の変遷を、歴史をさかのぼるように見ることが出来るように工夫した痕跡だということになる。

しかし、この配列の方法は、第二歌集『春のことぶれ』ではあつさりと捨てられている。ところが、『天地に宣る』で再び最も新しい歌を冒頭に据えるというスタイルを不完全ながら復活させ、さらには、初出誌の連作を解体しそれを改めて再構成しようとする意図さえ認められるのである。

このことと関わりを持つと思われるが、さらに大きな構造上の特徴として、前掲の資料でも示したとおり、歌集の中ほどに大きな断層が認められることである。この断層を境目として、発表年月の差だけでなく、歌の内容、声調なども含め、この歌集は二つの異質なものが合わさった形になっている。その境目は、目次で言うところ「刹那」と「戦時羈旅」との間にある。発表年月で言えば、「刹那」までは、昭和十七年の作がほとんどを占めるが、「戦時羈旅」以下の作品は、昭和十二年十二月の歌から始めて十四年までの歌がほとんどで、唯一「春王正月」に十六年の作品が入っているだけである。

さらに注目すべきことは、この断層が、その『遠やまひこ』『倭をぐな』へ分散して収録される境目ともなっている点である。「刹那」以前の歌群からは、『倭をぐな』へ収録される二十六首のうち二十五首がとられ、「戦時羈旅」以後の連作からは一首をのぞいてすべて『遠やまひこ』へと再録されているのである。もつとも、発表年代順に分散再録して行けば、古い歌が『遠やまひこ』へ、新しい歌が『倭をぐな』へと取られるのは当然の帰結だともいえるが、それではなぜ歌集にわざわざ一目で分かるような断層を作ったのが理解できない。むしろこの断層にこそ、この歌集を考える上での最大の意味があると思われるのである。

あえて言えば、この歌集はすでにその生成の段階で、すでに二つに分断される運命にあつたといふべきであろう。そしてそれこそ、最も新しい歌を冒頭に置いた理由と考えられる。先に述べた遥空の「これから」という一語は象徴

的である。この歌集が、宣戦の詔を聞いた感激に触発されたものであったとしても、「追ひ書き」に「たゞ歓喜と言ふより、もつと底深いおちついた、澄みきつた心を以て、其等の人及び消息に、次々に接して居る」(『新全集』第二十四卷 五八二頁)と書く心には、恐らくこの歌集の冒頭に載せる短歌の「これから」が込められていたに違いない。

『天地に宣る』とは何か

前段で述べた本歌集の構成上の断層について、歌の内容に即して考えてみる。歌の内容に關しても、先述したように「刹那」と「戦時羈旅」との間に大きな断層が認められる。

「天地に宣る」から「南を望みて」までの歌に横溢する声調は、遙空の言葉を借りれば、「宣戦のみことのりの降つたをりの感激、せめてまう十年若くて、うけたまはらなかつたことの、くちをしいほど、心をどりを覚えた」(「追ひ書き」『新全集』第二十四卷 五八一頁)感情でほとばしつた歌々であつた。その感激は、たとえば、

わからないながら「国学」を恃むと謂つた心持ちがあつたからではないかと思ひます。つまり国学の立つ所以の倫理観です。薄々之を感じて其を掴むことに、淌況らしいものを抱いて居たのだと思ひます(「国文学以外」『文芸

懇話会』第一卷第五号 昭和十三年五月 『新全集』第三十三卷 二八五頁)。

と書くように、若いころ高山彦九郎の伝記を読んで、直ちに百舌鳥耳原中陵に詣で、裏門外の土に額ずいて胸の張り裂けるような感激を味つたという、国学につながる皇室尊崇の思いと通じるものである。それは、正に国学の正しい継承者としての遙空をして、この戦いを神と神との戦いとしての位置づける意を強くするものでもあつた。

天地の神の叱責コロヒにあへる者 終全マタくありけるためしを 聞かず (「天地に宣る」)

ひむがしの古き学びのふかき旨 蔑ナミする奴輩ヤクハヤ 伐ウちてしやまむ (「伐ちてしやまむ」)

しかしこうした歌の反面、そこには、単なる歓喜というにはいささか異なる折口の感情がある。「神ながら神といら

つしやる大君の天地に響く甚大なる神の御言のかしこさ⁽¹⁾を歌い上げながら、それと裏腹に

たゝかひに家の子どもをやりしかば、我ひとり聴く。勝ちのとよみを

(「捷報」)

おのずから 勇み来るなり。家の子をいくさにたてゝ ひとりねむれば

(「同」)

といった激しい孤独感にさいなまれていることもまた事実である。さらにそれは、

わが心 きびしくありけり。敵艦に身をうちあてゝ 戦はねども

(「捷報」)

老いづけば 人を頼みて暮すなり。たゝかひ 国をゆすれる時に

(「同」)

我いまだ老いかまねば いさぎよく 若く過ぎ行く人の 羨し^{トモ}さ

(「南を望みて」)

というような、自らの老いに対する口惜しさと同期して、ある意味では無惨なほどの雄たけびを、あるいは若き神、若き兵士たちへの憑依の思いを迸らせることとなる。

逡空の『天地に宣る』前半部に据えられている激烈な歌々は、国学を恃む彼の思いとは裏腹に、それを引き継ぐべき若きひとびとが一人一人と戦場へ拉致されて行く現実と、それをどうにもできない、老い行く国学の伝統を引き継ぐものの姿とが激しく交錯し、その背反により、若き日の思いさながらの激しいことばが発せられているかのようである。

そこには、逡空個人の極めて個人的な現実が孕まれている。

これに対して、「戦時羈旅」以降の歌は、非常に沈思したまなざしをもって、銃後の人々の静かな生活が見つめられている。そこには、戦争の影が、深い山里や市井の生活に次第に影を落とし始め、人々の日々の生活が、戦いという国家の政策によって推進される現実⁽²⁾に拉致されて行く姿がうたい込まれている。

たゝかひを人は思へり。空荒れて 雪しとく⁽³⁾とふり出でにけり

(「雪ふたゝび到る」)

この歌は、逡空が初めて「たたかひ」という語彙を短歌の上で使用した例で、昭和十一年「雪ふたゝび到る」連作

中の一首である。二・二六事件の際に作られたものだが、それまで、満州事変、日華事変、五・一五事件など、戦争を予測させる事件が世情をにぎわせたが、逈空はそうした「たゝかひ」には実作の上ではほとんど見向きもしていない。

二・二六事件の感嘆を歌った歌としては、先の一首と共に次のような歌も発表されている。

我どちよ。草莽人のとなりはてゝ 慨たきときは、黙し居むとす

(昭和十二年春早く)

この時期の逈空は、深く山嶽に入り込み、民俗学の採訪を続けていたのである。国の戦いが山深い里へと次第にかわり深くなつてくることを感じながらも、「慨たきときは」黙つてみずからの生業に精を出す市井山沢の人々の姿を美しいと感じる。

戦ひの年のしづけさ。諏訪びとは、早く 秋繭も売りはなしたり

(霜風ぎ)

旅にして聞くは かそけし。五十戸の村 五人の戦死者を迎ふ

(同)

たゝかひは年を越えたり。勝ち興奮サレに人おサレこらねば、春の 静けさ

(戦ふ春)

たゝかひの年は かへりぬ。野山にも行き連れて 子らは よく育つなり

(山の端)

戦ひは このごろいとまあるらしと思ひ 入り行く。木原の原に

(微賤)

萱山に 炭焼ひとつ残りゐて、この宿主は 戦ひに死す

(黙禱す)

若き日を炭焼きくらし、山出でし昨日か 既に戦ひて死す

(同)

戦ひにやがて死にゆける 里人の乏しき家の子らを たづねむ

(同)

たゝかひは末をはらね、睦月たつ処女の家に よき衣あれ

(春王正月)

戦いがいよいよ深くなり、そうした「たつき」を支える村の青年達がひとりふたりと出征し、まるで日常茶飯のごとく、死が村人に受け入れられていくことを、さらに運良く戦いから帰還した青年が、決しておごらずに、静かにも

との生活に戻って行く姿をじつと見つめている。この時期の歌に、春の歌がことさらに多いのは、こうした山里の生活の最も平穏なゆくたてを祝福し鎮魂する場面が、正月であるということなのだろう。そしてその風景に、自らの心を同期して行くこうした歌は、まさに村の鎮魂歌であり、そしてその標題のごとく「戦時羈旅」歌そのものであった。

これらの歌は、反戦歌とまでは言えないにしても、戦いが次第に激しくなってきた時期に発表されたことは、ある意味で画期的であつたといえるが、逕空が「この頃、世間の歌、空しき緊迫に陥りて、読めどたのしく、聴けど心ひらくるものなし。かくして漸く、歌びとに疎く、ひとり詠じて、多くは人に示さず。嗤ひにあはむことを慮るればなり」とあえて題詞に述べることは、これら歌の性格を物語って十分であろう。

このように、「戦時羈旅」以降の歌は、深く民俗のひだに分け入り、その生活をみつめながら、そこから戦争を逆照射しようとしている。

歌集『天地に宣る』は、内容的に、極めて個人的な感懐、それはもちろん国学をみずから恃む国学者の末としての感懐であつたとしても、それが、開戦、シンガポール陥落、といった事件、あるいは自身の教え子の入隊という現実に触発されてうたわれる前半部と、戦争を受け入れながらも、日々の生活が粛々として営まれて怯える「市井山沢」の人々への祝福と鎮魂の歌によつて構成される後半部とが対比的に構成されているといえる。

大きな境目に前後して並べられた異質な歌が、「追ひ書き」で折口が自ら述べているように、そのどちらもが「戦争歌」であるとするならば、逕空における「戦争歌」とは、この異質な歌が交錯しているところに成立するものであつた、ということが出来るだろう。それこそ、先に触れたように、この歌集が自ずから分節していなければならなかつた理由でもある。まずは逕空の歌のありようが、このようなかたちで分節しなければならなかつたその意味をこそ、我々はこの歌集から読みとらなければならぬだろう。

注

(1) 日本評論社の基幹雑誌『日本評論』と折口との関わりは昭和十二年以前にはまったく無かったが、それ以降非常に深いものになってくる。特にこの時期の折口の重要な作品は『日本評論』に多く発表されている。例えば、『天地に宣る』に収録される歌が初出する時期からの状況を追ってみると、昭和十四年一月に「死者の書」の連載が始まり、昭和十五年には二月に「古代日本人の感覚」、四月に「大倭国原の歌」十一首、昭和十六年二月「家とは何かを語る」座談会、昭和十七年一月「伴の隼雄」六首、同八月からは「日本文学の発生」の連載開始といったように、『日本評論』への掲載が際立って目立つようになる。今、『日本評論』という雑誌と折口との関わりの意味を探る材料を持ち合わせてはいないが、注目すべき現象だろう。

(2) 「月しろの旗」の関する文献は、石内徹『釈迢空「月しろの旗」注考』(平成六年三月、折口信夫研究会、非売品)の巻末に挙げられた参考文献目録に詳しい。

(3) この歌は歌集『遠やまひこ』所収。連作『台湾へ』十二首の一部として、昭和十二年四月『日本短歌』第六卷第四号に発表されたもの。前年発表の「雪ふたゝび到る」の後半にあたるものと、『遠やまひこ』の「追ひ書き」にある。

第八節 未刊行本『歌虚言』——「虚構」の問題

未刊行本『歌虚言』

國學院大學折口博士記念古代研究所には「歌虚言」と題された単行本用の原稿が残されている。

原稿といっても、原稿用紙に書かれた形態のものではなく、昭和十二年一月に第一書房から刊行された『短歌文学全集 釈迢空篇』一冊を解体し、その目次を書き直したのちに、(一)本体の活字本文に加筆修正を施したもの、(二)別の初出本や初出雑誌の当該部分だけを切り抜いてそこに同じように加筆修正を施して本体に貼り付けてあるもの、(三)改めて稿を起こしてそれを同様に貼り付けてあるものなど、多様な形のテキストとして残されている。(三)については、折口信夫自筆のものに加えて、おそらく弟子による清書原稿と思われる筆跡のものがある。

つまり本テキストは、『短歌文学全集』の本文を母体にそれを改修して、新たに一冊の本を編集しようと試みたその組見本としての性格を持ったものではないかと推定される。

この原稿はいったい何か。結論から言えば、昭和二十年三月十七日(死亡公告書による)に硫黄島で戦死した養嫡子折口春洋の御霊に供えるために、折口信夫が製作を企図した単行本ではなかったかと思われる。しかしなぜにそれが『短歌文学全集』の改修であったのか。しかもこの時期の大幅な改修はいったい何を意味するのか。『短歌文学全集』という詩文集は折口信夫と藤井春洋にとってそもそもどのような意味を持つものであったのか。本節では、終戦直後の迢空の短歌に対する向き合い方と絡んで、未刊行本『歌虚言』の内容を紹介しながら、そのことについて考えてみよう。

『歌虚言』の構成

まずはテキストの全体像およびその改修・改稿の様子を追ってみる。

テキストは、『短歌文学全集』（以下元版とする）のハードカバーの表紙をはずし、本文ページは糸綴じしたポリウレタン製に解体されている。

見返しには「御賀之松 風流」と書かれ、能装束をまとい面をつけた人物が描かれている（写真1）。筆者の手元にある資料は白黒複写の為、絵の色合いは不明だが、トーンから色鉛筆で書かれたものである。絵の右端には空の筆跡で何事か書かれているが、判然としない。

目次頁は大量に加筆されている（写真2）。赤鉛筆を使用しているとみられるが、加筆がおびただしく、相当に混乱した状態になったため、改めて「慶応義塾試験答案用紙」と印刷された横形の印刷された縦長の紙を横に使って目次を書き直し、当該箇所に張り付けてある。この答案用紙の筆跡は遥空のものではない（写真4）。

元版の目次と『歌虚言』の目次とを比較してみると、作品順序の入れ替え、表題の名称変更など以下のような異同がある（なお七月以降の目次は残されていない）。

□で囲ったものは「歌虚言 第一」において削除されたかあるいは加えられたもの。傍線を施したものは当該作品の表題及び内容が加筆訂正されたものを示す。

『短歌文学全集 釈迢空篇』（元版）

一月 稚国 山のことぶれ 年明くる山 大倭宮廷の勅業 だうろく神まつり 文学は旅行する 雪まつり

どの一もと薄 古びとの島 御製に現れた宮廷ぶり 町住み ほうとする話 雪のうへ

やま

二月 冬木 「倭は国のまほろば」その他 雪ふたたび到る 海道の砂その一 山うら 太古の歌 別腸諺語 山の

音を聴きながら 霜 水牢 火口原 短歌滅亡論 みぞれ 俳諧控へ帳 菟道

三月 東京詠物集 切火評論 その一 雪 「月やあらぬ」その他 おほやまもり 昼のいこひ 其駒と門入りとい

ろものせき 独喰 羽澤の家

四月 堀江の寺 古今集以後 巖崩え 伝へたい人びと 善光寺 座談 蒜の葉 古代民謡の研究 軽塵 姥の話

遠州奥領家

五月 赤彦の死 切火評論 その二 母 時鳥を待つ 朝の森暮の森 端午 多武峰 俳諧の発生 かかる人あり

写生論の発生 樗散留韻 零時日記 野あるき

六月 讚仰庵雑歌 商返 川上の空 ほととぎすを待つ その二 藜 難解歌の研究 気多はふりの家 短歌滅亡論

その二 灘五郎 貧窮問答 先生

「歌虚言 第一」

一月 稚国 語部 年明くる山 山のことぶれ 雪まつり 文学は旅行する 道祖神まつり 正月十四日 古びとの島 ほ

うとうする話 宮廷ぶり 雪のうへ 町住み

二月 ゆき 梅散る村 冬木 「倭は国のまほろば」その他 雪ふたたび到る 海道の砂 山うら 太古の歌

記憶の変化 別腸諺語 山の音を聴きながら 霜 順番 水牢 火口原 短歌滅亡論 みぞれ 大和国原の歌

三月 春洋出づ 純自然描写の発足 東京詠物集 切火評論 「月やあらぬ」その他 おほやまもり 昼のいこひ

其駒と門入り いろものせき 女形の一生 独喰 羽澤の家

四月 山河の春 堀江の寺 古今集以後 巖崩え 伝へたい人びと 四季西行 善光寺 座談 蒜の葉 古代民謡の



写真2 加筆修正が加えられた『歌虚言』の目次。ベースは『短歌文学全集』积迢空篇の目次。



写真1 『歌虚言』見返しに描かれた「御賀之松風流」の演者



写真3 『歌虚言』の中扉。

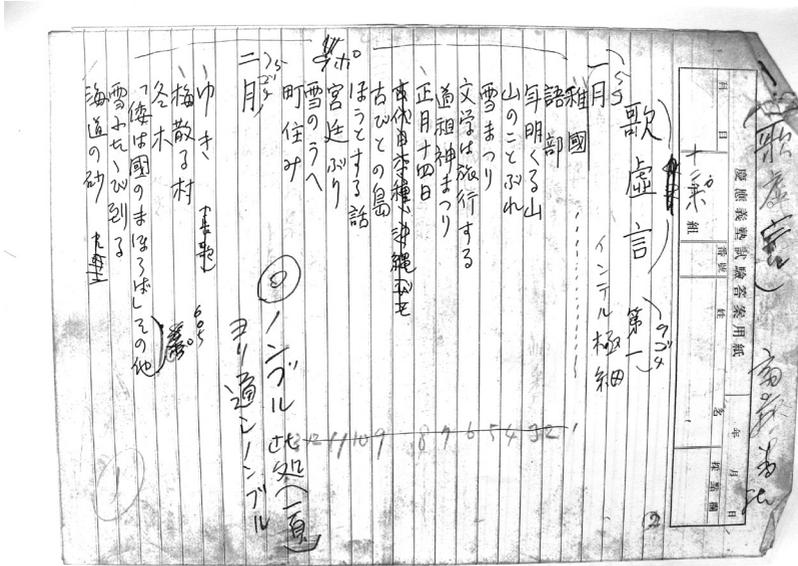


写真4 新たに別の紙に清書された『歌虚言』の目次

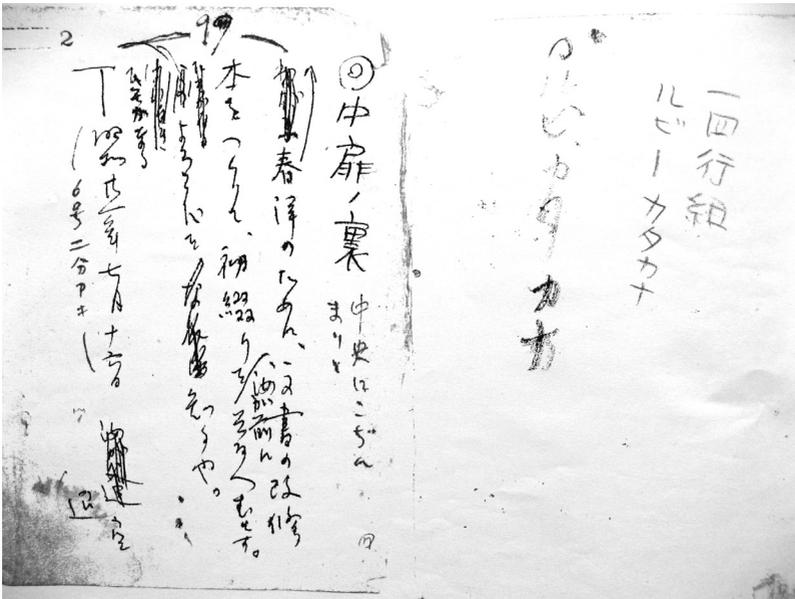


写真5 中扉裏の記述

研究 輕塵 姥の話 遠州奥領家

五月 [元服] 赤彦の死 切火評論 その二 母 時鳥を待つ 朝の森暮の森 端午 多武峰 俳諧の発生 かかる人

あり 写生論の発生 樗散留韻 [額田女王] 零時日記 野あるき

六月 [沙丘] 讚仰庵雜歌 [島の民俗] [波照間島を思ふ] 商返 川上の空 時鳥を待つ その二 藜 難解歌の研究

気多はふりの家 短歌滅亡論 その二 灘五郎 貧窮問答 先生 [山の湯雜記]

『歌虚言』は元版から「やまとの一もと薄」「俳諧控へ帳」の二篇を削除して、その代わりに「正月十四日」「梅散る村」「記憶の変化」「順番」「春洋出づ」「純自然描写の発足」「女形の一生」「山河の春」「四季西行」「元服」「額田女王」「沙丘」「島の民俗」「波照間島を思ふ」「山の湯雜記」の十五篇を追補している。

目次の次の中扉は、もともと「釈迢空篇」とあるところに縦線を引いて見せけちにし「歌虚言 第一 釈迢空」と訂正している。『歌虚言』は「4号」、「第一」は「5号ゴチ」、「釈迢空」には「十二ボ」の指定がされている(写真3)。中扉の裏には次のような記述が迢空の自筆で書かれている。

◎中扉ノ裏

(わが子) 春洋のために、この書の改修本をつくりて、初綴りを、汝が前にそなへむとす。ひそかなる(ひそかなる このはげしき) よろこびを(なんぢは) 知るや。

昭和廿一年七月十六日 (汝が父) 迢空

() 内は見せけちにしたもの。「中扉ノ裏」の下部に「中央にござんまりと」、本文上部には「9号」指定、年月日は「6号二分アキ」という指定が赤字でなされている(写真5)。

先述したが、この記述が示すように、このテキストが昭和二十一年七月十六日に、硫黄島で戦死した折口春洋の霊

に備えるために釈迢空によって企画され、制作途上にあった本の原稿であると推定できる。すでに応分の組み指定までされているところを見ると、かなりの段階まで進出した計画であったことがうかがえる。

『歌虚言』の内容

以下『歌虚言』において、元版の内容から、大幅な加筆訂正が施されたもの、また加除されたものについて、詳しく見てゆこう。

一月の章の冒頭、「稚国」は、元版では「稚国」四首、「春日ねもす」五首、「山風ぎ」六首の計十五首で構成されていた連作だが、最初の「稚国」に大幅な歌の増補と訂正が施されている。歌は元版の(三)(四)を棒線で消し、そこに原稿用紙に書かれた(五)～(十二)を挿入されるように指示されている。これら八首は、二〇×二〇字の正方形の用紙に折口の自筆で書かれている。

『歌虚言』の「稚国」を以下に転載する。★印は元版にある歌。()内には加筆修正する前の表現を記載した。初出表示は筆者によるもの。

- (一) ほのかにも 聞え来るかも。大宮のうちの起き臥し たゞしくいます★
- (二) 大宮のみほりに落す 筒井の水。見つゝ罷りて 夜はにひくも★(大宮、落、罷にルビあり)
- (三) 乏しくて礼譲知る人は 言ふことも、我の心を樂しからしむ★(乏、我にルビあり)
- (四) 暇ごひして 心ゆたかになりみたり。このよき人を たづね来にけり★(暇乞ひ、訪ね)

※

- (五) 畏さは まをすすべなし。民くさの深きなげきも 聞しめさなむ(「ひとり思へば」『倭をぐな』)
- (六) よき春の来向かふ如し。ひた土に 額つきていのる。世の安けさを(「心深き春」昭和二十一年一月)

(七) いさゝかも 民の心をまぐることなかりし君も、おとろへたまふ（「心深き春」昭和二十一年一月）

(八) 幼児^{オサナ}らは 春をしみゝに遊ぶなり。見つゝ 涙のあふれ来るはや（「睦月立つ」昭和二十五年一月五日『陸輸新報』）

(九) おのづから 春をつゝしみ暮すなり。さびしとぞ見る。年棚の塵（未発表）

(十) 睦月たつ たゞに明るき真昼風ぎ 祝言^{ホカヒ}人の輩^{トモ}も 門^{カド}により来す（「睦月立つ」昭和二十五年一月五日『陸輸新報』）

(十一) 睦月たつ 春の大川。しづかなる橋をわたりて（越え来つ）、いづこか行かむ（未発表）

(十二) この朝のしずけきに われ ありがたく思ほへにけり。立ちどまりつゝ（昭和十六年一月四日「霜のうへ」『東京朝日新聞』）

京朝日新聞

(十三) 霜土のうへに凍^シみつく枝松の 葉のともしきも、静かなる色（昭和十六年一月四日「霜のうへ」『東京朝日新聞』）

(十四) 睦月たつ 去年^{コゾ}のまゝなる庭の面^{オモ}に、咲き残りたる 寒菊の花（昭和十六年一月四日「霜のうへ」『東京朝日新聞』）

一見して判るように、元版にあつた歌四首を活かしながら、昭和十六年発表の「霜のうへ」から三首、昭和二十一年一月発表の「心深き春」から二首、この時点ではまだ発表されていない歌が五首が挿入されている。この五首のうち（七）（十）は「睦月立つ」と題する五首連作のうち二首で昭和二十五年に『陸輸新報』に発表されるが、残り（九）（十一）は未発表である。昭和二十一年においては、まだ原稿の段階であつたということになり、『歌虚言』が完成していたならば、この二首は「稚国」が初出となつていたところであつた。

次に、三月の章冒頭に据えられた「春洋出づ」は、内容そのものが増補され、詞書と左注を伴う十二首の短歌が加えられた。二〇字×二〇行の正方形の原稿用紙四枚に筆記された原稿が貼り付けてある。「倭をぐな」に所収する同名の連作を中心に、「春洋、再出づ」をはじめ複数の連作から短歌を採つて再構成してある。

面白いのは、冒頭の詞書で、「わが家に来たり住みて、ことしは十六年なり。」と「倭をぐな」では十五年とあるも

のが「十六年」となっている点である。

折口春洋追慕の書

『歌虚言』が、硫黄島で戦死した養嫡子折口春洋を追慕するために、逕空自らの手で企画・編集されたものであることは、前段に書いたように、原稿として仕立てられた元版『短歌文学全集』の中扉に記された逕空の辞によっても明らかである。そしてこの原稿は活字指定まで終えて、昭和二十一年七月十六日にひとまず入稿の体裁を整え、印刷所に回されるはずのものであったということになる。

逕空は前年、昭和二十年十一月に、春洋の戦死公報を受け取っている。

当初、その同じ月に春洋との合同歌集『山の端』が出版される予定であった。『山の端』の「追ひ書き」には「昭和二十年九月九日、私がこの追ひ書きを綴る時も、彼はまだ、公には生きて、現職國學院大學教授である」と記されていることをみても、この歌集は昭和二十年九月、つまり逕空が戦死公報を受け取る以前に出版準備が完了していたことがわかる。このときすでに逕空は春洋を養嫡子として入籍しており、『山の端』はいわば最初の親子歌集となるはずであった。

そもそも『山の端』に収録された春洋の歌は、彼の処女歌集『鵠が音』の初稿として昭和十九年の冬に出版社に渡されていた原稿が空襲で焼失したため、急いで抄録したものであった。そこには「せめて、五十首だけでも、一通りは、人目に触れ易い形で、世に示したく思ふ」という逕空の想いが籠っていた。

しかし『山の端』の刊行も順調ではなかったようである。初版本の奥付には「昭和二十年十一月十五日印刷／昭和二十年十一月二十日発行」という印刷の上に、「昭和二十一年五月二十五日印刷／昭和二十一年六月一日と刷られた短冊状の紙片が貼りつけられてある。昭和二十年十一月に刊行を予定して、逕空が春洋の公報を手にしたころには既

に印刷が完了していた可能性が高い。印刷が完了していたものが半年以上も遅れて、さらに奥付を刷り直さなければならぬ事情、その理由でまず考えられるのがGHQの検閲である。

結局『山の端』の刊行は予定から半年余り遅れて、翌昭和二十一年六月にずれ込むことになる。

『山の端』の刊行が遅延しているころ、すなわち昭和二十年十一月から昭和二十一年六月までの間に、逕空が別のかたちで春洋を追慕する計画を立てたとしても不思議はない。『歌虚言』はまさにそうした時期に編集されていたのである。

『歌虚言』の基盤とされた『短歌文学全集』（昭和十二年一月、第一書房）は、その「追ひ書き」に次のように記す。

今度、此叢刊の為に、藤井春洋が一心になつて整理し、歳時によつて類別してくれた。夏白布高湯・那須大丸温泉で出来たのである。私は例のとほり腕を拱いて、溜め息ばかりついて居た。さうして、時にいらざる干渉を試みた。私のした事は、註釈だけである。其が又、頗る春洋の為事の手足纏ひになつた。其外に、私の責任を分担せねばならぬ部分は、校正刷りに初校を試みた事である。此が校合の規準になつた訣だから、後校の煩ひをした事が多からうと思ふ。『新全集』第三十一卷 三二六頁

すなわち、『短歌文学全集』は、逕空のそれまでの作品を整理して歳時別に類別して載せたものであるが、その作業はほとんど春洋の手によつて行われたことが分かる。『古代研究』の刊行で、ひとまず自分の方向性を確認した逕空が、春洋によつて整理された多様な作品群に各々注釈を施していく作業は、彼にとつて自分の半生を振り返る大切なひと時であつたろう。『短歌文学全集』巻末に付された「年譜」は、昭和五年刊行の『現代短歌全集』第十三巻用に「自選年譜」として用意されたものに、逕空がみずから加筆修正を加えたものである。このきわめて相似的に重なり合う二種の自選年譜が、逕空の唯一の自筆年譜であることを考えれば、この『短歌文学全集』の編集作業というものが、逕空にとつていかにおだやかで思い出深い出来事であつたか、また特段の愛着を持つものであつたかが知

られる。(折口博士記念古代研究所には、春洋が筆記した逍空の自選年譜原稿が現存する)

『山の端』の刊行が不確かになる中、春洋が整理した自らの業績(人生)にさらに自ら手を加えて整理し、『歌虚言』として完成させる営為。お互いの思いが、いわば入れ子型になって、逍空の作品群を包みこむこととなる。はるばる硫黄島に愛する子を遣ってしまっている逍空にとつて、この営為は特段のものであったろう。『歌虚言』の中扉に書く「ひそかなるよろこび」とは恐らくそれを示す。

一方、昭和二十一年六月に刊行の運びとなった『山の端』は、逍空の言葉を借りれば「彼一代の記念として、亦文学力のある人間も、世には埋もれて居るものだと言ふ証拠として、彼の総著集を撰つておくだらう」とあるように、散逸を免れた歌稿によって編まれた、止むにやまれぬ思いが籠った親子歌集なのである。結果的に『歌虚言』『山の端』という、二種類の位相の異なる春洋追慕の書ができるはずであった。

『歌虚言』の編集

『歌虚言』はどのような方法で編集されているか、その点についていくつかポイントごとに概観してみよう。

まず、改訂された目次を見て言えることは、各月の冒頭近くにはほぼ例外なく新たな作品を挿入していることである。一月Ⅱ「語部」二月Ⅱ「雪(長歌)」梅散る村」三月Ⅱ「春洋出づ」四月Ⅱ「山河の春」五月Ⅱ「元服」六月Ⅱ「沙丘」等等など。ここに挿入された作品の内容を見れば、逍空がこのアンソロジーをどのように編もうとしたのか、その一端が垣間見られる。

五月の冒頭に置かれた「春洋出づ」「春洋再出づ」は、『歌虚言』を考える上で極めて象徴的な連作である。二百字詰め原稿用紙四枚に逍空の自筆で書かれ、『短歌文学全集』の三月篇の初めに据えられていた「純自然描写の発足」の直前に貼り込んである。筆記された内容に改めて修正加筆が施され、さらに「表題は十二ポ、本文9ポ、題詞6号、

中表題5号」という活字指定がされている。歌は全部で十二首、三百字ほどの左注がつけられている。以下の原稿の全文を示す。()内は迢空自身による加筆訂正、削除前の状態を示す。またΦ部分には、二輪の花のカットが施されている。○数字は筆者による。

春洋出づ

わが家に来たり住みて、ことしは、十六年なり。

ひとり居て 旦夕アツタニラベに苦しまむ時の 到るを暫思はじ ①

さびしくて 人にかたらふことのはの、ひたぶるなるを 自らも知る ②

はるくくと立ちゆきし後ノチ しづかなる思ひ残るはよくたゝかはむ ③

いとほしき者を 死なせにやりて後ノチ、しみぐ知りぬ。深きみむねを ④

Φ

老いづけば、人を頼みて暮すなり。たゝかひ 国をゆすれる時に ⑤

たゝかひに 家の子どもをやりしかば、我ひとり聴く。衢のとよみ ⑥

おのづから 勇み来るなり。家の子を いくさに立てゝ ひとり眠れば ⑦

Φ

刈りすてゝ 年かはりたる庭萱ニカヤのおどろの上に、日はあたり来ぬ ⑧

照りはたゝく今年の夏は、汗垂りて静かに居りき。冬も恃タまむ ⑨

ことし早 冬のたのみのすべなきに、炭俵スミダハラをくづし 炭散サンラン乱す ⑩

春洋 再出づ

朝ゆふべながむる庭は、秋さびて 松かは毛むし 荒し過ぎたり ⑪

Φ

將軍の書きのこしたる書フミのうへに、書き難かりし恩愛を感んず ⑫

久しく相住んで、情誼、骨肉を超えるに至った師弟のなからひである。而も唯ふたり居る家から、再（応徴）徴召せられて、軍団に入り、今に還らざる、わが春洋である。

友人石川氏、私の終に（わが日々の）孤飄に苦しまむことを憐んで、頑なゝ私に説くことをやめなかつた。春洋を、私の家に入れよと言ふのである。家を成すことに興なき私も、漸く年来の偏執を捐て、彼をわが子として迎へる決意をした。（此時）金沢に留守した彼の所属軍団は、此時既に、將に硫黄島の守備に移らうとする際であつた。其ゆゑ、私の送つたその（春洋）折口姓に入つた戸籍謄本を、春洋の手にしたのは、恐らく島の陥る数日前のことであつたであらう。

この連作は『天地に宣る』に所収する「捷報」中の七首連作「陸軍少尉藤井春洋、わが家に来り住みて、ことしは十五年なり」（後に『倭をぐな』に「春洋出づ」と別途二首を抱えこんで所収）とほぼ同じものだが、そこには若干の異同がある。

まずは題詞である。『天地に宣る』では、春洋が遥空の家に入つてから「十五年」と記す。『倭をぐな』も同様だが、『歌虚言』では「十六年」とする。この記述をそのまま受け取れば、『倭をぐな』の原稿を作成してのち一年後に『歌虚言』の原稿が作成されたことになり、これが両者のテキストの意味を決定的にする。

春洋が、出石の遥空の寓居に入ったのは昭和三年の十月であるから、そこから十五年といえば、数え方にもよるが昭和十七年十月から十八年十月にかけてである。藤井春洋が、再びの応召をしたのが昭和十八年九月のこと、遥空が春洋の歌稿の整理を始めたのが昭和十九年一月ころであるから、遥空が『倭をぐな』の「春洋出づ」の連作を構成し

始めたのとほぼ同時期ということになる。これが、「十六年」の理由であろう。そして「春洋再び出づ」が製作される。それはちょうど春洋が再び応召した時期と重なる。つまり、『歌虚言』の原稿は、『倭をぐな』の原稿からさらに一年下った昭和二十年十月以降に構成されたということになるだろう。

『倭をぐな』所収の「春洋出づ」は、『歌虚言』所収予定の短歌のうちの八首に別の短歌一首を加えた九首によって構成されている。その順番は「⑤↓⑥↓⑦↓①↓②↓③↓④↓⑫↓別の短歌」となっていて、『歌虚言』で構成したものと順番が異なる。この九首の表現の違いは、

A 表現の異同なし ⑤

B 漢字ひらがななど字句の表記上の異同のみ ⑥・⑦・②・⑫

C Bに加えて表現上の異同がある ①・③・④

となっている。

Cにかかわる歌の表現の異同は以下のとおりである。

① ひとり居て 朝ゆうべに苦しまむ時の来なむを 暫し思はじ『倭をぐな』

ひとり居て 旦夕(朝ゆふ)に苦しまむ時の 到ると、暫思はじ『歌虚言』

② たゝかひに立ちゆきし後 しづかなる思ひ残るは、善く戦はむ『倭をぐな』

はるばると立ちゆきし後 しづかなる思ひ残るは、よくたゝかはむ『歌虚言』

③ いとほしきものを いくさにやりて後、しみじみ知りぬ。深き聖旨を『倭をぐな』

いとほしき者を 死なせにやりて後、しみじみ知りぬ深きみむねを『歌虚言』

この三首を見るだけでも、「倭をぐな」の本文より後に『歌虚言』の本文が生成されたことは明らかであろう。

「たたかひに」を「はるばると」とに、そして「いくさにやりて」を「死なせにやりて」と直した事実が示すよう

に、逍空の諦念と悔悟の思いが、その改稿の痕跡にしっかりと刻み込まれている。

草稿の形態

『歌虚言』の草稿の形態についてはすでに述べたが、簡単におさらいしておこう。

『短歌文学全集 釈逍空篇』（昭和十二年一月二〇日、第一書房〓以降元版）は詩歌と散文とを交互に配した構成を持つアンソロジーだが、その一冊を解体し、収録されている作品の一部を削除する一方、新たに数編を追加した上で全編の順序を入れ替え再編集している。残した作品には、ほぼすべてにわたって初出の本文に対して加筆修正が施してある。その規模は作品ごとに濃淡がある。

また新たに原稿用紙あるいは無罫紙などに筆記した原稿を、当該個所に張り付けている。それには逍空自筆のものとは他筆の清書原稿とがあり、後者のほとんどは元版の内容を清書したものである。一方、折口直筆のものは、新たに稿を起こしているものもあれば、既存の論考、作品に大幅に手を加えた状態のものがある。

本段では、元版収載の本文にどのような加筆修正が加えられ『歌虚言』に至っているかについて見て行きたい。それによって、大戦をはさむ九年間の逍空の思考や心意の変化相をそこから読み取ることができるかもしれない。

目次冒頭「稚国」に異同についてはすでに述べた。

二番目の「語部」は、元版四番目にあつた「大倭宮廷の勅業」を改題して、新たに原稿化して当該個所に張り付けたもの。本文に以下のような異同がある。（ここでは煩瑣を避けるため表記法、句読点など細部の修正は示していない。傍線部が加筆修正箇所〓以下同）

- ・であるのに↓幾部分かであるのは
- ・人間の最↓（削除）

- ・ 聖なる記録↓聖なる口頭記録
- ・ させようと言ふ↓させようとする
- ・ 語部の物語の、極めて神聖な知識としての信仰が↓語部の物語を、神聖な知識とする信仰が
- ・ 払拭せられる↓払拭し去られる
- ・ 必然の計画が出て来ねばならなかったのである↓計画から出たのと同じ姿をとったのである
- ・ 伝へられたものを言ふ。↓伝へられたものである。
- ・ 創建することが、其方法であつた。↓創建する風が行はれた古代である。
- ・ 宮廷から↓主として宮廷から――
- ・ 物語では、まだ第二次の語部を思ふ時に達しては居なかつた。↓物語は、まだまだ第二次の語部の思ふ時代に達せぬ時代に成立したようである。
- ・ 靈通↓靈通者
- 三番目の短歌連作「年明るる山」(十一首)はほぼ元版のまま。元版を切り抜いたものに句読点、区切りの変更を加えて他、語句の修正が一か所ある。(一)内は元版。(以下同)
- 山びとは 夜々ひたぶるにをどるなり。春の祭り(睦月春祭の)奏び馴らしに
- 四番目には、元版では二番目にあつた「山のことぶれ」を「語部」と同じく清書原稿化して張り付けている。
- ・ ことぶき廻る↓ことほぎ廻る
- ・ 寂寥を感じた↓寂寥を報じずには居られなかつた
- ・ 桃青居士の誇張した↓誇張した
- ・ 其の口癖文句にも勘定に入れて居ない↓其ま口癖にも勘定に入れなかつた

- ・山の生活を刺戟して居た↓山の生活の美しみを刺戟して居たのである
- ・ほんたうは大昔から↓大昔から
- ・忘れ果ててからであつた↓忘れ果ててから後のことであつた
- ・その昔から持ち伝へた↓その昔持ち伝へた
- ・転げ込んで口は動かず↓転げ込んで口ははたらかず拐された座頭が↓拐されて戻った座頭が
- ・今語られてゐる↓即目前語られてゐる
- ・故意から出た山人のほら話↓山人のほら話
- ・五番目は再び短歌連作「雪まつり」(十八首)で、やはり元版を切り抜いたもの。五首目に次のような加筆がある。
背戸山のそがひに、いまだ 雪高き信濃の国を 今宵思へり(思ひをりつつ)
- ・六番目には「文学は旅行する」を配す。元版との位置は結果的に同じになっている。
- ・殆ど宿命的に、唱導文学には↓我が国の唱導文学には、殆ど宿命的に
- ・異人↓異人―すとれんじやあ―
- ・呪詞は常に、同一詞章のくり返されてゐる間に、次第に小区分を生じ、種々の口頭伝承を分化した↓(削除)
- ・乞食者となつて行つたものもある。だから実際は、山部、海部の種族というので、元日本民族の分岐者であつたのが↓乞食者であつたのが
- ・その力↓その呪力
- ・神々の来臨に逢ふ事も↓神々の来臨を迎へねばならぬ事も
- ・宿老↓宿老たち
- ・神群行の聖劇↓神群行の聖劇とも言ふべき行事

・内容としての演劇↓内容としたもの

・妖怪であつた。↓神とも妖怪ともつかぬものであつた。

・近頃、村田学士兄弟が、此「二種の神器」の外に↓村田正言学士は、まことに篤学なる史学者であつた。生ける日、私の為に、「二種の神器」の外に

・教へてくれた。まだ円満な↓調べてくれた。私には、まだ円満な

七番目には、元版では五番目の箇所「だうろく神まつり」とあつたものを「道祖神祭り」と直し、その直後に「道の神 境の神」(昭和十六年八月、「むらさき」第八巻第八号初出)を「正月十四日」と改題して挿入している。応分の加筆が施されている。

- ・知つておいでの方がある↓知つておいでの方も、多い
- ・あまり却けない名になつて残つたり↓あまり却けない名の、仏くさいものになり替つたり
- ・交叉せられて↓からだが交叉せられて
- ・塗り替へられ、こはすりして↓塗り替へるなり、こはすなりして
- ・答めるお方↓答める神
- ・信じてゐた時代も続いてゐたのでせう。↓ただ信じてゐた時代も、長く続いてゐたことが思はれます
- ・目に見える神となられたのですが↓目に見える神となられたのでせう。
- ・神屋↓神道
- ・荒ぶるものもいるもの↓荒ぶるものがある
- ・神↓靈物(モノ)
- ・立つて↓立盡して

・習慣もありました。↓習慣も、追ひ／＼に盛んになって来ました。

・其の最小の形↓此が中世の神の信仰でした。其の最小の形・・・

・今でも此神の信仰の生きてゐる処が、あち／＼にあります。↓今でも、此神の信仰の生きてゐる処では、なか／＼盛んなものです。

・其中、伊豆一帯の村々は、まだ／＼はつきりと信仰も窺はれ↓其中、伊豆一国の村々は、はつきり信仰の形も窺われ

・此写真、慶應大学大学院学生池田彌三郎・加藤守雄君が、数年前十数回、其村々に出かけて行つて、写影して来たものです。↓此写真、加藤守雄・池田彌三郎両人が、慶應大学大学院学生であつた、のどかな時代に、十数回、其村々に出かけて行つて、写影して来たもので、私にとつても、思ひ出のあるものなのです。

ほとんど、文脈をより分かりやすくするための加筆修正と、時間的推移によってそぐわなくなった表現の修正だが、最後の傍線部、「のどかな時代」「私にとつても、思ひ出のあるもの」という述懐は、この『歌虚言』全体の編集意図と響き合っているだろう。また細かいところではあるが、「池田彌三郎・加藤守雄」となっていた順番を、あえて「加藤守雄・池田彌三郎」としたのはなぜか。本書が、既に述べたように遥空の春洋に対する追悼の書という性格を持っている以上、このような細かい入れ替えにことさらの意味を感じてしまう。

九番目の「古びとの島（昭和十一年七月、「短歌研究」第五巻第七号初出）は、元版をそのまま使い、表記上の加筆修正以外内容上の大きな変更はない。ただ、付記に次のような加筆（傍線部）がある。

伊平屋島に渡る。当時藤井姓であつた、子春洋同行。琉球国王尚氏先祖発祥の地である。

十番目は「ほうとする話」を元版十二番目から移している。

・其上↓そんなことに

・まだ〜幾萬か↓幾萬か
 ・どうかすれば↓どうかすると
 ・那覇の都にゐた為↓那覇の都に住み
 ・まだ〜薩摩潟の南↓今も尚薩摩潟から南
 「ほうとする話」の当該箇所への移動は、「古びとの島」と関連付けるためと思われるが、その真意は『歌虚言』の構成順と関連があるだろう。そのことについては後に述べる。

十一番目は元版の十番目にあつた「御製に現れた宮廷ぶり」を「宮廷ぶり」と改題して配している。

- ・瘦されない。↓瘦されなかつた。
- ・かうした差別↓さう言ふ自らなる差別
- ・御製の自在さ↓この御製の自在さ
- ・山の歌の表現↓山を対象にむ歌の表現
- ・いかにも深い反省を↓いかにも深いはね返しと、其れに伴ふ反省を
- ・この御製が、夫の君↓夫の君
- ・だが何としても↓だがさうすれば何としても
- ・古い修辞法に↓古い修辞法なる序歌の技工に
- ・優れた↓優なる
- ・詠まれたのだ。↓詠まれたものの一連の中である。
- ・囁目即景の歌で↓囁目即景の歌として
- ・「やうして」→「やうして」だひう

思ひ述べられたのである。↓思ひ述べられてお作りになったのである。

・言ったから名になつたと↓言ったからの地名と

・物部ノ石上大臣↓物部氏の氏上―ある時代には石上大臣家で勤めた―

「語部」「山のことぶれ」「文学は旅行する」「ほうとする話」の散文四編は、すべて清書原稿となつている。これは当初元版に、恐らく折口の手による応分の加筆が入つたために、そのまま指定原稿とすることができず、加筆されたものを清書して改めて清書したものと考えられる。

『歌虚言』とは何か

そもそもこの『歌虚言』とは何だったのか。

この事と関わって、昭和二十三年四月に『短歌研究』に発表された「文学に於ける虚構」という小文が、にわかに前景化してくる。

「文学に於ける虚構」は「このごろ、短歌の上で虚構の問題が大分取り扱はれて来た」という書き出しで、日本文学、特に短詩形文学における虚構の問題を、芭蕉の「奥の細道」の虚構性を手始めに、その理路を短歌に及ぼしながら、短歌における「虚構性」を論じている。なかでも、次に引用する箇所がこの論の基本的立場を示して居よう。

今日短歌の上で、文学としては虚構が許さるべきものだ、虚構を用ゐる意義のあるといふことは、だれでも認めてゐる筈で、たゞ其議論の立て方、論理の運び方が、問題にせられてゐるのだと言つてよい。(中略)

(不完全な部面を表すことが多い素材を≡筆者注) 完全な素材に変更して表現するといふ処に、文学上の虚構の、真の意味がある。実際の生活よりも、もつと完全な生活を求めるための虚構だと言ふことが出来る。(中略) 虚構

が問題になるといふ事は、いかにも作り物らしい生活が詠まれる為に、起つて来ることであつて、完全な段階に達すれば、虚構が虚構だという曇りを払拭して、そんな問題を起さぬところにしずまる訣だ。

〔新全集〕第二十九卷 三八六―八頁

成瀬有は「山のまればと―海と夜と虚構」〔白鳥〕平成二十二年一月号他)の中で、当時「まさに湧き上がるように相継いで提唱された」「短歌への決別」(白井吉見・昭和二十一年)「歌の条件」(小田切秀雄・同)「短歌の運命」(桑原武夫・昭和二十二年)「奴隷の韻律」(小野十三郎・昭和二十三年)「歌よみに与へたき書」(福田恒存・昭和二十四年)といった「短歌・俳句の文学性や近代性の欠如を指弾し、抒情質や結社制度、さらには日本文学のあり方等のすべてを否定する」短歌否定論に対峙・反駁する論として、この「文学に於ける虚構」が書かれたと指摘する。

確かに時代状況を見ると、この論考が、そうした流れ、すなわちいわゆる「第二芸術論」に対峙する形で短詩形文学の作家あるいは擁護する側から提示される反論の一つと捉えることも出来る。

しかし、この論文をよく読んでみると、その内容からも語り口からも「対峙」や「反駁」といった用語で示される作者の強い意志を汲み取ることがなかなかできない。はつきり言ってしまうは、「虚構性の論理のありかた」以外は何も言っていない、ととらえた方が正確かもしれない。それどころか、何をいままさらそんなことを皆は議論しているのか、短歌の非合理性、韻律への従属、模倣性などといったことは、もう当たり前の話ではないか。といういささか達観した思いがそこからは感じられるのである。このことは、この昭和二十二年頃に書かれた、遥空の他の短歌に關わる論考におしなべて言えることで、

最近、歌に近代性を盛り得た若い人々が表れて来たが、これはどうしても、いつかは又前の処に戻つてしまふのではなからうか。かうした事は常なのであつて、この例としては前田夕暮君の例がある。も早、前田君は新しい様式の短歌へは絶対に帰らないだらう。これが歌といふものゝもつてゐる根本の誘惑である。短歌といふものは、

日本人につきまといつてゐる怨霊といふやうなものである。

〔「短歌の運命」、昭和二十四年三月『安房』第一号『新全集』第二十九卷 三九六頁〕

と、むしろ短歌の持つ怨霊性につきまといわれる我々の思想の限界を嘆いてみせる。逍空のこうした一見ふわふわしたものの言いは、それこそ彼が、二十年以上前に、「歌の円寂するとき」をはじめとした一連の「短歌滅亡論」を書き、短歌様式の限界を見極めながら、自らの実作の中でそこからの離脱と飛翔を幾度となく試みて来たからのことであつたに違いない。

何度も繰り返した述べたことではあるが、最初のそれは、関東大震災後に短歌に大きな限界を感じとり、一聯四行分かち書きの「砂けぶり」を「かうした様式の歌」と称して発表したころ。彼は

地震直後のすさみきつた心で、町々を行きながら、滑らかな拍子に寄せられない感動を表すものとしての——出来るだけ歌に近い形を持ちながら——歌の行きつくべきものを考へた。さうして、四句詩形を以てする発想に考へついた。〔『海やまのあひだ』「この集のすゑに」〕

と書く。「砂けぶり」がはたして歌に近いかどうかという議論はさておき、彼がこのとき短歌詩形からの離脱を考えて居たことはすでに述べた通りである。

そして次は、東北探訪の後、昭和九年十月から十年四月までの間に立て続けに発表される「非短歌」と称する一群の作品、「水牢」「貧窮問答」「東京を侮辱するもの」といった作品を「守屋豹司」という人を喰つたような筆名で『短歌研究』に発表し続けた時である。この時も、こうした作品を理論的に支えるようにして、「短歌将来の形式に関する一つの暗示」などの論考を書いている。

これら「非短歌」作品のほとんどはあきらかに虚構の産物であるが、濃密な物語性を作品にまといつかせながら、しかし逍空そのものが物語の中で実在性を以て感じられるという、そんな作品である。いわば私的記録的側面と物語

性、そしてそれを抱える新たな様式を模索するこれらの作品のあり様こそ、短歌様式からの離脱を図る際に常に、虚構と近代性という問題が彼にとつて不可欠の課題であったことを示している。これらの作品群をパッケージにして、入れ子型の形として提示することで、歌物語としての新たな様式を、歌の命脈の先に意識していたのではないか。「短編小説」と本人がいうものに近くなって行く歌物語。

そして、昭和二十一年から二十二年頃、再び短歌様式からの離脱への試みをしようとしたところに、時を同じくして短歌否定論、撲滅論に対峙する形で「虚構」の問題が前景化してきたということになる。どちらが先かを議論しても詮無い事だが、私は逡空はすでに昭和二十一年の初めに、歌の虚構性について考えていた。その虚構性は、様式性とは表裏の関係にあるものといつてもいい。

繰り返しの試みの中でも、恐らく彼が常に意識していたのが、文藝復興すなわち「ことば」と「生活」、「様式」と内容、「事実」と「虚構」これを律の中にどのように機能させるかという問題であったが、その場合も「虚構」「近代性」の問題は欠かせない要素である。

成瀬が指摘しているように、逡空の場合、「近代性」という用語のとらえ方そのものに、他の論者、作家たちと決定的に異なるものがあること、そしてそこからの発言として捉え直さなければ、結局逡空における短歌の虚構性の問題は理解しきることが出来ないということ、そしてそれは常に彼が短歌の限界を感じつつも、またその様式からの離脱をはかりながらも、しかし彼が言うように、「日本人につきまとつてゐる怨念」として、祀り続けなければならぬものなのであった。

虚構としての歌物語

虚構の問題が歌壇を覆い尽くす前から、つまり昭和二十一年から、逡空は「歌虚言」という問題を考え始めていた。

「文学に於ける虚構」が発表されたのは昭和二十三年四月『短歌研究』の冒頭エッセイであった。しかしこの用語そのものは、戦後すぐにこの「歌虚言」という書物を刊行する試みの中に登場していた。

『歌虚言』は、すでに述べてきたように『短歌文学全集』釈過空篇を解体し、一部の作品、論文、評論は残しながら、そこに新たな連作歌、詩、評論を加えて編集しなおしたものである。そして、その冒頭にある記述から推測するに、硫黄島で亡くなった子折口春洋に対する慰霊の書としての性格を持っていた。

『短歌文学全集』は、それぞれの作品の末尾に、その作品の成立した年、経緯や作品に対する思いなどが簡単に記述されている。新たに編集し直された『歌虚言』も、『短歌文学全集』の記述をそのまま残しながら、そこに応分の加筆をし、新たに書き直すなどしている。

その加筆部分の内容を見ると、春洋だけではなく、それまで失われて来たものに対する哀惜の情が確かに漂っている。それは、二十五年以上も前の関東大震災の時の情景までもまざまざと思ひ起こして、改めて自らと春洋の来し方を捉え直しているようにさえ見える。

古びとの島

昭和十一年一月、伊平屋島に渡る。当時藤井姓であつた、子春洋同行。琉球国王尚氏先祖発祥の地である。『短歌研究』に載せた。

雪ふたゝび到る

(前略) 一月二十六日以後、草莽志を述べるによしなく、愁い深く憤りに燃えた数日の間の歌詠。其中から。初二首は、挽歌四首と共に、『中央公論』に発表した。外は未発表。昭和二十一年二月追記。今にして見れば、憾み新たに、思ひ異なるものがある。

山つら

大正九年二月、山裏と通称する諏訪郡の高地部玉川村へ（講演に_{||}削除）行った時のもの。『海山のあいだ』。大泉山小泉山の山陰には、赤彦の生れた塚原家があつた。

火口原

前章は、大正五年作。「海山のあいだ」から。後二首は、昭和十一年一月『婦人公論』に出した「春日ねもす」の中から。和合瑞穂精舎は、塾主歿後、どうなつたかしらん。

東京詠物集

大正十五年、七・八・十一月、昭和二年六月と、『日光』に断続して載せたもの。未定稿は、もつと広く涉つて尚数十首（？）もあつたかと思ふ。当時まだ、関東大震災の痕のまざまざと、人心・現実二つの上に残つて居た。此らの歌すべて、それを背景としてゐる。その印象を外にしては、すでに解せられぬやうになつた歌もある。此一つ前には、「新様詩」砂けぶりが出来てゐた。その感激が薄れて、東京詠物集に落ちついた訣である。歌の主題が、すべて回顧的になつてゐるのも、其為である。「深川神明」、その社司林五助は、此時、奉祀した神社と去んだ。（下線部は加筆部分_{||}筆者注）

しかしこの慰霊の書に「歌虚言」という名が冠せられた時、この書は単なる慰霊の書から、短歌のあらたな立ち上がり、歩みを記す書としての性格を帯びてくる。論文と歌を組み合わせて、それを一年十二月に配列して、まるで歳時記のようにして編集する試みは、実は、先に述べた第二回目の短歌からの離脱の試み、すなわち昭和十年から十一年にかけて既に行われたのであつた。

その編集には折口春洋が深く関わっており、昭和二十一年に亡き春洋への追慕をたどりながら改めて編集し直し、そこにあえて『歌虚言』の表題を冠する逡空には、生活そのものを『歌虚言』として編集し直す意図があつたからではないか。生活暦のようにして作品を季節に割り振るあり方は、その作品の成り立ちや意義をとりあえずは捨象して、

配列の意味に埋没させる。そして万葉集左注の如く、簡単に事実関係を述べる。そして一つ一つの論作の配列に改めて気を配りながらの再編集には、この作品の新しい歌物語の生成に向けた虚構への希求が認められるのである。

第二章 折口信夫 小説の意味——視覚と聴覚の交錯

第一節 「生き口を問ふ女」の構想

怪談咄

釋迢空（折口信夫）の初期小説のひとつ「生き口を問ふ女」は、大正十一年の五月と七月、彼が自ら創刊した文芸雑誌『白鳥』の第二号と第四号に掲載された。その後『白鳥』が第四号で廃刊となったために中断し、以後もその続篇はついに発表されることなく、この小篇はいまもって「未完」の二文字で終わっている。

もつとも、『白鳥』第四号に直接あたってみると、その文末は「未完」ではなく「つづく」となっているから、この「未完」という二文字は、その後この小説が全集に収められた際、編者によって書き改められたものと推測されるが、いずれにせよ大正のこの時点において迢空がこの小篇を書き継いでいこうという意図を十分に持っていたことは明らかである。いったいこの小説はどのような構想をもつて書き出され、どのような展開を見せるはずのものであったのか。

この小説は、従来、かば焼き屋の主人卯之松と彼が身分不相応に困っている妾のおちかちを卯之松の正妻お留が生き霊となって襲うという話、つまり怪談咄として読まれてきた。種村季弘もその編著『日本怪談集』下巻（河出書房新社 平成一年八月）にこの一編を収め、その解説の中で次のように述べている。

未完ながら折口信夫「生き口を問ふ女」は、源氏物語の六条御息所の再来を思わせる生霊の口寄せにあやつり人形のようにふりまわされる男女の生霊を、大阪のねばっこい風俗を背景に描いて、文字通り鬼気迫る。風俗の細部を歌舞伎の極色の看板絵もさながらに丹念に描きこみ、一銭一厘もみがさない大阪人の合理主義的勘定ずく

を一点もゆるがせにしないだけに、かえって靈のリアリティーが現前した。

確かに今我々が手にすることのできる一編、つまり発表せられた部分だけを見れば、この「生き口を問ふ女」という表題そのものが、まずそうした怪談咄としての読み方を我々に強制するし、また内容的にもそう読むのが極めて自然かもしれない。

正妻お留は、夫卯之松の行動に不審を抱いて、「青物屋の姥はん処い、河内の大个塚から来る巫女」に生き口を問うて卯之松の行動を探っている。卯之松は「きつと見て貰て、女の家いあばれこんだる……」といった見幕のお留をすかして妾宅へ来ている。彼は先からの自分の眠気の原因が、お留が巫女の口を寄せているせいではないかと思いたつてお留の生き霊を感じだす。この小説の冒頭から卯之松とおちかの心理の中に生き霊の存在を盛んにちらつかせ、二人の心理の動きに伴つてそれを巧みにふくらませてゆく。気晴しの為に千日前にはかを見に出掛けてゆこうとする二人の心に、まるで吸いつくようにして生き霊が追いかけてくることを予想させるような描写を繰り返しながら、鉄眼寺門前でのクライマックスの場面を設定する。

この場面では、突然具合が悪くなったおちかが「膝の上に頭をにじらせて、横顔を上にして、倦相うづまに」しゃがみこんでしまうのであるが、この後、卯之松がそれを介抱する場面からの描写は、二人を取り巻く事物を写實的に描きながら、その一つ／＼にびくつく卯之松の心理を巧みに絡ませてゆく。生き霊そのものを登場させずに、事物と心理の描写だけでその存在を感じさせていく手法は、逆に壮絶なくらいの無気味さを誘つて、種村の言うように、怪談咄としては出色の出来ばえと言つてよい。このあと遙空は卯之松に「来るなら、一層早出て来い。掴へて見せ物に売つたぞ」と聞き直らせる。しかしこの一編は、卯之松の心理の中で次第に大きくなっていった生き霊への恐怖が頂点に達したところで中断してしまうのである。こうした中断のしかたが、このあと正妻お留の生き霊が卯之松の心を更に追いつめて、やがては二人と対決するというような展開を我々に想像させる。

つまりこの一編は、未完であるが故に、いやむしろ未完であるからこそ、それ自体怪談咄としての仕込みの巧みさとその後の展開を予想させる、そういった類の作品であったということさえできるのである。

しかしこの小説が、当初からそうした怪談咄として構想されたものであったのかというと、それにはいささか躊躇せざるを得ない。この作品が「此頃三十歳と四十歳との間の年頃であった私は、心に動揺が多かった」と逡巡自らが述懐している（『自歌自註 海やまのあひだ』『新全集』第三十一巻 一七四―五頁）ように、近代という時代性と厳しく交錯した自我との葛藤を背景に、学問と創作との問題に揺れ動いていた大正十年前後に書かれ、そしてその問題を考えるうえで重要な意味を持つとされる『白鳥』に掲載されたことを考えるとき、我々はこの一編が単なる怪談咄だと片づけることはできない。また「この故郷に対する私の底意は、町びとたちには訣らない」（『同』）などと大阪に対する屈託を抱える折口のこの時期の作品として、そう簡単に読むわけにはいかないのである。

新たな自筆原稿

こうした疑問を解決するうえで重要な手がかりを与えてくれる資料がある。折口博士記念古代研究所に保存されていた折口信夫の自筆原稿断片、書きさしの類の中から見出した一枚の原稿を手始めとして、その内容や使用された原稿紙、インクの特徴、書き癖などを手掛りに、未整理の自筆原稿断片の山の中から拾い集めたものを再構成した「生き口を問ふ女」の続編とみられる草稿である。

草稿は全部で十枚あり、現在我々が読むことのできる「生き口を問ふ女」に接続する部分は失われてしまっているが、幸いなことに十枚のうち六枚が連続した形で発見されたことから、残る四枚をあわせ読むことでおおよその筋を推定することができる。極めて貴重な資料であると考えられるので、以下筆者が推定した筋に従いながらその全文を掲げることとする。表記は原文のまま、原稿用紙の替り目をそれぞれ一行あけにして冒頭に①②と枚数を示す数字を

振つてある。

①瞬間には、毛布を跳ねのけて、大柄な女が車を飛びおりて居た。

急に重荷をおろした様な、すつとした気持ちが出来た。もう自由に飛び廻れ相な気軽さを覚えた。女も、うつて変わった落ちついた声で、卯之松に問ひかけた。

向い來んのが、お留はんだっしやる。

ふん。もう見よつた。為様がない。まあ、ぢつとしてい。

遂ひ返してこます。

からだ中に、力の充ちて来るのを、まるで瘡(オコリ)やんだ時に一度やった事のある

②の落ちた様に感じ乍ら、此も、晴れ／＼した女の顔を見た。

來た／＼。宛で、火吹いとうる。生き霊にならんと、生の儘で走つて來よる。

こんな軽いおどけも、一つは、女の力を落させまい為からはあつたが、自分でも不思議な程、訣なく口をついて出たのである。夕焼けの空を、真面に受けて近づいて來るお留の顔を見下し乍ら、火の様な瞬間を待ち受けて居る心は、段々勇氣がたまり込んで來

③る一方であつた。欄干橋迄來るや否や、破裂する様な声、女房は喚いた。

一鉢、そんな處で、何していやねん。

何せうと彼せうと、おれの勝手や。とつとつ往にさらせ。

次の瞬間には、お留の反歯が、卯之松の鼻の先にあつた。

へん。おまはんらこそ、何處ドコいなと、行きたら、えゝやないか。まんで、猫ネコに魅入ミられた鼠見ネズミたいに、びりびり動きも出来なん

④だやろ。其見たか。えゝさまや。

おちかと卯之松の目は、突嗟トクサにびったり行き逢うた。併し、追ひかけて来たお留の瞳ヒトメに出くはして、両方へ反れた。

な、な、何吐ハクそい。今、こゝ通トりかゝつたら、此女オナゴはんが、からだわるい言うてはったさかい、医者イシヤ教オシせたまつさ言うてた處トコロやはい。内預ウチヨつてる者が、日が暮クれまぐれに出あるきさらして、をかしい事コトしやがると、叩ツき出すぞ。

⑤男オトコだてらに何や。未練ミレンたらしい言イひまに止トめてんか。何程ナンボとぼけたかて、此方コッチヤには、日本國中ニッポンの神佛カミブツが随ツいてはんねん。

此方コッチヤにかて、此寺コノテの佛ブツはんが味方ミカタしてゝ下シはるはい、と言イひたくなつたのをこらへた。

ぼん／＼言イはれて、へっこんでる妾メカや思オモてんのか。其知シつてゝ威張イカリりまくつてるのは、何處ドコやらに居イよる、白粉オシロイ面に聞キきたいねやろ。

なるべく穩便ウズビに済ツむ様サマ、お留

⑥のいら立つた語コトバを交カし／＼居イた卯之松ウツノマツは、お留オシロイの感情カンジを一挙イツブツにへしつけ、烈シバシバしい語コトバを、こゝで叩ツきつけて置オかねばならぬと思オモうた。「あの時ナトキ何ナニちふ腰ウシの無ムさやつた」と言イふおちかの侮蔑ウヰゲツを長く受けねばならぬと思オモふ

と、いら（ママ）くして来た。

風呂イに行く様な顔して、財布ほところい入れたよつて、出ていくとすぐ、酒屋の角曲るなり、こつちや、八百屋来たはった巫女はんひつぱつて来て、生き口寄せ（ママ）而遣たら、これから、千日前いくとこや……てん（！）。……ふん、折角のよ、そいき、やろのに、足どめしられて、気の毒やの（！）。人の男とろ言ふを、なごやもん。如（ママ）何様され（以下中断）

⑦お留に言ひながら、実は女に聞かせる積りで、主人らしい威厳で叱りつけた気だが、すぐに、我ながら生ぬるい感じ（ママ）か残らない様に思はれた。

話そらし勿（ママ）。そんな事に如きがあるもんか。長年やつて来たんや。あほらしい。そこらの奴に、此様真似出来るか。……さあ、おまはん。早還（ママ）に。家（ママ）いに（！）

一人で、いんにやがれ。生霊め。

おまはん（！）そんな事言ひて、えゝのんか。

お留の聲は潤んで来た。

生き霊やあれへん。足もこの通りや。ようもく、そんな事……。さあ蹄りんか。（以下中断）

⑧なんやろ思たら、へへん。途方（ママ）ないへつ、びん（別品の緋り語）さんやしな（！）……そんな顔してくさつて、あたあつかましい。このへちやめ。

なにい（！）。鬼ば（ママ）。

卯之松が、抑へようとしたのは、間にあはなかった。

こっちやが鬼ばゞなら、おどりや（汝は）鬼女や
 きじよお雖、婆よりまっしやわい。

若がりさらしても、もう五六年たちや、やつぱり婆やはい。
 縮緬跛だらけの顔してくさつて……。この青べうたんの、賣滯

⑨め。

早、檀那に、ほり出されて、乞食でもなりくされ。

そおれ。蛙は口からや。やつぱり檀那ぬかしたな。

困はれてたら、どないや。おまいらの世話になつてえへんぞ。

なつてるとも……。川卯之内は、かまの下の灰まで、こっちのもんや。何程ねらひさらしても、死なゝあけんは
 い。わてが死んだ雖、四人の子持ちや。おのらは指もさゝれえへん。（以下中断）

⑩しばきくさつたな。警察へ来い。訴へたる。

卯之松が、女をかばはうとする前に、おちかは、門の敷居を越えて、中に這入つて居た。

どうなと勝手にしんか。こっちは、正当防衛や。

おちかの使うたむつかしい語が、卯之松には櫛つたくもあり、誇りがましくも思はれた。其下から、其づに乗つた
 心持ちが、二人の女に二様に、自分を甘く感じさせさうに思はれたので、あわてゝむんと口をひきしめて、努めて、
 洗面を作つてゐた。

ふん、漢語たら使ひくさつて、えらいこっちや。（以下中断）

この原稿を一読すれば、「生き口を問ふ女」という小説が怪談咄として構想せられたものでないことが容易に推測できるだろう。旧全集では生き霊として卯之松やおちかの心理や言葉の中にしか登場しなかつた正妻お留が「生の儘」で登場して来る。そして妾おちかと壮絶な修羅場を演じ、一方卯之松はといえばその二人の女に翻弄される小心者として描かれる。ここまで読めば、旧全集版における生き霊というものが、正妻お留の嫉妬におびえる卯之松の小心を極立たせるための装置として使われたのだということがわかる。まるで泉鏡花が描くところの怪奇小説の世界、そこには遙空の心象風景に絡みついた幼少時の暗鬱な体験を読みとることも可能だろうし、そこから一転して大阪世話物風な世界へと転換させる手際の良さには、種村季弘が指摘したような歌舞伎の舞台転換のような仕かけ、更には鏡花への意識というものを読みとる必要もありそうだが、しかしそうした背景はともかくとして、この「生き口を問ふ女」一編が、正妻と妾という二人の女に翻弄される小心な大阪商人の物語として仕立てられたということだけは確かだろう。

しかし、この一編が怪談咄であろうが、そうした大阪商人の生きざまを描いた小説であろうが、それが『白鳥』に掲載された必然性はどこにあったのかという疑問は依然として残る。

「生き口を問ふ女」の構想

ここで、この「生き口を問ふ女」が掲載された『白鳥』について考えてみる必要があるようだ。『白鳥』が『アララギ』を脱退した遙空が大正十一年一月に自ら創刊した文芸雑誌であることは先にも述べたが、この雑誌の意味を考へるうえで、その創刊に至る経緯にはいささか説明を要する。

創刊に先立つ二年前、大正九年五月、遙空は坪内逍遙の史劇「名残星月夜」を評した「芝居に出た名残星月夜」という一文を執筆する。この文章は更にその二年前の大正六年六月に『時事新報』に発表された斎藤茂吉の「史劇『名

残星月夜』に就いて」という評論を承けて『アララギ』の「編集所便」(大正六年八月)に自身が、

博士の内界に廿年間蓄積せられ居候史論の敷衍或は解釈とも見るべきものにて、尋常作家の概念的偶像・偶感的脚色とは撰を異に致し居り候。(中略)小生も「史論の表現形式としての劇」といふ題にて、名残の星月夜評を本誌の上に発表致し度前月より用意致し乍ら、今月もまた発表の運びに達せず候。来月はきつと相纏め度存じ居り候。

『新全集』第三十三卷 四一八頁

と書いたその約束の実現であった。実はこの「芝居に出た名残星月夜」の掲載問題が、逍空をして三年間在籍した『アララギ』を去らせ、自ら『自鳥』を創刊させる直接のきっかけになったわけだが、話はそれほど単純なことではない。

逍空が茂吉の「名残星月夜評」に触発されて「史論の表現形式としての劇」を書こうとした大正六年といえは、例の「身毒丸」とその執筆の弁明ともいふべき「附言」が発表された年でもある。「附言」には次のように言う。

わたしどもには、歴史と伝説との間に、さう鮮やかなくぎりをつけて考へることは出来ません。殊に現今の史家の史論の可能性と表現法とを疑うて居ります。史論の効果は当然具体的に現れて来なければならぬもので、小説か或は更に進んで劇の形を採らねばならぬと考へます。わたしは、其で、伝説の研究の表現形式として、小説の形を使うて見たのです。この話を読んで頂く方に願ひたいのは、わたしに、ある伝説の原始様式の語りてといふ立脚地を認めて頂くことです。

『新全集』第二十七卷 九七頁

この文章が、維新以来の性急な近代化のために本来の人間的な性格を置き去りにし、科学へと脱皮しようとして史学が陥った史料主義と実証主義への逍空の批判を示していることは明らかではあるけれども、この文章と先に触れた「芝居に出た名残星月夜」とをあわせ読むと、その批判の真意が単に史学そのものに対するものではなくその「叙述法、表現法」にあるのだということが理解できよう。ここがいかに逍空らしいところではあるが、この叙述法につ

いて、彼は二つの形態を見通している。一つは「史論」そしてもう一方にその具体化した効果、彼のことばでいえば「裏打ち」としての「小説・劇」があつて、その二つをもつて初めて歴史を表現できると考えていたのである。

このころから逍空は「萬葉びとの生活」ということをしきりに考え、大正六年の『アララギ』の講演旅行においても数回にわたつてこの題で講演し、更には同様の表題での論作をいくつか試みている。これと平行しながら逍空は「花山寺縁起」（大正五年十一月頃の執筆とされる）を書き、そして「身毒丸」（大正六年六月『みづほ』「おほやまもり序曲」）（大正六年十二月『アララギ』を發表するといつたように、「身毒丸附言」に言うところの「史論」と「史論の具体化」に見合う作品を次々と試みてゆく。これらの作品が、それぞれに手を加えられて、その後書きためられてゆく「神の嫁」とともにやがて『白鳥』に収められるという経緯を考えると、逍空が、「アララギ」に載せた「古語復活論」（大正六年二月）などに見られるような、卒業論文から引きずつた言語意識の問題を常に意識しながら、短歌では写真と必死にとり組みつつ、一方学問と創作という問題においては、自らの表現の居場所を捜そうとする営為の集成という側面を、この『白鳥』という雑誌に担わせていたということをまず指摘することができるだろう。

さて、こうした逍空の営為は、いったいどのような意識によって支えられていたのであろうか。そのことを考えるうえで注目しておかなければならない一つの用語がある。「文芸復興」という用語だ。

「文芸復興」とは、逍空がその国学に関する著作の中でしばしば使用する語彙で、彼自身の言葉を借りて言えば、世の中がいきづまった時に古代の美しい文学や芸術を見て、その生活意力に触れ、そこから新しい反省を以てそれを新しい世の生活の上に反映させ、更に伸びあがらせようとするのが文芸復興だ、ということになる。つまり、「国民生活のための文芸復興」であるというのである。このような物言いを見るだけでも、逍空のいう「文芸復興」ということばには「国学」の問題が深く絡まっていることは容易に確認できるが、その問題は、彼が幼少時からその思想の

中に育んできたもので、例えば後年「国文学以外」（昭和十一年五月）に書く次のような一節、

私の方向の厄介なのは、文学でなく、国文学でなく、更に其外の「国学」であつたことです。（中略）わからな
いながら「国学」を恃むと謂つた心持ちがあつたからではないかと思ひます。つまり国学の立つ所以の倫理観で
す。薄々之を感じて其を掴むことに、愉快らしいものを抱いて居たのだと思ひます。

『新全集』第三十三卷 二八五頁

あるいは

私の国文学生活は、未生以前既に進むべき方向が予定せられていたといふより外にありません。（『同』二八六頁）
などと言つたときのこの宿命的ともいえる国学に対する感情をあわせ考へてみると、
「文芸復興」という語彙にこめた一見鬱陶しい程の使命感と、その使命感の裏にある複雑な幼少体験、そこに育まれた自らの倫理観というものを
「新国学」という形で称揚しなければならなかつた逍空の心情をも読みとることができよう。そして『白鳥』広告に
述べる、

新なる文芸復興の機運を促さむとする新進文人らの意気に触れむと御考へ被下候方々に御購読御懇め申し上げ
候。
（『同』四二四頁）

という一節は、こうした使命感とともに、自己の国学体験を實踐する場所としての宣言でもあつたわけだ。

逍空が「史論の具体化」といい、あるいは「伝説の語り手としての立脚地」を捜し求める営為は、自らをさながら
実験装置のようにしての語りの場所を求めつづける情熱と執意であつた。それは言いかえれば近代という時代に厳し
く対峙した逍空の自我そのものが、その近代、しかも大阪における近代とを生きてゆかざるを得ない生き方にいかに
折り合いをつけるかという、自らの自己救済の執意に他ならなかつたということにもなる。そうした執意の集成とし
て『白鳥』は彼に「古代往還」という居場所を提供したはずだ。やがて『古代研究』を著し、そして『死者の書』に

至る折口古代学の一連の系譜を想起するまでもなく、古代と現代との往還運動の中に自ら身を委ねそして閉塞させることよってしかそうした「語りの立脚地」を見出すことができなかった彼の営為の、一つの重要な起発点としての意味を、この『白鳥』が担っていたということにならう。

「生き口を問ふ女」の系譜

こうした意味を持つ雑誌『白鳥』に掲載せられた論文や作品を読むとき、「生き口を問ふ女」を除いて、それぞれに後年の釋迢空（折口信夫）の学問につながるある一貫した流れを読みとることができる。

「万葉びとの生活」は『白鳥』掲載後『古代研究』に再録され、「おほやまもり」は再び改作を受けて『古代感愛集』に収録される。「神の嫁」は形を変えて『死者の書』に結実する。このように、『白鳥』掲載の主要作品のほとんどがその後の折口の学問、作品世界と密接にかかわりあって、いわゆる折口古代学の系譜に重要な位置を占める作品のいわば初発としての立場を保っているのである。

こうした傾向にまるで反目するかのようにこの「生き口を問ふ女」だけが『白鳥』の中で奇妙な独自性を主張しつづけているのである。これはいったいどう考えたらよいのであろうか。

「生き口を問ふ女」がいわゆる怪談咄でないことは、既に続編とみられる原稿を掲げて述べておいた。

この小説を考えるうえで着目したいのがその舞台設定と人物設定である。うなぎのかば焼屋川卯之の主卯之松が困うおちかの妾宅は、全集版に妾宅から鉄眼寺を経て千日前へにはかを見にゆくと設定されていることから考えて、木津の周辺に想定することができる。

木津といえは折口信夫の生家があったところで、加藤守雄の考証（『折口信夫伝』昭和五四年九月・角川書店）によると当時その周辺は魚介類や青物などを扱う市場街であったようである。また周辺には被差別部落が存在し、医師で

あつた祖父造酒之介はそうした人々を別けへだてなく診察したという。彼はそうした環境に生まれ育ち、そこから小学校、中学校と通うことになるが、その頃のことについて昭和五年九月に刊行された『現代短歌全集』（第十三巻 昭和五年九月 改造社）及び『短歌文学全集』（釋迢空篇 昭和十二年一月 第一書房）の年譜に自ら筆をとつて次のように書いている。（一）内は前者の記述。

明治二十九年（十歳）

大阪市南区竹屋町、育英高等小学校に（区外生として）入学。（通学の道程一里。途中千日前、道頓堀、及び所謂南地五花街を経る。）

明治三十二年（十三歳）

高等小学校三年終了。（南区上本町八丁目）天王寺中学校に入学。当時同校教諭三矢重松先生に口頭試問を受けた記憶が深い。（通学距離二十町余。道江戸時代以来の貧窮街。長町裏・家隆塚と伝へる夕陽ヶ丘、勝曼院、巫子町を通る）

年譜にわざわざこのような通学の道程を書き加える程、数年間通い続けた道々に彼が得た印象の強さがうかがえる。「生き口を問ふ女」の舞台はこの折口家周辺、特に上町台地周辺に設定されているわけで、全編に横溢する明るさの中にただよう暗鬱とした雰囲気は、彼が当時感得した内的体験そのものと考えても差支えないだろう。

次いで人物設定である。⁽¹⁾先にも述べたが、主人公の卯之松は極めて無口で気むずかしい人物として描かれている。それでいて若い妾や正妻の一挙手一投足に心を振りまわされる小心者としての性格が付与されている。そしていかにも田舎者が通人を装っているといった風情である。更には四人の子持ちという事実。

父秀太郎という人は、彼のことをば借りて言えば「苦虫をかみつぶした様など言はれる」気むずかしい人であり、しかしそうでありながら「家に来て十五、六年というもの、結婚前から持ちこした遊蕩生活を毫もゆるめなかつた人」であつたらしい。折口自身、父のそうした性癖に悩み、また自らの出生の疑惑がそれと絡まって苦悩に満ちた自我形

成期をすこす。先に触れた「国学」を恃む倫理観というものが、こうした事情から育まれたことは明らかだが、父秀太郎の死、そして二度にわたる自殺未遂という事件を経て、こうした苦悩の吐露という形で生みだされたのが最初期の自伝的小説「口ぶえ」ということになる。

東郷克美は、こうした彼の幼年期の家庭環境について、「不十分な父親と支配的な母親との組み合わせが同性愛者の家庭環境の際立った特徴である」とするD・J・ウェストの分析を例にあげて、「口ぶえ」に代表される初期の作品に横溢するナルシズム、同性愛的傾向を指摘している（大正三年の折口信夫『折口博士記念古代研究所紀要』第四輯昭和五十九年十一月）。また川村二郎も「身毒丸」に同様の性愛的傾向を認めている（『銀河と地獄』昭和四十八年 講談社）。「口ぶえ」から「身毒丸」へとつながるこれらの作品の内実については東郷や川村の論を参照していただく他ないが、端的にいってしまえば父親に対する同一視障害、異性に対する異化障害ということになるか。大正五年の伊勢清志とのいきさつを想起するまでもなく、当時の折口の心と作品に自己の生い立ちと特異な性癖、そして、「私」を持つてゐた執意、静かに此母からあとを消す為に家以後あらせぬ以外にない……（わが子・わが母）という不可解な述懐を読んでもわかるように、自らの血の問題と未生以前への関心が抜き難く沈潜していたことだけは事実である。『生き口を問ふ女』にも、その舞台設定、人物設定から考えて、そうした心の内実が濃密に絡まっているように思えてならない。

もう一つ手がかりがある。旧全集で「生き口を問ふ女」の次に収録されている「家へ来る女」という作品で、昭和十年四月に『遠つびと』に発表されたものである。これも何やらわけのわからぬ作品で、「小説にあらず」という副題が付いているが、幼少時に折口家へ出入りしていた芸者上りの「寅吉」という女性について書こうとしたその前口上のようなものらしい。

それによると、「虚子さんが、写生文を小説に延長して行つた頃の事である。（中略）此こそ、写生文小説より外に、

ゆき方がないと思つた物語がある。其を今になつて、その形で行つて見ようと言ふのだから……」ところある。しかし結局この時も「寅吉」は書かれずに終る。三年後に書いた「するめが三匹」〔茶栗柿譜〕『三田文学』第十三卷八号 昭和十三年八月『新全集』第三十三卷 二九九頁）という小文の中で「この女のことは、幾度か書きかけて見たけれど、どうも私には書けない」と述懐しつつ「寅吉」について触れていることを考えると、大正以来迢空は「寅吉」を書こうとする意志を営々と持ちつづけながら結局書けなかつたということになる。この「書けない」という事実は折口の出生と血の問題と絡んで極めて重要な意味を持つように思うが、ここでは述べることを保留しておく。

この「寅吉」については、大正年間に書かれたと見られる未完の一編が、これもやはり折口博士記念古代研究所の資料の中から発見されている。⁽²⁾（次節写真6）また、「捨二郎」という放蕩のあげく熊野に隠棲してしまつた商家の跡取り息子主人公とした未完の断片が同時に発見されている。これらも明らかに迢空が自らの周辺、それも未生以前に題材を求めた自伝的な色あいを持った作品とすることができよう。

こうした作品をあわせ読むと、「生き口を問ふ女」という小説が、作者のどのような内実を担つて生まれてきた作品であるかがおおよそ理解できる。大阪に対する後年の迢空の「大阪を思ふ心が深くありながら（中略）私自身は、厭うてゐるとも、必ずしも考えてゐない。併し、この故郷に対する私の底意は、町びと達には訣らない」（『自歌自註』）という述懐を読むとき、自己の体内に流れる秀太郎の息子としてそして大阪人としての血、更にもその特異な性癖につながる彼の大阪に対する屈折した感情を読みとることができらう。自己の居場所を求めて苦悩していた大正年間の迢空が、こうした大阪を舞台とした小説、しかも自伝的小説を書きながら、大阪と自己との折り合いをなんとかしようとしていた姿をそこに見出すことが可能ではないだろうか。

言い換えれば、自己を古代との往還の中に閉じようとする意図と、それとはうらはらに自己を解放しようとする意図、つまり「口ぶえ」から「身毒丸」を経て「神の嫁」「死者の書」へと至る古代往還の中において自らを「語ろう」

とする小説世界の系譜とはまた違った、「口ぶえ」から始発する自伝的小説の世界への構想を遙空は二つながら内包させていた。しかし、こうした遙空の自己解放への試みはすべて達成されずに終った。その未達成は、後年の種々の事件を想起するまでもなく、彼の心の内奥に同性、異性に対する複雑な陰影を引きずらせることにはなつたけれども、「身毒丸」や「死者の書」といった小説の系譜に幽暗なナルシズムと、そして感能的要素とを深く沈潜させた形で湛えさせることになつた。

われ今は六十^{ムッヂ}を過ぎぬ。大阪に還り老いむと思ふ心あり（『倭をぐな』）

大阪の風土、そしてそこに生れ育つた自らの大阪人の心というものに、未生以前への執意がからまつてどうとう折り合いをつけることができずに、古代往還の中に一人「物語」をせずにはいられなかつた遙空の、これは晩年のつぶやきである。

注

(1) この卯之松のモデルが「口ぶえ」に登場する鰻屋の主人仁三郎その人であることは明らかであるが、しかし問題は彼に付与された性格である。

(2) 「生き口を問ふ女」の続編とみられる十枚の草稿は、そのうち五枚が『土俗と伝説』用の原稿用紙に書かれている。また同時に見つかった「寅吉」もこの用紙に書かれており、この事実だけでは確定的なことは言えないけれども、この二つの原稿が「土俗と伝説」が刊行された大正七年から『白鳥』が出る大正十一年頃にかけて書かれたものと見て差し支えないと考える。

第二節 自伝的小説の系譜

「生き口を問ふ女」以前

「生き口を問ふ女」に濃密に描きこまれていた「大阪」「折口家」というキーワードは、小説「寅吉」、そして彦次郎のことを書いた「小説（断片）」にもあてはまる。

「寅吉」は、「生き口を問ふ女」（続篇）と同じ「土俗と傳説原稿紙」に書かれている。原稿は二十八枚、二十九枚日以降は散逸している。十枚目迄濃紺のインク、十一枚目からは紫のインクを使用し、同色のインクでそれぞれの原稿にナンバリングがされている。このインクは「生き口を問ふ女」（続稿）に使用されているものと同色同質のもので、用箋とインクを見る限りにおいては、「生き口を問ふ女」（続稿）とほぼ同時期に書かれたものではないかと推測される。

「寅吉」とは、大阪木津の商家であった折口家に、折口が幼少の頃、恐らく十才頃迄出入りしていた太悼芸者の名である。この芸者については、前節で引いたように後年（昭和十三年）『三田文学』に寄せた一文「茶栗柿譜」〔『新全集』三十三巻〕の中で割合詳しく述べていて、その内容は小説「寅吉」の内容とほぼ一致する。したがって内容的に見て「寅吉」は伝記的に特に真新しいものを提供するものではないが、しかし問題は別のところにあるようだ。「茶栗柿譜」の冒頭にある

この女のごとは、幾度か書きかけてみたけれど、どうも私には書けない。

という一文が示すとおり、折口がこの「寅吉」という芸者について執拗に書く意志を持ちながら、結局書くことができなかったという点である。「家へ来る女」も、この寅吉を主材にした小説になるはずのものだった。連載する予定

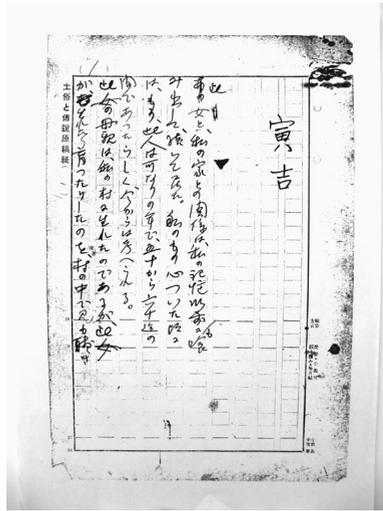


写真6 「寅吉」自筆原稿冒頭部

で昭和十年『遠つびと』に発表されたが、寅吉のことに若干触れた程度で結局「この女のことを、今すこし書きたい」という一文を最後に中断している。しかしこの前口上はとても奇妙な文章である。少し長いが一部引用しておこう。

さうして此こそ、写生文小説より外に、ゆき方がないと
思つた物語がある。其を今になつて、その形で行つて見
ようと云ふのだから、嗤笑を予期せないでは居られない。
だが、今書いてゐる形は、小説ではないつもりである。

いつか小人数コニズのあひだの茶話会にでも、一度は咄して、
さつぱりすまして了ひたい気がするのだ。咄して見るに
も及ばない気もするが、どうも、私の胸に時々浮べる程度に残しておくより、もつと適切に、うけ容れる人が、
世間にはありさうな気がする。多少、形に歪ヒズみが出来ても、さうした人の口かけられる機会が出来れば、何だ
か心残りも、をかしいがーらしいものもなくさうな気がする。『新全集』第二十四巻 一二九頁)

奥歯にものはさまつたような、なんだかよくわからない文章なのだが、「小説にあらず」という副題とともに折口
の主材と様式に対する執拗な屈託クツトクが感じられる。いったい「寅吉」という老女を主材に、折口は何をどんな形で描こ
うとしていたのだろうか。

やはりここに「大阪」と「折口家」というキーワードが顔を見せる。折口の未生以前に対する関心というものは、
当初は彼の出生への不安からはじまるが、それはやがて彼の幼青年期を覆うネガティブな心のありようと共に、彼の
作品世界、学問世界に大きな影響を与えているということとはよく指摘されるところである。そしてそれは恐らく生涯

にわたって、彼の心に複雑な陰影を与えているだろうことは、その視線が多く「異なるもの」「疎外されるもの」によつてもたらされる文学に偏つて注がれていることからわかる。言つてみれば、彼のすべての学問、作品に、この「未生以前」への屈託がおどんでいたと言つたら言いすぎであろうか。「寅吉」とは折口にとつてどういふ問題だったのか今知るべくもないが、彼の未生以前の問題と絡んでそう簡単に処理することはできないだろう。

こうしたことは、捨二郎という男を題材にした「創作(断片)」にも言える。この小説は、大阪の商家に生まれながら道楽の末に家を勘当されて熊野にこもつた「捨二郎」という男について書いている。彼の言伝てを持つて生家へやつて来た六十六部と捨二郎の母との会話を通して、この商家の家庭の様子や捨二郎の過去の行状などが語られる。発見された原稿は二十枚。一枚目が散逸している為、表題は不明である。また二十枚目以降も失われている。赤い野の入った相馬屋製廿字十行の原稿用紙に、十七字十行で書かれている。インクは緑。著者の推敲が黒インク(八枚目まで)と赤インク(九枚目以降)で施されている。用紙、インクともかなり劣化している。

ここに登場する「捨二郎」とは、折口信夫の祖父である彦七とその先妻との間に生まれ、学問を好んで家業を厭い、放蕩生活の末に家を追われ、熊野で寺小屋の師匠として寂しい生涯を終えたという「彦次郎」その人である。

彦次郎については、『古代研究』の「追ひ書き」の中で、かなり詳しく述べている。その中で折口は、自らの半生を彦次郎の生涯に重ねあわせている。大阪商人の家に生まれた者にとつては、学問や芸事を趣味として持つのであればよいが、それを暮しのたつきにするのは遊民であるという意識が根強かつた。兄進の影響で幼い頃から文学の素養を育み育つた折口も、京都大学医科へ進学させて医者として家業を継がそうとした家人、特に母このの期待を裏切つて上京、明治三十八年九月國學院大學に入学する。その時の心境を彼はこう歌っている。

武蔵野は ゆき行く道のはてもなし。かへれと言へど、遠く来にけり

この武蔵野の道の果てには、もしかしたらあの「彦次郎さん」の生涯が横たわっているかもしれないと思つたこと

であろう。このつぶやきは切実に心に追って来る。

國學院を卒業後、大阪に一度は戻った折口であったが、やがて「ひとりして」「口ぶえ」を友人達にのこして大阪と決別し、再び上京する。その後は厳しい困窮生活が続き、借材をすべて兄が肩がわりするという約束で再び大阪へ戻らねばならぬところまで追いつめられていた。大正五年頃のことである。

上京から『古代研究』刊行に至る二十五年間、折口信夫は全く「彦次郎」そのものであったと言つてよい。

文学や学問を暮しのたつきとする遊民の生活が、保証せられる様になつた世間を、私は人一倍、身に沁みて感じてゐる。彦次郎さんよりも、もっと役立たずの私であることは、よく知つてゐる。だから私は、学者であり、私学の先生である事に、毫も誇りを感じない。そんな氣になつてゐるには、あやにくに、まだ古い町人の血が、を、どんでゐる。祖父も、曾祖父も、其以前の祖たちも、苦しんで生きた。もつとよい生活を、謙遜しながら送つてゐた、と思ふと、先輩や友人の様に、気軽に、学究風の体面を整へる氣になれない。これは、人を喘ふのでも、自ら尊しとするのでもない。私の心に寓つた、彦次郎さんらのため息が、そうさせるのである。

『新全集』第三卷 四六二―三頁

『古代研究』『追ひ書き』の執拗なまでの饒舌は、逆に折口のことばを借りた、彦次郎さん自身の弁明であつたかも知れない。

「生き口を問ふ女」も「寅吉」も「捨二郎」も、大阪を舞台に、折口家にかかわる人々を主材にして、私小説風の作品に仕上げようとしている。いずれも未完の作品ではあるが、大阪あるいは家に対する折口の愛着と屈託とが示されていて興味深い。三篇とも、その執筆時期を特定する積極的証拠はないが、恐らく大正半ばから『白鳥』時代頃迄のものと考えられ、折口が学問的にも金銭的にも最も苦悩していた頃このような作品を書いていたことは注目されなければならぬだろう。大阪のねばっこい会話を駆使したこれらの作品がもし完成しておれば、「死者の書」や「神



写真8 「夜風」(一) 自筆原稿冒頭部

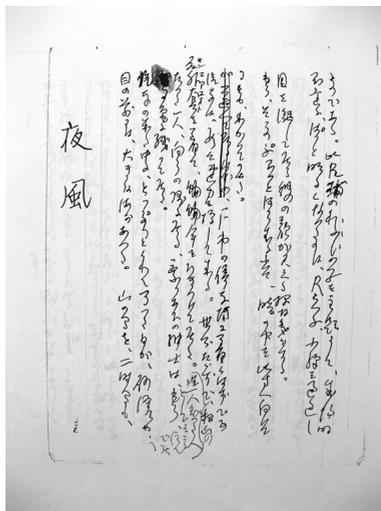


写真7 「夜風」(二) 自筆原稿冒頭部

の嫁」とはまた違った作品群が形成されていたに違いない。

さらにこの系譜に位置づけられる作品に「夜風」という小説がある。十七行の横書き用罫線の入った縦十六センチ横二〇センチの横長ノートを縦に使用して書かれている。ノートは裏表を使用、一ページ目より「夜風」と題して書き始めたものを二ページ目で中断(「夜風」(二))、三ページ目から改めて「夜風」と題して書き出し、二十二ページ目迄書きつづっている(「夜風」(三))。(一)と(二)はペンの種類、文字の様子がほとんど同じであることから、続けて一気に書かれたものらしい。執筆時期を特定できる積極的な証拠は、作品自体の中には確認できない。

(一)に登場するI、(二)では靱山三郎と書き直されているが、このIが伊勢清志であることは明らかである。この書き直しには、折口の伊勢に対する相当の屈託が感じられ、発表を意図して書き出したものとも考えられる。

伊勢清志は、衆知の如く鈴木金太郎、荻原雄祐などとともに大阪今宮中学校時代の折口の教え子の一人である。後に「安乗帖」「異郷意識の進展」などに結実する十三日間に渉る志摩・熊野への徒歩旅行(明治四十五年八月)にも同行する

などして、折口が最も期待をかけていた教え子であった。折口が大阪をあとに上京すると、鈴木らと一緒にすぐ後を追うようにして上京、本郷の昌平館に同居する。「自歌自註」をはじめとして後年あらゆるところで述懐しているように、彼に対する折口の愛情は並たいていのものではなかった。

上京後、定職もなく困窮の極みにあった折口は、大正三年（一九一四）四月から、國學院教授金澤庄三郎が編集を担当していた「中等國語讀本」の編纂を手伝うことになるが、過労による神経衰弱にかかり、翌年一月その仕事を辞退する。以後はいよいよ困窮の度を強めることになるが、そうした困窮ぶりとは裏腹に、生徒達、特に伊勢に対する愛情は深まっていったようで、大正四年から五年にかけて折口が生涯で唯一度した「めた日記」〔新全集〕第三十四卷）には彼に対する思いがいたるところに散見される。この時を除いて生涯発表を意図しない日記を書くことの無かった折口が、このように日記を書こうとした心境が窺われる。折口信夫三十歳。

伊勢清志は、その後大正五年夏、鹿兒島造士館高校への入学を期に折口信夫の元を去る。それから三年、次第に伊勢からの便りが間遠になってゆくことに悲しみをこらえていた折口であったが、鹿兒島での伊勢の恋愛を知ると、大正八年二月、取るものもとりにあえず鹿兒島へと発つ。まず旅費を工面するために会津へと向かい、その教え子から借りた金を持って鹿兒島へとつてかえした。

「夜風」は、この最初の鹿兒島行の様子を、東京での伊勢との思い出をはさみながら書きすすめている。清志に会うまでの心の動きが素直に吐露されていて、彼の思いつめた様子が手にとるようにわかる。折口は伊勢と芸者との仲を清算させるために鹿兒島へやって来たようであるが、しかし伊勢に会うには会ったが、彼の心を翻すことはできなかった。折口は、四ヶ月後の大正八年七月再び九州へと向かうが、この時は伊勢に会うことすら出来ずに東京へと戻らなければならなかった。「自歌自註」には福岡の大学に入学した伊勢を迎える為、とこの時の九州行きの理由を述懐しているが、実際は伊勢に会うことが主たる目的だったのではないか。後年加藤守雄の場合にもあったように、愛

する者に対する執着は誰よりも激しい折口であつてみれば、拒否された時の心の苦しみは想像に余りある。

この折の思いは即座に短歌作品となつて結実し、同年四月に「日向大隅」(八首)、五月に「蒜の葉」(八首)、六月と九月と十月に「福岡」(二三首)、九月に「大隅の國」(八首)、十一月に「寄物陳思」(七首)というように立てつづけに「アララギ」に発表される。これらの作品は、その後改作・再構成を受けて『海やまのあひだ』に「蒜の葉」(三八首)として収められることになるが、その改作や構成のしかたを見ると二回に渉る九州行を一回に再構築しようとする心の動きが読みとれて面白い。

小説である「夜風」においても、例えば(一)において「待っているはずのぷらつとほうむ」とあるところを「そのぷらつとほうむに出て(中略)目を凝して居る彼の顔が見える様な気がする」と直している。これは(一)は伊勢にまず直接会つて話をするという展開を予想させる話の筋が(二)では伊勢に覚られずに恐らく伊勢が交際している件くだんの芸者にまず会つて話をするという筋立てに変えられたための書き直しと思われ、鹿児島行そのものをフィクション化して書こうとする意図がこの改稿には窺える。

いずれにせよ、二回に渉る九州行での不覚は、折口の心にかかなりの屈託を残こしたようだ。連作「寄物陳思」の中に次のような歌がある。

何ナニごとも、完マタにをはりぬ。息ハルづきて 全くマタ霽ハルけむ心ココロともがな

「口ぶえ」一編を残こして大阪を去つたあの若い日同様、癒しがたい傷を心に持ちながら、一編の作品を書いて自らの心を清算しようとしたのだろうか。

以上紹介した作品群の位相を考えていくと、「口ぶえ」から初発し、「生き口を問ふ女」へ至るいわば私小説風の作品の流れを認める事が出来る。それは、大方自己の周囲に取材し、あるいは未生以前からの自己のアイデンティティ

を確認するような形で描かれていった。

しかしその一方で、「生き口を問ふ女」と同じ『白鳥』に掲載された「神の嫁」という位相の異なった作品も、同時に執筆していたのである。

第三節 「生き口を問ふ女」の続稿

本小説の本文評価過程

折口信夫の比較的初期の散文創作作品（以下小説作品）としては、『不二新聞』に大正三年三月二十四日から四月十九日にかけて二十五回にわたって連載された「口ぶえ」、國學院大學同窓会誌『みずほ』第八号に発表された「身毒丸」（大正六年六月）、雑誌『白鳥』に創刊号から三回にわたって連載された「神の嫁」（大正十一年一・二・五月）同じく『白鳥』第一巻第三号・四号に連載された「生き口を問ふ女」（大正十一年五月・七月）の四編が知られる。いずれも「小説」として『旧全集』第二十四巻に収録された。

しかしながら、折口博士記念古代研究所に所蔵される資料の調査解説を行う過程で、これらの四編の周辺に、小説作品の未定稿、続稿と思われる多くの資料が存在することが明らかになった。これらの資料評価と原稿判読を経て「初期小説作品」の自筆原稿と特定されたのが、「生き口を問ふ女」続稿、「寅吉」「夜風」「捨二郎」の四編で、これらの未定稿については『折口博士記念古代研究所紀要』別冊資料集（以下『資料集』）第一輯、第二輯に二回に分けて初めて翻刻、その後新編集決定版『折口信夫全集』第二十七巻に先の四編の作品に加えて「小説」として収録した経緯がある。

しかし、自筆原稿については判読に多くの労力と技術とを要することもあって、『新全集』編纂と同時進行の形で資料の判読を行い、加えて資料評価を行う時間を得ることが困難になり、多くの未定稿断片、手帳類が資料評価、判読が行われないまま残された。

その後、『新全集』の刊行がひととおり終えた今、筆者の手元に残された多くの手帳や原稿断片のコピーを相手に、遅滞とした歩みではあるが、資料評価と解説を続けた結果、幾つかの新たな成果があった。しかし、先述した作品の未定稿や続編が、原稿断片などの中から発見された経緯を考えると、資料研究の立場から言えば折口信夫の「初期小説作品」の全容や内実はまだ十分に明らかになっていない。加えて折口の「小説作品」のテクストとしての評価、あるいは同時代的評価についても十分に尽くされているとはいいたいものがある。

これらの小説作品をどのように評価するのか。まずは作品群の全体像を明らかにすることから始めなければならぬが、それを経たうえて各作品のテクスト評価を綿密に行うこと、それが今眼前に与えられた重要な課題である。

第一節で述べたように「生き口を問ふ女」については、その続編が見つかるまではいわゆる怪談話として受容されてきた。種村季弘が『日本怪談話』にこの一編を載せた際、その解説の中で、「六条の御息所の再来を思わせる生霊の口寄せに操り人形のように振り回される男女の生態を大阪のねばっこい風俗を背景に描いて、文字通り鬼気迫る」と書いた。ある意味で、先述したように種村のこの読み方は正しい。のちに発見された続編を見なければ、明らかにこの作品は、鬼気迫る怪談話としての構造と仕掛けを確かに有しているといえるからである。この一編がなぜこのような「怪談話」として読まれることになったか。種村もその辺りは十分にこの作品の細部まで読み込んで「歌舞伎の極彩色看板絵さながらに丹念に描きこ」んだこの一編の作品のありようを見抜いている。

しかし、その続編とみられる草稿が新たに発見されるに至って、本作品は、種村の読むような性格を持つ作品ではないことはほぼ明らかになった。ではいったいどのような作品であるのか。それを考える前に、既に見出されたテクストを詳細に分析することから始める必要がある。

分析をする前に、当然の手順としてこれまでの本文評価の過程を記して置かなければならない。

この小説は、大正十年一月より『白鳥』第三号、四号に続けて発表されたものが基本になる。

『白鳥』第四号掲載分の末尾に「つづく」とあって作品の継続が折口によって示唆されていたが、『白鳥』の終刊によってそれは果たされずに終わった。その後昭和三十年五月に刊行された旧全集は、『白鳥』掲載分を本文としてそのまま使用したが、末尾の「つづく」が「未完」に直された。その後長くこの旧全集掲載本文が白鳥の本文のすべてだと思われて来たが、第一節で述べたように新全集編纂の資料整理段階で十枚の続稿が発見されたことによって、この十枚分を加えた本文が『新全集』の本文として採用された。便宜的にこの十枚を「生き口を問ふ女」続稿Aとしておきたい。

続稿Aは、折口信夫が残した大量の原稿の書きさし、書き損じの中から見つかった一枚の原稿をもとに、用紙の種類などを参考にして丹念に拾い集め復元したものである。断片であるから、原稿として不完全なものであるが、登場人物、話の筋道からは見て「生き口を問ふ女」を書き継いだものと断定してよい。

十枚のうち五枚は用箋の左肩に「土俗と伝説原稿紙」とうぐいす色で印刷され同色の罫の入った廿八字十行の用紙を使用、そこに廿字十行で書いている。インクは紫色を使用（a箋）。残りの五枚は、えんじ色の罫の入った十五字十二行の用箋に黒色のインクを使用し、やはり廿字までのます目を埋めている（b箋）。内容から、a箋とb箋とはひとつづきのものであると考えられ、b箋はその中間部が一部散逸している。

a箋b箋とも『白鳥』の一行字数にあわせて一行廿字に意識的に整えようとしている意図が見られ、また折口の原稿の中では比較的読みやすく書かれていることから、『白鳥』の続号の為に用意されたものと考えてよいだろう。

内容を見ると、既発表の「生き口を問ふ女」では登場して来なかった正妻お留が、力強い商家のおかみさながらの性格を付与されて登場して来る。既発表分にお留が登場して来ないことが、この作品をより怪談咄らしくし、生き霊のリアリティを増す効果があったのだが、お留は生き霊ならぬ「生の儘」で、「まるで火を吹きながら」登場して来るのである。そしてこれもやはり気の強そうなおちかちと大変な修羅場を演じ、この二人の気の強い女に囲まれておる

おろする卯之松がことさらに強調される。泉鏡花の世界を茶化しているとまで思いたくなる程のにくりしい位の場面転換である。その後の展開は不明だが、この一編が怪談咄としてではなく、全く違った位相の作品であることは間違いない。主人公卯之松のモデルは「口ぶえ」に登場する鰻屋の仁二郎その人であって、折口の幼時に強い印象を与えた実在の人物らしいから、この作品は「口ぶえ」と一つながりの位相を持った作品として位置づけられるだろうし、また、自らの未生以前への関心と相俟った折口家そのもの、あるいはそこに集まる大阪人に対しての深い愛着と屈託とに裏打ちされた作品だと言えるだろう。

この十枚の原稿は、『折口博士記念古代研究所資料集第一冊』に収録されたのち新編集決定版『折口信夫全集』（以後『新全集』）に「生き口を問ふ女」（続稿）として収録された

欠落を補う続稿

その後さらなる資料の解読を進めた結果、新たにこの続稿Aの欠落部分を補う原稿が発見された。

新資料は「続稿」の自筆資料と同じく「土俗と伝説原稿用紙」と左肩に印刷された二八×一〇行の用紙の上部二〇×一〇行分に書かれているものが六枚（以下続稿B）、二五×一二行に書かれているものが一枚（以下続稿C）の合計七枚である。ペンの色使いは続稿Aと同様のものと見られる。

原稿そのものは幾分の加筆訂正の痕跡は見られるものの、これも「続稿A」と同様一気に書かれたものと思われる、折口信夫の自筆資料としては比較的読みやすいものである。（写真9〜14参照）

内容的には『新全集』第二十七巻の「続稿A」の直前に位置づけられるもので、本篇と続編とを架橋する原稿となる。

続稿Bは『新全集』一三八頁四・五行目の

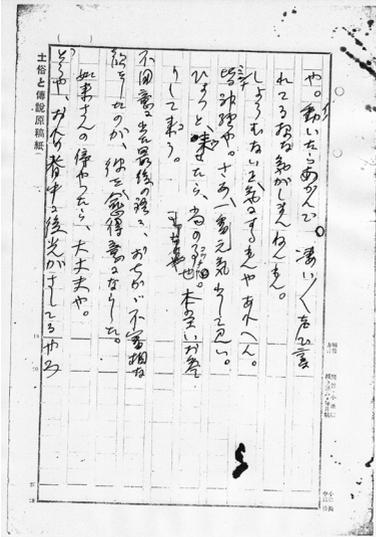


写真10

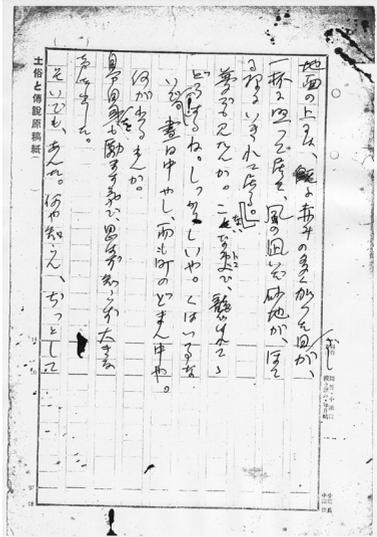


写真9

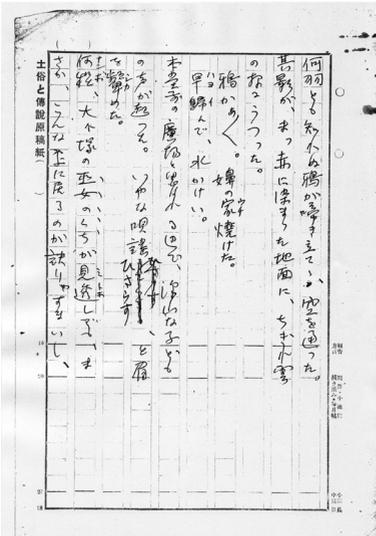


写真12

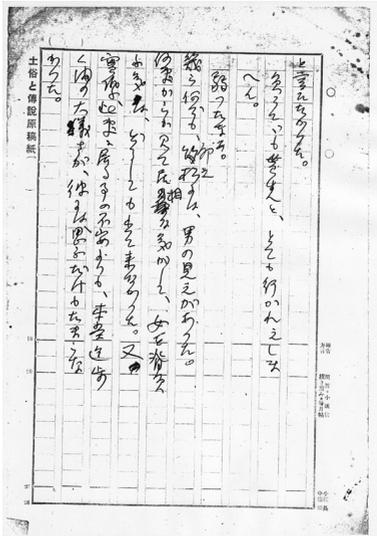


写真11

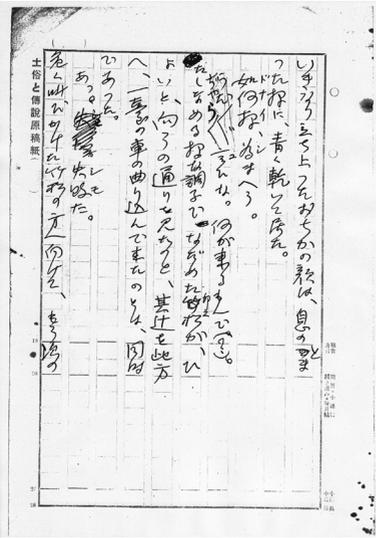


写真14

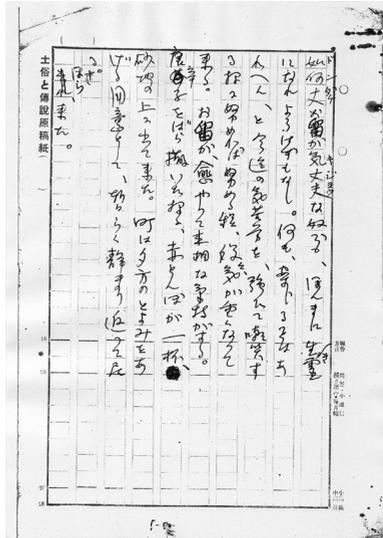


写真13



写真15

写真13-15 新たに見つかった「生き口を問ふ女」自筆原稿

まあよかつた。聞えたら、又怖がつたり、膨れたりしられる処やつた、とそ、こ、こ、ろ、でもない、かふ言ふ方面にも、心配せなければならなかつた。(未完)

の直後にあるべきもので、最後の部分

卯之(竹)松が、ひよいと、向うの通りを見たのと、其辻を此方へ、一台の車の曲り込んで来たのとは、同時であつた。

あつ。失敗た。

危く叫びかけた竹松の方へ向けて、もう次の

という部分は、おなじく『新全集』二五五頁の本文最初の行

瞬間には、毛布を跳ねのけて、大柄な女が車を飛びおりて居た。

の直前に位置づけられるものである。

これによって、一部欠落していた「続稿」の原稿が補われたことになる。すなわち大正十一年五月・七月の『白鳥』初出本文(即ち本編)と「続稿」とが繋がった形で読めるようになった。

続稿Cは、「続稿」内で、さらに欠落していた箇所の一部である。(写真15)『新全集』の頁で二五七頁五行目

お留めに言ひながら、実は女に聞かせる積りで、主人らしい威厳で叱りつけた気だが、すぐに、我ながら生ぬるい感じゝか残らない様に思はれた。

の直前に入ると思われる。冒頭部が二五七頁五行目の「如何様きれ」に続かないことから、続稿Cの前にさらに新たな本文があることが想定されるが、それについてはまだ発見されていない。

以下、今回確認された新資料を全文翻刻し紹介しておく。

地面の上には、既に赤みの多く加つた日ざしが、一杯に照つて居て、風の凪いだ砂地が、ほてる様にいきれて居る。』

夢でも見たんか。こないな処トコロで、襲はれてどうするね。しつかりしいや。くはい事ないで（！）。昼日中やし、
而も町のどまん中や。何が出るもんか。

自分自身をも励ます気で、思はず知らず大きな声を出した。

そいでも、あんた。何や知らん、ちつとしてや。動いたらあかんで。凄い／＼声で言はれてる様な気がしまん
ねんもん。

しようむない事、気にするもんやあれへん。皆神経ミンナや。さあ、一番元氣出して見い。ひよつと、来クせたら、尚
の事コト也。本堂いお参りして来う。

不用意に出た最後の語に、おちかゞ不審相な顔をしたのが、彼を、愈得意にならした。

如来さんの傍やつたら、大丈夫や。

どうや、おれの背中に後光がさしてるやろ
と言ひたかつた。

負うてども貰はんと、とても行かれえしまへん。

弱つたなあ。

幾ら何でも、卯之（竹）松には、男の見えがあつた。何処からか見て居相な気がして、女を背負ふ気は、どうし
ても出て来なかつた。又實際、此処に居る事の不安よりも、本堂迄歩く間の大儀さが、彼には、思ふだけもたま
らなかつた。

何羽とも知れぬ鴉が啼き立て、空を通つた。其影が、まっ赤に染まった地面に、ちぎれ雲の様にうつつた。

鴉がかあ〜。嬢の家焼けた。

早帰んで、水かけい。

本堂前の広場と思はれる辺りで、沢山な子どもの声が起つた。いやな唄謡ひさらす（うてくれる）、と眉を顰めた。何程、大个塚の巫女のくちが見透しでも、まさか、こんな処に居るのが訣りやすまいし、如何丈お留が氣丈夫な奴でも、ほんまに生き靈になれようはずもなし。何も、案じる事はあれへん、と今迄の気苦労を、強ひて嘲笑する様に努めれば努める程、段々、気が重くなつて来る。お留が、愈やつて来相な氣持がする。唐辛子をばら撒いた様に、赤とんぼが一杯、砂地の上に出て来た。町は夕方のとよみをあげる用意として、暫く静まり返つて居る。

ほら（それ）来た。

いきなり立ち上がったおちかの顔は、息のとまつた様に、青く乾いて居た。

如何様、為まへう。

ぢやら〜（うだ〜）言ひな。何が来るもんで（？）。

たしなめる様な調子でなだめた卯之（竹）松が、ひよいと、向うの通りを見たのと、其辻を此方へ、一台の車の曲り込んで来たのとは、同時であつた。

あつ。失敗た。

危く叫びかけた竹松の方へ向けて、もう次の

（ここから『新全集』の続稿冒頭部分、次の一行に続く）

（瞬間には、毛布を跳ねのけて大柄な女が車を飛び降りて居た。）

おまはんもおまはんや。妾が、どうやら痔らしい（らしい）、と今朝も言うたら、大阪病院い難渋言うていてせ。

れうたらで入院せい言うといて、自分メは思ふ存分な事して、えゝのんか。こんなきじよおに鼻の下長うしてゝ、青メびり《鰻の一種》の大きいやつが、ゆんべのうちに、池で八疋も死アガつたんも知らんとな（！）。・・・竹の筒《鰻のすみか》ぐらゐ、たまに易へたつたら、どうや。

目頭には、こぼれさうに涙がたまつてゐる。

この春易へた許トコやないけえ。まだ大丈夫やはい。ぐづ／＼ぬかしてる間に、早ハいで、辰に言ひつけて、池の水浚ひだしくされ（へさせや）。

以上のような経緯を経て、「生き口を問ふ女」の新たな本文が確定した。

このように、未整理断片の中から、新たな資料が出現することによって、折口によって捨てられた自伝的小説、大阪を舞台にした私小説の系譜がさらに明らかに becoming 来るに違いない。

第四節 「生き口を問ふ女」と「神の嫁」

視線の横溢

「生き口を問ふ女」は、主人公卯之松とおちかのダイアログと地の文を基本にして展開する。地の文は常に卯之松の視線を追うようにして記述されている。冒頭から読み手は、卯之松の心意を母体に発せられる卯之松の視線に付き合わされる。

思ひ切り目を睜いて、ちつとものを見据えようとする、次の瞬間には、たまらなく睘が重たくなつて、目の前に居るおちかの顔が、いくつにもぼやけてみえたりした。

卯之松はしきりに視線をおちかに注いでいる。語り手はその卯之松の心理、つまりおちかの一挙手一投足を仔細に「見よう」とする卯之松の心の動きに従つて語り続ける。

この作品全体に横溢するものは、「見る」行為である。卯之松、おちかの二人の視線は作品世界全体を飛び交っている。

思いきり大きく目を睜いて、ちつと物を見据えようとする『新全集』P一七五

まっさ青になつた唇をびく／＼させて、目を据ゑて居た。(P二〇一～二)

卯之松は薄暗い隅々に来て、耳立てゝ居る影の姿を想像した。ひよつと、目が其姿に行きあふことを恐れて、視線を反すまいとした。(P二二一～二六七)

おちかはこのい物を見る様な風で、奥の三畳を覗き込んで、おづ／＼這入つて行つた。(P 一二三L八)

卯之松の目は、こんもり持ちあがつた薄羽織の下から透いて見える光る帯を、ぢつと睨み据えてあるいた。(P 一二四L一七)

前を行く女の羽織の背中を睨みつけて歩いた。(P 一二五L一二)

時に二人は互いに視線を求め、交し合う。

男を痛めつける様な、さうして蕩す様な流し目をよこした。卯之松には、其の白みの多い潤んだ長い目が、すんなりと胸に來たのである。(P 一二七L一五〜六)

よう見とうくんは、わての背中を。(P 一二九L一二)

あなたの顔も、青なつてまんなあ。(P 一三四L一二)

様々なる視線は主人公二人から発せられるものだけではない。例えば

見せつけてやりたい様な気が：起つた。(P 一二三L一二)

自分の身なりが、如何にも其にそぐはぬ者であると気がついた。(P 一二三L一三〜四)

どうもお伴を連れた、と見える様にと言ふ考へから……(P 一二四L一五)

何処からか見て居相な気がして、女を背負ふ気は、どうしても出て来なかつた。(続稿B)

二人は、誰かの視線にさらされることを期待し、それを常に意識している。その視線は時に米屋の小僧であり、また不特定多数のこの作品世界に登場する者たちによつて発せられている。

それぞれに「何かを見」、そして「何かに見られ」、そのまなざしに精神を研ぎ澄ます主人公。実体の見えない、しかし登場人物の感情の動きを支配する視線は、時には生き霊であり、時には語り手であり、そして読者である。我々は、この作品世界の中で、常に見えない視線というものに付き合わされているのである。こうした「見る、見られる」

構造がこの作品全体を覆っている。

さらに多様な「視線」の存在を支えているものは、極めて鮮明な色使いと、コントラストの大きい原色を配した作品世界の色合いである。

三軒建ちの露路の奥である。……露路に向けた明り障子に強く当る日かげも、まつ白に澄んで見えた。(P 二二一 L 一五)

地面の上には、既に赤みの多く加つた日ざしが、一杯に照って居て、……(続稿 B)

何羽とも知れぬ鴉が啼き立てて、空を通つた。其影が、まつ赤に染まつた地面に、ちぎれ雲の様にうつつた。(続稿 B)

唐辛子をばら撒いた様に、赤とんぼが一杯、砂地の上に出て来た。(続稿 B)

「日かげ」「日ざし」は、飛び交う視線を助けるようにして舞台に差し込まれるライトのようでもある。しかも「赤みの多く加つた日ざし」と、その色まで指定され、さらに「とんぼの赤色」によって強い赤の色彩感覚が強調されている。

こうした「視線の横溢」「舞台に否応なく視線を注がなければならないような装置」としての色彩感をさらに支え、登場人物の視線に呼応して、見ることを読者に(あるいは観客に)強いるもうひとつの装置は、音を極力立てない、静まり返った舞台である。

昼日中でも、何やら、しんとして来たな。(P 二二二 L 一一)

どこもかしこも昼寝時は、ちよいと夜中の様な心持ちをさせた。(P 二二二 L 一四〜五)

さつきから静まりかけて来た所為か、(P 二二九 L 一)

音をさせないように気をつけながら……(P 二三二 L 二)

それこそ、何ものかの登場を常に期待させるような、あえて言えば生き霊を今か今かと待つような演出が随所に施されている、そうとしか読みようのない仕掛けがある。そしてその生き霊、即ちお留が出現する刹那、この世界に大きな音が響き渡るのである。それは静まりかえった舞台上に、まるで揚幕を突然かえして役者が登場する場面のように。

何羽とも知れぬ鴉が啼き立てて、空を通った。(続稿B)

鴉がかあ／＼。嬢の家焼けた。早帰んで、水かけい。

本堂前の広場と思はれる辺りで、沢山の子どもの声が起つた。(続稿B)

この作品は、「見る」行為によって展開変化する心のありようを、実に丹念に書き込んで、それ以外の感覚を極力排除することによって、リアリティーを極限まで発現させようとしているのである。しかも「生き霊」という目に見えないものの存在を提示するためには、この方法は極めて有効であった。折口は恐らくこの方法をおいて血肉化している歌舞伎舞台の演出から学んでいるのではないだろうか。種村がこの方法に、怪談話としての方法を見出したのは、故なきことではないのである。

まなざしから聴覚へ

これに対して、ほぼ同じ時期に作品化され、同時に『白鳥』の紙面を飾った「神の嫁」は、様相を全く異にする。そこには視線らしきものは何一つない。音だけの世界と言ってもよい。

まず舞台は夕暮れ。

昼間あんなに人通りの多い往還が、元興寺で暮れ六つをうちこむと最後、其は、ばつたりとぎれて了ふのです。

(P九九L四〇五)

大路一ぱい、夕霞がおりかけて居ました。(同L一〇)

姿をはっきり見、ことわけすることの出来ない時刻、おぼろげな情景の中にしかし実体だけは確かにある。そうした背景に「暮れ六つをうちこむ」元興寺の鐘の音だけがはっきりと耳に届く。目には見えないけれども、音によってはっきりとその存在が示される、という世界。

そして「生き口を問ふ女」と際立った違いを見せているのは、「神の嫁」の世界は、すべて語り手「私」によるモノローグで語られていることだ。あらゆるものが語り手「私」の感覚と心意のなかに抱え込まれて存在する。語り手の意志の赴く儘に、世界は予定されたように展開させられる。

だから作品中に多用される「……の様です」「……らしい」という表現によって示される不確かで、判断停止の状態は、まさに主人公の心意の表れでもあるが、作品世界そのもののおぼろげな光景も併せて表現している。それは確かに語り手「私」の判断に他ならないが、それ以上のことは読者には判断できない。全てが語り手の手の内にある。

くんじふ（群衆）の臃ろげな動きが、一々不安な心持ちを漂して来る様に、見えるではありませんか。（P100 L11）

腰のひどく曲つた年よりの、而も、女であるらしい物ごしです。（P103 L11）

大地は、黒く澱んで居る様にしか見えないのです。（P103 L16）

白い姿が小さな渦巻きを起した様です。（P103 L20）

こうした判断をすべて主人公に任せてしまつて、我々読者はどうにも行き場のない状態に置かれながら、しかしこのおぼろげな音だけが確かに飛び交っている世界に身をゆだねる。

こんな話し声が致します。（P102 L2）

大きな杖音を立て、南の方へ下りました。（P102 L9）

寂しいおちついた声が聞えて来ます。（P104 L11）

「姫をいたはるらしい父の声がいたします。(P一〇四L一六)

「静まり返った世界であることは、「生き口を問う女」の世界と変りはない、しかし「神の嫁」の世界では視線はすべて疎外され、読者は音のみの世界に敏感に付き合わされる。

不確かなぼうとした世界の中で、姫も、登場人物も動いている。しかし、彼らの視線も動いているのだが、はっきりとしたものはつかめていない。つまり、この世界が実際に見えているのは、語り手ただ一人なのである。一方登場人物、そして読者の耳は敏感に研ぎ澄まされていく。それは場面が進むことにますます磨かれ、遂には「塵一つ動かぬ程、静まりかへつて居る世界に、「足音が乱れて、這入つて来ました。澄んだ耳は、その中に、した、く、と運んで来る小さな音のまじつて居るのを、聞きわけて居ました。」という一文に到達するのである。激しい足音の中から、かの人の「したく」という音だけを聞きわける澄んだ耳を我々にも持たせるために。

当初、登場人物の目だけでなく読者の目をあえてふさぐことで、音をことさらに強調する仕掛け。この世界を見ているのは、ただ一人、語り手である「私」のみである。我々の眼をふさぎ語り手の目を通してのみなにかを見せようとする仕掛け。見ることを放棄して始めて成り立つ世界を造形しようとするこの作品は、「生き口を問う女」のテクストとは全く異なるもうひとつのリアリティの方向を指摘している。

そうして、登場する「かの人の「怖い顔」。

呪々しい青びれた顔。頭越しに、姫の顔に掩ひかゝつて来た、怖い顔。(P一〇七L二)

このテクストの中で唯一の視線は、「恐しい顔」に届く姫の視線のみである。かの人の姿をありありと見せることにのみ、すべての登場人物も文体も奉仕しているという構造。そして最後に目によって音は圧せられる。つまり姫は音を失うのである。そういうゆくたてを、「神の嫁」は示している。

「神の嫁」は語りとモノローグによって抱え込まれた作品世界を構築している。「視線」よりも「音」を優越させ

る世界。さながら「記録」よりも「音声」を優先させる感覚と似ている。それは、「神の嫁」から「死者の書」へといたる作品世界の主旋律ともなっているし、また彼の学術的な営為の源泉にも、「音」への偏倚が認められるのであるが、それは後のことである。

目から耳、視線から音、この二つの感覚の微妙にしなだれあうしかしアンビバレントな構造こそ、この時期の折口の作品が内的に抱え込んでいるものではなかったか。

「生き口を問ふ女」の主人公は、「口ぶえ」に登場する鰻屋の主人仁三郎その人であろうとおもわれる。しかし折口は、この鰻屋の主人を主人公としていったい何を書こうとしたのか。

それについてはかつて、父秀太郎、捨次郎、伊勢清志といった折口をとりまく男達の問題が、折口の初期散文作品の一つのキーワードであったはずだと述べたことがあるが、それだけではない何か内在しているようにも思われる。「生き口を問ふ女」とほぼ同時期に、後に「死者の書」に向う「神の嫁」のモチーフが試みられているからである。この二つは全くかわりのない作品なのであるうか。ここで問題にしたいのは、モチーフの問題ではない。述べてきたようにそれぞれの作品に託された、身体感覚の位相である。ある作品は見ることを、ある作品は聞くことをことさらに肥大化させて、作品世界を造形している。これはいったい何か。

「口ぶえ」を初発とする大正年間に試みられた折口信夫の「初期小説」の位相を本文の内実から分析することは、彼の学問と作品のありようをテキストの側から考える大事な契機になろう。

「家へ来る女」とは何か

昭和十年、『遠つびと』創刊号に不思議な文章が掲載される。『家へ来る女』と題されてはいるが、「小説にあらず」と表題に注記がなされ、その冒頭には折口特有の弁明じみた前書きが付されている。すでに第一節でも述べたことで

はあるが、改めて引用する。

虚子さんが、写生文を小説に延長して行つた頃の事である。誰しも、これはどうも——と一種の困迷に似た感じを持つたに違ひないが、全く時の勢と言ふものは、変なものである。其でも、さうした態度も態度として、立派にとほりさうに思はれた事だつた。さうして此こそ、写生文小説より外に、ゆき方がないと思つた物語がある。其を今になつて、その形で行つて見ようと言ふのだから、嗤笑を予期せないでは居られない。

だが、今書いている形は、小説ではないつもりである。(『新全集』第二十七卷 一三九頁)

虚子が「写生文を小説に延長して行つた頃の事」とは、『ホトトギス』全盛の時代、漱石が「吾輩は猫である」を發表した後「坊っちゃん」を、寺田寅彦が「竜舌蘭」を、左千夫が「野菊の墓」をそれぞれ發表し、虚子自身が写生文から展開して「風流儼法」「俳諧師」などの小説を執筆する、明治四十年から四十一年にかけての頃をさす。

この頃の折口が、文壇の状況に極めて敏感であり、様々な情報を得ながら、發表される作品についても恐らくはかなり精力的に読んでいたであろうことは、「左千夫の小説」(『アララギ』第十二卷第七号、大正八年七月、『新全集』第三十二卷)の冒頭に

「どこに、どうした人物が、隠れて居るかも知れない」と言ふさざめきが、あらゆる心をば、波立たせて居た。

此は、三十七・八年戦争の済んだ頃の、文壇殊に小説界のあり様である。此声は、唯一つの懸案には止つて居なかつた。直様、要求の叫びに変つて来た。文壇のどの隅からか、今に、土を擡げて、大きな作家が現れて来相な心持ちが、行き亘つて居た。此わく／＼と昂り立つた待ち心は、自然、めい／＼の内へも向うて行つた。(中略)

今から見れば、此時代こそ、わが小説界第一期の、

「と述べるくだりをみても容易に想像がつく。」
この「俄分限」の時代を仕切つていたのがまず『ホトトギス』を根拠とする作家たちであつたわけだが、そこにお

いて実践された写生文から小説への展開という試みが、言うまでもなく折口の述懐につながっている。

俳句における写生から派生した写生文は、子規においては小説とはまったく別のジャンルのものと意識されていたふしがあるが、虚子が明治四十年四月に「風流儼法」を発表するにおよんで、写生文と小説への展開ということがしだいに実践的になってきた。虚子は「風流儼法」について、後にそれが収められた単行本（大正十年六月、中央出版）の自序に、

私の写生文が小説の色彩を帯びた最初のもの

と述べている。確かにこの作品には、写生文独特の克明な場面描写が随所に施されながら、しかしあるいは「作為」あるいは「主観」によって人事を描くといった試みがなされている。虚子は写生文と小説との違いを写生文に想像を加味すると小説になると考えていたように

写生文は直ちに小説にはならぬ……写生文の上に想像を加味して小説になる。即ち如何にして想像を加味するかゞ問題である。（「写生文と小説」）

と述べる。特に作者は仮にその境遇性質の上に自己を置いて「色眼鏡」をかけて観察しなければならない、とし、

此色眼鏡を掛けた点が写生文には全くない処で、小説に進まうとする所謂第一歩たる処である（同）
と述べて、小説に登場する「私」はこのように仮構されなければならないとする。堀和三蔵という「私」自身が投影された人物が設定された「俳諧師」が執筆されるにいたって、写生文はより小説的になってきた。これは虚子自身をモデルにした俳諧師三蔵が世に認められるまでを、実在する人物をモデルとして配置された様々な登場人物と三蔵との交流、そして心の動きを絡めながら描いたもので、随所に写生的な手法が使われている。

しかし、実際虚子の写生文小説は文学史上の一時期を画したには違いないが、折口が「立派にとほりさうに思はれたことだった」と微妙な言い回しで述べるように、また虚子自らが「手近の記憶に残つてゐるものを材料にして事実

半分、嘘半分で書き上げて見よう、果して写生文が斯かるものを書き得るか否かの試験にさへなればいゝ」（「俳諧師」序 大正十五年十一月）と書く様に、いわば「試み」に終わったということでは確かだった。

そうは言っても、この虚子の試みは、折口の「家に来る女」の冒頭部分で述べる「ゆき方」に影響を与えたことは確かだ。どのような影響であったかは、具体的には改めて検討しなければならない課題だが、虚子の写生文的な手法は、前に述べたように「生き口を問ふ女」における視線の横溢、視線の転換といった問題とまちがいなく一連のものである。大正年間の折口の小説執筆の手法には、虚子の写生文の手法が大きな影響を与えていたことを認めることができる。

さて一方、明治四十年といえ、「私小説」という領域においても一つの事実を認めなければならない。田山花袋「蒲団」が発表され、自然主義から私小説が生み出されてくる前夜だからである。

このころ、志賀直哉が処女作「或る朝」の原型とも言うべき短い草稿を「非小説、祖母」と題して執筆していた頃でもある。もちろん草稿の表題であるから、公にされたものではないが、「非小説」ということがことさらに標榜されるといふことは、とりもなおさず「小説」というものが志賀にとつてあるべき姿として、あるかたちで脳裏に思ひ描かれていなければならぬまい。表現者にとつてある作品が「非A」であるといふことは「A」がそのあるべき姿、あるいは目指すべきものとして意識されているか、またその逆に「A」を忌避しているかのどちらかあるいは両方である。少なくとも志賀においては「非小説」とは前者の謂いである。小説とは一線を画すものであることをことさらに表明することで、新たな表現の形式を獲得する意思を表明しているといふことも出来るかもしれない。

しかしながら志賀は、この「或る朝」について後年「創作余談」に次のように書いている。（傍線筆者）

二十七歳の正月十三日亡祖父の三回忌の午後、その朝の出来事を書いたもので、これを私の処女作といつていいかも知れない。私はそれまでも小説を始終書かうとしてゐたが、一度もまとまらなかつた。筋は出来てゐて、書

くともものにならない。一気に書く骨ばかりの荒っぽいものになり、ゆつくり書くと瑣末さまつな事柄に筆が走り、まとまらなかつた。所が、「或る朝」は内容も簡単なものではあるが、案外楽に出来上り、初めて小説が書けたといふやうな気がした。『志賀直哉全集』第八巻 昭和四十九年六月 岩波書店 三頁

「簡単なもの」といいながら、志賀がこの作品を書くことにおいて並々ならぬ「何か」を抱いていたことがわかる。この「或る朝」が書かれたときに日記には

一月十三日 月 朝起きない内からお婆さんと一と喧嘩して午前墓参法事

一月十四日 火 朝から昨日のお婆さんとの喧嘩を書いて、(非小説、祖母)と題した

と記される。「非小説」として意識していたものが、それから十年を経て『中央文学』に小説「或る朝」として登場し、同年春陽堂から刊行された叢書にはその小説の表題が書名になって巻頭を飾ることになった。折口の言う「小説界第一期の俄分限の時代」に、折口自身も立ち会ったのであり、先の虚子の「写生文と小説」の問題、自然主義から「私小説」が登場する過程、そして志賀直哉が自らの小説執筆のあり方に苦闘していた時代は、直ちに小説とは何か、という問いとともに折口自身の問題でもあった。偶然とはいえ、志賀の使った「非小説」という用語と、折口が「家へ来る女」に「小説あらず」と使った用語とが符合するのは、どちらも内容と様式との問題にこだわったからに他ならない。

それにしても、冒頭引用の折口の文章はいったいどのように理解したらいいのだろうか。書いておかなければならないある物語がある。それは「家へ来る女」の土台となった物語、より詳しく言えば太掉芸者「寅吉」に関わるエピソードである。それを折口自らが「写生文小説より外に、ゆき方がない」と思ったのは虚子が「写生文を小説に延長して行った頃」であるが、それはどのように実践されたのであろうか。

「寅吉」に関しては、この「家へ来る女」のほかに、「寅吉」と題された自筆草稿が二十八枚残されていることは

すでに述べた。「土俗と伝説原稿用紙」と右肩に印刷された鶯色野の原稿用紙(二十八字×十行)を使用し、そこに二十字×十行で書いていることは、「生き口を問ふ女」(続稿)と全く同じあり方である。また十枚目まで濃紺、それから後は濃紫のインクを使い太いペン先で執筆しているが、そのインク、筆跡の状態とも「生き口を問ふ女」のそれと同色同質である。このことから、草稿「寅吉」は「生き口を問ふ女」(続稿)が執筆されたのと同時期に書かれたものであるという推測が成り立つ。「生き口を問ふ女」と執筆手法上の関係を考える上で重要な草稿であるが、これは「寅吉」のどの段階のものだろうか。

この原稿は、途中で中断してそのまま放棄された。それを昭和十年の段階になって試みてみようというが「家へ来る女」ということになる。しかし結局「家に来る女」も

この女のことをいまま少し書きたい。

という一文をもって中断している。これからさあ書きだそうというときに、それはないでしょうという感じだが、しかしだいたい折口が何かをやりだそうとして途中で放り出すという癖は、単なる放棄とはいえない事が多いのだ。「家へ来る女」の三年後、昭和十三年に『三田文学』に寄せた「茶栗柿譜」には

この女のごとは、幾度か書きかけてみたけれど、どうも私には書けない。

とあるように、折口にとつて「寅吉」は相当に苦心を要するテーマであったようだ。それは単に素材あるいは内容に よるものではないだろう。小説ではない「形」を敢えて選択すると断り、多少「形」に歪みが出来ても、世間に受け容れてくれる人の口にかかれれば心残りはない、と書いていることを見ても、「内容」と「形」の融合に意を払っていたということが分る。

何度か書きかけてみたが書けない、というのは果して「寅吉」という素材が折口を逡巡させていたのか。それもあろうが、むしろ「寅吉」という素材を籠める「形」を模索していたということである。「写生文小説」にその行き場

を求め書き出して見たもののすつきりと書けない。だから一旦放棄された。その一つが現存する「寅吉」であろう。しかしやはり書かなければならないと再び向き合った結果が「家へ来る女」であつたが、それもまた放棄された。この物語を十分に納める形を見出す事がないまま、折口は結局この物語を書くことができなかつた。

「小説にあらず」すなわち「非小説」ということを最初に受け止めたのが明治四十年から四十一年頃、それが次第に日本の小説があるスタイルを主張してくるのを横目でみながら、大正年間に試み、さらに昭和十年になつて改めて試みてみようとするこの折口のこの行動、どこかで見たような気がする。それは「非短歌」に対する折口の試みとほとんど同じではないか。

既に第一章で述べたことではあるが、折口にとつて「非短歌」とは、単純に「短歌に非ず」ということではあるまい。「非短歌」と同様、小説問題においての「非小説」という用語は、内容と形式、つまり「様式」に固執する折口のもうひとつの足取りを示してくれている。

第五節 「死者の書」のテキストとその生成

「死者の書」のテキスト

「死者の書」は、雑誌『日本評論』に、昭和十四年一月から三月にかけて連載された小説で、折口の一群の小説の中では、唯一完結したかたちを持つものである。

もつとも、折口信夫全集二十四卷（旧全集）には、「死者の書 続編」と名付けられた小説が収められていて、同じ「死者の書」と題されてはいるが、これは、折口が生前、頼長をモデルにした「死者の書」の続編を書く目的で「台詞」などを読み耽っていたという弟子の目撃談を根拠に、死後発見された未完の作品がその草稿ではないかと判断され、旧全集編纂者によって「死者の書 続編」と題され収められたものである。したがって、積極的な根拠をもって、これを「死者の書」の続編として位置づけられるかどうかの判断は、それぞれの作品内容の検討が十分になされたいのではないとなかなか難しい。

ただ、この「続編」の作品世界に極めて近似した内容を持つ草稿がみつき（「死者の書 続編 別稿」⁽²⁾）、そこに明らかに折口の自筆で「死者の書」と表題が付けられていることを考えると、「死者の書」という表題とその意味するテーマと対する折口の並々ならぬ執着が感じられる。つまり、「死者の書」とは、狭義ではおおかたが認めるように中条姫伝説を主材にした壮大な歴史小説そのものを指すのはもちろんであるけれども、広い意味では「口ぶえ」あるいは「神の嫁」を源とした折口の作品生成の流れの総体を指し示していると捉えるほうが、よりその作品群の内実を明らかにしているのではないかと考える。本節では、折口の「死者の書」の本文の在り方を検討しながら、「死者

の書」という流れがどのような折口の執意を引きずって流れていたかについて、若干の私見を述べたいと思う。

「死者の書」のテキストは全部で五つある。

一つめは、昭和十四年一月から三月にかけて雑誌『日本評論』（第十四巻第一号（第三号））に三回にわたって連載されたもの（以下「日本評論版」とする）。それぞれ「死者の書」「死者の書（正篇）」「死者の書（終篇）」という表題がつけられている。

二つめは、この「日本評論版」を折口自身が雑誌から切り取って、若干の朱を施し、それを綴じて自ら装丁した「折口自装本」と呼ばれるテキストである。これは折口没後、遺族から折口記念会に寄託された蔵書・原稿類の中から発見され、折口博士記念古代研究所で解読整理を完了したものである。章段の構成は「日本評論版」と同じだが、約五十箇所に加筆・語句の訂正並びに削除がなされている。加筆の箇所はそれほど多くはないが、しかし、初出から刊本に至る大幅な改変のちようど中間に位置するもので、折口の推敲の様子を窺うのに重要なテキストとして注目される。

三つめは、昭和十八年九月に青磁社から刊行された初めての単行本である。（以下「青磁社版」「日本評論版」に対して、章段を大幅に組み替えて、小説の構成を百八十度転回させ、さらに句読点を除いても全文約千二百箇所を越える書き加え・語句の訂正などの推敲が加えられている。

四つめは、「青磁社版」の全編にわたって加筆訂正を施したもので、原山喜亥旧蔵のものである。「青磁社版」に訂正を加えたものとしては、別に「青磁社版自装本」（折口博士記念古代研究所蔵）がある。

五つめは、昭和二十二年七月、角川書店から刊行されたもので、「青磁社版」を底本として使用し、小説の解説として折口自身の論文「山越の阿弥陀像の画因」を巻末に付載している。（以下「角川書店版」）このテキストは、『日本近代文学大系』四六『折口信夫集』（昭和四十七年四月、角川書店）に註釈つきで転載されているほか、「中公文庫」所

蔵の『死者の書』（昭和四十九年五月）もこのテキストに拠っている。

章段の改変

「死者の書」の二大テキストである「日本評論版」と「青磁社版」とが、その構成、字句に大きな異動を有しているということは、かねてより多くの研究者によって指摘されている。⁽³⁾特に章段の構成に関しては、篠田一士の、「この二つは、ほとんど別作品ではないかという、何か衝撃的と言ってもいいような当惑を覚えた。」⁽⁴⁾と言う評言に代表されるように、極めて大幅な改変を受けている。もう衆知のことではあるうが、改めてそれら章段の変更をわかりやすく表にすると以下の様になる。上段は「日本評論版」下段（ ）内は「青磁社版」の章段を示す。

「死者の書」	第一章	(第六章)
「死者の書」	第二章	(第七章)
「死者の書」	第三章	(第三章)
「死者の書」	第四章	(第四章)
		(以上「日本評論」第十四卷一号)
「死者の書」	(正篇)	第一章 (第一章)
「死者の書」	(正篇)	第二章 (第二章)
「死者の書」	(正篇)	第三章 (第五章)
「死者の書」	(正篇)	第四章 (第五章)
「死者の書」	(正篇)	第四章 その二 (第八章)
「死者の書」	(正篇)	第一章 その三 (第九章)

「死者の書」 (正篇) 第五章 (第十章)

(以上「日本評論」第十四卷二号)

「死者の書」 (終篇) 第六章 (第十一章)

「死者の書」 (正篇) 第七章 (第十二章)

「死者の書」 (正篇) 第八章 (第十三章)

「死者の書」 (正篇) 第九章 (第十四章)

「死者の書」 (正篇) 第十章 (第十五章)

「死者の書」 (正篇) 第十一章 (第十六章)

「死者の書」 (正篇) 第十二章 (第十七章)

「死者の書」 (正篇) 第十三章 (第十八章)

「死者の書」 (正篇) 第十四章 (第十九章)

「死者の書」 (正篇) 第十五章 (第二十章)

(以上「日本評論」第十四卷三号)

一見して明らかなように、「日本評論版」と「青磁社版」との章段の相違は、「青磁社版」でいうと第一章から第五章まで、つまり物語の導入部に集中していることがわかる。テクストの内部に立ち入って、これらの章段の改変を分析してみよう。

「日本評論版」の第一章は、まず天平宝字四年、奈良の家を出奔した郎女が當麻寺へたどり着いたところから始まる。郎女の目に映る物は、たとえば「堂伽藍」であれ「涅槃仏のやうに寝ている麻呂子山」であれ、あるいは「薄緑色の山色であれ、赤色の激しく光る建物」であれ、いずれも彼女の何の屈託もない感情に素直に訴えかけて来るいか

にも幸福そうな平和な情景である。第一章のこうした描写は、第三章に出てくる「朝目よく」という語に相応しい。ここには心に屈託する何の音もない。こうした情景に包まれながら、郎女は知らず知らずのうちに當麻寺の結果を犯すことになる。

その後、一行あきで、郎女の出奔の原因になった奈良の家での出来事が語られる。この出奔の一年前の春分の日、郎女は、屋敷から見た二上山の二つの峰の間に、瞬間莊嚴な人の佛をありありと見た事。それは、父の心尽しの贈り物である「称讚浄土經」の写経を一心不乱に進めて居たときの事である。そして半年後、千部の写経に取り付いた春分の日、郎女は再びその面影を見ることが出来た事など。続いて第二章は、郎女が奈良の家を出奔してから當麻寺の結果を犯すまでの模様が語られる。「南家の郎女が神隠しに遭つたのは、其の夜であつた。」という一文が始まるこの章段は、郎女が奈良の家から苦しい山中歩行の後、當麻寺に辿り着いてからの模様が語られる。そこで郎女が見たものは、「讚歎の声すら立てない」莊嚴な風景だった。所化僧に咎められた郎女は「二上山に逢ひに……。そして今、山の頭をつくつく見ていた……。とつぶやく。

続いて第三章は、結果を犯した郎女が、當麻寺の北の山陰にある小さな庵室に幽閉されて、長い物忌みの日々を送ることになるが、そこで當麻ノ語り部の媼が、郎女に二上山にかかわる「當麻の氏の語り」を語っているうち、突然滋賀津彦が媼に神懸かりし、其の口から長歌が歌われる。第四章は、この媼の口を借りて滋賀津彦（もちろん名前はふせられてゐる）が登場し、初めて郎女が「彼の人」に接触する場面で構成される。ここでは郎女自身がどうしてこの當麻寺に誘われてきたのか、その原因を媼の口から教えられて、自身が二上山の峰の間に見た莊嚴なお姿と當麻ノ語り部の媼の語る「彼の人」との実体との齟齬に、自問する姿が描かれる。

このように「日本評論版」では、連載の第一回目が郎女の話だけに終始しているのであって、「彼の人」はまったく登場しない。つまり郎女の神隠し・あるいは異界行そのものに語りの力点が置かれていることになり、当初「死者

の書」が「神の嫁」のモチーフであるところの「姫の失踪」を其のままひきずった形で語り始められていたということになる。

分節するイメージ

もう一つ重要な要素がある。それはこの小説に横溢する耳と目とに語りかけてくるものの関係である。「日本評論版」の冒頭をかざる第一章から第四章までの表現を子細に検討してみると、そこに表現されている景物と音に微妙な関わりあいが見られる。

第一章・第二章はほとんどが目にはいつて来る景物によって織りなされている。たとえば、「朴の葉が青いままで散らばっている白い地面」「固まつてみえる堂伽藍」「寺を圧してたつてゐる二上山」「涅槃仏のやうな姿に寝てゐる麻呂子山」「薄緑色の山色」「赤色の激しく光る建物」など、それは一年前と半年前の秋分の日に、二上山の峰に見た「荘厳なお姿」に憑かれたやうな郎女の視線の横溢である。そしてそこには音はない、というより意識的に音が避けられているといつていい。ここで音を表現する箇所はわずかに二箇所だけで、しかも郎女が三度目に佛人に逢うことを果たせなかった後、ふりだした雨の音だけである。しかしそれは、「人声も、雨音も、荒れ模様に加つて北風の響きも、もう姫は聞かなかつた。」とあつて、郎女はこの雨の音を聞いてはいない。

もう一箇所は、郎女が奈良の都を出奔した後、山中を独歩する間、彼女の耳にたえず届いていたはずの「嵐の音」「鳥の声」そして「山の獣の叫び声」など、これら「畏しい声」も、おそらく彼女には聞こえてはいまい。さながら狂者の様に、彼女の感覚はひたすら二上山の二つの峰に向けられている。第一章・第二章を眺めてみると、この二箇所のほかは、音という音が全くかき消されているのである。

ようやく現われる音が、當麻寺の一人の婢子の声。この声を序奏とするように、第三章・第四章にはいつて、音は

次第に郎女の耳に届くようになる。それはさながら、「彼の人」の声の登場を待つ前のオペラの序曲のようだ。舞台そのものが、現し世の明の世界から幽り世の暗の世界へと次第に暗転して行く中、たとえば「谷川激ちの音が、段々高まつて来る」「外には瀬音が流れて聞こえてゐる」と語られる谷川の瀬音、それはほかならぬ二上山から流れてくる聖なる水、當麻ノ語り部の媼の口を借りた「彼の人」の声の登場の序奏にはうってつけではないか。

「日本評論版」は、當麻ノ語り部の媼の口を借りて「彼の人」を登場させ、ここで「死者の書」をひとまず終える。約一箇月後、「死者の書(正篇)」と題されて発表されたこの小説の続きは、「青磁社版」の冒頭部に据えられている「彼の人」の岩墓のなかでの眼覚めから始まる。そこには、第三章の序奏におびかれた様に、音の横溢だ。松浦壽輝が既に指摘しているように、そこにはさまざまな音が、まるで「彼の人」の声を盛り上げるようにして画面の中に響きわたっている。暗黒の世界の中で、ただ意識を覚醒させるものは音だけであろう。雫の音を思はせる「した した した」、それは後に「彼の人」の足音を暗示させる音、そして「彼の人」の記憶から甦ってくるさまざまな音、彼は音によって「宿執」を持たされ、音によってそれを甦らせた。「鴨が音」「女の哭声」「墓をこじあける音」「誅歌」等々。「彼の人」の世界は、音に充ち満ちている。しかし「彼の人」自身は音を出すことがない。

一方、「青磁社版」はこの構成をがらりと変えている。小説はまず音の世界から始まる。舞台は暗黒、岩床に一人の死者が板付きとして横たわる。音が次第に大きく、多様になっていくに連れて、死者は自らのつぶやきと共に覚醒して行く。我々は、この小説の持つもつとも暗い異質な部分にまず付き合わされる。それは、「日本評論版」のように明から暗へとオペラの曲の流れのような幸福な計算はなされていない。むしろ敢てこの小説にとつては、不幸とも言うべき解体によって、暗と明、音と景物、古代と近代、折口によって対位せられた二つの世界は混濁し、我々はこの二つの世界を往還することを余儀なくさせられる。こうした二つの世界への分節は、この物語のもうひとつの主人公「郎女のおもひごと」にも影響を及ぼして、「彼の人」と「佛人」とに分節させられる。いやむしろ、最初からこ

の分節があつて、この小説の構造が構想されたと考えるほうがむしろ自然かもしれない。

「死者の書」の母胎となつたと言われる小説「神の嫁」。姫に憑依する異形の者は「あの方」或いは「あの方」お一方」と表現されている。後日それは「春日のすめ神」であることが明らかになるが、この神の本質は「死者の書」のように分節してはいない。

折口は、未完のまま放置した「神の嫁」の主題を再び呼び戻し、「死者の書」を執筆し始める直接の動機について、「何とも名状できぬ、こぐらかつたやうな夢をみた」ためだと述懐している。その夢とは折口が天王寺高校時代に深い憧れを抱きながら、結局その思いをとげることができなかった友人の辰馬桂二に関しての夢ではなかつたかというのが、一般的な解釈である。

「神の嫁」と「死者の書」との間に、辰馬桂二をモデルにしたと言われる折口の自伝的小説「口ぶえ」を改めて立ち上げてみよう。「口ぶえ」には「すべての浄らかなものと、あらゆるけがらしいものが、小さいあたまのなかで火の渦を巻く」という表現があるが、何かさっきの折口のみた夢の有様を暗示してはいまいか。

「口ぶえ」には二人の男性が登場する。ひとりには「渥美」という青年、もう一人は「岡沢」という青年である。「岡沢」は、折口に同性愛を迫る軽蔑すべき上級生として描かれているが、これは思春期の折口を襲った性への衝動、それも同性愛的な誘惑にかられる自己と其れに対する罪障意識の形象化であろう。これに対して「渥美」は、こうした罪の救済・浄化への指向の形象化といってよい。彼が憧れる辰馬桂二はこうした二つの形象に分節させられている。この二つの分節させられたイメージをひとつに結合することが、折口にとってもうひとつ重要な「死者の書」のテーマであつたということが出来る。

「死者の書」を内側から解体する音と目の世界、そこに担わされているイメージ世界を簡単に図式化すると以下のようになるだろう。

A 音の世界（暗）耳の世界（耳面刀自）古代的（語り・やまと）ころ）彼の人（「口ぶえ」の岡沢・罪障）

B 景の世界（明）目の世界（二上山）近代（経文・唐才）佛人（「口ぶえ」の安良・救済）

「死者の書」のテキストそのものの構造に言え、日本評論版」は、BからAへと、それはまるで毎日繰り返される民俗社会の幸福な世界の循環を予想させる。

これに対して、「青磁社版」は、こうした平和的な循環を敢て拒否し、それを解体し、混乱させることによって成している。我々は、AからBへ、BからAへと突然さらわれ意図せず往還しなければならない。それはまさに、最後に郎女によって織り上げられる「當麻曼茶羅」の図柄そのものではないか。日本文学の発生の現場のさまざまな情念とそこに育まれたイメージ横溢をどう読むかというテーマを内包した形で織り上げられ提示されている曼茶羅とも言おうか。さまざまな領域で、二つに分節させられたイメージが、色々な形象化を受けながら折口のあたまの中をめぐっている。それらを一枚の「蓮絲曼茶羅」に織り上げることが、広義の「死者の書」の営為だった様に思う。

推敲の現場

先に述べたように、折口は「青磁社版」の刊行に先立って「日本評論版」に千二百箇所にも及ぶ推敲・加筆を行っている。誤植の訂正や助詞の書換えなども含まれるが、内容面での変更は大きく分けると、一部の語句の変更（語句の変更、〈述語の変更を含む〉、時制の変更、語句の削除、語句の書き換え、語句の入れ替え）と一文の変更（文全体の意味が変わるほどの語句の訂正、文全体の削除、同書き換え、文の入れ替え）それから句読点の加除といった具合に分けることが出来るよう。

本来これらの改変のすべてについてそれぞれ検討を加える必要があるのだが、ここではいくつかの重要な点についてのみ検討を加えておきたい。

推敲の中で最も多いのが語句の訂正である。試みに、「青磁社版」の冒頭部を例にあげてみると、

「彼の人の記憶」→「彼の人の思ひ」

「起こしかけてゐることを感じはじめた。」→「起こしかけてゐるのだ。」

「離れて来た。」→「離れて来る。」

「頭に響いてゐる。」→「頭に響いてゐるもの。」

(傍線筆者)

といった具合。当然彼の頭の中では、こうした語句の変更に伴うイメージの改変が行われているはずであるが、それは決して直線的ではない。

もうひとつのテキスト、「折口自装本」の書き加えと対比してみると、それがよくわかる。たとえば、「青磁社版」の第六章に当たる部分、「日本評論版」の冒頭部、「折口自装本」における書換えの多くが「青磁社版」と同じかあるいは「青磁社版」にその書換の主旨が生かされているのである。「日本評論版」で「そのお墓のあるのが、あの麻呂子山だと言ふ。」とあるところ、「自装本」で「其が、あの麻呂子山だと言ふ。」と書き直しながら「青磁社版」では「お墓」を「み墓」と変えるだけで元に復している。また「その中腹と、東の鼻とに、西塔、東塔が立つて居る。」とあるところをわざわざ「その中腹に西塔、東の鼻に今ひとつの塔が立つて居る」と開いたのに、やはり元に戻している。こうした例は五十数箇所及ぶ。「自装本」の推敲箇所なかでほかに八箇所認められる。つまり、「青磁社版」は、「日本評論版」に対するただ一回の推敲で出来あがったものではなく、そこには、「自筆書き入れ本」を含む数度の推敲の過程が存在したことがわかる。

語句の訂正で特徴的に見られるのは、心情語・人の言葉に対する推敲と、景物や状況を説明する語に対する推敲の量の多さである。心情語・人の言葉に対する訂正は、多く句読点の位置の改変を伴っている。たとえば、當麻ノ語り部の媼の語を例にあげてみると、

(1) 中臣の筋は、神事にお仕えする、かう言う風にはつきりと分ちがついてまいりました。

←

中臣の筋や、御神仕え。差別々々明らかに御世々々の宮守り。

(2) 飛鳥の都に、日のみ子様近く待った高い御身分の方がいらせられました。近江の天津の宮の内に成人なされて、唐土の学間も詣り深くおありになりました。

←

とぶとりの飛鳥の都に、日のみ子様のお側近く待るおん方。ささなみの天津の宮に人となり、唐土の学芸にも詣り深く……

(3) お思ひになりませんか。

←

お思ひになされぬかえ。

(4) あの長歌を謳うたのだと伝えております。はい

←

あの長歌を謳ふ、と申したのが伝へ。

あげていけばきりがなが、一見してわかるように、「日本評論版」には當麻ノ語り部の姥の語り口は非常に礼儀正しい散文体であるのに、「青磁社版」では極めてぞんざいな、古風で韻文的な表現に替えられている。これはもちろん、前章で触れたような章段の改変に伴って古代的イメージを媪の語りにつ与しようとしてなされた変更と考えてよい。

逆に、景物や姫を取り巻く状況を説明する文章に対する推敲は、それとは逆の行為、近代的なイメージの提示となる。たとえば、「青磁社版」の第六章（「日本評論版」第一章）から、

だが、これは唯、此里の語部の姥の口に、さう伝へられてみると言ふに過ぎないことであつた。

←
だが、さう言ふ物語りはあつても、それは唯、此里の語部の姥の口に、さう伝へられてゐる、と言ふに過ぎぬ古物語りであつた。

「さう言ふ物語りはあつたとしても」と強調的語句に書き加え、更に「こと」を「古物語り」に変えることで、「現在」という意識を強調させている。

←
其れでも、寺があつたとも思ひださぬほど、微かな昔であつた。

←
そんな事があつても、そこは福田を占めて寺の創つた代を更めておもひださうとする者もなかつた程…それはそれは微かな昔だつた。

←
そんな小さな事件が起つて、注意を促してすら、そこに、曾て美しい福田と、寺の創められた代を、思ひ出す者もなかつた程、それはそれは微かな昔だつた。

微かな昔であることをさらに強調するために、さまざまな語でもって修飾を加えようとしている。更にそれは「代」が「代」とわざわざルビがふられて、「だい」と読まれるのを防ぎ、又「思ひださうとする者」が「思ひ出す者」と変えられていることで更に増幅させられる。

しかし、これはあくまで表面的な問題に過ぎない。もっと重要なことは、多くの述語の改変である。述語の改変は、ほとんどがいわゆるテンス、あるいは「人称」の問題と密接に絡まりあった形で行われている。このことは、「死者の書」一編の語りの構造、わかりやすく言えば「語る物」と「語られる物」との関係性を解く重要な鍵を握っていると考えられる。

ここで、人称の問題を含む述語に対する折口の推敲の様子つまりテンス・アスペクトの問題を一瞥しておこう。

この問題に関する推敲箇所は、全部で七十二箇所確認される。述語を改変するとき、多くテンスまで意識的に改変している痕跡が認められるのは、折口の推敲の意識の中に、「過去」と「現在」そして先程あげた二つの世界にかかわる語り手折口の人称意識の問題が抱え込まれていたためだ。しかも語り手自身が認識する「人称」の問題は、章段の改変によって複雑化しているわけだから、なおのことである。

語り手の意識は、常に女郎の心と同期して、重層化しようとしている。こうしたいわゆるテンスや人称意識の変化に伴う改変も、自ずと複雑化した語りの構造と規を一にするように、施されていると考えるのが妥当だろう。それは、折口の言う「神の詞は一人称で表出される」という古代の叙事詩に対する認識と、語り手の語ろうとする意識と、常に共時的に通じあっているはずである。そのすべてに解説を施す紙幅はないが、そのいくつかについて順に考えてみよう。「青磁社版」の冒頭部から順にあげてみる。

(1) 睫が離れて来た。

← 睫と睫が離れて来る

(2) おれはその時知つた。

← おれは知つてゐた。

(3) 何時までも続く。

← 何時までも続いてゐる。

(4) 庵室に手入れをして移されたのだと言ふのである。

← 堂を移し、規模を小さくして作られたもの、と伝へいふのであつた。

(5) 昔の知り人のやうに感ぜられる…

← 昔の知り人のやうに感ぜられた…

(6) 姫は、…悟つた。

← 姫は悟り始めて居た。

(7) 本式に物語りする時の表性が、此老女の顔にあらはれて居る。

←

本式に物語りする時の表情が、此老女の顔にもあらはれて居た。

(8) わなわな震ひはじめたのである。

←

わなわな震ひはじめて居るのである。

(9) 匂やかにほゝ笑まれたと見た…あの佛

←

匂やかにほゝ笑まれると見た…その佛

(傍線筆者)

たとえば(2)。死者が「知つていた」とはいささか奇妙な感じを受けるが、「その時知つた」「彼の人」の宿執は、今や「郎女」を誘く大きな力、此小説を展開させる重要な要素だ。折口はこの前後に「何も訣らぬもの」という「彼の人」の言葉に代表されるように、おぼろげなイメージを持たせる表現を多用している。たとえば「もの」の跳梁。「冷え庄するもの」「あたまに響いてゐるもの」「おれが何だかちつとも解らぬ世界のもの」。まだ覚醒しないおぼろげな意識のなかで、唯一覚醒しているもの。それは「彼の人」にとつて「知つた」だけでは済まされぬ、ずつとずつと「知り続けていなければならなかった」宿執なのだ。

たとえば(9)。「あの佛」の一文は郎女が曾て家から臨んだ佛人が「微笑むところを見ること得た」という事実を暗示させるが、「その佛」の一文は、笑む寸前のその口もとだけしか与えられなかった郎女の魂の欠如感を暗示する。郎女の意志に寄り添うか、その経験に寄り添うかによつて、この入れ子型の構文に抱え込まれた述語が改変したと考えられる。郎女が出奔したのは、唯「佛人」に憧れてと言ふのではなく、こうした欠如感に「彼の人」が入り込んだしわざであるという筋だてを、我々は郎女の感覚の側に立つて意識することになる。

こうした対位するイメージが跳梁する世界は、折口自身の語りの文体、言ってみればもう一人の語り手折口の地の文体ということになるだろうか。それに統括される形で、更に入れ子型に抱え込まれているという事になる。その地の文体、折口の「語り指向」によつて改変されている端的な例は、章段の変更に伴つて加えられたつぎの一文である。

新しい物語が、一切、語部の口にのぼらぬ世が来てゐた。けれども、頑^{ツツクナ}な当麻^{タギマウヂ}氏の語り部の古姥^{フルバ}の為に、我々は今一度、去年以来の物語りをしておいても、よいであらう。まことに其は、昨^{キノ}の日からはじまるのである。

この一文は、物語で言えば「草紙地」に当たるものである。これは「日本評論版」の第一章を第六章に変更したために、話の筋道をつける必要から必然的にこの箇所、つまり「青磁社版」の第六章の直前に据えられたわけだが、全篇の終章部にある次の一文と呼応して、二つの世界を入れ子型に統括する意味で極めて効果的だといつてよい。

もう、世の人の心は賢しくなり過ぎて居た。独り語りの物語りなどに、信をうちこんで聴く者のある筈はなかつた。(第二十章)

「日本評論版」では最後の部分が「信をうちこんで聴くものはなくなつてゐる」とある。「青磁社版」に至つてこの厳しい断定は、こうした「死者の書まんだら」を書いて果たして読まれるだろうかという、「語り手」折口自身の諦念そのものを現しているようだが、しかし、こうした「語り」の世界に自らの身を置こうとする折口の意志こそ、終助詞を中心とする述語改革の現場からは見えてくるはずである。

「死者の書」の改稿と折口文体のテンス・アスペクスの諸問題については、改めて考えなければならない重要な課題と考える。

注

(1)『新全集』では第二十七巻に「死者の書 続編(第二稿)」として収録されている。

- (2) 『折口博士記念古代研究別冊資料集 第二輯』(折口博士記念古代研究所 平成六年二月)にこの表題を付して紹介したが、『新全集』では「死者の書 続編(第一稿)」として収録されている。
- (3) 池田弥三郎・関場武編『折口信夫集』注釈(『日本近代文学大系46』、角川書店 昭和四十七年)、笠原伸夫『死者の方法』(『日本大学大学院人文科学研究所研究紀要』第二十一号、昭和五十三年三月)、長谷川政春「史論・小説・語り手——『死者の書』論のための序章——」(『東横国文学』第十六号、昭和五十九年三月)など。
- (4) 篠田一士「この珍貴の感覚(下)——詩から小説へ」(「すばる」第十六号、昭和四十九年六月)
- (5) 松浦寿輝『折口信夫論』(平成七年六月、太田出版)

第三章 『古代研究』への道

第一節 「語部論」の揺籃——折口信夫の発生

はじめに

折口信夫研究に初めて「折口名彙」という考え方を提示したのは池田弥三郎である。『私説折口信夫』（昭和四十七年八月、中央公論社）の中で一章を立て、その意義を強調した。膨大で複雑な様相を示す折口信夫のテキストを解説する上で、読みの方向性を示すことが求められていた。「折口名彙」は、折口の学問の祖述という意味を抱えこみながら、読みの一つの水準を作り、結果折口の学問研究を大きく推進したことは事実である。⁽¹⁾

しかし、「折口名彙」への執着は、そのことばが「名彙」という枠組みにおいて解説されていけばいくほど、逆に折口信夫の実態を「折口学」という狭い領域に閉じ込めてしまったことは否めない。「折口名彙」に採用されなかった語の中にも、折口特有のテキスト解説のための用語が抱え込まれている可能性を排除してしまったのである。

「折口名彙」の提示が折口の一つの「読みへの手順」であることを了解しつつも、折口のテキストは常に新たな読みの現場へと開放されなければならない。

かつて高橋直治は、『折口信夫の学問形成』（平成三年四月 有精堂出版）の中で、折口の初期の論考である「言語情調論」「異郷意識の進展」及び初期言語論のいくつかを研究の対象とする際、その形成過程を純粹に論考そのものの吟味と把握、その上でその論考内容と当時の学問研究と対比させて、そこに定位される「情調」「常世」といったタームの由来を検証した。⁽²⁾この方法は、いわゆる「折口学」の中に閉じ込められていた折口語彙を外部へ開放する、刺激的なものであり、今後の研究の展開のありかたを十分に予想させるものであった。しかしその後、この方法を追う研

究者はほとんど居らず、折口の當為は相変わらずその伝説の中で評価され、語られ続けている。

折口研究が折口伝説からの脱皮をなしえないならば、また折口伝説が一面折口語彙、あるいは折口名彙と称するものによって形成されたものであるならば、私がとり得る方法は、折口を取り巻く「折口語彙」といわれる言葉の一群を同時代研究の水準の中でとらえ直し、それらがどのようにして「折口語彙」として生育し、進化を遂げてきたかを再検討することである。

折口言説とその用語の相対化は、明治後期における近代文学あるいは文化研究の状況の中に折口の言説あるいは語彙をもう一度据えなおし、近代文学研究・文化研究・国語学研究などの綿密な読みを行った上で、再びその相関を検証することが求められている。⁽³⁾

本稿は、その試みとして、折口信夫と『帝国文学』とのかわり、そこから享けた時代の潮流の中で、音声への志向性というものを獲得しながら、そこを基点として「語部」に関する問題を折口が自らの研究の主題として位置づける過程を、まずは跡付けてみたい。

折口信夫と『帝国文学』

その手始めに、折口信夫と『帝国文学』とのかわりについて、第一章で触れたが改めておさらいしておこう。折口はその著述のなかで、時折思い出したように、自らが影響を受けたもの、あるいは読んだものについてつぶやく事がある。たとえば、

も一つ古い憶ひ出し咄。中学に新入した当時、学校前の用品屋、(中略)そこで初めて月ぎめの注文をした雑誌が二部、なんと「少年世界」に、「帝国文学」。かう言ふとりあはせです。勿論「少年世界」は、小学校以来の愛読雑誌ですが、「帝国文学」は、どうしてとる気になったか、今にそのきつかけがわかりません。

(中略)

其読みはじめは、確か高木敏雄さんの「白鳥処女伝説」と言ふ様な題の論文が載つて居て、読みあぐねた覚えがあります。少年の能力と言ふものは、存外なものですから、或は今想像よりも幾分余計にわかつて居たのではないかと言ふ氣もします。

私の方向の厄介なのは、文学でなく、国文学でなく、更に其外の「国学」であつたことです。中学で譴責せられても、も一つずつと来なかつたのは、わからないながら「国学」を恃むと謂つた心持ちがあつたからではないかと思ひます。つまり国学の立つ所以の倫理感です。薄々之を感じて其を掴むことに、愉快らしいものを抱いて居たのだと思ひます。

(「国文学以外」昭和十一年五月、「文芸懇話会」第一卷第五号『新全集』第三十三卷 二八四〜五頁)(傍線筆者)

明治三十年代における第一期の「帝国文学」に、山田檀椰子が、佐々政一の研究態度を非難した事がある。佐々さんが、江戸の小唄類を研究してゐるのに対して、さう言ふ卑小な文学を研究する事は意味がないと言ふのである。それに対して、相当弁難せられたのであるが、当時の学界が学界だけに、佐々さん自身、其為事の意義を十分に感じてゐながら、知識的には、相手の蒙を啓くだけの自信がなかつた。卑小な文学が持つ類型と、従つてそれに伴ふ前型・後型、その系統、その持つてゐる微弱な文学動機の追求、それから、さうした文学に普遍してゐる民族性——さう言ふ作品の上に捉へ易い日本文学の主題、作品以前からあつた動機が、作品時代にも残つてゐて、文学・非文学の間に続いてゐるもの——さふいふものゝ存在に、佐々さんは最も早くから、心づいてゐた一人だつたのである。併しその頃はまだ、日本文学の考へられる範囲は狭かつた。佐々さんの心の内にすら、自ら江戸末期の好事家の学問に類するものとしてのひげ目が感じられてゐたのである。

(「日本文学研究法 序説」昭和二十六年三月、『日本文学講座』第八卷 『新全集』第五卷 三八四〜五頁)(傍線筆者)

『帝国文学』に言及した部分であるが、折口が自身の発言の中で『帝国文学』に言及するのは、この二ヶ所だけである。しかし、ある意味では、この二ヶ所の発言から受けとれる彼と『帝国文学』との関わりは、むしろ無視できないものがある。⁽⁴⁾

注目すべきところは、毎月月極めでとっていたという事実、そして二番目の文章のなかで、極めて詳細に佐々政一の論文内容に言及している点である。この文章は、晩年（昭和二十六年）に書かれたものだが、長い年月を経てもこれだけのことを記憶しているということは、折口にとってきわめて重要な記憶であったことを示している。

ここで折口が言う「佐々政一（醒雪）の論文とは、「謡ひ物の変遷」「小文芸の研究」等の一連の論考であったが、こうした詳細な記憶は、『帝国文学』をかなり真剣に読んでいたことを物語っている。特に謡いものに関しての記憶は、折口が当時から「謡いもの」、つまり音声的要素を持つ文芸、折口のことばを借りれば「非文学」的なものに強い志向と関心を抱いていたことを窺わせている。

次ページ以降の表は、『帝国文学』について、折口が購読を始めたと推測される第四卷（明治三十一年）から第十二卷（明治三十九年）までの内容を概観し、あらかじめ収録論考、記事からその特徴的要素（あるいは論考の方向性を示す領域的キーワードといってもよい）を見出し、それぞれの要素が論考、記事にどのように出現しているかを示したものである。⁽⁵⁾ 設定した要素は、以下のとおりである。

A列：文学・言語の音楽的要素・音声への偏倚要素（A1）

言文一致問題（A2）

漢字廃止・国字改良問題（A3）

B列：文学的要素（発生）（B1）

国学（B2）

表『帝国文学』(第4巻～第12巻)収録論考・記事における特徴的要素

巻	号	論考記事表題	著者	要素
4	1	謡ひ物の変遷 (1)	佐々政一	A1B1
		古代文学に於ける婦人の地位	高楠順次郎	C1
	2	方言に就て (1)	保科孝一	D1D2
		3	謡ひ物の変遷 (2)	佐々政一
	箏曲の調子及其曲節につきて		宮尾木知佳	A1
	方言に就て (2)		保科孝一	D1D2
	4	再び箏曲の調子及其曲節につきて	富尾木知佳	A1
		日本古代の俚諺	雑録	C1D1
		俚諺の収集と其研究	(雑録)	D1
	5	方言に就て (3)	保科孝一	D1D2
		都風及び田舎風	早川漁郎	D1D2
	6	方言に就て (4)	保科孝一	D1D2
		宗教に関する俗諺	藤井乙男	C2D1
	7	方言に就て (5)	保科孝一	D1D2
謡ひ物の変遷 (3)		佐々政一	A1B1	
8	日本国字論 (1)	岡田正美	A3	
	宗教に関する俗諺に就き	大谷正信	C2D1	
	詩形と声楽	(雑録)	A1	
9	日本国字論 (2)	岡田正美	A3	
10	謡ひ物の変遷 (4)	佐々政一	A1B1	
11	日本音声考 (1)	岡沢鉦次郎	A1	
	12	日本音声考 (2)	岡沢鉦次郎	A1
		謡ひ物の変遷 (5)	佐々政一	A1B1
5	2	謡ひ物の変遷 (6)	佐々政一	A1B1
		謡ひ物の変遷 (7)	佐々政一	A1B1
	3	俚諺に就て	雑報	D1
		4	詩歌と楽曲	(雑報)
	偏狭なる国学論		(雑報)	B2
	5	神話と戯曲	(雑報)	C2
		珍奇なる神代史論	(雑報)	C2
		高山氏の古事記論	(雑報)	C1
	6	日本音声考え (3) 附P音考斥排	岡沢鉦次郎	A1
		日本の文学史	(雑報)	B1
		アストン氏の日本文学史	(雑報)	B1
7	文学史研究の態度	(雑報)	B1	
	地方文壇振興の期	(雑報)	D2	
8	素盞鳴尊の神話伝説	姉崎正治	C2D1	
9	素盞鳴尊の神話伝説 (2)	姉崎正治	C2D1	
	神話研究における言語学	(雑報)	C1	
11	素盞鳴尊の神話伝説 (3)	姉崎正治	C2D1	

		素尊嵐神論 (1)	高木敏雄	C2D1
		帝国教育会の国字改良部新設	(雑報)	A3
	12	素盞鳴尊の神話伝説 (4)	姉崎正治	C2D1
		素尊嵐神論 (2)	高木敏雄	C2D1
6	1	言語学派神話学を評して高木君の素尊嵐神論に及ぶ	姉崎正治	C2D1
	2	国文学にあらはれたる狐 (1)	芳賀矢一	D1D2
		嵐神論不可能説に答へて自己の立脚地を明にす	高木敏雄	C2D1
		文学の史的研究	(雑報)	B1
	3	羽衣伝説の研究	高木敏雄	C1D1D2
		国字改良に関する二提案	(雑報)	A3
		神話学の論争に関する言語学の態度	(雑報)	C2
		「東北文学」批評	批評氏	D2
	4	国字改良は当今の急務 (1)	岡沢鉦次郎	A3
	5	国文学にあらはれたる狐 (2)	芳賀矢一	D1D2
	6	浦島伝説の研究	高木敏雄	C1D1D2
		国字改良は当今の急務 (2)	岡沢鉦次郎	A3
		羽衣伝説数種	上田敏	C1D1D2
	7	十九世紀音楽を論ず	上田敏	A1
		琉球に伝はれる羽衣伝説	岡倉由三郎	C1D1D2
	8	国字改良は当今の急務 (3)	岡沢鉦次郎	A3
		羽衣伝説拾遺	新村出	C1D1D2
		国字改良論の批評	(雑報)	A3
	9	国字改良は当今の急務 (4)	岡沢鉦次郎	A3
	11	国字改良は当今の急務 (5)	岡沢鉦次郎	A3
	支那詩歌に見えたる叙事詩技巧の発達 (上)	久保天随	C2	
12	支那詩歌に見えたる叙事詩技巧の発達 (下)	久保天随	C2	
7	1	津軽方言考 (1)	松本円次郎	D1D2
	2	津軽方言考 (2)	松本円次郎	D1D2
		短歌の詩的価値に就て (1)	樋口秀雄	A1B1
	3	日本説話の印度起源に関する疑問	高木敏雄	B1C2D2
	4	津軽方言考 (3)	松本円次郎	D1D2
	5	支那小説の起源を論ず	藤田劍峯	B1
		大国主神の神話 (1)	高木敏雄	C1C2D2
		短歌の詩的価値に就て (2)	樋口秀雄	A1B1
		津軽方言考 (4)	松本円次郎	D1D2
	6	大国主神の神話 (2)	高木敏雄	C1C2D2
		言文一致の文字に就ての希望	(雑報)	A2
	7	大国主神の神話 (3)	高木敏雄	C1C2D2
		国字改良当今の急務 (6)	岡沢鉦次郎	A3
	8	国字改良当今の急務 (7)	岡沢鉦次郎	A3
	院本に見えたる諺	堀田次郎	C1D1	
	言文一致通分・言文一致文例	(雑報)	A3	

		9 神曲の由来及び趣旨	上田敏	A1B1
		幼年唱歌・日本遊戯唱歌	(雑報)	A1D1
		11 諺の発生及び変遷 (1)	藤井乙男	B1C1D1
		12 諺の発生及び変遷 (2)	藤井乙男	B1C1D1
8	1	万葉思想の特色 (1)	高津敏三郎	C1
		メレジュコフスキーの大作	愛天生	C2
	2	万葉思想の特色 (2)	高津敏三郎	C1
	3	万葉思想の特色 (3)	高津敏三郎	C1
		言文一致文例	(雑報)	A2
	5	日本神話学の歴史的概観	高木敏雄	B1C2
	6	万葉集略解編成の事情	関根正直	C1
	9	日本神話学の建設 (1)	高木敏雄	C2
	10	日本神話学の建設 (2)	高木敏雄	C2
	11	日本神話学の建設 (3)	高木敏雄	C2
	9	2	日本神話学の建設 (4)	高木敏雄
3		万葉集の諸本及び注釈書類	上野紀士	C1
4		日本歌謡史に於ける組織の起伏	佐々醒雪	B1D1
		明和改訂の謡本について	関根正直	D1
5		日本神話学の建設 (5)	高木敏雄	C2
7		日本神話学の建設 (6)	高木敏雄	C2
9		国学の再建	(雑報)	B2
10	日本古史神話学概論 (1)	高木敏雄	C1C2	
12	神代巻に現はれたる宇宙並に人生の思想 (1)	堀重里	C1	
10	1	田楽史考	鈴木暢彦	B1C2
		詞の発達及び変遷 (1)	久保得二	A1B1
		日本音楽の将来	川上捨次郎	A1
		希臘古劇とわが国の能楽	芳賀矢一	C2D2
		楽話	上田敏	A1
		古事記の一節に関する私疑	金沢庄三郎	C1
		傾城島原蛙合戦の材料に就て	高木敏雄	D1D2
	2	詞の発達及び変遷 (2)	久保得二	A1B1
		日本古史神話学概論 (2)	高木敏雄	C1C2
		神代巻に現はれたる宇宙並に人生の思想 (2)	堀重里	C1
		詞の発達及び変遷 (3)	久保得二	A1B1
		楽譜の発達	石倉小三郎	A1
	5	標準語の制定と国語調査の方針 (1)	岡沢鉦次郎	D2
		詞の発達及び変遷 (4)	久保得二	A1B1
		神代巻に現はれたる宇宙並に人生の思想 (3)	堀重里	C1
		田楽史考	鈴木暢彦	B1C2
	6	日本古史神話学概論 (3)	高木敏雄	C1C2
		標準語の制定と国語調査の方針 (2)	岡沢鉦次郎	D2
		詞の発達及び変遷 (5)	久保得二	A1B1

		元禄時代軽く知ばなし	(批評)	D1
	7	神代巻に現はれたる宇宙及び人生の思想 (4)	堀重里	C1
		標準語の制定と国語調査の方針 (3)	岡沢鉦次郎	D2
		古史神話学概論 (4)	高木敏雄	C1C2
		千島樺太侵略史	(批評)	D2
	8	諺に就いて (1)	虎石恵美	C1D1
	9	諺に就いて (2)	虎石恵美	C1D1
	10	日本古史神話学概論 (5)	高木敏雄	C1C2
	11	(小泉八雲特集)	諸氏	C1C2D1
	12	日本古史神話学概論 (6)	高木敏雄	C1C2
11	1	朝鮮の神話	坪井九馬二	C2D2
	4	声乐を籀る詩形と新楽式	吉田豊吉	A1
		国民文学史の編述べに就て	(雑報)	B1B2
		人身御供に就いて (1)	長谷川福平	C2D1
	5	人身御供に就いて (2)	長谷川福平	C2D1
		非曲新浦島 (上)	鼎浦漁史	A1
		田舎世界	梧桐夏雄	D2
	6	非曲新浦島 (下)	鼎浦漁史	A1
7	叙事詩の新形式	鼎浦漁史	C2	
11	国文学と天人説話	鈴木暢彦	B1D1	
12	1	七福神の話	芳賀矢一	D1
		郡の語源	金沢庄三郎	C2D2
	2	日本民謡概論	志田義秀	D1D2
		漢呉音図斥非	高橋富兄	A1C1
	3	国民的叙事詩としての平家物語 (1)	生田弘治	B2C2D2
		日本民謡概論 (1)	志田義秀	D1D2
	4	郷土芸術論 (1)	片山正雄	D1D2
		国民的叙事詩としての平家物語 (2)	生田弘治	B2C2D2
		漢呉音図斥非万葉集字音弁証排斥	高橋富兄	A3C1
	5	郷土芸術論 (2)	片山正雄	D1D2
		日本民謡概論 (2)	志田義秀	D1D2
		国民的叙事詩としての平家物語 (3)	生田弘治	B2C2D2
	6	駁万葉集字音弁証排斥論	木村正辞	A3C1
	7	松浦佐用姫の伝説	吉岡郷甫	C1C2D2
	8	室町時代の小唄	高野斑山	D1
	9	酒顔童子の伝説に就いて (1)	長谷川福平	D1D2
		日本民謡概論 (3)	志田義秀	D1D2
	10	酒顔童子の伝説に就いて (2)	長谷川福平	D1D2
11	肉霊の関係	メレジコウスキイ	C2D1	
	越中資料	(批評)	D2	
12	再斥駁万葉集字音弁証排斥	高橋富兄	C1	
	小野お通	須藤求馬	C2D1D2	

C列：古代・古代文学（C1）

神話・叙事詩（C2）

D列：民俗・伝説・民謡・俗語・俗諺など（D1）

地方・周縁（D2）

これらを参考に『帝国文学』の収録論考、記事にどういった傾向が認められるかを検討してみよう。折口が読んだ佐々政一の「謡い物の研究」が載る第四卷第一号から見ると、この時期の『帝国文学』は、たとえば「謡い物の研究」に代表されるような、文学と音声とが密接にかかわる領域（非文学）への志向性が巻を追うにつれて強くなっていく。

一方、言語の領域においては、「言文一致」とそれにとまなう「国字改良問題」「漢字廃止論」など、文字よりも音を優先する発想を伴い、さらにそこに「庶民性」「民衆性」というものをことさらに見つけようとする志向を抱え込む傾向が、この時代における一つの主調音をなしていたといっても過言ではない。

さらに、古代あるいは始原への志向性が顕著になってくる。それらもまた「民衆」という概念によって色づけされて、文学と民衆とが直接的に結びつけられる場として「民間伝承」という考え方が登場してくる。そのことは「羽衣伝説の研究」（高木敏雄）「素盞鳴尊の神話伝説」（姉崎弘治）といった神話研究、文学の始原を考える論考を導き、神話を古伝承とするか歴史とするかといった論争を引き起こしてさえている。さらにいえば、地方や周縁への興味が現れてくるのも特徴的である。

このように、音声、始原、周縁、民衆といった観念が渾然と交じり合いながら、明治三十年代の『帝国文学』の一つの学問的傾向を示していると考えられる。これらの要素に向けられた志向性は、明治期の「国民国家」成立の道筋と無縁ではない。「日本」というアイデンティティを空間的・時間的枠組みで規定しようとする志向は、「日本文学史」

というものを編成する機運とも結びついている。

たとえば、『帝国文学』誌上においても、第一巻第一号から「日本文学の過去及び将来」（井上哲次郎）、「文学史編纂方法に就きて」（界川）、「史学と文学」（坪井九馬三）、「文学史の著述」など「文学史」にかかわる論考が目白押しに発表され、本誌が「文学史」編成という課題をも担っていたことが窺える。とくに、「文学史編纂方法に就きて」には、次のような記述があつて、「文学史」というテーマが「音、始原、周縁」によつて串刺しにされていることがわかる。

国民思想の煥発する初めより悉く文字に由て表彰され居るものに非ずして人口に膾炙する伝説、讃歌、俗諺、俗謡の如きも詩人の之を採輯して文学に表彰するときは国民文学の範圍に入るべきものにして其の文学史に於ける価値は毫も高潔なる詩文に譲る所なきなり。

（界川「文学史編纂方法に就きて」『帝国文学』第一巻第五号、明治二十八年五月 一三頁）

このように、当時の代表的雑誌であつた『帝国文学』、特に折口が熱心に購読していたところは、言語・文学の音楽的要素、始原、周縁という三つの大きな潮流が支配し、それらが文学史というテーマを貫いていたということができるのである。

「語部論」の揺籃と周縁への志向性と

そもそも折口信夫の研究の最初の集大成である『古代研究』が構想されるきっかけとなつたのは、「語部」の存在証明への希求であつた。『古代研究』「追ひ書き」には次のような一節がある。

語部なる部曲については、古史伝以外には、まだ明確な、記述も研究もなかつた。ある時、重野安禪博士の国史総覧稿の出版に臨んで、何かの意味を持つて催された後援会で、始めて偶像破壊者と謳はれて来てゐた翁の口から、語部の話を聞いた時は、此部曲の職掌について、一点の疑ひもない定説が、発表せられたものだと思つた。

其と共に、我が古代社会の指導力としての詩のあつた事を知つて、心躍りを禁ずる事が出来なかつた。(中略)
 文献の上の証拠は、幼稚な比較法によつた語部の職掌や、社会的地位に關した仮説を、殆、覆し尽した。けれども、私の古代研究は、此仮説を具体化しようとする努力に基いてゐる所が多い。(傍線筆者)

〔『古代研究』追ひ書き〕、『古代研究』民俗学篇Ⅱ、昭和五年六月、大岡山書店、『新全集』第三卷 四七四〜五頁〕

重野安禪が、『国史総覧稿』卷之一(明治三十九年、静嘉堂)刊行を記念した講演会において、「語部」の職掌などについて講じたのは、明治四十二年五月十二日であつた。この講演会を折口が聞いたことはこの記述によつて、ほぼ明らかである。しかし、高橋直治が指摘するようにこの講演会が折口の語部の存在証明へ乗り出すきっかけとなつたとは明らかであるにしても、この講演会そのもの内容から、先に引用したように「仮説の具体化」という道筋は即座には見えてこない。後援会の内容は、重野の手元に残されていた筆記を基に、後に『重野博士史学論文集中卷』に「神代」と題して収録されるが、それを見ると、この講演会における語部に關する重野の言及は、活字にして僅か千五百字程度、折口がいうところの「一点の疑いのない定説が発表せられた」というには、あまりにもダイジェストに過ぎるのである。

この講演会において重野安禪が語部に就いて述べた内容は次の三点に要約される。

- 1、語部と云うものが古来の伝説を語り伝えていくこと。
- 2、語部の故事を語るに、淨瑠璃語、平家語のごとき節を附したこと。
- 3、語部の語り伝えたものを書いたものが古事記、日本書紀であること。

確かに、「語部」についての基本的な考え方はこの三点が骨格となる。しかし、この講演の内容には、後に折口が抱えこむことになる「うたふ」と「かたる」とを架橋する方法は示されておらず、特に万葉集人磨呂歌の問題、つまり万葉歌を対象として語部論に接近しようとした「万葉談義」から、本格的に「語部」について論じた最初の論文「国

民詩史論」へと至る折口の思考の道筋は、この講演会の内容のみからは見出せない。折口が自らの方向性を見出すに至った転機という意味においてこの講演会が重要であったことは確かであるが、むしろ、このあとの折口の行動と思考にこそが、語部論の展開にとって基本的な意味があったのではないかと考える。

折口は、この講演をきっかけとして、「語部」の存在を確信した。しかし重野は講演のなかでは、その存在理由について言及していない。折口にとって、それはやや不満であったはずである。彼は当然、講演の元になった『国史総覧考』を直ちに閲覧したに違いない。

講演の直後、明治三十九年の年譜に、上野の帝室図書館に通って古典部の書籍を片っ端から読破し、それが新聞記事になった、とある記述は、この講演に触発された折口が、「語部」の存在証明というテーマにのめりこんでいったことを示すのではないか。上野の帝室図書館で折口が何をどのように読んだかはいまや知るよしもないが、『国史総覧稿』そのものを閲覧していた可能性は十分にある。この本については、一般にはほとんど配布されなかったといわれているからである。⁽⁶⁾さらには、その後の彼の行動と問題意識とを考えるならば、重野安禪の講演に触発されて上野に通い、おそらくは「語部」を史料上証明しようとした重野安禪の説を確認するため、そしてそれ以上の資料を見出すために、古典籍を様々に読み込んでいたとみるのが、最も穏当な道筋であろう。

折口は、この講演から「語部」の存在との論の基本的な方向性を見出したことは事実であろうが、さらにそこから進んで、「語部」の存在証明のための理論構築に向かっていたと見るべきである。

さらに講演の後半に発せられた重野の次の言説にも着目しておきたい。

言葉は諸国から参つた言葉もあります。又天然に我国に湧いたる言葉もあります。その差別無き国の言葉はどの辺から来たか、どの辺の国の言葉が日本に這入つて居るかと云ふことは、是は余程研究すべきことであります。(中略)朝鮮は殊に我国とは親しい。神代よりして其の通りでありますから、其の時分から朝鮮の言葉がこちら

に移り、或はこちらの言葉が朝鮮に移つて居るに相違ない。だに依つて朝鮮の言葉は最も講究すべきことであると思ひます。(中略) 或は琉球等の言葉も、皆是は参考になるに相違ない。

(重野安禪「神代」、大久保利謙編『重野博士史学論文集』中巻、昭和十三年五月、雄山閣 二六六―七頁)

朝鮮語をはじめとして列島周縁の言葉の重要性を述べた部分であるが、折口のも後の行動を見ると、むしろこの部分についても、この講演における重野安禪のことばが、折口に大きな影響を与えたことを知る。翌年(明治四十年)の年譜には、「金澤庄三郎に朝鮮語を習い、東京外国語学校の夜学で蒙古語を学ぶ。」とあつて、朝鮮語を真剣に学ぼうとする姿を見ることが出来る。さらに、これは大正年間に入つてのことであるが、彼が琉球へとそのままざしを転換させるきっかけも、この重野の発言と無縁ではなからう。加えて「言語情調論」をはじめとした初期の彼の言語学への接近も、高橋直治が指摘するように方法的には西洋言語学の方法論から影響を受けたとはいへ、その基本的視座は、周縁言語と日本語のかかわりということにあつたと思われる。

つまり、言語への親和、そして周縁言語であるアイヌ語、朝鮮語、琉球語へのまなざしも、重野安禪が指摘したことがらを忠実に実行していたということが出来る。その真剣さは、彼が残した朝鮮語ノートや琉球語を記した手帖にも如実に現れている。折口が卒業論文に「言語情調論」を選び、その最初の論文「わかしとおゆと」にも、朝鮮語への言及があるのは、こうした流れを背負つてのものといえる。

「万葉談義」

さて講演を聞いた直後に折口は「万葉談義」を執筆する。この論文は、折口のもとまつた論考の中では最も早い段階のものだが、後半が箇条書きのメモといった体裁で、未完成という印象が強い。以下はいずれも「万葉談義」の中の一節(傍線筆者)。

「一体上古の歌は皆謡つたのであるが、万葉集の出来た頃にはもう見る歌がはじまつて居たのである。」

さうであるから、この時代に出来た挽歌の如きは、必ず棺の前又は墓の前でうたはれたものでなければならぬ。

この歌は人麿がたゞ自分の哀傷の情をあらはすために作つたのではなく、殯宮で多くの人のうたふ為に作つた歌と解釈するのが適当である。

この歌の中に、檀乃丘、佐太乃岡^{サダノ}など、いふ地名の見ゆる点、或は廿三首を通じての歌の有様を見ると、岡宮天皇（即日並皇子）の御陵を舍人等が守りながらうたつたものと考ふるのが正当である。即人麿の長歌は、殯宮でうたつたもの、この短歌廿三首は陵の前でうたうたものといふことになる。

謹厳、高古、雄渾、高踏独歩といふ姿はこの作者に古代歌謡（広く祝詞、語部の伝へた古伝説——謡物の形式を具へた——のやうなものをもこめていふ）の修養があつたことを証して居る。

（「万葉談義」、『八少女』第二卷第五号、明治四十二年八月、『新全集』第六卷 二八四〜六頁）

「歌は皆謡つた」と言う断定から論が始められている。

この論文には、日並皇子の挽歌二十三首が宮廷歌人柿本人麻呂によつて作られたものであるという、当時としてはきわめてユニークな論が展開されているが、重要なのはその点よりもむしろ、「上古の歌は皆謡つた」「挽歌の如きは、必ず棺の前又は墓の前でうたはれたものでなければならぬ」とことさらに断定する箇所である。

ここで指摘しておかねばならないことは、「うたふ」という行為が、人麻呂を仲立ちにして、「語部」と直接的に結び付けられて視野に入れられている点である。「語部」の素養、折口に言わせれば「祝詞、古伝説のやうなもの」も含めた古代歌謡の素養を持った人麻呂を介在して、「うたふ」と「かたる」この二つの問題が同じ地平で考えられている。ここでは「歌」という用字は意識的に避けられており、「うたふ」と仮名で書くか、あるいは「謡ふ」と標記する事からも、「歌」という用字が抱え込んできた「読むもの」としての観念を極力排除しながら、「語る」と「うた

ふ」との通行関係を暗示させている。この際に「謡」という字を用いているのは、『帝国文学』における佐々政一の「謡ひもの」という用語あるいは志田義秀の「民謡」に関する論考などから意識せられてきた用語であることは間違いない。そこからは、いわゆる文学という領域に入る前の「曲節」を持った「非文学」の存在に対する認識がほの見える。

「音・声」に対する志向性。相当のしつこさで「古代の歌」と「音声」がセットであり、うたわれたものだと強調する。「必ず謡われたはずの歌、音楽的条件、音楽的要素、律文」といったことはが横溢する文において、「耳と口」を主体とする言語行為によってのりづけされて始原に定位されるべく、「語部の伝へた古伝説のやうなもの」が提示されてくる。もちろんその底流にも、音声主義とでも言うべき思考が濃密に横たわっている。折口の断定的な物言いの基盤には、音声に対する絶対的な信頼、始めに音声ありきというある確信が捉えられているように見える。こうした音への絶対的信頼というもの、そしてそれが始原を語る意志と分かちがたく結びついている状況は、先ほどから見えてきたように『帝国文学』を初めとした同時代の学問的潮流と決して無縁ではなく、むしろ折口はそれを積極的に受け入れているといえるべきなのである。

また、人麻呂には「古代歌謡の修養があつたことを証している」とし、その根拠として二十三首の歌には「謹厳、高古、雄渾、高踏独歩」がそなわっていると指摘する。そしてそうした性格こそ、祝詞、古伝説のやうなものに認められる特性である。つまり「うたはれるもの」としての性格がかくのごときであるという把握、読みが「かたりごと」とは何かという問いをほらみながら、語部論への重要な架け橋となっていく。

さらにあえて割注をして、それらが「謡物の形式を具へた」ものであると断っている。つまりこの一連の文章は、「古伝説を伝へるものは語部である」「それは曲節を有してゐた」ということ、そして、「語部」の存在と万葉集の人麻呂歌とを結び付ける考えを、はじめて明らかにした文章であった。折口にとつて「古代歌謡」とはいわゆる一般的

な意味での「古代歌謡」ではなく、「謡物の形式を具へた古伝説あるいは祝詞」のようなものでなければならぬ。つまり「語部」が伝えた律文形式の「謡ひもの」である。謡物の形式を具えているがゆえに「歌謡」なのである。これはのちに、「叙事詩」ということばを獲得してゆくにつれて、また異なった様相を呈していくが、ここではまだ、「叙事詩」という語の意義についてはまだ十分に發揮されていない。しかし折口は、万葉の歌と語部論とがある脈絡をもつて見通すことが出来ることを、「万葉談義」において初めて指摘したのである。

「語部考」の内容

「万葉談義」においては、「語部」について言及する箇所はわずか一箇所、「この作者（人麻呂―筆者注）に古代歌謡（広く祝詞、語部の伝へた古伝説―謡物の形式を具へた―のやうなものをもこめていふ）の修養があつた」と述べるくだりだけで、「語部」について論じているというより、人麻呂歌が「うたわれた」ということの傍証として、「語部」の存在が持ち出されているだけである。内容としては重野の講演を出るものではない。

つまり「万葉談義」においては、「語部」は視野には入っているが、しかしいまだ研究の対象としてのテーマとは十分なりえていないことを示している。

これに対して、後に発表される「国民詩史論」においては「語部」について重野の「語部考」を十分に消化し、それを批判する立場に立っている。

「国民詩史論」の検討に入る前に「語部考」について検証しておこう。

「語部考」は、さまざまな資料を博搜して「語部」に少しでもかかわる記述を拾い集め、それらに注釈を加えながら「語部」の存在を明らかにしようとしたものである。⁽⁸⁾

「語部考」は、まず「上古ノ事ハ語部之ヲ言ヒ伝フ」と題して、

上古ノ事跡ヲバ如何ニシテ伝ヘケムトイフニ語部トイフ者アリテ語り継ギ言ヒ伝ヘタルニゾアリケム。專業ノ人アリテ口語ノ正伝ヲ熟習シ、之ヲ後世ニ遺シ伝ヘタルナリ。ソノ事業ノ人ヲ語部ト称セリ。

（「語部考」第三十三丁『国史総覽稿』卷之二）明治三十九年 静嘉堂

と「語部」の存在を指摘した後、「延喜式」「儀式」「北山抄」「江戸次第」「出雲国風土記」「日本紀」「東大寺正倉院文書」「姓氏録右京神別上」などにそれぞれ「語部」「語ノ臣」「語ノ造」といった記述が見えることを検証する。そして朝妻の手下龍麻呂に海語ノ連を賜った故事を上げて、語部は天神の故事としての天語、神語を伝えるものとした。ここで、八千矛神の神語歌を例に挙げて「ことのかたりごとをこをば」についての「こと」と「かたり」という問題についていささか言及している点に着目しておく。

次に「語部ノ語言ニハ音調アリ」として、

語部ガ語リツタフル様ハ、物ニ見ヘネバ知ルニ由ナケレドモ、思フニ言詞ヲ調ヘ曲節ヲ面白クセシナルベシ。

（「同」第三十五丁）

と述べ、「語部」の伝える「語言（かたりごと）」と音声との関係を示している。そしてその根拠として「北山抄大嘗会ノ条」「三代実録」をあげる。

さらには「語部ノ語言今ニ存スル」とし、「国引キノ語言」は上世の語言であること、「語部」の語言が永徳の大嘗祭まで行われた形跡があること、永享の大嘗祭には語言が廃れたこと、土御門天皇の大嘗祭から「大嘗会廢セラレ語部ノ語言竟ニ絶」えて二〇〇年がたつことなどが、豊富な史料の読解から導き出されている。

そして、「語部ノ語言歌詞トナル」という条では

語部ノ語言ハ後ニ又歌詞トナリテ伝ハリシト覺シ。ソハ古今集ニ大歌所ノ御歌ト云フアリ、（中略）此大歌所ハ神樂風俗等ノ歌ヒ物ヲ司レル官人、其外歌人等ヲ召シ置ケル所ナリ。

（「同」第四十丁）

として、「語部」と大歌所との関係に言及、さらには八千矛の神の神謡を初めとした「古事記」「日本紀」に見える長歌、いわゆる古代歌謡は「ことのかたりごとをこをば」で示されるがゆえに、後々まで歌詞に上せて伝えるべし、とする意味であり、歌謡に音節が付されてあつた証拠であるとした。

重野の理解においては、史料に「奏す」とあり「其音祝詞ニ似テ又歌ノ声ニ渡ル」「其ノ声神歌ニ似テ遅ク」「早歌ヲ奏ス」（いずれも「北山抄大嘗会の条」等といった記述から（「同」第三十五丁）、「語部」が語る「こと」が歌と同じような曲節を持っていたと結論付けていく。

つまり「うたふ」と「かたる」とは、何の疑問もなく直接的に結び付けられており、語ると歌うはほぼ同じ語義として単純に理解されている。このことは、重野安禪の「語部考」が、多くの資料の記述を博捜することによって、語の有無によって語部の存在とその語りに「節」が付されて居る事を立証しようとし、古代における「うたふ」と「かたる」という用語の微細な差異性と広がり、つまりは言葉の持つ情調というべきものに思いが届かなかつたことに起因する。

これに対して折口は資料による立証という手段をとらなかつた。もちろん先にも指摘したように、さまざまな資料を帝室図書館で博捜し、それをわきまえたうえでのことだと思われるが、折口は「音声」という一点を中心に据え、そこから発想しようとした。さらには、「うたふ」「かたる」という二つの用語のかかわりを見極めようとした。つまり語りに節がついているのであるすれば「なぜ節が付されなければならないのか」という疑問である。そして、それが「伝承」されるということはどういうことか。語りが伝承されるためには

伝承される必然性（なぜ伝承されなければならないか）

伝承される方法（なぜ音声的要素が必要か）

この二つが満たされなければならない。折口はこの二つを解決することによって、蓋然的に「語部」の存在が認め

られなければ、「古事記」、「日本紀」に残された伝承は伝えられなかったはずだ、と云う展開法を導こうとしたのである。

音節とそれをもって語ることをなりわいとする「語部」の存在理由については、重野は文字の不在を根拠としている。しかし折口はその説は採らなかつた。その辺りのことは、「国民詩史論」について言及する段で述べる。

「万葉談義」では、先にも述べたように、「語部」の存在理由については、重野の見解をほとんど出ることがない。折口は「万葉集」の歌と「語部」との脈絡をつけて考え出しただけといえる。「万葉談義」の発表は明治四十二年八月、重野の講演を聞いて後、三年を要したことは、その間に言語情調の問題、「うたふ」「かたる」といった、ことばそのものの持つ情調に同縁言語とのかかわりの中で解決をつけておかねばならない必要を感じたからであろう。

ノート 「語部の説」

この時期のものと思われる、折口の問題意識をうかがわせるノートが存在する。「語部の説」と題したノート四ページ分に記述した覚書で、執筆年代を知る直接的手がかりは示されていないが、記された内容と問題意識のありようから考えて、少なくとも、重野の講演を聞いた後のものと考えられる。おそらくは、「語部考」の解説から「国民詩史論」執筆へとつながる資料として位置づけられるのではないか。その主たる根拠は、「語部」そのものの究明へと踏み出していること、重野安禪の見解をうのみにせず、それを確認してさらに推し進めようとした形跡が認められること、結果、折口の独創的な見解が示されていること、そしてこのノートで示された見解をさらに敷衍したものが「国民詩史論」の各章段に展開されていると思われること、などからである。短いもので全文を示しておこう。ゴチックで示した部分は、後に折口自身の手によって加筆された箇所である。□□は判読不明の文字を示す。

語部の説

(一) 語部 語るの分解的研究 こと かたといふ語

(二) 物語。かたり物(叙事詩)

(三) うたふとかたるの上代の外延研究

語部は□□に出てるか 風土記と古事記

(四) 万葉集 すそみづらよさみの原に人もあてなむ さゝなみのあふみあがたのものかたりせむ の物語の意味

(五) 語部の職掌(かたりつぐといふ語の特殊的)

西洋の古国(羅馬の如き)においてホメロスの詩篇を暗誦せしめて貴族の子弟に故事・歴史・其他教訓をさづけたることあり

(六) わが国にても帝室豪族等にそれぞれ子弟の教育者ありて、叙事的詩篇をさづけ種々の智識(国民として上流人士として必要なる社会的智識)即伝説、歴史、故事、教訓その他種々の事情を授けしに似たり

古事記冒頭にみとのまぐはひの伝説あるは貴族子弟にとつぎをしへをなすこと
かの後世おそくつの魚をすゝむるとおなじく重要な知識なれば也。その他(叙事詩の)諷諭話教訓話的の性質十分見えたり

(七) 子弟教育がもとか歴史伝統の文字なきより発せしがもとか容易に定めがたし

(八) 平田篤胤式の語部を女なりとする説 然らば乳母との関係を見るべし

ハシヒト

(九) 古事記は諸家のかたりの綜合なり

稗田阿礼の所屬(帝室にか)

(八) その編さんには一つは更に之を定本として子弟を教ふる目的もありたらむ

(十) 野蠻人の家族のかたりと日本の語部のかたりと

(十一) 語部の世々つぐハ世襲部曲制の時代なれどある家に対して子弟の教育者も亦世襲なるべきは当然也

(十二) 文字あつて後の語部

「聞きつぐ人のかたりつぐすね」の意味

英雄譚中の人たらむとする也 此れ英雄譚の多き理由にして英雄譚の貴族子弟教育に重大なる意義ありしこと

(十三) 万九、葦原処女墓をよぎる歌

わがたち見ればながき世のかたりにしつゝ後人のしぬびにせむとたまほこの道のへちかくいはかまへつくれる塚を

(十四) 志斐姫 万葉の(かたれかたれとのらせこそ)

(十五) 家々によりて悉くその家に関係あるかたりのみ伝ふといふは不可也

上流社会の子弟教育は必ず普通のかたりあり志可もある家々によりてその家々のかたりもありしは教訓としてその塚を重んずる心を発せしむるためなれば勿論ありしなりかつある家の語部と他のある家の語部のかたる所との間には

イ 社会的——○ (個人的) ——

ロ 社会的——○ (即家族的) ——家族の語部が伝へざる社会的のものといふが如き関係を見む

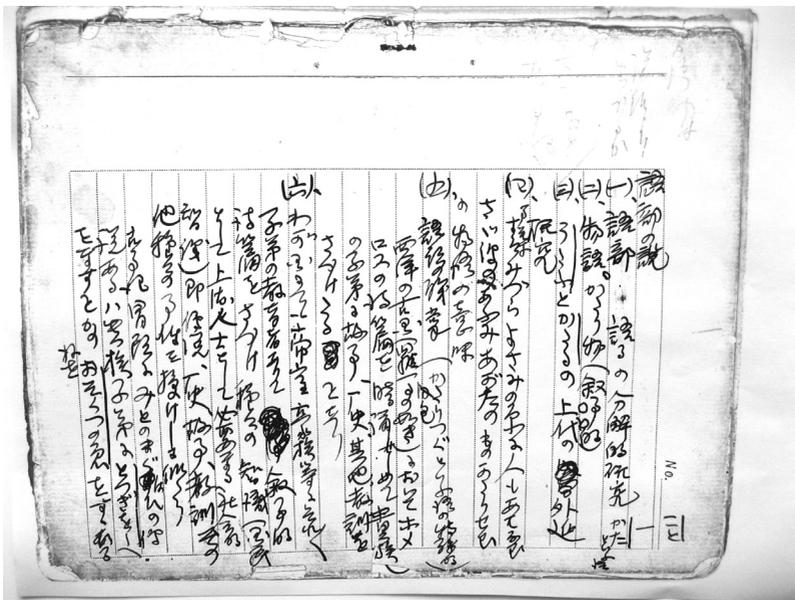


写真16



写真17

写真16-17 ノート「語部の説」

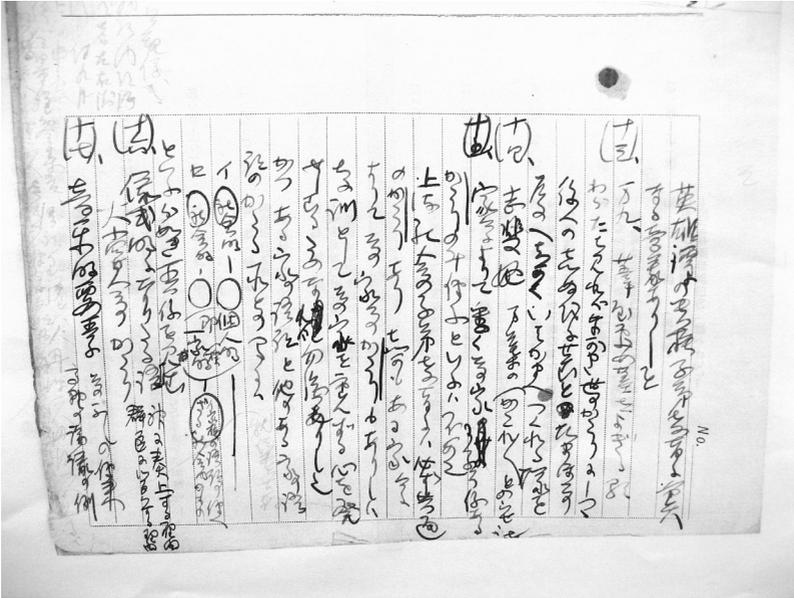


写真18

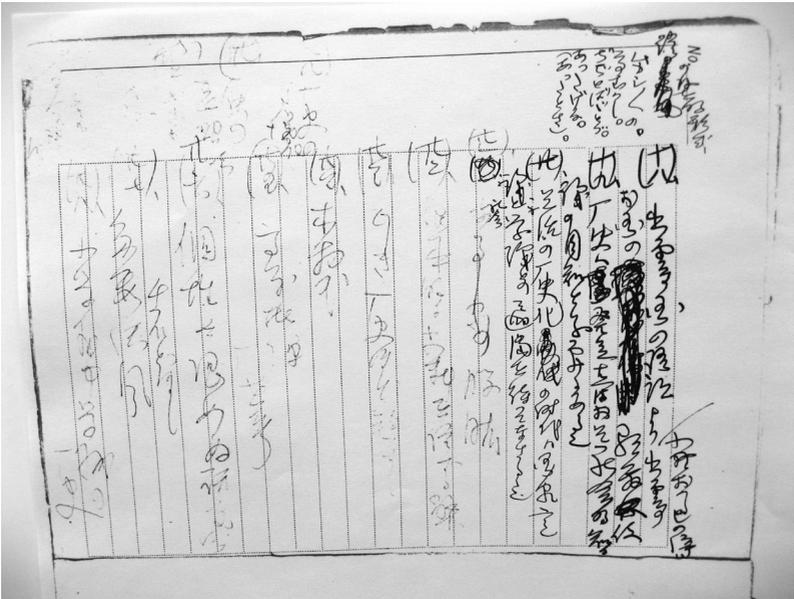


写真19

(十六) 儀式的になりたる語

神に奏上する理由

群臣に聞かす理由

大嘗会のかたり

(十七) 音楽的要素

そのふしの伝来

高野の福縁の例

貞観儀式

物部門部語部者左右衛門府九月上旬申官預令量程參集云々

語部美濃八人丹波二人丹後二人但

馬七人因幡三人出雲四人淡路二人・・・就位奏古風

(十八) 出雲国の語部より小野おつうの浄瑠璃 出雲お国の歌舞伎

(十九) 歴史は発足点において社会的智識の周知といふ処にある也

(二十) 説話の歴史化の時代は国家意識と社会学識との口隔を待つてなざる也

(二十一) 好事家の股肱

(二十二) 根本的に支那を信じる弊

(二十三) 正しき歴史ほど疑わし

(二十四) □□式

(二十五) 高等批評

歴世考

(二十六) 個性を認めぬ研究法

千石どほし

(二十七) 多数決風

(二十八) 小学校中学校の歴史

(二十九) 歴史の伝説化

(三十) 歴史の表現法

(三十一) 国家中心より氏族中心に

(三十二) あまりにも合理的

(以上 写真16〜19参照)

最初に「語るの分解的研究」「こと」「かた」といふ語」「うたふとかたるの上代の外延研究」といった研究の方針が立てられている。

「こと」「かた」については、重野の「語部考」の中でも問題にされていた部分である。重野は、「神語」と題する条において、八千矛の神の神語を問題にしながら、「此謂之神語也」とした上で、

紀伝ニハ、カミゴトト傍訓セリ。天語ノ例ニ依ラバ、カミガタリト訓ムベキニヤ〔同〕第三十五丁

とあえて注し、「こと」と「かた」の問題を提示している。さらに「天語」の条においても同様の問題提議を行っている。ノート「語部の説」にある「こと」「かた」の問題は、この提議をさらに追求しようとしたものと見ることが出来る。ただ、「うたふ」と「かたる」の上代における外延研究という視点は、先にも述べたように、折口独自の展開を予想させるものだ。

さらにノートは、万葉集の「すそみづら」の歌を引用したのち、「語部」の職掌として

物語。かたり物（叙事詩）

語部の職掌（かたりつぐという語の特殊の）

西洋の古国（羅馬の如き）においてホメロスの詩篇を暗誦せしめて貴族の子弟に故事・歴史・其他教訓をさづけたることあり

と記述する。この「語部」の存在理由としての子弟教育という考え方は、「語部考」には見えない考えで、折口のオリジナルと考えられる。その後子弟教育についての言及を繰り返しているところから考えて、かれの語部論が、「万葉談義」からさらに展開する時期に、目安として書かれたものであることを証している。重野の理解をさらに延ばして、「語部」が西洋の子弟教育という観点での理解が進んでいる。ホメロスの詩篇あるいは叙事詩という概念は、重野からではなくむしろ『帝国文学』から得た知見であり、折口の語部論は、いわば重野安禪と『帝国文学』という二つの刺激の接点に重要な展開を見せたといえることが出来る。

このノートから読み取れる折口が目指すところは、「かたり」の本義、「うたふ」と「かたり」との関連、こうしたことを見出せば必然的に「語部」の存在証明になると考えた。資料を博搜して「語部」の文字を探し出しているのではなく、資料の中から「意義」を発見し、それを読み取ってくる後の折口流の資料操作術が示されているといっている。「先に音声ありき」という思想から一歩進んで、「語部」の本質へと赴こうとしている姿が垣間見られるのである。

「国民詩史論」

「万葉談義」においては、万葉集の歌の一部は「歌われたもの」という断定のみで、「語部」と「万葉集」の歌の関係は、極めて慎重に提示されていた。しかしやがて「語部」という語彙は、「始原」「音声的要素」にしっかりと付けられて和歌の起源として提示される。「万葉談義」の五年後、大正三年に発表された「国民詩史論」において、語部論は飛躍的な展開を見せる。

わが和歌の歴史は……この時代以前の作物は、すべて後人の「擬作」である。英雄神に仮託した物語の、主要な部分をなすものとして伝つたので、いはゞ、語部の物語の断片なのだ。

国家の基礎の定るとともに、音楽的意識が急に民族の精神に、げん隆んに興つて来る。

明らかに意識して作られた歌と称すべきものは、肇国しろすすめらみことなる、崇神天皇の時代にはじまるのである。それは、語部が物語の一部分なるが故に。音楽的要素を多くもつた、律文であるが故に。これは単に抽象した話ではない。

頭目とその直系であると、一般に考へられてゐる所の、英雄神の物語が、ある音楽的条件を備へて現れて来る

（『国民詩史論』『わか竹』第七卷第九号、大正三年九月 『新全集』第五卷 十一頁）（傍線筆者）

国家の始原を保証する物語として「英雄神の物語（つまり神話）を設定し、それは「うたわれたものである」とし、そうした物語の断片が「歌」であると。こうして、「物語」と「和歌」の起源は、音楽的要素に串刺しされることによつて同一化されるのである。ノートによつて意識された「かたる」との「うたふ」との通行関係は「語部の物語の断片」としての歌を措定したところにはつきりと解決の手がかりを得た。そして、

わが和歌の歴史は、崇神朝にはじまる。（中略）わが国古代の社会制度のうへに、語部といふ部曲が定められてゐたのは、開国以来の風なのである（同）。（傍線筆者）

と述べ、「語部」の物語が開国にかかわる英雄神、つまり「肇国にしろすすめらみこと」の物語を後世に伝える「語部」と、その「語部」の伝えた物語の断片としての和歌とが直接的に結びられている。その特異なところは、音楽要素を「民族精神」とむすびつけたところである。つまり、「律文」の根柢は、単に記憶の方便としてあるのではなく、英雄神の物語としてあるがゆえに音節を帯びているのだという、因果の転倒である。

折口の語部論は、かように「音への絶対的確信」という認識を経た上で、「（曲節をもつ）音としてのかたり」の外堀を資料読解によつて埋め続けることで本丸に到るといふ方法であった。

ここで中核になっている問題は語部は何故存在するのかという問題と、その存在を保証する「もの」をいかに定義

するかという問題である。

語部と言ふ部曲の成立ちに就ては、一に、古代に文字がなかつたといふことに、原因を帰してゐるが、それは想はざるもの、といはなければならぬ。古代に於ては、神人交通の言語は、すべて韻律形式を採つてゐる。これは韻律文は人間が日常用い穢してゐる偏倚した言語でなく、すがすがしい、普遍的なものだといふ処に、基礎を置いてゐるのである。律文でないものも、之を誦する場合に、律文的な調子をつける(同)。(傍線筆者)

「国民詩史論」には、「語部考」には見られない、折口独自の語部論の萌芽が随所に見られる。

「語部考」が語部の存在理由を「文字」の不在に置いたのに対して、それは「想はざるもの」として否定し、「神人共通の言語」として「すがすがしい、普遍的なものだといふ処に基礎を置いてゐる」と述べ、曲節ある語りの必要理由は、文字不在にあるのではないとする。そしてその理由として

- 1、神人交通の言語として
- 2、芸術意識の始原として
- 3、子弟教育の方法としての三つをあげる。

つまり「語言」は神と人との交通の言語であるから、すがすがしい曲節を有すべきだと説く。このことは、「万葉談義」において、「謹嚴、高古、雄渾、独歩」と人麻呂歌を評したその思考をさらに進めた見解である。曲節が自ずからかくなる性格を歌に付与するのだという意味である。そしてその曲節は、もう一つの意味において重要である。

語部の物語の利用は(中略)貴族の子弟教育にも、分家並びに奴婢の類に対して、宗家の威嚴を覚らせる方便にも、利用せられたであらう。いりあつど・おぢつせい、羅馬の家庭教師の、教授課目になつてゐたことから見ても領かれよう(同)。

と、「語部」は開国以来の神の物語を後世子弟に伝える役割を有し、それが曲節を有するのは、その物語の日常語でないことを示すとともに、伝承教育の方法としてあったということ述べる。

さらに着目しておかなければならない重要な用語は「叙事詩」である。

わが国律文の最古いものは、比較的長篇の物語、即叙事詩であつた。短編の抒情詩が出来たのは、遙かに後のことである。しかし現に立派に抒情詩があるではないか、と異見を抱く人があるかも知れない。けれども其は、寧ろ叙事詩の抒情化したもの、言ひかへれば、英雄伝の自叙伝化する傾向のある処から、抒情派を多く引いたもの、といふことが出来る(同)。(傍線筆者)

「叙事詩」という用語とその概念を獲得したことによって、折口は「英雄神の物語」が何ゆえ曲節を帯びて伝承されなければならなかつたか、その蓋然性を見出した。それは、単に「文字がなかつたから」ではなく、「すがすがしく普遍的なもの」と表現するように別箇の伝承欲求、つまり子弟教育としての物語の存在を設定したのである。このことについては、改めて述べるが、叙事詩の概念獲得によって、折口の語部論は、その説得力を格段に身に付けていたのである。

物語が「音」をともなっているということの根拠として、その伝承母体としての「語部」の存在はどうしても必要であつた。音声優先主義にとつては、伝承母体が不可欠だからである。そこで「音楽的要素」は「律文」と読み替えられることによって、「英雄神の物語」の中に、叙事脈と叙情脈とを発掘して、そこから「語部」を介して叙事詩と短歌発生へと脈絡をつけようとしたのである(この後の短歌論への展開については第一章第三節を参照されたい)。

折口の初期の志向には常に「音声」「始原」という要素を縫い目とした「文学史」構想の企みがあつた事は疑いえない。そしてそれは、『帝国文学』をはじめとした当時の文学研究、文化研究の動向と無縁であるはずが無く、むしろそうした潮流を積極的に享受し、そこから新たな地平を乗り出そうとした形跡が窺えるのである。

「上古の歌は歌われたのである」という断定から導き出された「語部」の存在、それは「叙事詩」という概念を身にもたそうことによって、神と民衆の物語という形に体系化されていったのである。

註

(1) 西村亨『折口名彙と折口学』(昭和六十年九月、桜楓社)を代表的な研究として、慶應義塾大学出身の研究者を中心にこの方法での研究が進んでいった。西村亨編『折口信夫事典』(昭和六十三年六月、大修館書店)はその集大成ともいえるものである。

(2) 高橋直治「折口信夫の『言語情調論』」「折口信夫の「情調」などの一連の論考」(『折口信夫の学問形成』所収、平成三年四月、有精堂出版)。なお、筆者は現在『古代研究』成立・形成過程の検証をおこなっているが、その過程において、折口語彙の再検討が不可欠であると確信している。その方法として高橋が提示した方法はきわめて有効であるが、それを基盤として一次資料(自筆原稿、加筆原稿、清書原稿など)の一群の原稿資料ならびに手帖、加筆本)などの検証も改めて必要であろうと考える。

(3) このことについては、本節で取り上げた『帝国文学』だけで足りる問題ではない。検証は、当時の雑誌、単行本などにも及ばなければならないはずである。

(4) 『帝国文学』は、明治二十八年一月創刊。以後毎月一冊発行し、大正九年一月第二十六卷第一号をもって終刊した。創刊の前年、帝国大学の教官学生ら一八〇人によって組織された『帝国文学会』がその発行母体であり、「国民文学創造」を旗印として、その発言は当時の文化文学研究に大きな影響力を持った。折口が自ら述懐したところによれば、中学新入時、第五巻ころから定期購読をしたことになるが、佐々政一への言及などを見る限り、兄進の影響下でそれ以前から読んでいた可能性が高い。

(5) 『帝國文学』各号の構成は、基本的に「論説」「詩藻」「雑録」「文学資料」「雑報」などからなり、時に「付録」がつけられる。この構成法は第十五卷(明治四十三年)まで続く。第十六卷第一号からは、それまでの構成法を大きく変更している。論説というより評論に近い文が巻頭を飾るようになり、また小説などの作品が多く掲載されるようになる。それに伴って、批評対象の書物も、論文、学術書から小説、戯曲へと大きく変化している。今まで紙面を飾っていた文学研究は、ほとんど姿を消し、評論誌としての体裁を強く押し出すようになった。表に示したものは、その中の「論説」「雑録」「雑報」から抜きだしたものである。論説の本数は各号三、四本、雑録は二、三本程度である。

(6) 黒板勝美『国史の研究』各説の部(大正七年、文會堂書店)

(7) 折口博士記念古代研究所には、金澤庄三郎の授業を筆記したと思われる折口信夫の自筆ノートが残されている。

(8) 「語部考」は本文頭注に掲げられる以下のような各条目より構成されている。「上古ノ事ハ語部之ヲ言ヒ伝フ」「語部ノ事延喜式ニ見ユ」「語部ノ事見エシ諸書」「語ノ連・語ノ臣」「天語連」「神話」「天語歌」「語部ノ語言ニハ音調アリ」「語部ノ語言今ニ存ス」「語部ノ語言」「国引ノ故事ハ上世ノ語言」「語部ノ語言永徳ノ大嘗マデ行ハル」「永徳ノ大嘗ニハ語部參ラズ」「永徳以前ノ大嘗ヨリ外記官人語部ノ語言ヲ代表セリ」「永享ノ大嘗ニハ語部ノ語言全ク廢セリ」「大嘗會廢セラレテ語部ノ語言竟ニ絶ユ」「語部ノ語言歌詞トナル」「本辞旧辞ハ語部ノ語言」「帝紀本辞旧辞」

(9) 横二十一センチ、縦十六・五センチのノート四頁分に記述したメモ。黒ペン・鉛筆書き。そこに赤で加筆がしてある。折口博士記念古代研究所蔵。

第二節 「わかしとおゆと」——折口信夫と金澤庄三郎

「わかしとおゆと」と「用言の発展」

折口信夫に「わかしとおゆと」という論文がある。明治四十一年六月、國學院大學の同窓会雑誌『同窓』第九号に「春日野」という筆名で発表されたこの国語学の論文は、彼の発表した論文の中で最も初期のものとされる。

この論文の中で折口は、当時の動詞形容詞一元論者が、意味の上から形容詞「わかし」と動詞「おゆ」とを一对の語として考えようとする立場をとっていることに対して、動詞形容詞一元論は形式上の考えにとどまるべきで、意味上からその二つの語を対峙させて考えるのではなく、それぞれの語を歴史上の用語の語根の在り方を念頭に置きながら分解してゆく過程において蓋然的に導かれる形容詞「わかし」に対する動詞「わかゆ」、動詞「おゆ」に対する形容詞「おし」を想定すべきであることを主張する。それぞれが意味上から向き合っているのではなく、語根が歴史的に語尾を屈折させる過程で、形式上必然的に向き合わざるをえなくなったものと主張し、動詞形容詞一元論者の陥っている誤りを、その拠って立つ根拠を崩すことよって間接的に批判している。

この論文の重要性は、その内容もさることながら、彼の後年の学問的手法、つまり発生論的方法的基盤である用例を歴史に追尋し、それを帰納的に整理しながら、しかし実際は演繹的に論理を展開してゆく方法が、追尋する対象に相違はあるものの、既にここにあますことなく披露されているという点にある。

後年柳田民俗学と出会い、民俗の調査、比較研究をその学問的方法論として吸収し、民俗の発生・展開と言うものを見据えながら、やがて「国文学の発生」、そして「古代研究」へとつながってゆく折口古代学は、実は根底のどこ

ろで彼の言語に対する深い愛着、興味、知識とによって支えられていたものであること、更にその古代学の方法論の基本には、この学生時代から積み上げられていた、日本語はもとより、外国語をも含めた「ことば」に対する構造的把握、実例追尋、その歴史的遡源を可能にする豊富な言語知識が最も強く寄与していたというこの事實は、見逃すことはできない。

特に、彼の言語論を直接指導した金澤庄三郎や三矢重松、そして彼等を取り巻いた同時代的な言語学の学問状況というものに目を配り、その影響関係について論じた『折口信夫の学問形成』（高橋直治）は、折口信夫の最初の学問研究であった「言語論」についての研究の重要性を説いて、今後の研究に一つの道筋を指し示した点で注目される。ここでは、高橋論文に屋上屋を架けることを避けながら、折口の言語論に強い影響を与えた金澤庄三郎と折口とのかわりについて、いささか述べてみたいと思う。

折口信夫の学問が、国語に対する深い愛着からたものであることは、『古代研究』「追い書き」の次の文章から窺い知ることができる。

私の学問は、最初、言語に対する深い愛情から起つたものであるから、自然言語の分解を以て、民俗を律しようとする傾きが見えぬでもない。一時は、大変危いところに臨んで居た。併し、語原探求と、民俗の発生・展開との、正しい関係を知る様になつた。だから、言語の分解を以て、民俗の考察の比較の準備に用ゐ、言語の展開の順序を、民俗も履んで居るかを見る様になつて来た。〔新全集〕第三卷 四七九頁〕

『古代研究』最終巻の巻末に、まるで言い訳のように述べられているこの彼の述懐を聴くまでもなく、われわれは『古代研究』の冒頭から語を分解してゆきながらその用例を歴史的に追尋してゆく行為を通じて、その語の発生と機を得同じくして発生する民俗・文学、この三様の動態を探ろうとする折口の姿勢をそこかしこに見いだすことが出来るだろう。

このように、語を分解してその発生の動態を探るといふ折口信夫の学問的方法の、最も初期の実践と言うべき「わかしとおゆと」であるが、その内容に極めて近似するいわば草稿と言うべき内容の論考が、雑誌の『同窓』に発表される以前に未発表論文の一部として執筆されていた。

「用言の発展」と名づけられたこの論文の草稿は、折口博士古代研究所の未整理資料の中から見出したもので、四〇〇字詰め和紙製原稿用紙に墨で書かれている。分量は六十三枚、書き出しから三分の一辺りの文章が千四百字ほどにわたってすべて朱で消されその部分の用紙が紙縫で閉じられ、そこに雑誌『同窓』から「わかしとおゆと」の部分を取り抜いてそのまま張り付けてある。

同じく古代研究所に保存されている折口の卒業論文である「言語情調論」にもこのような切り抜きの張り付けが行われている事実を見ると、どうやらこれはこの時期の折口の癖だったようだ。

後年、例えば「国文学の発生」のように、同じテーマについて何度も書き直しては消し、書き直しては消すという行為を繰り返して、刊行された後もそこに書き入れ訂正を加え最初に書いた内容と全く異なった相貌を見せるといったような、真理探究に対して食欲さを見せる彼の姿勢は、もう既にこのあたりから身に付いていたものと見える。

さて、その「用言の発展」であるが、折口から金澤庄三郎に宛てて提出された単位論文であったらしいことが、この論文の末尾に書き記された金澤庄三郎の自筆と思われる評言から明らかである。その評言の全文を紹介しておこう。

評 本編は古書を精読し用例を集め「名詞語根説」を以て用言の発展を論述したり。所論往々如何と思はるゝ説なきにあらざるといへども亦大に創見あるを認む。著者が広く古典に徴して其論拠を明かにしたる点は確に苦心勞力の存するを見るなり。

(原文は漢字片仮名交じり文で句点なし。文中の句点は筆者が施したもの)

評言は朱の筆でもって書かれ、末尾に花押に似た署名が施されている。その署名は「金」と読め、金澤庄三郎のものである可能性が高い。

「わかしとおゆと」が雑誌『同窓』に発表されたのは明治四十一年六月のことであるから、少なくとも「用言の発展」の執筆された時期はそれより以前の比較的近い時期であることは間違いない。おそらく金澤庄三郎に提出すべく執筆を進めていた単位論文「用言の発展」のうち、「わかしとおゆと」の部分だけを増幅して改稿し、それを『同窓』に発表、その発表誌から自らの論文の部分を切り抜いて提出論文に張り付けたものと考えるのが穏当だ。ただ、「用言の発展」の文脈の中でこの「わかしとおゆと」にかかわる箇所は、「将然名詞法」という章段の中、動詞の将然型の語根の一部が屈折して副詞や形容詞を再び形づくる基礎となる語尾がついたという主張の中で論じられる箇所であり、少なくとも「用言の発展」を最初に書いた段階では「わかし」「おゆ」という用語は他の多くの用語例の一つに過ぎない扱い方をされていて、この二つの語がことさらに重要視されて居た形跡は認められない。したがって雑誌『同窓』誌上で「わかし」「おゆ」がとくに俎上に載せられ改めて論じられた理由は、「動詞形容詞一元論」の立場に対する反論をしなければならない、という折口の意志が強く反映していたとみるべきだろう。

もしそうであるとすれば、この折口の一連の行為には、彼の師金澤庄三郎に対する若々しい対抗意識を認めないわけにはゆかない。なぜならば、最初に「用言の発展」のために用意された「わかしとおゆと」と、『同窓』に発表された「わかしとおゆと」（以後混同を避けるために、前者を「草稿」、後者を「全集版」と称しておく）では、主題は同じであっても論文の書かれ方・文脈がいささか異なっている事を認めないわけにはゆかないからである。

二つの「わかしとおゆと」

ここで、折口によって封印された紙縫を解いて、この二つの「わかしとおゆと」の内容を検証してみよう。

比較を容易にするために、改変された「わかしとおゆと」がその部分に張り付けられたことによって抹消された「草稿」「わかしとおゆと」の全文を此処に提示しておく。

(1)【若は古動詞わく(文献の今徴すべきものがない)の將然名詞法であつたらうといふことは、】(2)【わきいらつこ(わかいらつこの音韻の変化ではあるまい)もあればわくこもある、いわきなし、いわけなしもある(いとけなし、いとけなしがい・とき(分別)なしと考へられる如く(一)い・別きなし い・別けなしとも思はれぬでもないけれど、いとけ、いとけのいとけは幼い(いと姫君紫式部日記、いと京阪地方のことば)をふくんでおつて、これにけとかきとかゞついたものを見る方がよからうと思はれるから、これもなほ幼いと言ふ意である(う)い・わ・くは今日存しているこの動詞に甚しという意をあらはすなしがついたと考へる方が正当だとおもふ。いが動詞の接頭法となることは(一)い・ゆ(行)く、い・さ(去)る、い・は(這)ふ(いはひもとほりうちてしやまむ 古事記)い・の(宣)る、などを見ても明らかであるから、】(3)【わくといふ動詞が實際あつたといふことは疑を容れる余地がないと思ふ。】

(4)【人はおゆが動詞なるに對してわかしが形容詞だといふことを不思議がる。動詞形容詞二元論者は(一)一の屈強な抛り所としてこれを採用する。】けれどもおゆに對してわかゆといふ動詞がある。わかしに對してもおほしの意のおしといふ語がある。論理的觀念の乏しかった古人は大きいといふこととわかい(即ち小い)といふことを對比したのである。同時にこのおしといふ語は越しとも對比せられてをる。(おとをとによりて物の大小をあらはした事はいふまでもない。)(5)【あるいはおしといふ様な形容詞はないといふ人があるかもしれぬ。けれども古事記を見ると忍し許呂別、忍熊王、忍穂井、忍坂などいふ語が多くみえて居る。このおしについては古事記傳にこれらのおしを大(オホ)の意にといてある。橘曙覧はこれを難じて大の意なるをおしといふ事あるまじく、はたそのころならんには直ちに大字をかゝるべきなり。同じ意なる語に文字を様々にかへてかかれざる、古事記の文体なればなり。というて押人命、押勝などは押の字を書いてあるから、つまりたけく勇ましく、威往の口なるをあらはしとなへたものである。と、説いてゐるのは考へ過ぎた説で、やはり紀の一書に熊野忍瀬限命とあるのが他の一書にはその忍が大の字にかへてつかはれてをると凡河内を大河内とかよはして用ゐてゐるのをば

根拠として忍と大とが同じであるとゐうて居る記傳の説の方が勝つてゐると思ふ。】忍阪も大阪の意味で大和の磯城郡より宇陀の秋野へ出る途に今も半阪というて洲常な急阪のある、そのむかし宇陀の阿騎野へ遊獵に出かけた人たちがその阪に命じた名であるのが、終にその下の里の名にうつつたのである。

今一つ忍海の角刺宮のおしはやはりおほし(即ちおほきし)の意味であろうと思ふ。形容詞のおしとみとの間とのいふ□□□をはさんだことは恰もうるはしの人、かなしの子といふ如く(一)或はかみのみ即ち神南(カンナミ)といふ地名があるようなものである。(6)【みは朝鮮語のㅁ로이にあたる。(ㅁ이ㅁ로이)は山でもあるけれど我が国では多く山、岡、たかしの意に使はれている。(一)】いまきなるをむれが上に(斉明紀) 培塿 倭名抄には田中は高之とある(一)もり(森)但し山の意に用ゐて居る事もある。紀伊の牟婁郡は山の郡の意であらしみよしのゝ小村(むら)が獄の類(二) 神南(神奈備、神南備、神並)は神のㅁ이即ち神のみである。神の森であると古人がいうたのもあたらざといへども遠からずである。おしのみは即ち大き岡の意である(一) 蓋し葛城山の付近の高みにあつたからであろう。顕宗紀に「やまとへにみかほしものは於戸農瀬の此たかきなる都奴婆之能瀬野」とあるのはその地理をよく説明してゐるとおもふ(一) また蘇我蝦夷の歌に「やまとの飢斯能廣瀬をわたらむとあよひたづくりらしづくらふも」とある飢斯能廣瀬(一) おしといふ地名ではなくして、大き広瀬の意味である。

(7) 【わかゆに|に対しておゆ、わかし|に対しておしのある管であることも之を以て明かにすることが出来ると思ふ。】

(一) 内数字、(一) 内の句読点、及び 【一】は誤読を避けるためあるいは本文での解説のために筆者が最少限補つたもの(一)

両者を比較してみてもすぐわかることだが、発表を意図して書き直したためか、「全集版」の方が論理が纏まっていた、文脈もすつきりと通っている。「草稿」【内の(2)(5)の部分】は、「全集版」でもほぼそのままの表現で使用されている。「全集版」におけるそれ以外の部分は、「草稿」にはないか簡単に触れられているだけである。これらの内容の多くは、「用言の発展」の一部分を取り出して、それを一つの論文にしあげるために書き加えられたか書き足されたものとみられる。

たとえば「全集版」で言う冒頭部分、

動詞形容詞一元論のち、おもに、形式のうへにあるのだが、中には、意味のうへにまでも立入つて、其説を主張する人がある。今いはうとするわかしとおゆの如きは、其屈強な材料なのである。

『旧全集』第十九卷、『新全集』第十二卷 一五七頁

この箇所は折口がこの論文を発表しなければならなかった理由を陳述している箇所であるが、ここは「草稿」で言う(4)の部分に相当する。この部分を折口はわざわざ冒頭に持ってきているのである。

「動詞形容詞一元論」は、当時明治三十年代の国語学者達によって盛んに論じられていた「動詞活用古型論」つまり動詞のそれぞれの活用の内どの活用が最も基本的なものであったかという論争⁽³⁾のただ中に生み出されたもので、四段活用が動詞の最も最初の活用のすがたで、其処から様々な活用が派生してくるといふ考え方を形容詞の活用にまで発展させたものである。

動詞形容詞一元論、これはほかならぬ金澤庄三郎の立場でもあった。金澤庄三郎『日本文法論』(全港堂書籍、明治三十六年十二月)には、「動詞形容詞一元論は予の宿説なり」という一文がある。

「全集版」は、言ってみれば金澤庄三郎の宿説である「動詞形容詞一元論」主張の基本的な材料である「わかし」「おゆ」の二つの用語を取り上げて、その語分解、用例追尋という方法を用いて、この二つの動詞が意味上向き合っ

ていないことを演繹的に証明しようとしたわけで、極めて戦略的意味合いの強い論文と言わねばならない。それがほかならぬ動詞形容詞一元論者金澤庄三郎に宛てて出すべき論文であったこと、更に「わかしとおゆと」にかかわる部分だけ極めて詳細に改稿して発表し、それを更に提出論文に張り付けて提出するという、相当に強心臓なことを折口はやつてのけたのである。

次に、「草稿」(6)の部分、朝鮮語を形容詞「おし」の存在を主張するための傍証として使おうとしているが、「全集版」ではこの部分はそっくり削除されている。単に、この部分の論証が論旨の展開に必要なから削ったとも考えられるが、折口が「全集版」の冒頭でその批判の対象とした、金澤庄三郎の主張する「動詞形容詞一元論」の根拠の一つが、比較言語論の立場から、朝鮮語と日本語とを比較することによって導きだされた「なほ、我が国と同系の朝鮮語の形容詞を参考すると、一層このこと(筆者注)形容詞志・志畿活用の「し」は語根ではないという前文の主張を受けたもの)が明瞭になる。朝鮮語では、……動詞形容詞の活用が同一であつて、我が国で二つに分かれたものが彼に於いては一つになつて居る。」と言う主張に依拠するものであつてみると、たとえ傍証に使用するとはいへ、折口自身の論証の根拠に、当時としては金澤庄三郎の専売特許とも言うべき「日鮮語同祖論」を無反省に持ち込むことを避けたのではないかと推定される。

後年、金澤の方法論をそのままに踏襲して、琉球語と本土の言語とを比較してその同系であることを論じ、「日琉同祖論」を著す折口であるが、金澤庄三郎の「日鮮語同祖論」に対してはわずかに「熟語構成法から見た語根論の断簡」⁽⁴⁾のなかで一言触れているほかは、ほとんど冷淡とも言うべき無関心の態度を貫いている。この態度は、後年、折口が柳田の昔話研究に対して、全くというほど無関心を装つた、いわば学問の領域を犯さないという弟子としての彼がとつたあるこだわりある態度と、奇妙に通じあうところがある。

次に、「草稿」(1)と(3)の箇所の表現は、動詞「わく」の存在はほとんど疑いの余地がないような物言いになつ

ているが、「全集版」では、「これまでよんだ、きはめてすこしの本のうちでは、まだわ・くといふ動詞に逢着するところが出来なかつた。けれども必ず、あつた語に相違ないと信じて居る。」といささかトーンダウンしている。

そのほか「全集版」に書き加えられた箇所も多くは、「用言の発展」の他の箇所では他の意図で触れてあつたものを、「わ・く」の存在を帰納させるためにここに持ち込まれたものと見られる。そのために唐突に感じられるところや論旨に若干の乱れが生じた所がある。

たとえば「全集版」に書き加えられた「わ・くは形容詞にうつたばかりでなく、動詞にも再び転じて居る。」と書いて「おすがへおすへおそふ、よすがへよすへよそる、ながへなぐへなごむ……」などの例を挙げて終止名詞法と将然名詞法の存在を主張したあと、「ともかく」という接続詞を用いて「わかゆ」の存在を主張するのは、いささか強引の感を免れない。

いずれにせよ、この論文は、彼が初めて雑誌に発表した論文であつた。それを更に金澤庄三郎へ提出すべき論文に張り付けて提出したわけで、この「わかしとおゆと」は二重の意味を帯びて金澤庄三郎に発せられたメッセージだったということになるだろう。そこには、当時の言語学研究の状況を睨みながら、師説を批判しようとする若い折口の気負いと、反面、師に対する躊躇とが二つながら感じられる。

これに対して金澤庄三郎はというと、恐らく折口にとってはいささか拍子抜けの先の評言になつた。この評言と、三矢重松が折口の詩「おほやまもり」に与えたかの評言とを比べてみれば、この二人に対する折口の態度が、これによつていささかも左右されなかつたとはいえまい。

二枚の絵葉書

ここに二枚の絵葉書がある。いづれも折口の金澤庄三郎宛てた未投函の書簡である。

(A) 先日は、遅くまで、お邪魔申し上げました。だんだんからだも堪えきれなくなつてまいりましたので、二十日夜出発こゝへまいりました。こゝは脳によいとか申します。それをたよりにくりかへし入湯いたしております。いろ／＼気になります。暫く休まして頂きます。

(B) 信濃中を経巡つて、とうとう、こんな奥へはひつてまいりました。これから美濃へ越えて、岐阜辺へ出て、ついでに大垣へよつて帰らうと思います。

どうか、これから先、もう案じさせてくださいませんやう。案じるのが、弟子の努めではございますが。

信夫

(A) は峨々温泉発行の「蔵王山御釜」の絵葉書を、(B) は「信濃名所園原の箒木」の絵葉書を使用している。(A) (B) いづれも未投函であるため、消印その他で執筆年月を特定することは困難であるが、葉書の文面と裏の写真に關わる情報を総合することによつて、それを推定することは可能である。

まず (A)。折口年譜によると、折口は生涯に何回か蔵王周辺の温泉に行つてゐるが、そのうち昭和八年の青根温泉滞在の時に、彼は笹谷峠を越えて、山形まで旧友の花輪郡蔵をたずねている。その旅の途中、同行していた折口春洋が、東京の留守宅にゐる藤井貞文に宛てた絵葉書が現在も残されているが、『折口博士記念古代研究所紀要別冊資料集第二輯』所収、それはこの折口の未投函絵はがきと全く同じ「峨々温泉発行」と言う絵葉書を使用している。したがつてこれはあくまで推測であるが、この (A) は昭和八年に折口が藤井春洋と共に宮城の青根温泉に逗留したときに書かれたものの投函されなかつた一枚ではないかと推測される。

次に (B) である。裏面には「信濃名所 園原 箒木」と印刷され、一本の檜の大木が写つてゐる。言うまでもないことではあるが、新古今の坂上是則の歌や、源氏物語の箒木の巻で光源氏と空蟬との贈答歌にも歌われる歌枕「園原」「伏屋」の地であつて、室町時代に木曾街道が整備されるまで、旧東山道が急峻な神坂峠を越えた東側に位置し

ていた。現在の長野県下伊那郡阿智村智里。この下伊那の地へも折口はしばしば訪れているが、文面にあるように信州中を經巡ったあと美濃へ出て岐阜大垣へと辿った旅と言えば、昭和九年夏の旅が思い起こされる。この時折口は、折口春洋の病を養う為に軽井沢に滞在、かの地の夏期大学で講義（八月七・八・九日）したあと九月四日に軽井沢を出発、諏訪、伊那と転地、下伊那教育会で講演（九月七・八・十・十一日）のあと神坂峠を越えて下呂、高山、平湯、宇奈月と遊んでいる。

以上この二枚の絵葉書は、昭和八年と九年の夏にそれぞれ書かれたものと考えてよいだろう。昭和八年から九年という、実は金澤庄三郎が國學院大學を辞職した時期と符合する。金澤庄三郎の辞職の原因ははっきりしたことはわからないが、当時國學院大學で起こった「十人組徒党事件」にかかわりがある複雑な人事関係の末の事だったようである。（B）にある「もう案じさせてくださいませんよう」という文言は、この辺りの事情を示唆しているよう。

金澤庄三郎——この比較言語学者に対する折口信夫の感情には、師という認識を持ちながらしかしいささか複雑なものがあったと考えるのが穏当だ。三矢重松、柳田國男と共に、大きな影響を受けた師の一人、彼の学問の初発からその底流を流れつづけている言語に対するこの上ない愛着を更に深めさせた人物として、また比較言語学の草分けとして折口に学問の方法論としての比較学の重要性を認識させた人物、本来ならば折口自身によって彼の文章の中にもっと頻繁に言及されてしかるべき人間である。

「去七尺状」に金澤と共に「その印象は恐ろしいまでに私に印象しています」と書いた三矢に対しては、割合詳しくその方法的批判も含めた言説がなされているばかりでなく、その死に際しては自ら祭文を作り祭主となって祭りを営んでいる。「人間にしてもらった」とまで言う三矢に対する人間的敬愛は、自ら三矢の嫡男を任じ、その源氏全講会を引き受け、それが國學院でよく扱われないと見るや、即座に慶応にうつしてしまっただ、ほとんど盲目的とも言える対応の仕方であらわれている。

これに対して、金澤については、学問の上で数箇所言及されているほか、大正六年、金澤が地方に赴任する姿を新橋駅で見送った際に歌われた五首の歌が、『海やまのあひだ』に残されているばかりである。

金澤に対する折口のこうした淡泊さが、意外と重要なこの二人の関係を我々から隠蔽してきたと言っても過言ではない。折口が淡泊であればあるほど、その感情の底に沈んでいる屈託を思わずにはいられない。師として尊敬をしつつも、なにかそこに複雑な人事の問題が横たわってしまう。一方では、師の学問の方法について研究者として激しく疑問をさしはさむ折口が居り、一方では退職間際の師に宛てて非常に含みのある葉書を書いて、結局ポストの前で立ちすくむ折口がいる。その二人の折口をつなぐ線上に、もう一人の学問の師柳田國男に対して折口が抱いた感情を定位することも可能だろう。

注

- (1) 順次公開を予定していたこれらの未発表資料は、その後復刊行された『新編集決定版 折口信夫全集』にその一部が収録されたが、まだ多くが公開されないまま折口博士記念古代研究所に蔵せられている。
- (2) 「言語情調論」の原稿には、明治四十三年四月に雑誌『わか竹』第三巻四号に発表した「和歌批判の範疇」(三)が第九章「言語と記憶心理と」の部分として張り付けられている。
- (3) この論争の詳細については、高橋直治『折口信夫の学問形成』(平成三年四月 有精堂)に詳しい。
- (4) 『旧全集』には「……語源論の断簡」となっているが、初出誌(『川合教授記念論文集』昭和六年十二月刊)には「……語根論の断簡」となっている。恐らく全集編者の錯誤であろう。ここは初出誌にしたがって訂正しておく。
- (5) 『海やまのあひだ』の追い書きの中で折口は以下のように述べている。
 (三) 矢重松は——筆者注——私の一作々々を、私の研究を見るにひとしい欲びを以て、どんなに聴き入って下された事で

あつたらう。安倍ノ清明とうち臥しの巫女との術くらべを中心に置いた脚本は、王朝文学研究の具体化出来たものとして、過褒を賜った。水清きつゝ敵愾を謡うた「おはやまもり」の死の叙事詩の構想は、国学の窮極地だとまでの保証を、先生から受けた事であつた。

第二節 「古代研究」と国学の再興——折口信夫と柳田國男

折口信夫宛柳田國男書簡

折口信夫がその学問研究の始まりにおいて、柳田國男の影響を大きく受けていたことはよく知られたことである。柳田との出会いの時期については諸説あつてなかなか特定はできないが、しかし少なくともかなり早い段階で、折口は『遠野物語』をはじめとした柳田の著作や論考に接していたことは確かである。そして自らの学問研究へのその強い影響力について、折口はその出会いの直後から報謝の言葉を繰り返し述べている。このあまりにも執拗懇切な謝辞ゆえに、そこにアイロニーや強い屈託を見出し、また柳田と折口の基本的な資質や考え方、方法論の違い、さらには「鬚籠の話」と「柱松考」の掲載順序の混乱、「常世とまれびと」の雑誌『民族』への掲載拒否問題といった柳田の仕打ちや人間的な確執などを根拠に、二人の関係を対立的にとらえる論考は多い。⁽¹⁾

確執といえ、確かにそうした一面はあつたと思われ、後の二人の言説の中に師から弟子への批判や学説の否定、それに対する弟子の屈託や葛藤を見ることは容易である。しかし、それは、何もこの二人に特有にみられることではなく、師と弟子の関係においてはある意味普通のことだ。

私は、この二人の関係をもう少し素直に解釈したいという思いに駆られるのである。あのような個性的な人間二人が、終生師と弟子の関係を維持できたことこそむしろ稀有なことであり、そこに、お互いの学問を認め合いながら、その異なる立場、手法への懐疑、あらたな学問が創生し成長していくときのさまざまな矛盾を共に抱えて、時にわだ

柳 8	柳 7	柳 6	柳 4	柳 3	柳 2	折 5	折 4	柳 1	折 3	折 2	折 1	番号
昭和9年3月6日	昭和9年2月23日	昭和7年3月30日	昭和6年12月3日	昭和5年6月29日	昭和4年4月21日			大正9年10月30日				柳田國男書簡
						大正15年10月3日	大正10年8月(29日)		大正8年9月8日	大正5年12月13日	大正4年8月12日	折口信夫書簡
千歳	千歳			砧	東京中央			美濃太田				消印局
世田谷区成城	世田谷区成城	世田谷区成城	市外砧村	市外砧村成城北		上高地	壱岐郷ノ浦		郡上八幡	堂ヶ島	石山	差出場所(推定も含む)
未	238	237	236	未	234	101	70	233	47	28	18	全集・定本における整理番号

かまりを生じさせながらも、極限のところまで踏みとどまっていた師と弟子の関係を見るからである。
 こんな考えを抱くのは、二人の間に交わされた(あるいは交わされたであろう)大量の書簡群の存在である。⁽²⁾ 柳田の書簡だけが多く現存するという不均衡な状態ではあるが、これら現在披見できる限りの書簡を、それぞれの対照関係がわかるように年代別に整理してみると次の表のようになる。⁽³⁾

柳24	柳23	柳22	柳21	柳20	柳19	柳18	柳17	柳16	柳15	柳14	柳13	柳12	柳11	折7	柳10	折6	柳9
昭和16年11月7日	昭和16年7月4日	昭和16年6月14日	昭和16年6月10日	昭和16年6月9日	昭和16年6月1日	昭和16年5月30日	昭和16年5月29日	昭和16年5月25日	昭和16年5月24日	昭和15年11月29日	昭和14年7月21日	昭和14年5月13日	昭和14年4月20日		昭和10年6月10日		昭和9年3月7日
														昭和10年8月23日		昭和9年8月26日	
	千歳	千歳	千歳	千歳		千歳				千歳						群馬志桑	砧
世田谷区成城	世田谷区成城	世田谷区成城	世田谷区成城	世田谷区成城		世田谷区成城		世田谷区成城	世田谷区成城	東京市外砧村		東京市外砧村	東京市外砧村	小谷温泉	東京市外砧村		東京市外砧村
未	未	未	未	未	未	未	未	未	未		241	未	未	217	240	193	239

柳38	折11	折10	柳37	柳36	折9	柳35	柳34	柳33	柳32	柳31	柳30	柳29	柳28	折8	柳27	柳26	柳25
昭和19年10月4日			昭和19年6月6日	昭和19年5月18日		昭和19年4月18日	昭和19年2月7日	昭和18年12月21日	昭和18年7月28日	昭和18年7月15日	昭和18年7月6日	昭和18年5月20日	昭和18年4月20日		昭和18年4月8日	昭和18年1月17日	昭和17年10月27日
	昭和19年8月2日	昭和19年8月2日			昭和19年5月4日									昭和18年4月19日			
			砧	千歳		千歳		千歳		千歳	長野浅間	山形手向	千歳		千歳	長岡葦山	千歳
	弘前斎吉旅館	弘前斎吉旅館	世田谷成城	世田谷成城	大和当麻寺	世田谷成城		世田谷成城	世田谷成城	世田谷成城	信州浅間温泉	山形手向村羽黒	世田谷成城	吉野桜花壇	世田谷成城	伊豆葦山富士山荘	世田谷区成城
未	297	296	未	未	289	未		244	243	未	未	未	未	273	未	未	242

柳田國男・折口信夫書簡対照表（書簡情報を判読できる限り判読して作成したが、まだ不完全な部分もある。上記のほかに差出時期等判読不能の書簡など9通ある。「未」は『定本』・『全集』未収録を示す。）

柳53	昭和28年4月24日			吉野	未
柳52	昭和28年1月23日	国府津		相州国国府津	未
柳51	昭和25年10月16日	千歳		世田谷成城	
柳50	昭和25年10月12日	千歳		世田谷成城	未
柳49	昭和25年6月10日				未
柳48	昭和24年9月29日	千歳		世田谷成城	未
柳47	昭和24年3月4日	京都			245
柳46	昭和23年11月4日				未
柳45	昭和22年1月9日	千歳		世田谷成城	未
柳44	昭和21年9月30日			世田谷成城	未
柳43	昭和21年9月6日			世田谷成城	未
折13			昭和21年4月	京都	343
柳42	昭和20年10月1日	世田谷		世田谷成城	未
柳41	昭和20年4月25日			世田谷成城	未
折12			昭和20年4月20日	松本	318
柳40	昭和19年12月26日			世田谷成城	未
柳39	昭和19年10月16日			世田谷成城	未

折口信夫宛て柳田國男書簡は六十一通。うち『定本柳田國男集』(以下『定本』)に収録されているものが十三通、残りは未収録である。書簡は、大正九年十月三十日消印を最初に、折口が亡くなる四か月あまり前、昭和二十八年四月二十四日まで、柳田が民俗学の科学的方法論を目指して「民間伝承の会」を発足させた昭和十年ころの一時期を除いて大きな間隔をあけることなく出されている。「民俗学会」設立に関わって折口との関係が悪化したといわれる昭和五年から十年にかけても出されており、また昭和十六年、同十九年は非常に頻繁に投函されていることがわかる。⁽⁴⁾このことを考えると、柳田はむしろ積極的に折口へ書簡を送っていたとみるのが妥当である。

一方、公表されている折口信夫の柳田國男宛ての書簡は全部で十三通。全て『新編集決定版折口信夫全集』(以下『新全集』)に収録されている。そのほとんどが旅先から投函した旅中報告の類で、これが折口から柳田にあてた書簡の全容とは到底考えにくい。絵ハガキが多く、その内容に二人の関係性を窺わせる記述はほとんどない。極めて差しさわりのないものだけが公開されていると言える。

柳田から書簡を受け取って、弟子を自任する折口が返事を出さないとすることは考えにくく、また柳田書簡には折口への返信と思われる文言が記載されていることもあって、当然往信の存在を推認できる。こうしたことを考えあわせると、折口からは、柳田書簡六十一通を超える頻度で、柳田に向けて書簡が発信せられていた可能性が高いのである。⁽⁵⁾しかし残念ながら、その書簡の全貌は柳田の日記とともに、いまだわれわれの目には触れていない。

多くのしかも長い期間にわたって出されている柳田書簡群の詳細な検討は、今後両者の関係性を検討する上で一つの重要な課題になるが、それは後に綿密に行うとして、ここでは柳田と折口の間が、一般に考えられている以上に緊密で、きめの細かいものであったことを確認するだけにとどめておこう。

柳田國男の道筋

さて、折口が柳田に対して初めての学問上の感謝の言を記述したのが、彼の初めての公刊書『口訳万葉集』の序文においてであった。

又、この口訳が、多少、先達緒家の注釈書と、類を異にした点があれば、其は、万葉びとの生活についての直観力と、語部が物語り・権威者の記録の上に、高等批評を下す態度とを授けられた、柳田國男先生の賚物だ、といはねばならぬ。(「口訳万葉集のはじめに」『国文口訳叢書 万葉集』序文、文會堂、大正五年九月、『新全集』第九卷)

そして『海やまのあひだ』のあとがきにおいても、次のように述べる。

其間に俄かに、一筋の白道が、水火の二河の真中に、通じて居るのを見た。柳田國男先生の歩まれた道である。私はまつしぐらに其道を駈け出した。けれども、白道を行きつゝも、二河のしづきは、しきりなく私の身にふりかゝった。(「この集のすゑに」『海やまのあひだ』 改造社、大正十四年五月、『新全集』第二十四卷)

中村生雄は、『口訳万葉集』序文においては、折口が生来持つ「直観力」と柳田から学んだと思われる「高等批評」の力を対比的に表現する部分に、その資質の違いからくる後の路線の対立の予兆が見て取れるとした。また『海やまのあひだ』あとがきにおいては、柳田を仏典の喩えを借りて称賛したり、新体詩人としての青春の日々を「文学のわかれ」を経て決別したはずの柳田に対して、学問と文学との理想的な両立の実例として称える部分などに、柳田に対するアイロニーが含まれている、と指摘し、この二つの文章に、すでに柳田と折口のその後の摩擦や葛藤の種子が内包されていたと解釈する⁽⁶⁾。

しかしその指摘は、後年の折口と柳田の学問上の対立を前提として前史を解釈する手法を採り、二人を取り巻く同時代の批評を捨象して折口と柳田の関係性だけを記述の中に読み取るという弊を犯している。

『口訳万葉集』は折口にとつて初めての公刊本であった。まだ駆け出しの研究者であり、定職も持たず多くの教え子と同居させて金銭的に苦勞していた折口にとつて、柳田への対抗心など思いもよらぬことだったろう。当時研究対象としていた「万葉集」を解釈するにおいて「生活」という用語を強く意識していった過程は、まさに新たな民俗学的な手法を用いて「古代の信仰と生活の元の姿を見ること」と軌を一にしていたし、それは初期の柳田を読み込むことで到達した「直観力」と「高等批評を下す態度」との融合によつて初めてなされる営為だったからである。柳田への謝辞は全く本心からのものだったはずである。

また、後者についても、文学と研究という二足のわらじを履き続けようとする折口にとつて、『遠野物語』を發表した頃の柳田のあり方は、まことに理想的に見えたと素直にとつておきたい気がする。そして、そのことから折口が見出したものこそ『古代研究』の「追ひ書き」に繰り返し記述するように、「はじめは疑ひ、漸くにして会得し、遂には、我生くべき道」であつたはずであり、「石神問答」前後から引き継いだ、長い研究から受けた暗示の「具体化」、すなわち「国学の再興」というテーマだった。やがて折口は、

かう言ふ、自身弁護（帰納法的な立証方法を取らないで、蓋然の学問、つまり実感をもとにした仮説なら、その解釈や論理に錯誤がない限りは、民俗学上にその存在の価値を許してよいこと＝筆者注）、を考えて後、わりに自由に、物を書く様になつた。唯、柳田先生の表現方法から、遠ざかつて行く事を憂へながらも、私は、自身の素質や経験を、度しやかな意義において、信じてゐた。『古代研究（民俗学篇第二）追ひ書き』『新全集』第三卷 四六九頁）

発足点から知つた私自身は、一次・二次のものに、固執してゐるかも知れない。使徒の中、最愚鈍な者の伝へた教義が、私の持する民俗学態度かも知れない。併しながら、私は先生の学問に触れて、初めは疑ひ、漸くにして会得し、遂には、我生くべき道に出たと感じた歓びを、今も忘れないである。『同』四六五頁）

と書く。この記述は、折口の柳田からの自立ととらえる向きが大方である。しかし、『古代研究』刊行にいたるまで

の柳田とのさまざまな行き違いがあつたとしても、そしてそのために折口の感情が多少屈折したものになつていたとしても、初期の柳田の方法に固執し、「最愚鈍な者の伝へた教義が、私の持する民俗学態度」と言明する程にその影響下にあつたと言ふべきなのである。『古代研究』が「民俗的方法による国文学研究」を標榜するのであれば、最も大切な一文であり、また、柳田から学んだ初期の方法のもとに自身があることを、むしろ柳田に向けて宣するものであつたといふべきであろう。むしろ初期の「表現方法から遠ざかつて行」つたのは柳田の方であり、それをこのように表現することがむしろ、折口特有の柳田への接し方であつたと考えられるのである。

先に触れた中村も、この「追ひ書き」こそ折口の柳田からの離陸の書として捉えることが出来、自己弁護に終始しているように見える柳田への言及が、表面上自制と謙遜に満ちた言い回しとは裏腹に、だれもまねのできない自前の学問を世に問おうとする野心的な意気込みが伝わつてくるとした。

確かにそこには、フレーザーの学問をやり玉に挙げて、帰納法的な学問方法への決別と、類化性能を駆使した、「実感」に裏打ちされた新たな古代学への目論見が示されている。しかし、中村が言うように「フレーザー＝柳田」という図式、つまりフレーザーをやり玉にあげながら、その後ろ側に仮想敵として柳田を想定している、と言うのは、いささかうがち過ぎではないか。

この記述は、柳田への報謝の思いをこれでもかこれでもかと述べ立てながら、柳田が新たに目指そうとしている科学的方法とは道を異にすることだけは言っておかねばならない、ということだったのであるが、柳田自身の初期の方法を最も踏襲したのは実は折口であつて、それは柳田以上に「実感」というものに重きをおいたものであつた。そこから学んだ折口は、柳田が次第に科学的立証を旨とする帰納法的研究に傾斜していく姿に、あるさびしさを感じながら、どうしてもそれには追従しないという一言を述べておかねばならなかつた。柳田の変容を寂しきにはいられない折口の、柳田に対する精一杯の思いの表出と受け取っておくべきなのではないか。この「追ひ書き」を、自らの

学問が柳田からの離陸宣言と受け取るのは読み過ぎであると私は考える。むしろ第一段階で柳田から獲得した方法論を、変容していく柳田に対して、自らはその手法をそのまま引き継ぐ⁽⁹⁾とする宣言だった。

折口信夫の真意

ところで、この「追ひ書き」はもちろん柳田だけに向けられたものではない。

『古代研究』民俗学篇第二が出版されたのが、昭和五年六月二十日。折口はその刊行直前に次のような献本遠慮の紙片を刷っている。それが実際に送付されたかどうか確認できないが、たしかに多くの献本を控えた形跡がある。⁽⁸⁾

この三冊ひき続いて出るはずの書物を、百人からのあなた方に、全部さし上げて、私一己の義務感や、友情を満足させようといふ計画が、必ずしもよい道ではなかつた、といふ事に気がついた次第なのです。決して、本を惜しむ訣ではありません。またさう思うて頂いては、残念に存じます。其うへ此は、弁解でも何でもありませんが、私としましても、民俗学篇第二冊に対しては、ある嫌疑に近いひげ目を感じてゐる理由があります。結末に近い四五篇を除いては、ほんの責め防ぎに書いたものばかりなのです。識見深いあなた方のお目さきには、そつと隠して置きたいと考へてゐるわけです。旁以て、此れはさしあげない方が、よいような気がいたします。どうか、私の心をおくみとり下さいまして、民俗学篇第二冊の献本はさしひかへさせて頂くことの御了解を願ひたく存じます⁽⁹⁾のです。

当該書籍にはあれだけ長い「追ひ書き」を付してその刊行の意味を解いているのに、一方で献本を減らすというのはいったいどういうことか。この紙片の内容の意味するところ、そして「献本遠慮」という意志の裏には、この紙片の表のメッセージとは裏腹のメッセージが隠されているのではないかと思えてならない。

献本を遠慮する理由がこの紙片の後半に書かれているように「民俗学篇第二冊」が満足のいかない本であるから、

というのは筋が通らない。それはむしろ方便というべきであろう。主たる理由は、実は「国文学編」「民俗学篇第一冊」を百人の人に送ったその計画が「必ずしもよい道ではなかった」と書いているのであるから、当初の「国文学編」「民俗学篇第一冊」献本以後の状況がこの紙片を刷らせたと考える方が妥当である。

しかし一方では「民俗学篇第二冊」の「追ひ書き」に、この紙片のメッセージ内容とは裏腹に、高揚した口調と強い自負心を持って『古代研究』刊行の意義を語っている。この落差は何か。そしてまたその自負心とは裏腹に、「かうした真の意味の仮説を、学会に提供することは、わるいとも言へよう、又、良いとも言へる」といった意味不明な言い回しをする。こうした言い回しは「追ひ書き」の随所にみられる。

この落差と微妙な言い回しにこそ、献本遠慮の真の理由があった。つまり「私の方法論は結局は理解されないのではないか」という思いがあつたのではないか。初めて自らの方法を世に問うた折口は、慎重に周囲の反応を見つめていたのであろう。そして、確かに高く評価はされたが、その評価は実は折口が期待した通りのものではなかつた。

彼が「必ずしも良い道ではなかつた」と気が付いた次第は、例えば以下の久松潜一、神保至純の書評を見ればうなずける。久松は、

折口氏がその民俗学的立場を以て古代文学の新しい見方を提唱されてから最早かなり長い年月になる。その間氏は絶えず一貫した立場でその所説を部分的に発表して来られた。日本における民俗学的立場は柳田國男氏等によつて唱へられ、従来多くの興味は与へながら学問的には困却せられた各地の民間説話や民間風習を豊富に蒐集し見なほすことによつて、次第にその学の成立を見つゝあつたのである。さうしてかういふ民俗学の成立のために折口氏の研究も重要な寄与をされたのは勿論であるが、殊に折口氏はこの民俗学を民俗学として研究せられるのみならず、その立場から、古代国文学の研究を行はれて、国文学研究の上に新しい態度を立てられたことは

注意せらるべきである。(久松潜一「折口信夫古代研究」(国文学編)『中央公論』第四十四卷第六号、昭和四年六月)

と、折口の民俗学的研究方法を「文学研究の新しい態度」として紹介しながらも、その新しい研究態度については、「演繹的に過ぎて帰納的な点が乏しかった」と述べ、続けて次のように指摘したのである。

たゞ文学意識の発生した後の文学はかういふ民俗学的立場のみから扱ふことは困難であるが、文学意識発生以前の文学や、かういふ系統を引く文学の研究に於ては民俗学的立場は最も重要な研究の立場となるのであらう。

(同)

また神保至純も、

先生は（中略）我々の繩を解いて新しい道を示され、我々の瞑つた眼を開いて、広い世界に引出して、我々の常識的な研究方法を見事打破して下さつた。それは純粹な帰納的研究方法であり、發生学的な見方である。即ち民俗学の研究及び民俗学的研究方法であつた。

（神保至純「折口先生の『古代研究民俗学篇』を読む」『國學院雜誌』第二十二卷第一号、昭和五年一月）

一見すると折口の「民俗学的研究」あるいは「民俗学的立場」に正しい理解を示しているようにみえるがそうではない。久松も神保も「帰納法」をもって折口の手法を理解しているのである。ある意味完全な読み違いであつて、だからこそ折口は「追ひ書き」において、フレーザーの方法を引き合いに出して「およぶ限りの資料を列ねて、作者の説明がなくとも、結論は、自然に訣る様になつてゐる」ことに異を唱え、「ある事象に逢うて、忽、類似の事象の記憶を喚び起し、一貫した論理を直感して、さて後、その確実性を証するだけの資料を陳ねて学問的体裁を整える」『古代研究』追ひ書き）方式の企てを宣言する必要性を改めて迫られたのである。「資料の陳列」の順序が違うのである。

他の書評も、こうした読み方をしており、それが折口の『古代研究』の一般的な評価だったと言える。このことも、折口に「追ひ書き」を、ここまで綿密に書かせた理由だったと考えられる。そして次のような一節は、まさにそのことの核心的理由であつた。

私の学問は、それ程、同情者を予期することの出来さうもない処まで、踏み込んで了うてゐる。

そして、この学問方法については、柳田以外に分かるまい、という思いを強くした。柳田への報謝を述べながらも、そのことこそが国学の新しい道を探る道のことさらに標榜することであつたということ、科学的方法に方針を変えつつある柳田にきちんと表明しておかねばならない思いに至つたというべきであらう。そしてそれは、その「口うつしにすぎない」とまで言つて正しく「柳田」の初期の道を歩む姿を見出す事が出来るというもので、それは、先にも触れたように、「国学」というテーマを介在させて初めて響きあうものであつた。

其は、新しい国学を興すことである。合理化・近世化せられた古代信仰の、元の姿を見る事である。学問上の伝襲は、私の上に払ひきれぬ蠹ムサの様に積つてゐた。此を整頓する唯一の方法は、哲学でもなく、宗教でもないことが、始めてはつきりと、心に來た。先生の学問の、まず向けられた放射光は、恰も、私の進む道を照してゐたのである。

新しい国学は、古代信仰から派生した、社会人事の研究から、出直さねばならなかつた事を悟つた。此民間伝承を研究する学問が、我が国にもないではなかつたが、江戸末の享楽者流・鎖閑学者の、不徹底な好事、随筆式な蒐集に止つてゐた。だから民俗は研究せられても、古代生活を対象とする国学の補助とはならなかつた。(中略)私は、柳田先生の追隨者として、ひたぶるに、国学の新しい立て直しに努めた。爾來十五年、稍、組織らしいものも立つて來た。今度の「古代研究」一部三冊は、新しい国学の筋立てを模索した痕である。

国学の再興ということ

「国文学研究」という課題を仲立ちにして、柳田國男と折口信夫を串刺しにするのは、なかなか容易なことではない。いわゆる「国文学研究」という用語が示す一般の問題からは、まずは二人の共通項はあまり見いだされて來ない

と思われるからである。

しかしそこにひとたび「国学」という問題をはさみ込んでみると、この両者に際立って濃密な「国文学」的課題が浮かびあがってくる。いやむしろ、柳田と折口は、この一点においてのみ、まさしく師弟であったというべきであろうか。この近代の知の巨人ともいうべき二人の、接近、交錯、離脱、そしてふたたびの併走というその複雑な経緯こそが、柳田から折口に受け渡された「国文学研究」という課題の根幹だったようにも思えてならない。

柳田と折口の接近と交錯は、折口の恐らくは大正の初め『遠野物語』との出会いに始まり、「三郷巷談」の『郷土研究』（二一・四、大正三年三月）への投稿掲載、翌四年の折口の論文「鬚籠の話」と柳田の「柱松考」の掲載順序の問題、大正十四年ころの雑誌『民族』への「常世及びと「まれびと」」の掲載拒否問題というようないくつかの邂逅と行き違いを経て、一見淡々と、しかし実際は極めて濃密に複雑化して行った。この間に、弟子折口の柳田から受け継いだ最大のテーマは「新しい国学をおこすこと」であり「国学の立て直し」という課題であったことは疑いようがない。

折口の国文学研究の道筋が、柳田との出会いによって啓示されたものであり、先に引いたように『古代研究』の「追ひ書き」に「新しい国学は、古代信仰から派生した、社会人事の研究から、出直さなければならなかつた事を悟り「新しい国学の筋立てを模索した痕」が『古代研究』三冊であると書き、その通りそこに至る仕事のごとく『万葉集』研究を基盤にして、「合理化・近世化せられた古代信仰の、元の姿を見る事」、すなわちあらゆる時代の古代要素の探求に費やされていることは、その後の折口の営為を見れば明らかである。

つまり、柳田と折口の接近と交錯と離脱の核心に、『古代研究』とその「追ひ書き」にあるように常に「国学」の存在があった。それは、民俗学的研究方法を採りながら、「古代の民俗生活」や「万葉びとの生活」を実感することによって、彼らとの心のつながりを求めることにあった。それはとりもなおさず、後年の発言ではあるが「文芸の為

のみの文芸復興ではなく、国民生活のための文芸復興である」という言葉と呼応する。「国民の生活」というものに古代の心をよみがえらせることが「国学」の進むべき道であり、それこそが折口の文学研究のスタイルであった。

そしてさらには、そのことが、同時代におけるいわゆる「正規の国文学研究」のいわばシャドウライン（陰の道）であったはずであり、その裏街道を専心にひた走る折口は、初期の柳田から引き渡されたバトンを守りながら、おそらくは『郷土研究』休刊以降、昭和の初期に至るまでの柳田の変容に複雑な思いを抱きながらひたぶるに走っていたのではないか、と思うのである。

ここに柳田國男が折口信夫に宛てた一通の手紙がある。昭和五年六月二十九日付書簡。そこには、折口が「柳田の追隨者」として、柳田の学問をまるで口うつしのように与えられ、走り抜いて初めて業績を世に問うた、『古代研究』の贈呈に対する柳田の礼状である。

奥の方の御添書を読みて頗る明かに意見の差を覚り申候。御説の如く小生は以前は固より今も折々はフォクロアを史学の方法として活用すること有之。それがよきことであつたと今さへ感じをり候。単なるフォクロアよりも其方が国学の改革には有効に役立つべしとも存じをり。貴兄が更に独自の方法を加添せらるゝも悦ばしく存候ことに候。唯一点だけは非とも故障申入度はそれをフォクロアと称せらるゝことに候。民俗学は新名なれば衆議次第何に適用しても可なれど少なくともフォクロアには既に定まつた意味あり。一言でいへば資料を書冊に採らず、純乎として民間の伝承を解説することに候。

「添書」というのは「古代研究」の「追ひ書き」のこと。柳田はそれを詳細に読んで折口との意見の差を「覚つた」と書いている。その内容は「フォクロア」という用語を使うことについての苦情と、「民俗学」の内容の違いに終始している。

しかし、「追ひ書き」には「フォクロア」という用語は「一か所も使われておらず、むしろ折口は慎重にその用語を

避けているとさえ言える。ほとんど言いがかりに近い内容である。しかしその言いがかりは、決して折口の学問研究の手法に向けられてはいないのである。

柳田のこの書簡は『古代研究』贈呈への謝礼にかこつけてむしろ「民俗学会」の設立にかかわる怒りを吐き出してしまったという類のものではなかったか。そう考えると、むしろこの手紙の内容で見るべきは「御説の如く：悦ばしく存候」までで、そこが『古代研究』に対する柳田の意見であったと見るべきなのだろう。

この文章を柳田の嫌味ととらえるべきではなく、むしろ「フオクロー」を学の方法に役立ててきたことが「国学の改革に有効に役立つに違いない」という柳田の記述は、先に引用した「追い書き」の引用部分、つまり柳田へ報謝を述べたぐだりとしつかりと響きあっていたのである。 (本文中引用文の傍線はすべて筆者による)

注

- (1) 池田彌三郎『まれびとの座——折口信夫と私』(中央公論社、昭和三十六年)、加藤守雄『折口信夫伝』(角川書店、昭和五十四年)、岡正雄「柳田國男との出会い」(『異人その他』言叢社、昭和五十四年)、西村亨「柳田國男と折口信夫」(『折口名彙と折口学』桜楓社、昭和六十年)、中村生雄「古代研究の成立まで」(『折口信夫の戦後天皇論』所収、平成七年十一月、法蔵館)などの論考を参照。

- (2) 折口信夫宛て柳田國男書簡の原本は、國學院大學折口博士記念古代研究所が所蔵している。詳細は野村純一他編『柳田國男事典』(平成十年七月、勉誠出版)の口絵写真並びに同事典の項目「折口信夫全集」編纂準備のために整理した「折口信夫受取書簡データベース(未完)」に拠っている。筆者が研究所を離れたため原本の最終確認ができず本データベースは完成に至っていないが、その基本骨格だけは整えてある。平成二十六年年度から三年間の予定で、科学研究者補助金の資金を得

- (3) 本データベースは、筆者が折口博士記念古代研究所在職中に、『折口信夫全集』編纂準備のために整理した「折口信夫受取書簡データベース(未完)」に拠っている。筆者が研究所を離れたため原本の最終確認ができず本データベースは完成に至っていないが、その基本骨格だけは整えてある。平成二十六年年度から三年間の予定で、科学研究者補助金の資金を得

て、整理作業を再開、公開に向けての調査を進めている。その過程ですべてのデータを再度確認して完成し、公開することが可能となる。多数の作家、詩人、歌人、そして出版社、出版人、日本近代文学者からの書簡が混在して現存しており、折口信夫研究はもとより、日本近代文学研究に資する膨大な資源と考える。今後調査研究を一步でも前に進める必要性を強く感じている。

(4) 柳田と折口の関係が微妙になる『古代研究』刊行以後昭和五年から昭和十年にかけてのもの、さらには昭和十六年から十九年にかけて東北民謡試聴団で東北旅行に一緒した後の書簡が多く残されている。

(5) 柳田あて折口書簡は、第一次の『折口信夫全集』編纂時収集されたものが主であるが、その段階では柳田はまだ存命中であり、差しさわりを以って公開しなかった可能性がある。あるいは残念ながら散逸した可能性も否定できない。

(6) 中村生雄「古代研究の成立まで」(『折口信夫の戦後天皇論』所収、平成七年十一月、法蔵館)

(7) 前掲注(6)

(8) 古代研究所に保存している折口信夫受け取り書簡の中から、折口宛の献本御礼の書簡を先述のデータベースから抜き出して整理してみると、七十八通ほどの贈呈に対する礼状が確認できる。それ以外にも恐らくは出版社や各雑誌へも贈呈していたことが考えると、この紙片にあるようにほぼ百冊程度の贈呈があったことは確かだろう。それに対して、「民俗学編第二」に対する礼状は二十一通で、ほぼ四分の一に減っている。しかし贈呈先を見ると、齋藤茂吉、柳田國男、松本信弘、室生犀星といった名がみえる。これだけのデータでは確実なことは言えないが、明らかに贈呈先を絞ったことだけは窺える。

(9) 『古代研究』解題(『折口信夫全集』第三卷) 原紙は國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵。

(10) 折口信夫「異訳国学ひとり案内」(『國學院雜誌』第二十六卷第十・十二号、昭和九年十・十二月、後『新全集』第二十卷)

(11) 昭和五年六月二十九日消印のある「柳田國男書簡」。折口信夫の『古代研究』民俗学篇第二の献呈に対する謝辞の後、

引用文を含む長い意見を記している。

第四節 昭和五年の折口信夫——東北・新野採訪の意味

『古代研究』民俗学篇第二

『古代研究』民俗学篇第二が刊行されたのは昭和五年六月のことである。民俗学篇第一と国文学篇があわせ刊行されたのが、昭和四年四月のことであるから、その後一年と二カ月の月日が経過している。

なぜこのように間が開いたのかについては、次のような事情が指摘されてきた。

当初折口は「民俗学篇」「国文学篇」の二分冊二巻での刊行を予定していたらしい。そのことは、信州東筑摩教育会西南支会で折口の講習会の世話役をしていた洗馬小学校長小林国男に宛てた昭和三年十月十二日付消印の書簡に「今度は大岡山書店から古代研究といふのを二冊出します。」『新全集』第三十四巻 一二七頁とあることでわかる。

それが、三分冊になったのは、当初は民俗学篇は一冊に収めようと考えていたものが、ページを組んでいくうちに大部なものになってしまったためだという。刊行直前に民俗学篇を二分冊にすることにしたため、今度は第二冊のページ数が足りなくなり、その不足ページ分を埋める原稿を書くために、一年あまりも刊行が遅れたというのである。⁽¹⁾

確かに表面的な事情はそうであるかもしれない。しかし、内実ははたしてそれだけであつたらうか。

当初民俗学篇第二に収録が予定されていたのは、十八編であつた。その発表雑誌は次の如くである。⁽²⁾ 参考までに、民俗学篇第一の発表誌もならべておく。

	民俗学篇第二	民俗学篇第一
『土俗と伝説』	6	5
『民俗芸術』	3	2
『ふおくろあ』	2	
『國學院雜誌』	1	3
『神道学雜誌』	1	
『民族』	1	3
『郷土研究』	2	1
『改造』『女性改造』		3
『三田評論』		1
『大坂朝日』		1
草稿・その他	4	7

これをみて気づくことは、『古代研究』民俗学篇に当初収録を予定していた論文は、みずからが主宰し、柳田の『郷土研究』を引き継ぐ意気込みで、大正七年八月自ら刊行を開始した『土俗と伝説』に発表されたものが多いということだ。また、『ふおくろあ』『民俗芸術』に掲載されたものも、折口が組織した郷土研究会会員が彼に無断で掲載したものが多し。つまり、彼の「民俗学」にかかわる當為は、この頃までほとんど彼自身がこしらえた枠組み、或いはその周辺でのものであったということになる。

次に広告に示されていないなかったもの、つまり当初収録を予定されていないなかった論文がどのようなものであったか、そしてそれがどのような発表形態だったかを検討してみる。整理のためにその表題と発表年月、発表場所・発表誌を

列挙する。

- 田遊び祭りの概念 4・6 (4・9) 國學院大學郷土研究会講演 (『民俗芸術』)
- 呪詞及び祝詞 (4・7) 信州松本講演 (『民俗学』)
- たなばたと盆祭り 4・7 『民俗学』
- 漂著石神論計画 4・7 『民俗学』
- 「琉球の宗教」の中の一つの正誤 4・7 『民俗学』
- 古代人の思考の基礎 4・8 (4・11) (5・2) 國學院大學信濃人会 (『民俗学』)
- 組踊り以前 4・8 (4・10) 『民俗芸術』(伊波普猷著『琉球戯曲集』序文)
- 靈魂の話 (4・9) 國學院大學郷土研究会 (『民俗学』)
- 河童の話 4・9 『中央公論』
- 雪まつりの面 4・10 『民俗学』
- 古代に於ける言語伝承の推移 4・10 (5・1) 第一回民俗学大会 (『民俗学』)
- 折口が『古代研究』民俗学篇第二に後から収録をしたものすべてが、昭和四年六月以降に講演あるいは発表されたものであるということがわかる。これは、加藤守雄が指摘したように、「一冊分としてのページ数を満たすために」講演・発表を重ねたということもできるだろう。しかしそれらのほとんどが雑誌『民俗学』に掲載されていることは、やはり看過できないものがある。
- つまり、民俗学に関わる論文は、昭和四年五月の雑誌『民族』休刊と、それを引き継ぐ雑誌『民俗学』の創刊を境にして、かたちの上では『土俗と伝説』から『民俗学』へと完全にシフトしているということだ。
- このようなことを長々と述べてきたのには理由がある。それは、折口が初めて「民俗学」ということばを文章中で

使用したのが、ほかならぬこの『古代研究』であったからである。表題に「民俗学篇」第一・第二と使ったのはじめとして、すべてそれ以降に発表、掲載された文中にそれは使われる。中でも『古代研究』の「追ひ書き」は注目しておかなければならない。

「追ひ書き」の中で折口は、今まで自らの学問が柳田國男の考え方に導かれてきたことを報謝しつつ、この『古代研究』全三巻は、柳田の表現法を模倣し、態度を鵜呑みにし、その感受力を自分の中に生かそうとした結果であるとする。そしてさらに「民俗学」の草分けに柳田を得たことはいささきのよいことだったと称える。しかしその後、折口は奇妙な文章を記す。すでに繰り返し引用して来た文章だが、改めて引いておく。

先生の益倦まぬ精励が、我々の及ばぬ処までも、段々進んで行つて居られ、新しく門下に参じる人たちも、殖えてゆく一方である。或は心理学的に、社会学的に、日々新しい研究法を加へて行かれる姿がある。発足点から知つた私自身は、一次・二次のものに、固執してゐるかも知れない。使途の中、最も愚鈍な者の伝へた教義が、私の持する民俗学態度かも知れない。

この部分はなかなか難しい問題をはらんでいる。すでに前節でも述べたように、柳田に報謝しながら、実は今の柳田が目指そうとしている方向、つまり心理学的、社会学的な方向性が、自分の進もうとする道とは幾分異なつて来ているのだということを、自らに言い聞かせるような文面である。

この「追ひ書き」が、昭和三年十月から書かれ始め、⁽⁴⁾ ほぼ一年半あまりにわたつて書き継がれたものであることは、現存する校正刷りに残された、ゴム印の日付等から明らかである。この執筆にかかった時間が、先述した『古代研究』民俗学篇二分冊刊行の間にかかった時間とほぼ符合することは、見過ごせない事実である。『古代研究』民俗学篇第一の刊行の遅れは、ただ単に埋め草を書くために費やされた時間ではなく、この「追ひ書き」の内容と深くかかわるのではあるまいか。その執筆時期は、折口と柳田とを取り巻く事態が、きわめて微妙になつた時期と符合するからである。

雑誌『民俗学』

雑誌『民族』が第四卷三号を最後に休刊したのは、昭和四年四月のことである。柳田の砧の家に野沢虎雄とともに寄宿し、その編集を手伝っていた岡正雄が、その編集方針をめぐって柳田との仲が険悪となり、柳田が編集の現場から手を引いたことが引き金となった。⁽⁵⁾

雑誌『民族』はその休刊の辞に、次のような文章を載せている。

「民族」は又私かに休息を欲して居ます。自らを一先づ決算し反省し、そして明日の学問の健かにして快適なる発足を準備する為めとでも申しませうか、(中略)充分なる休息の後又やがて、「民族」は一層の学問的洗練と更に高次なる学問使命とをもつて必ず再生する日のあることを信じて疑ひませぬ。(『民族』第四卷第三号、一八一頁)

このことばは忠実に守られる。その『民族』の休刊から『民俗学』の創刊までの実にすばやい動きを見ると、『民族』の休刊は『再生する日』を予期してのこととさえ思えるのである。

『民俗学』創刊号の記事によると、『民族』を失つてから、寂しさを感じてみた人々の間に、誰云ふとなく談話会でも月々催して、お互の見聞を語り合はうと云ふ⁽⁶⁾。話が持ち上がって、三月九日、つまり雑誌『民族』が休刊になつた直後に民俗学談話会が開催される。この談話会はその後四月十三日、五月十一日、六月八日と立て続けに開催され、その後設立される「民俗学会」の母体となつた。その機関紙が『民俗学』であつたわけだが、その発刊は昭和四年七月である。

雑誌『民族』から『民俗学』へと到る一連の動きは、岡にとつては予定の行動であつたのかもしれない。しかし、こうした動きに対して、折口の立場は極めて微妙である。

『古代研究』国文学篇の巻頭を飾る論文「常世及びまれびと」の掲載問題をめぐって、掲載を主張する岡に対して

柳田は「こんな物は載せられない」と掲載を拒んだということとはよく知られている。岡によれば、結局柳田が編集に
関与していた第三卷までには折口の論文は載せられず、柳田が編集からほとんど手を引いた第四卷になって初めて載
せることができたという。⁽⁷⁾昭和四年に刊行された三冊（第四卷第一号、第三号）は、すべてその編集を岡と岡村千秋が
行っていたというが、この三冊に折口の論文が二編も掲載されているのは偶然ではあるまい。

『民俗学』の刊行に際して折口は、巻頭論文を含む四本の論文を寄せ、並々ならぬ熱意を見せるのである。『民族』
への掲載拒否問題を知る我々が見れば、表面的には柳田に代わって折口がそのあとがまに座つたと見られても仕方が
ないような行動である。現に『民俗学』第一卷第一号の会告に、「民俗学は先の民族とちがつたものではありません」
と書かれているし、学会員全員の顔ぶれを見れば、『民俗学』が『民族』を引き継ぐ意志を持った雑誌であることは
疑いはない。そしてさらにそれを発展させるために刊行する旨を告げている。意図的に柳田を排除したわけではない
だろうが、設立・創刊の経緯からして、形の上で柳田の積極的参加は望むべくもなかった。編集体制は、おのずから、
折口を中心とした体制に一新された。

柳田國男の立場

折口の『古代研究』民俗学篇第二と雑誌『民俗学』に対する柳田の考えは、昭和五年六月二十九日に折口信夫に宛
てられた書簡⁽⁸⁾にほぼ吐露され尽くされているといつていいだろう。

この中で、柳田は、折口の『古代研究』民俗学篇第二の「追ひ書き」に言及し、次のように述べる。前節でも言及
したが、その部分を含めて少々長いが一部を以下に引用する。

民俗学第二の完成悦しく存候。この中にはまだ拝見せざりしものも有之潜心精読いたすべく候。尚奥の方の御添
書を読みて頗る明かに意見の差を覚り申候。御説の如く小生は以前は固よりも今も折々はフオクローアを史学の方

法として活用すること有之。それがよきことであつたと今さへ感じをり候。単なるフォクロアよりも其方が国学の改革には有効に役立つべしとも存じをり。貴兄が更に独自の方法を加添せらるゝも悦ばしく存じ候。唯一点だけは是非とも故障申入度はそれをフォクロアと称せらるゝことに候。民俗学は新名なれば衆議次第何に適用しても可なれど少なくともフォクロアには既に定まつた意味有り。一言で言へば資料を書冊に採らず、純乎として民間の伝承を解説することに候。故に小生らが巫女考等に書いた(中山君等が今もやつて居る)やり方をば曾て一度もフォクロアと呼びたること無之候。雑誌の英文は余計なことなれども会をフォクロアソサイテイと謂ひつゝ紀伝解釈の仕事をして居られたのでは如何にも日本に外語の理解力が無いやうで、片端之に関係ありし小生は心苦しく候。譬へばちやうど植物学と薬物学のやうなものなればフォクロアの名はやはり順当に専ら此が採集と標本作成に任じ次に又民間の伝承を解説せんとする者共に与へなければなるまじと存候。あの会は一種の張合で作つたものなれども行く／＼主要なる会員の之に臨む(時だけの)態度をかへさえすれば別に出来たものを打潰すにも及ぶまじと存候。(読解の便のため、筆者において句点を補い若干表記を変更した)

にべも無い言い方である。

『古代研究』は、先に述べたように、柳田の「表現法を模倣」し「その学問を全的に取り込まうと努め」、その「態度を鵜呑みして、その感受力を、自分の内に活かさうとした」結果の作物であり、それはまさしく「国学の改革」それのみを目指していたはずだった。民俗学との出会いは、そうした自らの目指すところに「一道の明り」を見出したと折口は述べる(『古代研究』追ひ書き)。

それに対して柳田の態度はそつけない。国学再生の方法として、折口が「古代信仰から派生した、社会人事の研究」とか「伝承に実感を催されて、古代日本の姿を見出す」といい、「古代生活に現れた民族論理」一編に込めた思いを語るのに対して、「フォクロアを史学の方法として活用すること」は確かに自分もかつて行っていた方法であり、今

でもそれがよいことであつたと思つてゐる。それはたしかに「国学の改革」ということには役立つものであるけれども、しかしフォクロアそのものではない。折口が国学の改革という方向に独自の方法を加えていくのはかまわないが、それをフォクロアそのものと言つてもらつては困る、というのである。柳田が「明かに意見の差を覚」つたと書くのは、先に引いた折口からの柳田に対するメッセージに対するかなり強い拒否のことばであつたろう。

もつとわかりやすく言えば、折口の言う「古代研究」は国学の改革には役立つものであるが、それはフォクロアとは別物であるとはつきり釘をさしたのである。折口が『古代研究』に「民俗学篇第一・第二」という表題をつけ、「追ひ書き」にも盛んに「民俗学」ということばを用いて柳田にメッセージを送つてゐるのに対して、「民俗学」と「フォクロア」とは違ふということばでもつて、折口の「古代研究」はその方法からはつきりフォクロアの書としては柳田に否定されたといつても過言ではない。

返す刀で柳田は、同じ書簡に民俗学会ならびに『民俗学』に対する苦情も述べてゐる。批判の根柢はまったく同じであるが、こちらはもつと辛辣である。

民俗学会が「フォクロアソサイティ」といいながら、「紀伝解釈の仕事をして」いたのでは、日本に外語の理解が無いようでもフォクロアに少しでも関係してゐる人間にとつては心苦しい。フォクロアという語は本来採集を専らにし民間の伝承の解説をしようとする者のみに与えられるべきである。「民間の」あえてゴマ点を打つてあるところなど執拗だ。ただ民俗学会の主要会員が、今行つてゐる方法さえ改めれば、民俗学会をうち潰すこともあるまい、と述べる。そしてその矛先は、好むと好まざるとにかかわらず民俗学会の旗頭となつてしまつた折口に向つてゐることは、明らかであろう。

この頃、採集資料の客観性と有効性を保証し、「民俗学」の学としての確立に腐心してゐた柳田としては、みずかに「張合」うようにして作られた学会・学会誌にその名前を先んじられて、いささか苛立つてゐたのではあるまい

か。もちろん、単なる名辞の問題ではなく、民俗学と言う学問、或いは伝承資料に対する姿勢の問題が根底にあることは明らかだが、しかしそれをあえて「名辞」の問題に集約したあたりに、むしろ柳田の苛立ちが仄見える。折口は、「民俗学」と「フォクロア」とを柳田ほどに深く分けて考えていなかったふしがある。しかし柳田にしてみれば、そうした曖昧さこそ、許し難く写つたに違いない。いささか強がりにも聞える「民俗学」は新名なれば、衆議次第何に適用しても可なれど」と言う発言は、そのような意味にも受け取れるだろう。柳田はその後しばらく「民俗学」ということは避け続ける。

しかし、折口にとつて、この柳田の発言はどのように聞こえたのであろうか。

北上山地採訪・新野採訪手帖の目安

柳田の発言から二ヶ月後、折口は突然東北旅行に旅立った。それまで師柳田のフィールドを荒らすまいとする配慮からか、仙台以北を本格的に訪ねたことの無かった折口が、突如東北旅行、特に遠野を中心とした北上山地の採訪に旅立ったのはなぜか。

この採訪が、佐々木喜善からの誘いではなく、折口が佐々木に頼み込んで実現したものであるらしいことは、昭和五年七月十三日付けの佐々木喜善が折口に宛てた書簡(9)から推測できる。書簡には次のようにある。

お手紙を誠にありがたく拝読いたしました。御旅行の事につき本日電報で御願申上げました通りこの所少々暫時お待ち下され度御願致します。折角の御出先きをそいだ様でほんとうにお申訳がありませんでしたが、明十四日に東京を御立ちになるといふことになれば、あまりに急で御座いましてこちらがすっかり面食らつてしまいましたのです。(中略)このところ少々御立出でを御延ばし下さいませ。旅行は実は八月頃かと思つて安心してゐました。

折口は七月の上旬に佐々木喜善に手紙を出し、遠野をはじめとする上下閉伊郡の探訪の案内を頼んだようだ。この依頼に対する返事がこの書簡である。折口は佐々木から返事が来るのを心待ちにしていたようで、逗留中の上林温泉から留守宅の鈴木金太郎に宛てて「佐々木喜善氏の手紙が来たら返事の事、これは、春洋承知⁽¹⁰⁾と書き送っている。

実際に折口が北上山地探訪に旅立ったのは、佐々木の提案通り八月末から九月中旬にかけてであった。遠野から歩き始めて、徒歩と車を利用しながら『遠野物語』の舞台を陸中川井、茂市、刈屋、落合、岩泉、安家と、千メートル級の険しい山々がつづく北上山地のやまあいを北上、下閉伊郡戸鎖から道を西にとつて、野田玉川へ出、さらに海岸沿いを久慈、鮫と辿つた。その後、八戸から津軽へ抜け、さらに下北半島探訪をしてこの最初の東北旅行は終わる。

それにしても、この遠野行きはあまりにも唐突である。柳田からの書簡を受け取った後、すぐに北上山地探訪を思い立つあたり、しかも、いかにも性急な折口の様子は、彼が柳田の発言によつて何らかの行動を迫られたのだと考えるのが妥当だろう。そしてその最初の訪問地が他ならぬ遠野であったことは偶然ではあるまい。

折口は普段、小さな手帖を携行し、日々の予定、出来事、或いは思い付いた考えなどを記す常があつた。旅に出ても同様で、旅先における見聞、採集した事柄等をそこに記している。彼の民俗学の方法が、文献に残された資料と、現存する民俗資料との間を、実感と洞察力によつて架橋するという方法であるとするならば、彼が旅先で残した手帳は、そうした見聞に触発された実感を生に書きとめたものとして重要であろう。最初の北上山地探訪でも、彼は一冊の手帖を残している。⁽¹¹⁾

そこには、遠野から始まった探訪の聞き書きが断片的に記されているが、その聞き書きの間に次のような事柄が書き留められている。

1、経済状態

交通

隣村との関係

職人調べ

2、文書に関するもの

3、年中行事

祭事

4、家屋調査

記念物

5、冠婚葬祭

伝説

歴史

新旧交代

不完全なものであるが、民俗採訪の目安である。

実はこれとほとんど同じような内容が、別の資料に残されている。それは、この東北採訪から一ヶ月後、昭和五年十月に行われた國學院大學郷土研究会の新野採訪に関する資料である。この採訪も、折口の側から当時旦那村役場の伊東宣直に直接頼み込んで実現したものらしいことは、やはり伊東からの昭和五年八月二十八日付書簡から窺える。

この資料は、折口の教え子で郷土研究会会員であり、又民俗学会員でもあった青池竹次が残した聞き書きノートである。⁽¹³⁾ ノートには、約一週間に亘った新野採訪の聞き書きが書き留められているが、その冒頭に折口によるものと思われる採訪目安が筆記されている。

1、経済状態

- ・よその村との交渉
 - ・村へ来るみち
 - ・とつひきの状態
 - ・職業しらべ——職人しらべ
 - 職人の信仰、職人のつかふ道具
 - ・職業の新旧
 - 職業の農工林業の方法
 - ・職業の方法
- 2、家屋調査
- ・家屋の構造
 - ・家系
 - 本家末家の関係
 - ・植物動物の関係
 - 家屋とその所屬のもの
 - 家畠と植込みとかの必須条件たるもの
- 3、村落組織
- ・旧家組織
 - 祭りの時の席順できまつてゐた
 - ・小作人しらべ

被官があゝの辺に多かつた

新野の付近

・わで

祭りの時の上席になるもの

その新旧、伊豆山の信仰と領主との関係

4、行事伝承

・年中行事

・冠婚葬祭

・まつりのこと

仏教のことについて

・民間療法―薬

・童戯

・芸能

演芸の萌芽になるもの

雪まつり―盆をどり

5、口頭伝承

・伝説

・童話

・俗信 (ことばに宿した)―いひならはし (否定と肯定)

・民謡

6、動物伝承

- ・ 造型の方面
- ・ 呪ひの方面
- ・ 玩具に属するもの
- ・ 農具其他職業用具
- ・ 地物、記念物

墓からぬし、祠きのえね

・ 記録類（歴史）

成書（しきたり類をかきとめてあるもの）を集めること

・ 着物・食物

いささか長い引用になったが、新野で郷土研究会会員に指示し、実際に行わせた探訪の目安は、東北での手帖に書きとめた目安を下敷きにしたものであることはほぼ明らかである。そしてそれはかなり整理され、発展したものである。なっている。

岩手県上・下閉伊郡という、いわば『遠野物語』のフィールドでの民俗探訪のさなかに書き留められた目安、そしてその翌月に行われた新野での共同探訪で門弟のノートに書きとめられた目安、この二つの目安は、折口が「民俗学」の調査方法や認識のあり方を自ら模索した後と見ることが出来る。

目安の意味

折口が調査の目安を考えたのは、これが最初ではない。

大正十一年、二度目の沖繩採訪を目前にして、「民間伝承蒐集事項目安」と「民間伝承採集事業説明書」と名づけられ啓明会に提出された書類である。

このうち、「説明書」は、ジュネーブに国際連盟日本委員として赴く柳田が出発前に折口に含め置いた旨を書き綴つたものという、向こう五ヶ年に及ぶ民間伝承採集の計画書である。

「計画書」では、「民間伝承学」の必要性を西洋のフォクロアの研究史を引き合いに出しながら論じ、その目的・方法、具体的事業の進め方まで詳述している。具体的進め方として、沖繩諸島、鹿児島湾など全国七地方を調査対象とし、事業に当たるものとして柳田、佐々木喜善、折口の三名の名を挙げている。

西洋を引き合いに出しての民間伝承の意義を説き、それが科学的地歩を占めつつある状況などを述べているあたり、柳田の意見が極めて濃厚に反映している。しかし「民間伝承学」が、「民間生活に於ける古代的要素を研究するにあり。即、伝説・風習・文献等によりて、信仰並びに行事の方面より、その基礎をなせる古代人の精神的発達を考察せむとするもの」と規定する文脈は、折口が『古代研究』の「追ひ書き」に、「合理化・近代化せられた古代信仰の、元の姿を見る事」や、「古代信仰から派生した、社会人事の研究」と述べた「国学の改革」の方法そのものである。つまり、この壮大な採訪計画が企画された時点で、折口と柳田の「フォクロア」に対する認識の違いはまったく露呈していなかったといつてよい。折口としては、なんの違和感もなく、この事業が「国学の改革」を目指す事業と認識していたに違いない。

折口は「説明書」にさらにこう記す。

斯学研究資料たる民間伝承は、その性質上、文献・記録に漏れ易きを以て、単に書齋に於ける渉獵を以て完全なりといふべからずして、其大部分は、民人の記憶或は実在せる伝承の蒐集に俟たざるべからず（中略）拙者等親しく其地方々に臨んで、精細に探訪を遂ぐる外なきを信ずるに至れり。『新全集』第十九卷 三一―三二頁）

先の柳田の書簡における批判的言辞を知る我々にとつては、いささか意外である。むしろこれほどまでに柳田の意見に忠実な考えはないと思える。同時に提出された「目安」には次のような事項が書き留められている。大項目だけ引用する。

- 一、信仰に関するもの
- 二、医療・禁厭
- 三、一般風習
- 四、階級制度
- 五、口碑・民譚
- 六、言語・遊戯
- 七、民謡・民間芸術
- 八、童謡
- 九、舞踊及び演芸（末流的・非都会的のもの）
- 十、演劇
- 十一、影絵
- 十二、ノゾキカラクリ
- 十三、巡業手工職人の余興演芸（『新全集』第十九卷 三二五―三三〇頁）

十四、右の外、地方々々の事情によつて、特殊事情の加はるべきは勿論なり。

大項目だけで見ると芸能方面に偏つた目安であるが、引用しなかつた小項目の中に、社会的、経済的項目が含まれている。つまりこの目安は、芸能的側面から伝承を見ていこうとする姿勢が貫かれている。

一方、先に引用した東北採訪、新野採訪の際に書き留められ試行された目安は、そうした芸能的方向が薄められ、社会制度の方面を強く意識しているといえる。

柳田から批判された後、折口が民間伝承収集の在り方を模索したのは確かである。柳田の主張に屈してその方向に追随するか、それともそれとは異なつた何らかの民族認識の場に自らをいざなうか、その方法的、認識論的な具体的ありようは、これらの目安などこの時期の両者の発言を更に子細に検討する必要があるが、しかしこれだけは言える。

それは、先に述べたように大正十一年に明らかにした「計画書」から、昭和五年の『古代研究』に至る道筋で自ら確信していた「民俗学」の目的が、柳田のそれと大きくかけ離れてしまつている事を知らされ、改めてそれを確認する作業が必要だつた。そして採訪という作業を続けながら、しかしそれは、やはり大正十一年に明らかにした方向であつたと自覚するに至つたのだと。

折口が、「民間伝承収集事業説明書」とと「民間伝承収集事項目安」とをあえて『民俗学』に掲載した理由の一端には、そうした思いがあつたはずである。

昭和五年に行われた二つの民俗採訪の背後には、折口がみずからの民俗学に対するスタンスを見極めるための、おのずからの葛藤があつたと考えられるのである。

注

- (1) 加藤守雄「解説・折口信夫研究」『古代研究』Ⅲ（角川文庫版）解説、昭和五十年四月 角川書店）
- (2) 異なる雑誌に二度以上に分けて掲載された論文は、それぞれの雑誌をカウントしているため、合計は十八を越える。
- (3) 注（1）加藤前掲書、二六五頁
- (4) 國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵。自筆書き入れがある。前半後半とに別れ、前半部には昭和五年三月二十三日、後半には同四月一日のゴム印が捺されている。また、この「追ひ書き」が、昭和三年十月四日に亡くなった長兄の通夜に書き起こされたことは、その冒頭部で明らかである。
- (5) 岡正雄「インタビュー・柳田國男との出会い」『季刊柳田國男研究』一 昭和四十八年二月 白鯨社。
- (6) 「民俗学談話会記事」『民俗学』第一卷第一号、七二頁。
- (7) 注（5）岡前掲書。
- (8) 松本博明「折口信夫宛柳田國男書簡―書簡資料①―」『折口信夫研究資料だより』第二号 平成九年十月國學院大學折口博士記念古代研究所）に、他の折口信夫宛て柳田國男書簡と共に紹介した。柳田から折口に宛てた書簡については本章第三節を参照。すべて國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵。なお、本書簡を含む一部の書簡については、『柳田國男事典』（平成十年七月、勉誠出版）にその一部が写真付で紹介収録された。
- (9) 國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵。封書。差出人は「仙台市川内大工町七四 佐々木喜善、二〇〇字詰丸善製 原稿用紙六枚に書かれている。
- (10) 昭和五年八月十四日は鈴木金太郎・藤井春洋宛て書簡。（『新全集』第三十四卷 一三九頁）。
- (11) 國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵。所蔵されている手帖は無作為にナンバーが付されている。この手帖は「NO、209」。内容から「東北探訪手帖」というより「北上山地探訪手帖」と名付けるべきもの。引用した目安のほかに、

おしらせさま、いたこ、神子などについての聞き書きがされている。『新全集』第三十五巻に収録されている。

- (12) 國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵。封書。差出人は「長野県下伊那郡且開村役場 伊東宣直」、村役場の用箋二枚を使用。

- (13) 同。B6判大のノート三〇四頁に、採訪の目安と十月十一日から十八日に至る聞き書きが日付ごとに記されている。本ノートについては、『折口博士記念古代研究所紀要』第七輯（平成十六年三月）に収録した。

- (14) 「民間伝承採集事業説明書」の末尾に、『民俗学』発表にあたって書き加えた説明文。『新全集』第十九巻。

第五節 柳田國男の「郷土」と折口信夫の「郷土」

「郷土」の概念

「郷土」という言葉が、いついかなる形で生み出され、時代によって変容し、あるいは再発見されてきたのか。その言葉の概念が時代とどのように切り結んできたのか。「郷土」あるいは「郷土研究」「郷土文学」など、「郷土」という語をその核として成立している語句の実体は、どのようなものであったのか。そして、実際「郷土」とは何なのか。このような疑問から出発して、近代における「郷土」という言葉について、新渡戸稲造、柳田國男、さらには郷土教育運動へのひろがりを基軸として、概略的な跡付けを行ったことがある⁽¹⁾。本節では、それらを踏まえて柳田國男と折口信夫の「郷土」というタームを仲立ちとした関わりを考えてみたい。二人の出会いそのものが『郷土研究』であつたこと、郷土という問題が、彼らが「民俗学」を立ち上げてゆく時代に重要な用語であつたと考えるからである。

「郷土」という言葉は、新渡戸稲造の「地方学⁽²⁾」という研究方法の提示にもなつて、その学問の対象をどのように構成するかという観点から思考された。それまで、「地方(ちほう)」を対象とする研究⁽³⁾といった場合、市町村、郡といった、境界に区切られた地域をその学問あるいは調査の領域としていた。しかし、歴史的枠組みのなかで生きてきた地域にとつて、明治政府によって行われた、擬制的範囲として地域の実態に整合していない市町村の区分けと、それに拠つた地域研究は、地域の活性化にほとんど役立たないという事情があつた。そうした実情から、思考の基盤

と研究の対象を自然村とし、その中で繰り広げられて来た、そして今ある農業生活を中心とした人間のさまざまなとなみを対象とする学問を、「ちかた地方学」と名づけて推進することを新渡戸は主唱したのであった。「ちかた地方学」とは、ありていにいえば、人文地理学、農政学、歴史学など既存の学問分野から集合した人々による、「研究領域及び対象の再構成」の営為と捉えなおしてもよい。そうした考え方に基本的に同調し、その方向の中に「郷土研究会」を組織した柳田の意思によつて、「ちかた地方」は「郷土」という言葉によつて置きかえられ、「ちかた地方の研究」は「郷土研究」として、再認識されていく。⁽³⁾

しかし、柳田において、「郷土研究」という方法にいささかの揺らぎがあつたことが、問題を複雑にした。それは、たとえ、「郷土」という研究対象範囲が定まったとしても、それをどの視点から思考するかという一点に関わる問題であつたようである。つまり、「郷土」とはなにかという議論がほとんど深まらないうちに、「郷土研究」が進められた結果、「郷土」についての概念が錯綜してしまつたためでもあり、また新しい学問である「民俗学」の思想についての受取り方に関わる混乱であつたとも言える。新渡戸と柳田では、一見同じような思想、視座からの発言が、恐らくまったく異なつて享受される言説として述べられている。新渡戸は、「一村一郷のことを細密に研究して行ば、国家社会のことは自然と分る道理である」と述べ⁽⁴⁾る。これに対して柳田は「郷土研究の最終の目的は、⁽⁵⁾国としてより賢明に、社会として長く栄えるに在ること」と説いたのである。この二つの考えを同俣に見るかどうかという点で、後の郷土教育運動をはじめとする「郷土論」に一つの誤解が生じたことは否めない。新渡戸の考えは、「郷土を豊かにする」ことにあり、その「郷土」は、「地域主義」に置きかえられ享受される可能性があり、また事実そうであつた。それに対して、柳田の志向は、「郷土」を狭い「郷土」に閉じ込めてくことを忌避していたとさえ思われる。「郷土研究とは郷土を研究することではない」と言い切つているのである。⁽⁶⁾

少々わかりにくいのだが、「日本の中の地域」である「郷土」という発想と、「郷土」の中にすでにして「日本があ

る」という発想の違いとでも言おうか。

こうした認識あるいは方法の差異は、現象として、雑誌『郷土研究』の編集方針について、あるいは「山人」に関する柳田の考え方に対しての南方熊楠の批判⁽⁷⁾、さらには、教育運動と柳田との考え方のずれ、柳田の郷土教育運動批判⁽⁸⁾など、様々な場面で露呈した。

「郷土」をどのように認識するかという問題を考えた場合、より根本的なところに考察の基盤があるように思える。常に柳田の伴走者であった折口信夫の発言によってそれはクロースアップされる。

折口信夫 「郷土と神社及び郷土芸術」

折口信夫は、昭和七年八月、國學院大學で開催された皇典講究所主催の神職再教育講習会に於いて、「郷土と神社及び郷土芸術」と題して、三日間にわたる講演を行った。⁽⁹⁾この講演は、「郷土」「神社を中心として」「郷土に於ける芸能」の三部によって構成され、その第一講「郷土」の中で、折口信夫の「郷土」に対する考え方を理解する上で極めて重要な発言がなされている。折口が、「郷土」という言葉の概念規定について解説した場面はそれまでほとんど見られない。初めて「郷土」という言葉について詳細に語ったのがこの講演だったわけだが、その内容は極めて注目されるものであった。

この講演が行われた昭和七年は、文部省と郷土教育連盟が共同で郷土教育運動を全国各地で推進し、盛んに鼓舞していた時期である。⁽¹⁰⁾そのような時期において、この講演が注目されるのは、講演の最初に明確に位置付けられた「郷土」についての折口の考えが、こうした郷土教育運動の思想的基盤になっている「郷土」の概念あるいは「郷土教育運動」の方針と大きく異なっており、きわめて特異なものであったこと、そしてその考え方が、教育運動のいわば思想的支えであったはずの柳田國男から引き継いだものであることを、折口がはっきり明言して居るといふ点である。

「郷土と神社及び郷土芸術」のうちの第一講「郷土」の内容を子細に検討してみよう。

折口は先ず、「郷土といふことは何を意味するかといふ話から述べたいと思ふ。」と口火を切る。昨今郷土教育がやがましく言われているが、それを行う郷土教育に携わっているものが「郷土」というものに対してほとんど理解がないばかりか、誤った考え方をして居ることに對して批判を加え、「郷土」の概念について次のように述べる。

一体郷土とは、西洋の歴史から考へても、都会から呼びかけられた名、つまり、田舎といふことばに過ぎないのである。田舎には静かな、豊かな落ちついた生活があると、都会のあわただしい生活をする人が、さう考へて懐しんだのである。その心持ちから郷土といふ詞は生れて来たのである。即、そこには古めかしい生活があり、専ら古いものを保存し、維持してゐるものだと、かう考へて居つたのである。さうして、田舎に對して、一種の尊敬と、やすらひとを感じてゐたので、この詞が盛んに用ひられ出したのだ。それは、西洋——フランス・イギリス——の国々でもほゞ五十年前のことである。これと同時に、この田舎を対象とした學問が、自然起らなくしてはならないのである（「郷土と神社及び郷土芸術」『折口博士記念會紀要』第二輯 五頁）。

「郷土」の本質的な意味は「都会から呼びかけられた名」つまり「田舎」という詞に過ぎない、と折口は言い切る。ここで折口が考へている「郷土」は、「古めかしい生活」「古いものを保存維持している」「そういう領域を都会の人間がそう名づけたのだ」という点である。しかし、そうした本質的な「郷土」の概念は、次第に変容し、「田舎に住んでゐる人自身が、段々自分の土地を言う風になつてきた」とする。

つまり「郷土」には

- ① 都会人が、静かで豊かな生活が残っている、古めかしい生活を保存維持している場所に対して使う場合
- ② 田舎人が、自分の住んで居る土地を言う場合

この二つの位相が考えられるとする。しかし本来的には、「郷土」という詞は、次の内容によつて規制される。「古代

の生活が残つてゐること、昔からの信仰生活によつて我々の生活が秩序立てられていること」つまり、「われわれの現代の生活を指導してゐる指導精神が古い時代からもち伝へられてゐること」が郷土の条件であるといふのである。そして、「郷土」という言葉からこうした「古代の匂い」を取り去れば、もはやそれは「郷土」としての意味をなくす時まで言い切つてゐる。「郷土」を「古代生活の残存」といふ観点から位置づけたこと、まずこれが折口における郷土観の一つの大きな特徴である。このことは、折口の学問の基本的な枠組み、あるいは性格をはつきり方向付けた『古代研究』の内容とその生成に深くかかわることである。

さらに折口は、「郷土」を考えるために、三つの「標準」を提示する。その標準とは、「土地、家、人」であり、郷土はこの三つの単位によつて成立しているとする。

まず、「土地」というのは、「郷土」をどのような範囲で考えるかという問題であるが、折口は「政治上から言つて、郷土とは、政治組織が進んで来る今一つ前の古い時代の邑落即国によつて統一されない村なのである」とする。この「郷土」の枠組みは、新渡戸稲造がその「地方ちかたの研究」において「地方学」の研究対象を自然村の形に設定したことと共通している。「郷土」そのものの範囲についての認識は、新渡戸も折口も同じであつたといつてよい。

しかし新渡戸と異なつて極めて特徴的なのは、郷土を考えるうえで「集団」ということ、さらにその集団を形成する心意的根拠、精神といったものを強く意識している点である。集団とは、人が集団を作れば「氏族」であり、氏族（つまり「家」）が集団を作れば「種族」であるというように、土地にも集団の意識があるとし、先に掲げた「郷土」を考える三つの標準すべてに「集団」という要素を見るのである。

ここで折口は、「日本の国で最も著しく考えられるのは土地に一つの強い精神があつたことである」とし、「国魂」といふ概念を持ち出してくる。土地にはそれぞれ「大和の国魂」「武蔵の国魂」のような精神的な存在があり、それが人間と並行してゐた。そうした「土地の精神」である「国魂」の集合体として国家があり、それが大きな「国魂」

(大國魂)として天皇に司られていたと考える。

こうした「土地にも集団の生活がある」とする折口の「郷土」観は、折口学の基盤とも言うべき「マナ」「ライフインデキス」といった、日本人の靈魂観に関わる考え方と分かちがたく結びついている。⁽¹⁾すなわち、折口にとつて「郷土」とは、「ライフインデキスが人と交わる現場」であつて、そこに繰り返されてきた人間のいとなみが、例えば「地名」「祭りの詞章(芸能)」「伝説」といった形を借りて傳承されている、その領域として認識されるわけである。

この「郷土」観は、折口のその後に発表された文章の中でもほぼ一貫している。

たとえば、昭和十年に発表された「民俗研究の意義」を見てみよう。これは昭和十年、日本民俗協会第一回例会における講演筆記である。まず、折口は、民俗学徒が民俗学調査で歩く時に第一に必要なことは、歩いていて矛盾を感じ、疑問を捉え、愕きの心を持つ事であると述べ、民俗学における「実感」の重要性について説いたあと、その学の対象となる「郷土」に言及して次のように述べる。

我々は、民俗学といふ語を用ゐる前は、郷土研究と云うてゐたのであるが、近年、此語を用ゐるのが都合が悪くなつた。我々の用ゐた郷土と、最近一般に謂はれてゐる郷土とは、意味が違ふのである。即、我々の郷土研究は、誰某の郷土、我が郷土などといふ、狭い意味の郷土の研究ではなく、其を通り越した——我々の過去、即、日本人の古い相を知る為の郷土研究だつたので——郷土と研究とがくつゝいたものであつたのだが、残念なことには其が再び逆転して、狭い意味の郷土を考へる様になり、更に近頃は、其に対して歴史的な考へ方をする様にさへなつた。最近の郷土教育、郷土史研究が其である。謂はゞ、かうした人達には、言葉の進化といふ事がないとも見られる。また、言葉の意義を無視して、無制限に拈げた結果だとも見られる。

(「民俗研究の意義」『日本民俗』第二号・第六号、昭和十年九・十二月、『新全集』第十九卷 一九一—二頁)

(ここで注目されるのは、「われわれの用ゐた郷土と、最近一般に謂はれてゐる郷土とは、意味が違ふ」とはつき

り断定していることである。「我々」とは何を指すかという問題は、別に考えるとして、少なくとも折口の「郷土」あるいは「郷土研究」とは、「誰某の郷土、我が郷土」と言う言葉で示される「狭い意味の郷土」では無く、「それ」（つまり「我々の郷土」）の概念を通り越した「日本人の古い相を知る為の郷土」であったと宣言している。そして、その「古い相を知る」方法として「歴史的」な迫り方をする考え方を廃し、その頃盛んになった「郷土教育」、あるいはその理念に支えられて始められた歴史教育に対して批判を加える。

つまり折口の考えでは、「郷土」を研究するという行為は、限定された地域の歴史を調べ上げるのではなく、地域に残りその地域を成り立たせている思想、風習といった、人間の永年持ち伝えている倫理、それは古い時代から不合理な形であっても、伝えられてきたしきたりを研究することによって、その拠って立つ基盤思想を日本人全体に敷衍して考えようとしたものであった。この立場は、先に引用した「郷土と神社及び郷土芸術」の文脈からさらに一歩進んでいる。

折口において、「郷土」は常に「古代」とひとつながりをもって、今の時代に現実化していなければならぬものとしてあった。折口にとつての「郷土研究」は、彼の「古代研究」に他ならなかったからである。

こうした「郷土」観が、決して折口独自のもので無かったことは、「郷土と神社及び郷土芸術」の次の文章で示されている。

この郷土といふ詞を、本当の意味の用語に使ひ出されたのは、柳田國男先生なのである。それ以前もこの詞はあるが、それは唯簡単な使ひ方に過ぎない。更に先生は、さういふ古代精神によつて統一せられてゐる、田舎及び都会の生活の種々な様式を集めて研究して行く事に、「郷土研究」と言ふ詞を用ゐられた。それで、日本に於ける郷土といふ詞の意義が決つて来た。即、郷土研究といふ詞を通じて郷土の意義が決つたわけである。

折口が、柳田から受けた「郷土」という言葉の意味は、「古代精神によつて統一せられている、田舎及び都会の生

活の種々な様式を集めて研究して行くこと」であるとす。そして、それを決定したのは、柳田國男であつて他ではないことを、それに自らは追隨してゆくことを、折口は他の文章の中でも繰り返し強調するのである。⁽¹²⁾

柳田國男と折口信夫の「郷土」——雑誌『郷土研究』と『土俗と伝説』

このような折口の「郷土」に関する言説を視座にして、あらためて柳田國男の発言を考えてみよう。

柳田は、明治四十二年に出版された『後狩詞記』を境に、従来の農政官僚としての発言から、急速に伝説、風習といった民間伝承を中心とした方向に、その発言の裾野を広げてくる。⁽¹³⁾ そうした道筋の中に、「山人」に対する研究が、明治末期から大正末期にかけての柳田の基本的なまなざしのひとつとしてあつたということは、多くの研究者が指摘するところである。⁽¹⁴⁾ その言説を見ていくと、柳田の「山人」探策という営為の背後に、柳田のもう一つの「熱意」が存在するらしいが見えてくる。どうやらそれは二つ認められる。一つは、柳田の思想的枠組みの中で、「山」が「平地」と対比させられる時、「山」というフィールドに遺つていであろう「昔ながらの生活と倫理」ということである。

椎葉山の狩の話をするに付ては、私は些も躊躇をしなかつた。この慣習と作法とは山中のおほやけである。平地人が注意を払わぬのと交通の少ない為に世に知られぬだけで。我々は此智識を種に平和なる山民に害を加へさへせずば、発表しても少しも構はぬのである。『後狩詞記』明治四十二年三月、『定本』第二十七卷 一〇頁

米食人種、水田人種の優勝 以上は私が九州旅行の見聞の一端を順序なく申述べたのでありますが、要するの古き純日本人の思想を有する人民は、次第に平地人とに山中に追込まれて、日本の旧思想は今日平地に於ては最早殆ど之を窺い知ることができなくなつております。したがつて山地山民の思想性情を觀察しなければ、国民性といふものを十分に知得ることが出来まひと思ひます。

（九州南部地方の民風）『斯民』第四卷第一号、明治四十二年四月）

狭き谷の底にて娶らぬ男と嫁がぬ女と、相呼ばひ静かに遊ぶ態は、極めてクラシツクなりと言ふべきか。首を回らせば世相は悉く世絆なり。淋しいとか退屈とか不自由とか云ふ語は、平野人の定義皆誤れり。齒と腕と白きときは、来りて縷繆纏綿し、頭が白くなれば乃ち淡く別れ去ると云ふ風流千萬なる境涯は、林の鳥と白川の男衆のみ之を独占し、我等は到底其の間消息を解すること能はず。

（木曾より五箇山へ）『文章世界』第四卷第十一号、明治四十二年八月『定本』第二卷 一九三―四頁 傍線はいずれも筆者によるもの）

傍線部のように、柳田の言説において、「山人」は「平地人」と対比させられる形で言及されることが多いのであるが、その対比の中で、「山人」に与えられた立場は、例えば「椎葉村の慣習と作法は、山中のおほやけである」といい、又「古き純日本人の思想を有する人民は、次第に平地人に山中に追込まれて、日本の旧思想は今日平地に於ては最早殆ど之を窺ひ知ることができなくなつております。したがつて山地山民の思想性情を觀察しなければ、国民性といふものを十分に知得することが出来まひと思ひます」というくだりに見られるように、古き純日本人の国民性とそのおおよけ、あるいはクラシカルな作法の伝承者としてである。山人の生活を顧みなければ、日本の国民性など分るまいという言説こそ、柳田の一つの熱意の表出でなかつたかと思われるのである。彼が「山」に求めていたものは、いわば再構成された「郷土」であり、それは平地と対比的に語られることによって、あるいはその山と緊張感を持つて生活している「山民」によって語られることによって、平地の生活を逆照射することであつた。「山人」の発見は、彼にとつての「郷土」「郷土人」の発見に他ならなかつた。

もうひとつは、『遠野物語』の序文などに、繰り返し示される「現在の事実」ということである。

猪狩の慣習が正に現実に当代に行はれて居ることである。（中略）毎年平均四五百頭づゝは此村で猪が捕られる

ので。此実際問題のある為に、古来の慣習は今日尚貴重なる機能を有つて居る。私は此一篇の記事を最確實なるオーソリテイに拠つて立証することが出来る。何となれば記事の全部は悉く椎葉村の村長中瀬淳氏から口又は筆に依つて直接に伝へられたものである。〔後狩詞記〕序文、『定本』第二十七卷 六頁)

此の話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。(中略) 自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝに書きたり。(中略) 況や我九百年前の先輩今昔物語の如きは其当時に在りて既に今は昔の話なりしに反し此は是目前の出来事なり。(中略) 要するの此書は現在の事実なり。

『遠野物語』序文 明治四十三年六月、『定本』第四卷 五一―六頁 傍線はいずれも筆者

挙げて行けばきりが無いが、ここで柳田が苦心していることは、伝説、風習、しきたり、柳田の言葉で言えば「古代のおほやけ」「クラシカルな生活」が、今なお行われている「現実」であるということ強調することである。「山人」にあそこまでこだわったのも、最初の段階で、山人を日本人の古き思想を持ち伝えている種族として規定してしまつたため、それを現実化、実体化することに迫られたからであった。なぜ、そこまで現実化にこだわったのか、それこそ、彼がまなざしを向ける「郷土」というものが、そうした古い慣習を「現在」に「実際」に持ち伝えている必要があったからである。つまり、「郷土」の再構成のためには、必要な作業だったといえる。その郷土の再構成という作業が、とりもなおさず、「民俗学」という学問の生成とそのフィールドの再構成という目標とつながっている。雑誌『郷土研究』はそれを試みた雑誌であったと言える。

『郷土研究』は、郷土会の機関紙として、新渡戸の「ちかた地方学」の方針を踏襲した雑誌という印象があるが、実態はそうではない。たしかに郷土会での講演筆記が、各号にほぼ一編ずつ掲載されてはいるが、むしろ柳田が「道楽」と呼んだ、そして南方熊楠がその書簡で厳しく批判した内容こそ、この雑誌の本質があったと思われる。柳田は、巻末に据えられていた「謹告」という生硬な文章にかわつて、第二卷第八号(大正三年十月)から毎号、「社告」を掲載し、

そこに「我々の雑誌に於て殊に読者の採集報告を切望する事項」として以下の項目が挙げた。

村々に於て現に行はるゝ珍しき年中行事 ○農業 林業 商工業 動植鉱物の採取等に関する特色ある慣行又は之に伴なふ儀式 ○一族一郷又は部落間の交際往来に関する昔からの作法 ○生死婚姻其他重大なる人事に伴なふ現在の風習 ○忌み嫌ひと称して人のせめ事及び其理由 ○まじなひと名けて祈祷以外に災害を避くる手段 ○大小の神様仏様に対する信仰と其祭り祈禱願掛けお礼詣りの有様 ○妖怪などゝ言ひて神仏以外の人の怖るゝ物の種類名称 ○村に昔あつた事として老人などのする話 ○山川峡谷森塚古木岩石城跡屋敷跡乃至は鳥獸草木其他の天然物に関する言ひ伝へ ○物の名などの珍しきもの ○昔からある土地の唄の類なり(『郷土研究』社告)

『郷土研究』第四卷第一号(大正五年四月)には、『郷土研究』読者間に於て目下最も人望多き題目」として、次のような七つの項目も挙がつている。

作物禁忌の如き農作に関する俗信 鼬とか狐とかい云ふ色々の動物に関する世間話 古い神社の祭礼の式作法 盆又は小正月の各地風習の比較 村の繁栄し或は衰微して行く實際の事情 旧家に残つて居る有形無形の特色 所謂七不思議の流行及び変化

これらをも分るとおり、ここで求められているものは、「儀式」「作法」「風習」「まじなひ」「妖怪の名称」「物の名」「昔話」「昔からの歌」などであつた。そして實際、『郷土研究』に掲載された論文や報告の内容は、こうしたテーマに偏倚するものであつた。

柳田が『郷土研究』の休刊を発表したのは、大正六年三月発行の第四卷第十二号においてであつた。その休刊の辞に、柳田は、『郷土研究』が「もつぱら我が邦民間思想の変遷を見るのを職としていた一つの雑誌」であつたこと、その雑誌を休刊する真相は、張り合ひが無くなつてから中絶するのが厭で、血氣盛んなこのときに、もつと研究をしてその後に再び雑誌の再興を期したい事、そして、この種の雑誌は必要であるから、自他問わず遠からず再興すべき

もので有ること、と述べている。

折口信夫が最初の「郷土研究会」を國學院大學の内部に組織したのは大正五年のことであった。これは、柳田國男の郷土研究会を引き継ぐかたちで、あるいはその國學院支部といった形で始められたということはよく知られていることである。しかし、「郷土研究会」を引き継いだというよりも、その内実はむしろ雑誌『郷土研究』を引き継いだといった方が妥当である。折口は、この國學院の郷土研究会メンバーを基盤にして、大正七年、雑誌『土俗と伝説』を刊行するわけだが、この雑誌は、その創刊の意図からいっても、またその内容からいっても、『郷土研究』の路線を踏襲していたからである。その創刊号巻末に掲載された「社告」は、『郷土研究』のそれをそのまま踏襲したものであり、その中に「殊に採集・報告を望む事柄は」として掲げられている項目も、

村々に現に行はれて居り、又は何年前から行はれなくなつたといふ年中行事。○農業・林業・商工業・動・植・鉱物採り出しに關した特色あるしき、たり、又其に伴ふ儀式。○一族・一郷又は部落々々の交際・往來に關した昔からの作法。○生死・婚姻其他重大な人事に伴ふ風習。○忌み嫌ひなど稱へて人のせぬ事及びその訣。○災害を避けるまじなひ・民間療法。○民家建築史上の参考になる事柄。○大小の神仏に対する信仰と、其祭り・祈祷・願掛・礼参り・願ほごきなどの容子。○妖怪の種類・名称・伝説・其形。○山・川・淵・谷・森・塚・古木・巖石・城址・屋敷址から、鳥獸・草木其外、天然物に關した言い伝へ。○諸職人の使ふ道具の種類・名称。○珍しい物の名。○其の村に昔あつたこととして、老人などのする話。○昔からある土地の唄。○方言。¹⁶⁾『新全集』第三十三卷 四二二頁)

と、『郷土研究』社告」そのままである。更に折口は、「創刊にあたりて」と題して次のように述べる。ちよつと長いが引用する。

昨年四月には、此雑誌の唯一の先輩とも、兄雑誌とも申すべき「郷土研究」が、第四巻をとちめて、一まづ無期

に休刊致す事と相なり候ことに御座候。かの雑誌の出現によりて、此迄帰趣知らで、徒らに胸中に鬱積したる斯新日本学の偶像開眼の歎びに会ひ得たる者、昔に我ら二三同人の上に止るまじく候。近き数年の間に、伝説の、郷土の、或は土俗のと、似よりの傾向と称号を持ちたる雑誌・単行書、或は団体など引きもきらず出で来り候は、一つは時の流れとは申しながら、其樋の口をあけたる「郷土研究」韜晦の後は、通人・好事家・術学者・享樂党の為に淵瀬踏み濁され候。此分にては遠からず、水の手はあせ果て、そこらに蛆も湧くべく候。かゝる末流跋扈の時代に、さい・目高の輩と共にあぎとひ候むこと、到底忍び難きこと、御推察下され度候。此雑誌の「郷土研究」の後を襲ぎて生れ出で候も、何卒今一度さやなる波のほあけて、枝川の濁り波をも珠はしる瀬と澄す、ゆほひ、かなる本流繁榮の時を現ぜむ存念に外ならず候。(中略)

旧の「郷土研究」既に、在来の神学者や、科学の金看板に憧るゝ年代記学者の反抗心を咬り候模様見え居り候。此は研究・表現の態度に就きての没理会に基き候ことに御座候。本誌の代になりても、復其再燃有之べきは覚悟の前に候。時によりては、逆へ火鑽ることもあるべきかと存じ候。ともあれ、家・土・民を対象とせる新日本学建設の爲には、我ら何を犠牲に致すとも悔い申すまじく(下略)

『土俗と伝説』第一巻第一号、大正七年八月、『新全集』第三十三巻 四一九—二〇頁

ここには、自らがこれから創刊する雑誌こそ、柳田の「郷土」及び『郷土研究』の思想を引き受けるものであることを宣言する自負と激しい高ぶりが窺える。

そして、その創刊号に、柳田國男が明治時代から重要な研究テーマのひとつとしてきた、また「郷土」の再構成というテーマに深くかかわる「俗信の話」「地名の研究」などを連載し始めるのは、偶然ではない。⁽¹⁷⁾

この雑誌が、「家・土・民を対象とせる新日本学の建設のために」創刊されたと述べられているが、この「新日本学」とは、先に言及した「郷土と神社及び郷土芸術」の中で、「大体この郷土を考えるには標準がある」として「土地、家、

人」の三単位の集合体が「郷土」であるとした言説とつながっている。つまり「郷土研究」は「新日本学」と同義であるという認識が折口の中にあつたことは言うまでも無い。

さらにこれは何度も言及引用している箇所だが、『古代研究』の後書きに、柳田國男への報謝を繰り返しながら、次のように述べるのは、『古代研究』が、折口信夫の「郷土研究」に他ならなかったことを示している。

学問上の恩徳を報謝するためには、柳田國男先生に献るのが、順当らしく考へないではない。(中略) 其ほど、先生の学問のおかげを、深く蒙つてゐるのである。先生の表現法を模倣する事によつて、その学問を、全的にとりこまうと努めた。先生の態度を鵜呑みにして、其感受力を、自分の内に活かさうとした。私の学問に、若し方が一、新鮮と芳烈とを具へてゐる処があるとしたら、其は、先生の口うつしに過ぎないのである。又、私の学問に、独自の境地・発見があると見えるものがあつたなら、其も亦、先生の『石神問答』前後から引き続いた、長い研究から受けた暗示の、具体化したに過ぎないのである。『古代研究』追ひ書き『新全集』第三卷 四六五頁

南方熊楠の批判にさらされたように、柳田が、「郷土研究」という問題に関して、自己矛盾とも言えるような二つの路線を、その方向性の中に内包していたことはすでに述べた。その学問的揺らぎに関しては、後の民俗学の創生という一点を視座にして考えられることが多いから、例えば、「郷土研究」から「民俗学」へという正当な路線図をひきながら、柳田が振り捨てて行くものに関しては、余り顧みられない。

例えば、資料を書冊に採ること、あるいは「伝説研究」、あるいは雑誌『郷土研究』そのものも、言わば柳田によって捨て置かれていったものである。そういったものを、まるで落穂拾いのごとく拾い上げて行くのが、折口信夫であつた。

「郷土研究会」における柳田と、雑誌『郷土研究』における柳田との自己矛盾を突いた南方熊楠の指摘は、確かに正しかった。しかし「郷土」という言葉に、そのように自ずから分節する要素が含まれていたとしたら、柳田の方法

はある意味では自然であつたかも知れない。むしろ、柳田が考えていた「郷土研究」という概念には、例えば新渡戸稲造から引きつづく「地方研究」の流れを汲む「郷土」と、「山中のおほやけ」を発見し、それを基盤として新たな「郷土」（即ち新日本）を再構成し、「新日本学」へと導こうとする、そういう場としての「郷土」とが混在していた。言葉を生み出した者の、先駆者としての苦しみと言えなければ言えなくもない。

こうした柳田の態度を折口は側でじつと見ていたふしがある。そして柳田が、最初に『郷土研究』において実践しようとした「郷土」の再生を踏襲して行く。折口は、その後柳田が、「民俗学」創生のために、こうしたふたつの自己矛盾に折り合いをつけて、次第に自らの学問を新たな方向へといざなうて行くことを、じつと見つめながら次のようにつぶやくのである。

此の学問で大切なのは実感だ。実感を持たないで、単に書物から掻き集めるだけなら、ぢやあなりすと同じである。殊に地方の学者の注意しなければならぬ事は、反省する機会が少いので、自分のやつてゐる事を一図に正しいと思つてゐる人が多い。此点は、大学に籠つてゐる人にも一脈通ずるところがあるのだが、かうした人の書いたものを見ると、時々顔まけさせられる様なものがある。かうした組織化は、却つて此学問の進みを遅らす事になると思われる。つまり、日本の民俗学は、柳田先生の様な優れた方が出られた為に、あまりに柳田先生風になり過ぎた。柳田先生が民俗学へ進出されたのは、他の学問が相当進んでからであつた。而も非常な勢ひで、ちやうど、嵐がものを捲き込む様に捲き込んで行かれたので、此方へ進まうとした者は、誰もが先生風になり、先生の態度から出られなくなつたのである。先覚者が態度をきめて行くのは、すべての学問に於てさうなのだから、此学問においても、柳田先生風に進んで行くのは決して間違ひではない。しかし、此風も、段々に革つて行く時が来るだらう。

〔民俗研究の意義〕『新全集』第十九卷 一九四―五頁

「郷土研究」から「郷土文学」へ

柳田や折口が「郷土研究」といった場合、少なくとも「地方研究」あるいは「地域研究」そのものを指していたのではなく、むしろ「新日本学」というべき学問の創設を目指していたということは明らかである。そしてそれは「民俗学」と姿を変えて、柳田によつて再構成されて行く。そのことは「郷土研究」というものに関わる柳田の変節とも言うべき結果であつた。

これに対して「先生の表現法を模倣することによつて、その学問を全的に採りこもうと努めた」折口信夫は、「発足点から知つた私自身は、一次・二次式のものに、固執してゐるかも知れない。併しながら、私は先生の学問に触れて、初めは疑ひ、漸くにして会得し、遂には、我が生くべき道に出たと感じた歓びを、今も忘れないでゐる。この感謝は私一己のものである(『古代研究』追ひ書き)。」と述べるように、柳田の初期の『郷土研究』に黙々としたがつていつたのである。その後の柳田と折口のいささか不可解な相克を経ても、折口が初期の柳田の路線を歩むことには変わりが無かつた。

初期の柳田と折口の「郷土研究」が、いわば「新日本学」創出と言ふ意義を持つていたとすると、「郷土文学」と言ふ言葉の内実が、改めて考え直されなければならないだろう。「郷土文学」とは何かという我々の当初の疑問は、「郷土」と言う枠組みを単に「我らが郷土、誰某が郷土」と言うように、狭い「郷土」観で理解しようとして陥つた陥穽であつた。現実には「郷土文学」と言つた場合、どうしてもその地域に生れた文学者やその地域を舞台題材とする文学といったような意識で考へる。しかし、そもそも「郷土」という言葉の内実に、初期の柳田や折口が思考した「新日本学」創生の場と言ふ意識があるとするならば、「郷土文学」はあらたな思考の地平を与えられるだろう。

折口信夫のその後の民俗学の方法、「新国学」として民俗学」と称したときの「新国学」、そして「文芸復興」と言う

二つの語彙によって言い表される折口民俗学の内容を考えると、それこそが『古代研究』への軌道の上に熟成されていったものと考えられるのである。

注

- (1) 拙稿「郷土」から「郷土研究」そして「郷土文学」へ(『岩手郷土文学の研究』第一号 岩手郷土文学研究会 平成十二年一月)
- (2) 新渡戸稲造「増訂農業本論」(『新渡戸稲造全集』第二卷、昭和四十四年七月 教文館)、同「地方の研究」(明治四十四年二月十四日「中央報徳会例会講演」(『新民』第一編第一号 明治四十年五月 後『随想録』に改稿収録。『新渡戸稲造全集』第五卷、昭和四十五年八月、教文館)
- (3) 前掲注(1)
- (4) 前掲注(2)
- (5) 柳田國男「郷土科学に就いて」(『郷土科学講座』第一冊、昭和六年九月 四海書房 後『定本柳田國男集』第二十五卷)
- (6) 柳田國男「郷土研究と郷土教育」(山形県郷土研究会講演、『郷土教育』第二十七号(昭和七年十二月)に収録、後『定本柳田國男集』第二十四卷) この柳田の郷土教育運動の推進者たちに対する批判については、拙稿「郷土」から「郷土研究」そして「郷土文学」へ)では、柳田の変節点として捉え言及した。しかし柳田の内部にある「郷土」の認識は変わっておらず、変節点と捉えるよりむしろ、その研究の方法論においての揺らぎが柳田に内在していたと考えるほうが妥当である。「郷土を研究の対象としたのではなく、(中略)郷土で日本人の生活、ことにこの民族の一人としての過去の経歴」を研究したのである、とする柳田の郷土認識は一貫していたと見るべきであった。
- (7) 南方熊楠「郷土研究」の記者に与ふる書(『郷土研究』第二卷第五・六号 大正三年七・八月) 大正五年十二月二十三日

- 付柳田國男宛南方熊楠書簡(『柳田國男南方熊楠往復書簡集』、後に「諸君の所謂山男(書信一説)」として、大正五年二月、『郷土研究』第四卷十一号に再録される)など。
- (8) 前掲注(6)
- (9) 折口信夫述「郷土と神社及び郷土芸術」として『折口博士記念古代研究所紀要第二輯』(昭和三十八年三月 折口博士記念古代研究所)に収録。講演筆記原稿は、折口博士記念古代研究所蔵。
- (10) 伊藤純郎『郷土教育運動の研究』(平成十年二月 思文閣出版) 他。
- (11) 折口信夫「餓鬼阿彌蘇生譚」(『民族』第一卷第二号、大正十五年二月、『新全集』第二卷)、「日本芸能史」(昭和三年慶応義塾大学文学部「国文学」講義筆記、『日本芸能史ノート』、『折口信夫全集ノート編』第五卷)「原始信仰」(『郷土科学講座』I、四海書房、昭和六年九月、『新全集』第十八卷)など。
- (12) 折口が初期の柳田國男の方法に追隨してゆくことを述べた資料としては、「花田大五郎宛折口信夫書簡」(大正七年一月二日付、『新全集』第三十四卷)、「胡桃沢勘内宛折口信夫書簡」(大正七年四月十二日付、『新全集』第三十四卷)、『古代研究』「追ひ書き」(昭和五年六月、『新全集』第三卷)などがある。
- (13) 柳田は、明治四十一年以前は、『中央農事法』『斯民』など農政学に関する多くの論文を発表してきたが、明治四十二年の『後狩詞記』を境に「天狗の話」(『珍世界』、明治四十二年三月、後『妖怪談義』)、「九州南部地方の民風」(『斯民』、明治四十二年四月)、「山民の生活」(『読売新聞』(明治四十二年五月)、『山岳』(明治四十二年十一月)、他)、「木曾より五箇山へ」(『文章世界』、明治四十二年八月)、「地名雑考」(『歴史地理』、明治四十三年二月、後「地名の研究」)、「神籠め石に関係ある地名」(『歴史地理』、明治四十三年三月、後「石神問答」)といったように立て続けに「習俗」「妖怪」「地名」に関する文章を発表、農政学関係の論文は影を潜める。
- (14) 永池健二「柳田民俗学における山人研究史の変容と展開」(後藤総一郎『柳田國男研究資料集成』昭和六十二年四月、日

本図書センター)、赤坂憲男『山の精神史』(平成三年十月 小学館)など。

(15) 「大正二年六月二十九日付南方熊楠宛柳田國男書簡(飯倉昭平編『柳田國男南方熊楠往復書簡集』昭和五十一年 平凡社)

(16) 『土俗と伝説』社告(『土俗と伝説』第一巻第一号(大正七年八月)から毎号巻末に掲載)。この社告に載る「採集報告を望む事柄」の中で、『郷土研究』のそれと異なるのは、「民家建築上の参考になる事柄」「諸職人の使う道具の種類・名称」「方言」の三項目である。『土俗と伝説』の発刊一月前に、同年一月から依頼されていた足柄下郡市編纂の仕事をしている。編纂依頼後に書かれた草稿「足柄下郡誌ひんと帖」をみると、「職人調べ」と「叢祠調べ」に強い関心を持っていることがわかる。

(17) 『土俗と伝説』に対する柳田の寄稿は以下のとおりである。なお、安東危西、榎本御杖、大野芳宜名で発表されたものも柳田國男のものである。

第一号「雑誌は採集者の葉」「だいと云ふ地名」「地名の当て字」「国々の巫女」「真継氏」、第二号「杓子と俗信」「津久井の山村より」「古い家と古い村」「燕の巢の蜺貝」「よそぞめ・どどめ」「し[△]の[△]と言ふ地名(問ひ)」「汝が母のほとこの広さ(答)」、第三号「おたま杓子」「丘と窪地の名」「うだ・むだ」「雪を知る木」、第四号「杓子・柄杓及び瓢箪」「ぐり」。

第六節 「古代生活の研究」本文成立をめぐる

はじめに

折口信夫の「まれびと論」の初発は、大正十年に行われた最初の沖縄旅行までさかのぼらなければならない。琉球の生活に日本の古代生活の姿を発見することによって、文学の信仰起源説をより確かなものにしようとする過程が、「まれびと論」生成の過程であったといつてよい。その最初の成果が大正十二年五月、『世界聖典外纂』に「琉球の宗教」として発表された論文である。

この論文はその後大幅な加筆訂正を受けて昭和四年四月『古代研究』民俗学篇第一に所収されることになる。この加筆訂正がいつ行われたか、おおかたの説はオリジナルに一章を加えて『続琉球神道記』と改題、島袋源七『山原の土俗』に序文として寄せる時期、すなわち昭和四年頃とする。

しかし大正十二年七月から八月にかけての第二回目の沖縄旅行の採訪ノートである「沖縄採訪記」の旧全集未収部分に、「琉球の宗教」加筆の根拠になりうる記述が詳細に残されていることが明らかになったことで、採訪旅行の途次あるいはその直後、既に折口が「琉球の宗教」の改訂の必要性を感じそれを具体化していたことは間違いないところである。その後、折口の学問が大きな展開期を迎えていた時期に、改訂を企てながら昭和四年に至るまでまる六年間もこのことを放置していたとは到底考えにくい。「琉球の宗教」は「まれびと論」「常世論」の深化とともに、大正十二年八月以降比較的近い時期に加筆訂正が施されていたとみるのが妥当であろう。それは折口がいわゆる「発生の時代」に生身で向き合った第二回目の沖縄旅行直後から、「古代生活の研究」を『改造』に発表する大正十四年四

月ころまでのことではないかと筆者は想定している。

さらに重要な問題がある。このノートには「琉球の宗教」改稿の根拠となるはずの八重山地方の信仰生活についての聞き書きメモに加えて、刊行を予定していた『日本文学の発生』⁽¹⁾に関わる覚え書きが残されている。

そこには、次に示すような単行本の目次と思われる項目の箇条書きと、各項目に関する内容目安が記述されている。
 (一) 内の数字・記号は次頁表1との整合をはかるために筆者が便宜上付したものである。

序論一、文学史の意味

序論二、此書を読む人のために

第一。しゝまからことゝひへ (1)

第一別記。常世の国と「まれびと」と (2)

第二。呪言〓寿詞 (3)

第二別記。「ほ」及び「うら」 (4)

童謡

第三。語部の物語〓叙事詩 (5)

第三別記。現つ神と巫女 (7)

第四。創作する寿詞と壊れて行く物語と

第四別記。巡遊伶人及び社寺奴婢 (6)

第五。古代文章の理念法

第五別記。常用語句の解剖から証する古代日本人の文章に対する気分⁽²⁾

この覚え書きに示されたそれぞれの項目(1)から(6)までについて、第二回の沖縄採訪旅行から帰った後大正十三年四月に雑誌『日光』に発表した「日本文学の発生」を皮切りに、同誌に立て続けに発表する一連の論文および現存する自筆草稿断片、未定稿の表題と比較してみると、次頁の表のとおりきれいに一致する。

これらの一群の資料の相互の関係性と資料評価の結果については、すでに当該資料を公開した段階で触れておいた⁽³⁾のでここで詳しく述べることはしないが、論の展開上簡単に解説しておきたい。

(I)は二百字詰め原稿用紙にして二十四枚の草稿である。途中で断絶している未定稿であるためか、旧版『折口信夫全集』(以後『旧全集』)には収録されなかった。(II)は二百字詰め原稿用紙七十枚の草稿。これも中途断絶していること、後に『古代研究』の巻頭を飾ることになる「国文学の発生 第三稿」の基礎本文となった「常世及び「まれば」と」(昭和四年一月『民族』初出。現存する当該論文の自筆原稿の表紙には「日本文学の発生」という発表時とは異なった標題が示されている)とほぼ同じ標題を持つことから、その草稿あるいは未定稿と判断されたらしく、(I)と同様『旧全集』には収録されなかった。しかしこれら二つの本文を比較検討すれば「とこよ」と「まれば」と」と「常世」及び「まれば」と」とは全く異なる論文であることがわかる。

以上のことを踏まえつつ、表中の(I)(II)(IV)三編の自筆原稿の用紙の質、使用筆記具、またそれぞれの論文中に他の論文に対する参照指示がなされていること、⁽⁴⁾「沖縄採訪記 旧全集未収録部分」の解説と資料評価によって先述の覚え書きが見出されたことなどから、これら三編が、ほぼ同時期に書かれたきわめて関連性の高い一連の原稿であることが確認された。また『日光』初出の論文(III)(V)(VI)についても、その初出本文に、自筆原稿を含めた相互の参照指示が認められることから、(I)～(VI)の論文は一連の執筆意図に基づいて書かれたものであるとほぼ断定してよいと考える。

このことは、「日本文学の発生」刊行のための執筆計画が一部とはいえ実際に実行に移されていたことを示してい

表1：『日本文学の発生』目次と実存する論文の表題

沖繩採訪記手帖に記載する『日本文学の発生』の目次	『古代研究』刊行以前に『日光』に発表した論文の標題	現存する草稿の標題	旧全集	初出・関連事項
(1) しづまからことぶひへ		(I)「しづまから「ことぶひ」へ	未収録	『折口博士記念古代研究所紀要別冊資料集 第一輯』初出。『新全集』第四卷再録
(2) 常世の国と「まれびと」と		(II)「とこよ」と「まれびと」と	未収録	本稿のテーマ 『折口博士記念古代研究所紀要別冊資料集 第一輯』初出。『新全集』第四卷再録。「常世及び「まれびと」」(『民族』第四卷第二号、昭和四年一月)とは異なる内容
(3) 呪言=呪詞	(III) 呪言の展開—日本文学の発生その二		第一卷(『古代研究』国文学篇)	『日光』第一卷第二号(大正十三年六月)初出
(4)「ほ」及び「うら」		(IV)「ほ」「うら」から「ほがひ」	第十六卷(民俗学篇2)	『旧全集』第十六卷、『新全集』第四卷再録
(5) 語部の物語=叙事詩	(V) 叙事詩の撒布—日本文学の発生その四		第一卷(『古代研究』国文学篇)	『日光』第一卷第七号(大正十三年九月)初出
(6) 巡遊伶人及び神社奴婢	(VI) 巡遊伶人の生活—日本文学の発生その三		第一卷(『古代研究』国文学篇)	『日光』第一卷第五号(大正十三年八月)初出
(7) 現つ神と巫女と				(I)(II)の本文中に参照指示

る。そしてそれが後に少しずつ解体され、『古代研究』を構成する主論文へと再構成される。折口が目指した課題解明の道筋の重要な分岐点として『古代研究』成立の問題があるが、その問題を解き明かすためにこれらの本文形成に関する研究は、この時期の折口の思考過程の展開や変容を考える上で重要な視座を提供する。

本節ではその最初の課題として、表1の(II)に示した「とこよ」と「まれびと」との本文評価を通じて、当該論文が「古代生活の研究—常世の国—」の原態であった可能性を明らかにするとともに、なぜこのような書き換えが行われたかについて検証したい。

「日本文学の発生」から「古代生活の研究」へ

論文「古代生活の研究―常世の国―」は、大正十四年四月に『改造』第七卷第四号に掲載された。その後『古代研究』民俗学篇第一に収録された。

ところで、『古代研究』民俗学篇第一はなぜにあのような配列になっているのであろうか。いままであまり議論されていぬことなので、以下に並べてみたい。

妣が国へ・常世へ 異郷の意識の起伏／古代生活の研究 常世の国／琉球の宗教

水の女／若水の話／貴種誕生と産湯の信仰と／最古日本女性生活の研究の根柢

神道の史的価値／高御座／鶏鳴と神楽と

髯籠の話／幣束から旗さし物へ／まといの話／だいがくの研究

盆踊りと祭屋台と／盆踊りの話

信太妻の話／愛護若／鸚鵡小町／餓鬼阿弥蘇生譚／小栗外伝（餓鬼阿弥蘇生譚の二）

翁の発生／ほうとする話／村々の祭り／山のことぶれ／花の話

一見してわかることだが、『古代研究』民俗学篇第一は七つのカテゴリーに分れた領域の論考が互いに連携しあつてひとつの本を構成していることがわかる。

その冒頭に据えられているのが「常世」の問題である。「妣が国へ・常世へ 異郷の意識の起伏」（以後「妣が国へ・常世へ」）が最初に「古代生活の研究 常世の国」（以後「古代生活の研究」）「琉球の宗教」の三論文が、『古代研究』民俗学篇第一の冒頭の主題、すなわち「常世の問題」を引き受けている。

次に続く論考は、常世との関連から「常世から来る水の霊力」とそれをつかさどる神女について、「水の女」をは

はじめとした四つの論文が「琉球の宗教」をいわばのりしろとして並べられ、それに続く形で「神道」「依代」「盆踊りの話」「伝説」「祭り」をキーワードとした論考が並ぶ形をとっている。これらのキーワードを串刺しにしている概念は何かといえは、「異郷との交渉」ということになるだろう。「異郷との交渉」を成り立たせている生活論理の実態解明こそこの巻に与えられた使命であったといえる。

『古代研究』という作品が、何故に三分冊として構成されたのか。先述したように、そもそも折口の最初の目論みは、『日本文学の発生』の刊行であつたはずである。そうなれば、それを国文学と民俗という二つのカテゴリーに分けなければならなかつた理由は別にある。それは当然、沖繩の経験による思考の深化と、それに伴う国文学、民俗学という二つのカテゴリーに対する折口に向き合い方の変化に起因したと考えるべきだろう。『日本文学の発生』を「古代研究」国文学篇に閉じ込め、一方民俗学篇を二分冊として取り扱おうとした事実、そしてそこに『古代研究』という名辞を与え、古代人の生活意識の研究に大きく舵を切つた事実こそ、『古代研究』の意味であつた。しかしそれは『古代研究』という作物の本質に関わる重要なことなので、ここでは事実だけを述べ詳細な検証は保留しておく。

しかしこれだけは言えそうである。彼が最初に明らかにしなければならなかつたのは「常世」即ち「異郷」の問題であつた。『古代研究』民俗学篇第一の冒頭に「妣が国へ・常世へ」が据えられているのが象徴的であろう。この論文はいうまでもなく、折口が大王ヶ崎の突端に立つたときにわが身に押し寄せてくる異郷の意識の起伏感情から得た感覚、人が異郷とどのように向き合つてきたのかその実感を記したものだ。いわば異郷という問題に最初に取り掛かるきっかけをなしたものとして冒頭に置かれるのは当然であつた。この「異郷意識」に関わるテーマは折口によってその後何度もくり返し言及され、抱えられ続けた。⁵⁾

ここで問題にしたいのは二番目の論文である。「古代生活の研究」は、その位置・内容から言つてもあまり着目される論考ではない。しかし、先に述べたように、「妣が国へ・常世へ」「琉球の宗教」とともに民俗学篇第一全体を支

えるベースとしての役割を担う論考の一つであり、『古代研究』成立に関わる問題を考える上で極めて重要だと考えるのである。

「古代生活の研究」はどのように成立した論文であったか。そのことを論文「とこよ」と「まれびと」ととの比較分析によって、明らかにしたい。

「古代生活の研究」本文の原態

「とこよ」と「まれびと」とが『日本文学の発生』刊行に関わる一連の執筆の中で誕生した可能性が高いことは、先に述べた。この論文と「古代生活の研究」の本文をそれぞれ仔細に比較検討すると、この二つが『古代研究』生成の過程において極めて近い存在であり、折口の思考並びに原稿推敲の過程まで通時的に辿ることができるものであることが判る。

まず目次について検討してみよう。「とこよ」と「まれびと」は「目次を有さない。それに対して「古代生活の研究」は十一の章段から構成されている。「古代生活の研究」の冒頭三章、つまり「一 生活の古典」「二 ふる年の夢・新年の夢」「三 夜牀の穢れ」については、その内容や表現に近似のものを「とこよ」と「まれびと」との本文中に明らかな形で見出すことはできない。したがって冒頭部から第三章までを概観するばかりでは両者が近似のものであると即座に見分けられない。

問題は第四章以降である。

「四 鼠の浄土」「五 祖先の来る夜」「六 根の国・底の国」「七 楽土自ら昇天すること」「八 まれびとのおとずれ」「九 常世の国」の六章段の本文を「まれびと」と「とこよ」との本文とその異同を比較すると、「とこよ」と「まれびと」との記述内容に加筆、削除、修正、また前後の関係を入れ替えるなどの整理を施して「古代生活の

研究」の本文が形づくられていることが分かる。詳しくは本節末に収めた「本文対照表」を見ていただくことになるが、いくつか典型的な箇所について検証しておきたい。

以下に「古代生活の研究」と「とこよ」と「まれびと」との二つの本文を比較のために順に引用する。煩雑を避けるために、前者を（A）とし、後者（B）としておく。引用文中のゴチックで示した部分は「とこよ」と「まれびと」との本文に加筆されたと考えられる箇所、□内は削除、用語の入れ替えなど訂正を施されたと思われる箇所を示す。

まず「古代生活の研究」第四章「鼠の浄土」の中ごろに出てくる次の一節である。

（A—）此洞からにいるびと（にらい人）又はあかまた・くろまたと言ふ二体の鬼の様な巨人が出て、酉年毎に成年戒を行はせることになつてゐる。青年たちは神と言ふ信念から、其命ずる儘に苦行をする。而も村人の群集する前に現れて、自身踊つて見せる。暴風などにもいるから吹くと言つてゐる。さう言えば、本島でも、風風ぎを祈つて「にらいかないへ去れ」と言ふことを伊波普猷氏が話された。⁽⁶⁾

（B—）其洞から、「にいるびと」と言ふ鬼の様な二体の巨人が出て来て、成年式を行ふ事になつてゐる。神として恐れ敬うて、命ぜられる儘に苦行をする。而も、村人の群集してゐる前に現れて、自身舞踏もし、新しい若衆たちにもさせる。⁽⁷⁾

A—とB—それぞれの本文は、加筆訂正されたと思われる箇所を除くと、全く同じ表現である。このことからこの二つの本文は別個に執筆されたのではなく、B—がベースとなつて、そこに応分の加筆訂正、削除が施されてA—が成立したということが明確に認められる。加えて、「にいるびと」については「（にらい人）又は「あかまた」「くろまた」とあり具体的な提示がされている他、「さう言へば」という記述のあと、思い出したように伊波普猷から聞いた話を披歴している。A—とB—との間に琉球探訪の体験がはさまれたために、このように具体性を帯び

たと考えるのが自然だろう。

次に第七章「楽土自ら昇天すること」の冒頭、奄美から鹿児島にかけての「なるこ・てるこ」「まやの国」「にらいかない」「おぼつかぐら」「あまみ、しねり」といった楽土、理想国の名称を紹介したあとの一節である。

〔A―二〕私どもの今の宗教的印象を分解して見ても幽冥界カクリヨに属してゐる者は、一つに扱つて居る場合が多い。

単に神の住みかと言ふだけではない。悪魔の世界なる内容も持つて居る。神・悪魔・死霊など、其性質

に共通した点が少なくない。其著しい点は、晝夜の世界に属する事である。で鶏鳴と共に顕明界クツシヨに交替する

からだ。一番鶏に驚いて事遂げなかつたのは、魔や霊に絡んだ民譚だけではない。神々すら屢鶏の時をつくる

声の為に、失敗した事を伝へてゐる。尊貴な神にすら、祭りの中心行事は、夜半鶏鳴以前に完へる事になつて居

る。わが国の神々の属性にも存外古い種を残してゐるので、太陽神と信じて来た至上神の祭りにすら、晝には

神上げをしなければならなかつた。⁽⁸⁾

〔B―二〕我が国で見ても、幽界カクリヨと言ふ語の内容は、単に神の住みかと言ふだけではない。悪魔の世界といふ

意義も含んでゐる。幽界に存在する者の性質は、一致する点が多い。其著しい点は、神魔共に夜の世界に属する

事で、鶏鳴と共に、顕明界クツシヨに交替する事である。民譚に屢出る魔類と鶏鳴との関係は固より、尊貴な神の祭りすら、

中心行事は夜半鶏鳴以前ときまつてゐる。わが国の神々の属性にも、存外古い種を残してゐたので、太陽神の

祭りにすら、晝には神上げをしなければならなかつた位であつた。

この部分についても、先の箇所と同様B―二に加筆訂正が施されて、A―二の本文が完成した形跡が認められる。

さらに、第八章「まれびとのおとずれ」の冒頭箇所は以下のごとくである。

〔A―三〕祖先の使ひ遣した語で、私どもの胸にもまだある感触を失はないのは、「まれびと」といふ語である。

「まろうど」と言ふ形をとつて後、昔の韻を失うて了うた事と思はれる。まれびとの最初の意義は神であつたら

しい。時を定めて来り臨む神である。大空から海のあなたから、或村に限って、富みと齡と異他若干の幸福とを齎して来るものと、村人たちの信じてゐた神の事なのである。此神は宗教的空想には止らなかつた。現実、古代の村人は、此まれびとの来つて屋の戸を押ぶるおとづれを聞いた。音を立てると言ふ用語例のおとづるなる動詞が、訪問の意義を持つ様になつたのは、本義「音を立てる」が戸の音にばかり偏倚したからの事で、神の来臨を示すほとと叩く音から来た語と思ふ。まれびとと言へばおとづれを思ふ様になつて、意義分化をしたものであらう。戸を叩く事に就て、根深い信仰と聯想とを、未だに持つてゐる民間伝承から推して言はれる事である。宮廷生活に於てさへ、神来臨して門におとづれ、至上の日常起居の殿舎を祓へてまはつた風は、後世まで残つてゐた。

(B—三)まれびとはなにか。神である。時を定めて来り臨む天神である。(大空から)或は海のあなたから、ある村に限って富みと齡と^{オハヒ}その他若干の幸福とを齎して来るものと、その村の人々が信じてゐた神の事なのである。此神は□空想に止らなかつた。古代の人々は、屋の戸を神の押ぶるおとづれを聞いた。おとづるなる動詞が訪問の意を持つ事になつたのは、本義音を立てるが□戸の音にのみ聯想が偏倚したからの事で、神の□ほとと叩いて来臨を示した処から出たものと思ふ。戸を叩く事について深い信仰と□聯想とを持つて来た民間生活からおしてさう信じる。宮廷に於いてさへ、神来臨して門を叩く事実は、毎年くり返されて居た。

以上三箇所の表現のありよう、すなわち訂正や加筆の様子を見れば、Bが基礎となつて、そこに折口の手が十分に於てAの本文が成立したことは、明らかである。この三箇所以外にも、例えば第九章「常世の国」、第十章「この意義」の二つの小段にも、同様の箇所が存在する。

さて、こうした極めて近似した本文の存在は明らかになつたが、次にはAの本文はどのように再構成されたかという問題が残される。A—一にはつぎのような本文が接続されている。

(A―四)にらいかないは本島では浄土化されてゐるが、先島では神の国ながら、畏怖の念を多く交へてゐる。全体を通じて、幸福を持ち来す神の国でもあるが、禍ひの本地とも考へて居るのである。⁽¹²⁾

この本文は、もともとB―一の直前に以下のような形で存在したものを、加筆訂正よりもさらに突っ込んだ書き換えを行つて、順序を入れ替えてA―一の直後につけたと思われる。

(B―四) 天国を「おぼつかぐら」と言ふ。海のあなたの樂土をにらいかない(又ぎらいかない、じらいかない)又「まやのくに」と呼ぶ。(中略) 而も其儀来河内^{ヤライカナイ}は、又禍の国でもある様子は見える。(中略) にいるを使うてゐる先島の八重山の石垣及びその離島々では、語原を「那落」に聯想して説明してゐる程、恐るべき処と考へてゐる。⁽¹³⁾

A―一が「にいろびと」についてのみの言及であるために、B―四で記述した「おぼつかぐら」「まやのくに」についての言及は不要になる。八重山石垣についても同様である。したがつてその用語を削除し、さらに「禍の国」という用語を「禍の本地」と代えて整理しなおし、A―一に言及した「にらいかない」のみの説明に特化して、その後半部に配置して形を整えたという意図がここには見て取れる。

このようにBの本文を整理して配置を入れ替えることにより、説明をより決りやすくするといった工夫は、他にも複数箇所見出されるのである。(本文対照表参照)

「古代生活の研究」のベースとなつたと思われる本文のほかに、「とこよ」と「まれびと」とにはもう一つ別の位相を持つ本文がある。「まれびと」に関わる箇所である。

(B―五) 稀に来る人と言ふ意義から、珍客をまれびとと言ひ、其屈折がまらひと・まらうどとなると言ふ風⁽¹⁴⁾考へて居るのが、従来の語原説である。近世風に見れば、適切なものと言はれる。併し古代人の持つて居た用語例は、此語原の含蓄を⁽¹⁴⁾拵げなくては、⁽¹⁴⁾積かれない。

(C—五) 客をまればとと訓ずることは、我国に文献の始まった最初からの事である。従来の語原説では「稀に来る人」の意義から、珍客の意を含んで、まればとと言うたものとし、其音韻変化が、まらひと・まらうどとなつたものと考へて来てゐる。形式の上から言へば、確かに正しい。けれども、内容—古代人の持つてゐた用語例—は、此語原の含蓄を拵げて見なくては、積かれないものがある。⁽¹⁵⁾

B—五は「とこよ」と「まれば」との冒頭部分、C—五は『古代研究』国文学篇に載せた「国文学の発生(第三稿)」の冒頭部分である。いずれも論文の冒頭に置かれていことから、「まればと」に対する折口の立場を端的に表明する箇所である。表現はかなりの変容をしているが、内容はほぼ同一であることをここも見てとることができる。

すなわち「とこよ」と「まれば」との本文は、「古代生活の研究」とやがて「国文学の発生 第三稿」へと展開する『民族』所収の論文「常世及び「まればと」⁽¹⁶⁾」という、二つの本文の重要なベースとなつたことなのである。

『古代研究』生成論に向けて

述べてきたように、「古代生活の研究」の本文が『日本文学の発生』のために書かれたと思われる原稿すなわち「とこよ」と「まれば」とをベースにして、それを大幅に改稿して成立したものであることを検証した。冒頭三章を書き加えるとともに、第四章以下については、基本的な本文をそのまま残しながらそこに応分の加筆・削除と訂正を施した。このことは、冒頭の書き加えと、根幹部分が第四章以下の加筆訂正の意味を検討すれば、「とこよと「まればと」」から「古代生活の研究」に論文のコンセプトが変化した意味を理解できるといふことである。

見通しだけ述べておこう。この改稿は「日本文学の発生」から『古代研究』成立への折口内部における重要な変化

を担っていたと考えられる。『日本文学の発生』刊行が断念されたことは先に述べたが、それが『古代研究』へといかなる道筋で繋がっていくのか。

表層的に見れば、『古代研究』は民俗学篇が二冊加わっているということである。『日本文学の発生』は『古代研究』の国文学篇に位置づけられるものである。そこに『民俗学篇』を加えたという事は、「日本文学の発生」は発生の論理を「古代人の生活意識」の側から一方で説明しない限り、説得力を持ち得ないということをし、折口自身が一番強く感じたからであろう。武田祐吉の半ば抜け駆けともいふべき『神と神を祭る者の文学』の刊行に刺激されて、『日光』に立て続けに論文を掲載し、また『日本文学の発生』刊行を言挙げしながらそれを断念した裏には、そうした意識があつたであろう。⁽¹⁷⁾

「古代人の生活」特に異郷の意識の解明、それを『古代研究』民俗学篇第一は担っている。

「とこよ」と「まれびと」とから「古代生活の研究」への改稿はそうした道筋と同期している。「古代生活の研究」の副題に「常世の国」という言葉が据えられているのは示唆的である。「とこよ」と「まれびと」とは、二つに分解され、一方は古代人の異郷意識の研究、すなわち「常世論」へと展開し、それが「古代生活の研究」として『古代研究』民俗学篇第一の冒頭三編、すなわち異郷の意識問題の解明の一つの成果として据えられる。一方「まれびと」、すなわち異郷からの来訪者の問題は、来訪者が口にする詞章の問題、その通時的展開を中心にすえながら「国文学の発生」の課題へと収斂していくという道筋である。

「とこよ」と「まれびと」との本文が「古代生活の研究」本文へと流れ込んだ意味は、そうした折口の意図があつたといふべきなのである。

今後おびただしく残る『古代研究』に関わる周辺本文の詳細な本文評価によって、折口の学問研究がどのような思考過程を辿って展開していったか、またそれが彼の学問と創作という問題とどのように絡んでいるのか、それを解き

明かすことが『古代研究』の生成過程を解明するにおいて、次の重要な課題となるであろう。

注

- (1) この本については大正十三年十月に雑誌『日光』の同人消息欄に「釈迢空の「日本文学の発生」は遠からず一冊に纏めて出版される」と記述されている。「沖繩探訪記」旧全集未収部分に記された覚え書きがこの「日本文学の発生」の目次である可能性が高い。この未完の論文集については、拙稿「未完の一冊」(『國學院雑誌』第九十四卷第九号、一九九三年九月)、松本博明編『折口博士記念古代研究所紀要別冊資料集』(以降『資料集』)第一輯(一九九二年十月、折口博士記念古代研究所)『同』第二輯(一九九四年二月、同)の「解説」において言及した。またこれらの覚え書きを含む一部の「沖繩探訪記」の内容は、理由はわからないが旧全集には収録されなかった。一九九四年に初めて筆者が判読し、『資料集』第二輯に「沖繩探訪記手帖旧全集未収部分」として公開した経緯がある。なお同誌は新しい全集編纂に先駆けて、折口博士記念古代研究所が所蔵する未整理の一次資料を判読、その評価と解説、紹介を目的に発刊されたものである。「第一輯」「第二輯」の二冊が刊行された。同誌上で公開された新資料のほぼすべてが、新編集決定版『折口夫全集』(『新全集』)に新資料として収録されている。

- (2) 引用は松本博明編『折口博士記念古代研究所紀要別冊資料集』第二輯(一九九四年三月、折口博士記念古代研究所)初の本文に拠った。この本文は、自筆原稿の形態・表記・見消部分をそのまま活かしているためである。

- (3) 『折口博士記念古代研究所紀要別冊資料集』第一輯(一九九二年十月)『同』第二輯(一九九四年三月)の「解説」及び新編集決定版『折口夫全集』第四卷(一九九五年五月)の「解題」。

- (4) 「しんま」から「ことしひ」には「ほ・うらの論」「まれびと」と「とよ」と「あきつ神の論」への参照指示がある。また「とよ」と「まれびと」と「にも」あきつ神の論」への参照指示がある。

- (5) その後折口は様々な機会をとらえて日本人の異郷の意識の問題を解明しようと試みている。「異郷・他界」と人との接点に文学の発生の基盤を見ていたからに他ならない。戦後くり返し書き直された「民族史観に於ける他界観念」はその最後の試みであった。
- (6) 「古代生活の研究―常世の国―」『改造』第七卷第四号、大正十四年四月。後に『古代研究』民俗学篇第一に収録。『古代研究』を底本に、『折口信夫全集』第二卷（一九五六年四月、中央公論社）新編集決定版『折口信夫全集』第二卷（一九九五年三月、中央公論社）にそれぞれ再録された。本稿での引用は『改造』初出の本文（P一四〇下L四〜L一〇〇）に拠った。
- (7) 新編集決定版『折口信夫全集』第四卷（一九九五年五月、中央公論社）P四二三L八〜一六。引用は『新全集』に拠った。新全集本文は自筆原稿に依拠する。なお自筆原稿は國學院大學折口博士記念古代研究所所蔵。
- (8) 注（6）と同じく引用は『改造』初出の本文（P一四三上L一八〜同下L八）に拠った。
- (9) 新編集決定版『折口信夫全集』第四卷（一九九五年五月、中央公論社）P四二四L一六〜P四二五L四。引用は『新全集』に拠った。
- (10) 注（6）と同じく引用は『改造』初出の本文（P一四四上L一四〜同下L一〇）に拠った。
- (11) 新編集決定版『折口信夫全集』第四卷（一九九五年五月、中央公論社）P四二二L三〜L九。引用は『新全集』に拠った。
- (12) 注（6）と同じく引用は『改造』初出の本文（P一四〇下L一〇〜L二三）に拠った。
- (13) 新編集決定版『折口信夫全集』第四卷（一九九五年五月、中央公論社）P四二三L八〜L十三。引用は『新全集』に拠った。
- (14) 新編集決定版『折口信夫全集』第四卷（一九九五年五月、中央公論社）P四一九L六〜八。引用は『新全集』に拠った。
- (15) 新編集決定版『折口信夫全集』第一卷（一九九五年五月、中央公論社）P一一八〜一二。引用は『新全集』に拠った。

(16) 『民族』第四卷第一号(昭和四年一月、民族発行所) P 一〜六二。

(17) 『日光』第一卷第三号に初出した「呪言の展開」の「まえがき」には、同創刊号に掲載した「日本文学の発生」について「私は、年来の宿案の発想と、材料のあんばいに悩んでゐた。此頃になつて、不徳な追隨者の、疎漏な考証文に先んじられて、竟に発表の機を失ひさうな虞れが、激しく感じられ出した。其で、小泉氏のお薦めに応じて、あわたゞしく発表したのが、あの文章であつた。あれで、私の立ち場や、考へ方の輪郭は伝へる事が出来た。云々」といった、いささか焦慮ともとれる文章を残している。また『日光』第一卷第五号に載せた「巡遊伶人の生活」の「まえがき」にも、このことに執着した記述が見られる。

をかゝせる様な事も言ふ。其家では、此に心尽しの馳走をする。眷属どもは、楽器を奏し、芸尽しなどする。此行事は「あんがまあ」と言ふ。語原は知れぬが、やはり他界の国土の名かと考へられる。

私はある夜此行列について歩いて、人いきれに蒸されながら考へた。有名な「千葉笑ひ」、京都五条天神の「求祭り」の悪口、河内野崎祭りの水陸の口論、各地にあつたあくたい祭りは、皆かうした所に本筋の源があるのではなからうか。さう思つてゐる中に、大人前がずつと進んで出て、郡是として、其年から励行する事になつた節約主義を、哄笑を誘ふ様な巧みな口ぶりであてこすつた。村の共通な祖先が出て来て、子孫の中の正統なる村君のやり口を難するのに対して、村君も手のつけ様がなかつた理由が知れる。其が尚他の要素を含んで、あくたいの懸け合ひが生まれて来たのであらう。此三通りの人と神との推移の程度を示す儀式が、石垣一島に備つてゐるのである。

先島の祖先神は、琉球本島から見れば極めて人間らし

垣島の中に備つてゐる。神の属性の純化せない時代の儘の姿である。あんがまあは語原不明だが、類例から見れば、やはり信仰上の地名であらう。(P四二四一〜七)

(中略)

此まやの神の行事は、若衆のする事である。成年式を経た若衆が、嚴重な秘密の下に蓑笠を着、顔を蒲葵の葉で隠して、神の声色をうて家々を廻るのである。海のあなたから渡来した神に扮して居る訣である。(P四二六一〇〜一三)

加筆部分
訂正部分

いあり様を保つて居る。に^いる人と言ふ名は、神の中に人間の要素を多く認めてゐるからなのである。而も、島人の中には、に^いるを以て奈落の首将と考へてゐる人もある程に、畏怖せられる神である。其は、地下の死後の世界の者で、二体と考へてゐるのは、大人前・祖母の対立と同じ意味であらう。さすれば、死の国土に渡つて後、さうした姿になつたと考へたか、元々さうした者の子孫として居たのか識らぬが、同根の語のに^いら^いかないの説明には役立つ。

に^いら^いに對するかないは對句として出来た語で、に^いら^いが知れ^ば、大体は釈ける。に^いら^いかないは元、村の人々の死後に靈の生きてゐる海のあたりの島である。そこへは、海岸の地の底から通ふ事が出来ると考へる事もある。「死の島」には、恐ろしいけれど、自分たちの村の生活に好意を期待する事の出来る人々が居る。かうした考へが醇化して来るに連れて、さうした島から年の中に時を定めて、村や家の祝福と教訓との為^にに渡つて来るものと考へる事になる。而も、此記憶がさうなつて久しい後まで断片風に残つて居て、樂土の元の姿を見せて居るのである。

琉球諸島の現在の生活―殊には内部―には万葉人の生

なし

なし

活を、其の儘見る事も出来る。又、万葉人以前の倭さへ窺われるものも、決して少なくない。私どもの古代生活の研究に、暗示と言ふより、其儘をむき出しにしてくれる事すら度々あつた。私は今、日琉同系論を論じてゐるのではない。唯、東欧西亜の民族と同系を論ずる態度と、一つに見られたくない。此論が回数を重ねるほど、私の語は、愈裏打ちせられてゆくであらう。

六 根の国底の国

七 楽土自ら昇天すること

奄美大島から南の鹿児島県下の島々は、どの点からでも、琉球と一と続きの血筋であるが、琉球の北端から真西に当る伊平屋群島をこめて、なるこ・てること言ふ理想国を考へてゐる。伊平屋は、南方のまやの国の考へも持つて居た様だし、琉球本島のにらいかないをも知つて居た事は、巫女の伝誦して居た神文をば証拠にする事が出来る。尚、琉球本島の宗教で、にらいかない以上のものとしたをほつかぐらと言ふ地の名さへ唱へた様である。本島では、天の事をあまみやと言つた様に見えるが、此も神の名あまみこ・しねりこから

全章段なし

記述なし

想像出来るあまみ・しねりも楽土の名から出たものらしい。をぼつかぐらなる天上の神の国が琉球の信仰の上に現れたのは、当時の人の考へ得た限りでの、全能な神を欲する様になつてからの事であらう。

私どもの今の宗教的印象を分解して見ても、幽冥界に属してゐる者は、一つに扱つて居る場合が多い。単に神の住みかと言ふだけではない。悪魔の世界なる内容も持つて居る。神・悪魔・死霊など、其性質に共通した点が少ない。其著しい点は、皆夜の世界に属する事である。

鶏鳴と共に頭明界ウツシヨに交替するからだ。一番鶏に驚いて事遂げなかつたのは、魔や霊に絡んだ民譚だけではない。神々すら屢鶏の時をつくる声の為に、失敗した事を伝へてゐる。尊貴な神にすら、祭りの中心行事は、夜半鶏鳴以前に完へる事になつて居る。わが国の神々の属性にも存外古い種を残してゐるので、太陽神と信じて来た至上神の祭りにすら、暁には神上げをしなければならなかつた。(A—二)

我が国で見ても、幽冥界カクリヨと言ふ語の内容は、

単に神の住みかと言ふだけではない。悪魔の世界と言ふ意義も含んでゐる。幽冥界に存在する者の性質は、一致する点が多い。其著しい点は、神魔共に夜の世界に属する事で、

鶏鳴と共に、頭明界ウツシヨに交替する事である。

民譚に屢出る魔類と鶏鳴との関係は固より、

尊貴な神の祭りすら、中心行事は夜

半鶏鳴以前ときまつてゐる。此で見ても、

わが国の神々の属性にも、存外古い種を残してゐたので、太陽神の祭りにすら、暁には神上げをしなければならなかつた位であつた。(B—二)

(P 四二四L十六〜四二五L四)

古今集大歌所の部と、神楽歌とに見えた^{ヒルメグ}昼目歌を見れば祭りの暁の気持ちは流れ込む様に、私どもの胸に来る。

昔になるほど、神に恐るべき要素が多く見えて、至上の神などは姿を消してゆく。土地の庶物の精霊及び力に能はぬ激しい動物などを神と観じるのも、進んだ状態で、記録から考へ合せて見ると、其以前の髣髴さへ浮んで来るのである。其が果して、此日本の国土の上であつた事か、或は其以前の祖先が居た土地であつた事を疑はねばならぬ程の古い時代の印象が、今日の私どもの古代研究の上に、ほのかながら姿を顕して来る事は、さうした生活をした祖先に恥ぢを感じるよりも、耐へられぬ懐かしさを覚えるのである。

庶物の精霊に「媚び仕へ」をした時代に、私どもの祖先の生活に段々力を持つて来、至上の神に至る階段になつた神と、神の国との話をせなければならなくなつた。

八 まれびとのおとづれ

古代程神に恐るべき分子を観じたが、海のあなただから来る神には、地物の精霊とは別で、単に崇^{ウツ}り神としての「媚び仕へ」ばかりでなく、邑人に好意を寄せるものとして迎へる部分があつた。だから、神の中に善神の考へ出されるのは、常住する地物の神にはない事で、時を定めて常に新しく来り臨む神の上からはじまるものと見るべきであらう。(P四二五〜五〇八)

この部分を書き換えて次章「まれびとのおとづれ」への糊付けとした。

祖先の使ひ遣した語で、私どもの胸にもまだある感觸を失はないのは、「まれびと」といふ語である。「まろうど」と言ふ形をとつて後、昔の韻を失うて了うた事と思はれる。(A—三)

まれびとの最初の意義は、神であつたらしい。時を定めて来り臨む神である。大空から海のあなたから、或村に限つて、富みと齡と其他若干の幸福とを齎して来るものと、村人たちの信じてゐた神の事なのである。

此神は宗教的の空想には止らなかつた。現實に、古代の村人は、此まれびとの来つて屋の戸を押ぶるおとづれを聞いた。音を立てると言ふ用語例の「おとづる」なる動詞が、訪問の意義を持つ様になつたのは、本義

「音を立てる」が戸の音にばかり偏倚したからの事で、神の來臨を示すほとくと叩く音から来た語と思ふ。まれびとと言へばおとづれを思ふ様になつて、意義分化をしたものであらう。戸を叩く事に就て、根深い信仰と聯想とを、未だに持つてゐる民間伝承から推して言はれる事である。宮廷生活に於てさへ、神來臨して門におとづれ、主上の日常起居の殿舎を祓へてま

まれびとはなにか。神である。時を定めて来り臨む大神である。(大空から)或は海のあなたから、ある村限つて富みと齡とその他若干の幸福とを齎して来るものと、その村の人々が信じてゐた神のことなのである。此神は、空想に止らなかつた。古代の人々は、

屋の戸を神の押ぶるおとづれを聞いた。

おとづるなる動詞が訪問の意を持つ事になつたのは、本義音を立てるが、戸の音にのみ聯想が偏倚したからの事で、

神の「ほとくと」と叩いて來臨を示した処から出たものと思ふ。

戸を叩く事について深い信仰と、聯想とを持つて来た民間生活からおしてさう信じる。

宮廷に於いてさへ、神來臨して門を叩く事実は、毎年くり返されて居た。(B—三)(P四二一)

はつた風は、後世まで残つてゐた。(A—三)

平安朝の大殿祭は此である。夜の明け方に、中臣、
 齋部イハムの官人二人、人数引き連れて陰明門におとづれ、
 御巫ミカムコ(宮廷の巫女)どもを随へて、殿内を廻るのであ
 った。かうした風が、一般民間にも常に行はれてゐた
 のであるが、事があまり刺戟のない程きまりきつた行
 事になつてゐたのと、原意の辿り難くなつた為に、伝
 はる事少く、伝へても其遺風とは知りかねる様になつ
 て了うてゐたのである。此よりも古い民間の為来りで
 は、万葉集の東歌アツメウタと、常陸風土記から察せられる東国
 風である。新嘗の夜は、農作を守つた神を家々に迎へ
 る為、家人はすつかり出払うて、唯一人その家の処女
 か、主婦かゞ留つて、神のお世話をした様である。此
 神は、古くは田嶋の神ではなく、春のはじめに村を訪
 れて、一年間の予祝をして行つた神だつたらしい。
 此まればととなる神たちは、私どもの祖先の、海岸を
 逐うて移つた時代から持ち越して、後には天上から来
 臨すると考へ、更に地上のある地域からも来る事と思
 ふ様に変つて来た。古い形では、海のアなたの国から

L三(五)九

記述なし

初春毎に渡り来て、村の家々に一年中の心躍る様な予言コトを与へて去つた。此まれびとの属性が次第に向上しては、天上の至上神を生み出す事になり、従つてまれびとの国を、高天原に考へる様になつたのだと思ふ。而も一方まれびとの内容が分岐して、海からし、高天原からするものでなくても、地上に属する神たちをも含める様になつて、来り臨む「まれびと」の数は殖え、度数は頻繁になつた様である。

私の話は、まれびとと「常世トヨコトの国」との関係を説かねばならなくなつた。

九 常世の国

常世の国は、記録の上の普通の用語例は、光明的な富みと齡との国であつた。奈良朝以前から既に信仰内容を失うて、段々実存の国の事として、我國の内に、此を推定して誇る風が出来て来た様である。常陸風土記に、自ら其国を常世の国だとしたのは、其一例である。

常世の国は、我が記録の上の普通の用法では、常闇の国ではない。光明的な富みと齡の国であつた。奈良朝になると、信仰の対称なる事を忘れ実在の国の事として、わが国の内に、こゝと推し当て、誇る風が出来て来た様である。常陸を常世の

人麻呂の作と推測される「藤原宮の役民の歌」を見て、「我が国は常世にならむ」と言うてゐるのは、藤原の都の頃既に、常世を現実の国と考へてゐたからである。此等から見ると、海外に常世の国を求める考へ方は古代の思想から当然来る自然なものである。出石びとの祖先の一人なる「たぢまもり」が、「時じくの香の木実を」採りに行つたと伝へる常世の国は、大体南方支那に故土を持つた人々の記憶の復活したものと見る事が出来る。此史実と思はれてゐる事柄にも、若干民譚の匂ひがある。垂仁天皇の命で出向いた処、還つて見れば、待ち飲ばれるはずの天子崩御の後であつたと言ふ。理に於て不都合な点は見えぬが、常世の国なる他界と、我々の住む国との間に、時間の基準が違つてゐると言ふ民譚の、世界的類型を含んでゐる事を示してゐる。浦島子の行つたのも、やはり常世の国であつた。此物語では、「家ゆ出で、三年のほどに、垣も無く家失せめや（万葉巻九）」と自失したまでに、彼土と此国との時間の物さしが違つてゐた。浦島の話は、更に一つ前の飛鳥の都の頃に既に纏つて居たものらしいが、早くもわたつみの宮とこのよの国とを一つにし

国だとしたのも其一例である。唯海外に常世を考へる事は、其から見れば自然である。（P四二七―二七五）

田道間守がときじくの―かぐのこのみを探りに行つたと伝へのある南方支那と思はれる地方は、かくの如き木の実の実る富みの国であつたのだ。けれど、此史実と思はれる事柄にも、民譚の匂ひがある。垂仁天皇の命で出向いたのに、還つて見れば待ち飲ばれる天子崩御の後であつたと言ふのは、理に於て不都合な点はないが、此は常世の国と我々の住む国との時間の基準が違つて居る他界觀念から出来た民譚の世界的類型に入るべきものが、かう言ふ形をとつたと見る事も出来る。浦島ノ子の行つたのも、常世の国である。此は驚くべき時間の相違を見せてゐる。而も、海のあるあの国と言ふ点では一つである。此話は、飛鳥の都の末には、既に纏つてゐたものらしいが、既にわたつみの宮と常世とを一つにしてゐる。海底と海の彼方とに区別を考へないのは、富みと齡との理想国と見たからだらう。（P四二七―五―一三三）

てゐる。海底と海のあなたとに相違を考へなくなつた事は、前にも述べたとほりである。

常世の国を理想化するに到つたのは、藤原の都頃からの事である。道教信者の空想した仙山は、不死常成の樂土であつた。其上帰化人の支那から持ち越した通俗道教では、仙境を恋愛の理想国とするものが多かつた。我国のどこよにも恋愛の結びついて居るのは、浦島の外に、ほをりの命の神話がある。此は疑ひなく、海中にある国として居る。唯浦島と變つて居る点は、時間觀念が彼此両土に相違のない事である。此海中の地は、わたつみの国と謂はれてゐる。此神話にも、富みと恋との常世の要素が十分にはいつて來てゐる。富みの豊かな側では、古代人の憧れがほのめいてゐる。海鯨の皮を重ね敷いた宮殿に居て、歛樂の限りを味ひながら、大き吐息一つしたと言ふのは、万葉歌人に言はせれば、浦島同様「鈍や。此君」と羨み嗤ひをするであらう。ほをりの命の還りしなに、わたつみの神の「釣り鉤や、呆鉤・噪鉤・貧鉤・迂鉤」と言ふのであつた。此鉤を受けとつた者は、これ／＼の不幸を釣り上げると呪ふのである。其上に水を自在に満干させ

常世を一層理想化するに到つたのは、藤原京頃からと思はれる。道教の信者の空想する所は、不死・常成の国であつた。其上、支那持ち越し

の通俗道教では、仙境を恋愛の浄土と説くものが多かつた。我が国の海の中の国に、恋愛の結びついたほをりの一みことの神話がある。此が、浦島の民譚と酷示して居るに拘らず違つてゐるのは、時間觀念に彼此両土に相違のない事である。常世の国と言はれた海のあなたの中の国には、わたつみの国を容れなかつた時代があるのかも考へる。けれども富みの方では、大いに常世らしい様子を備へてゐる。海鯨の皮を重ねて居る王宮の様などに、憧れ心地が仄めいて居る。歛樂の国に居て、大き吐息一つしたと言ふのは、浦島子にもある形で、實在を信じた万葉人は、「おぞや此君」と羨み嗤ひを洩らすのであらう。ほをりの一みことの帰ししなに、わたつみの神の訓へた呪言「此針や、おぼち・すゝち・まぢゝ・うるち」と言ふのは、おぼは茫漠・鬱屈の意の語根だから此鉤でつりあげる物は、ぼんやりだと言ふ意と思はれる。うる

る如意珠を贈つて居るのは、農村としての経験から出てゐるので、富みの第一の要件を握る事になるのである。貧窮を与える事の出来る神の居る土地は、とりも直さず、富みについても、如意の国土であつた訣である。

とこよと言ふ語が常に好ましい内容を持つてゐるに拘らず、唯一つ違つた例は皇極天皇紀にある。秦河勝が世人から謳はれた「神とも神と聞え来る常世の神」を懲罰した其の事件の本体なる常世神は、長さ四寸程の綠色で、黒い斑点のあつた虫だつたとある。橘の樹や蔓椒ホソキに寄生したものを取つて祀つたのである。「新しき富み来れり」と呼んで、家々に此常世神を取つて清座に置き、歌い舞うたと言ふ。巫覡の託言に「常世神を祭らば、貧人は富を到し、老人は少シカきに還らむ」とあつた。かうした邪信と見るべきものだが、根本の考へは、やはり變つて居ない常世並びに常世から来る神の内容を見せてゐる。

十 とこよの意義

とこよと言ふ語は、どう言ふ用語例と歴史とを持つて

は愚かの語根だから、鈍を釣り出す釣だと言ふ説が当る。まぢマヂのまぢはまづしの語根だから、日本紀の本注にもある通り、貧窮之本になる釣だと説いてよい。(すスはまた合点が行かぬ)する事なす事、手違ひになつて、物に不足する様になるとの呪詛を釣にこめる事を教へたのである。貧窮を人に与へる事の出来る詞を授ける王の居る土地だから、富みに就いても如意の国土と考へる事は出来る。皇極天皇の朝、秦ノ川勝が世人から謳はれた「神とも神と聞え来る常世の神」を懲罰した事件も、本体は桑の木の虫に過ぎないものに関して居た。此神も突発的に駿河に現れてゐるが、やはり海あなたから渡来したものと信じられて居たのである。其はどうでも、常世の神の神たる富みを、農桑の上に与へた神であつたのである。

(P四二七L十四～P四二八L十四)

みるか。とこは絶対、恒常或は不変の意である。「よ」の意義は、幾度かの変化を経て、悉く其過程を含んで来た為に、「とこよ」の内容が、随つて極めて複雑なものとなつたのである。

「よ」と言ふ語の古い意義は、米或は穀物を斥したものである。後には、米の稔りを表す様になつた。「とし」と言ふ語が、米穀物の義から出て、年を表す事になつたと見る方が正しいと同じく、此と同義語の「よ」が、齡、世など言ふ義を分化したものと見られる。更に万葉以後或は「性欲」「性関係」と言ふ義を持つたものがある。此は別系統の語かも知れぬが、常世の恋愛、性欲方面の浄土なる考へに脈絡がある様だからあげておく。

とこよを齡の長い義に用いた例は沢山にある。とこよと言ふ語は、古くは長寿者を直に言ふ事になつてゐる。だが、長寿トコヨの国の義から出たと説くのは逆である。「とこよ」の義には、まだ前の形があるのである。「常

一体よと言ふ語は古くは穀物或は米を斥したものである。後には米の稔りを言ふ様になつた。としと言語が米又は穀物の義から出て年を表す事になつたと見る方が、正しい様であるとおなじく、同義語なる「よ」が、齡・世など言ふ義を分化したものと見られる。更に「よ」と言ふ形に、「性欲」「性関係」と言ふ義を持つたものがある。此は別殊の語原から出てゐるのかも知れないが、多少関係があるから挙げる。

常世を齡の長い意に使うてゐる例は沢山にある。私の考へでは、常世を長命の国と考へたのは、道教の影響かと思ふのであるが、常世の国を表す用語例の外に、長命の老人をさして、直に「とこよ」

世の国に住みけらし」と万葉人が老いの見えぬ女の美しさを讃へたのは、長寿の国の考への外に「恋愛の国に居たから」と言ふ考へ方も含まれてゐる様である。とこよの第一義は、遙かに後までも忘れられずにゐた。奈良盛時の大伴坂上郎女が、別れを惜しむ娘を論じて「常夜にもわが行かなくに」と言うたのは、海あなたを意味したものと取れるが、多少さうした匂ひをも兼ねて、其原義をはつきり見せたのである。宣長も、冥土も黄泉などの意にとつて、常闇トコヨミの国の義としゐる。常闇は時間について言ふ絶対観でなく、場処について言ふもので、絶対の暗黒と言ふ事である。此意味に古くから口馴れた成語と思はれるものに、「常夜行く」と言ふのがある。かうした「ゆく」は継続の用語例に入るもので、絶対の闇の日数が続く義である。「皇后（神功）南の方、紀伊の国に詣りまして、太子に日高に会ふ。……更に小竹宮コタケノミヤに遷る。是時に適りて、昼暗きこと夜の如し、已に多くの日を経たり。時人常夜行くと言ふ」と日本紀にあるのは、此暗さを表すのに、語部の口にくり返されたと思はれる。成語を思ひ合せて、「此が昔語りの天窟戸の条に言ふ天照大

と言ふ例もある。だが昔見たより若返つて見える人を「常世の国に住みけらし」と讃美した様な言ひ方もある。記紀の古い処にあるから其程も古いものとは言はれまい。大体長者者のとこよは、常世の国の意義が絶対の齡即不死の寿命を言ふ意に固定してから岐れたものと見るが正しからう。（P四二八七五〜P四二九七八）

大伴ノ坂上ノ郎女の別れを惜しむ娘を論じて「常夜にもわが行かなくに」と言うてゐるのは、後世の用語例をも持ちながら、原義を忘れて居ない様である。宣長は三つの解釈の中、冥土・黄泉など言ふ意に見て、常闇の国と言ふ意味に入れて説いてゐる。此などは、海のあなたの国といふ意にも説けるから、字面の常夜にのみ信頼しては居られない。だが、「常世行く」と言ふ―おそらく意義は無反省に、語部の口にくり返されて居たと思はれる―成語は、確かに常闇トコヨミの夜の状態が続くと言ふに疑ひがない。

（P四二二七四〜P四二三七二）

神隠れて常夜行くと言うたあり様なのだ」と考へたものであらう。此常夜は、ある国土の名とは考へられて居なかつたやうに見えるが「とこよ」の第一義だけは、釈る様である。併し尚考へて見ると、単純に「常夜の国に行つてる」やうなあり様と言ふ感じを表す語であつたかも知れない。さう思へば、古事記の「爾高天原皆暗く、葦原中つ国悉スデに闇し。此に因りて常夜往く……」とあるとこよゆくも甚固定した物言ひで、或は古事記筆録当時既に、一種の死語として神聖感を持たれた為に、語部の物語りどほりに書いたものであらう。第一義としての常闇の国土となる「とこよ」が、祖先の考へにあつた事は想像してよい。

「とこ」は絶対の意の語根で、空間にも時間にも、「どこ〜までも」の義を持つてゐる。常夜は常なる闇より、絶対の闇なのである。(P四二三L五〜L六)

此「常夜」は、ある国土の名と考へられて居なかつたやうであるが、此語の語原だけは決るのである。

さうすると、常世の国は古くは理想の国土とばかりも言はれなかつた事になり相である。(P四二三L二〜四二三L四)

※本対照表において、……「……」は加筆された箇所を、——「——」は訂正箇所を示す。ただし本表は、本文相互の対照関係を明らかにする目的のため、すべての箇所について施してあるわけではない。
 ※両本文は新編集決定版『折口信夫全集』に拠つた。「古代生活の研究」の本文は収録頁順に、「とこよ」と「まれびと」とについては収録頁数を末尾に示した。

終章 生成論研究の地平へ

活字印刷技術が生み出したのは印刷物である、という理屈は正しい。しかし逆に印刷とは印刷物をつくることであるという一見自明のように信じられていることがらは果たして正しいのか。

確かに人から発せられた文字の集合体が社会的に認知され、読解されるに至るには、活字の総体、つまり「印刷物」という全く同じ内容をもつ最終形態が平等に提供されることが必要であり、またそれが「作品」として享受されるためには、「ある水準」において完成していることが求められる。それに向けた作業はほぼひとつながりにつながっているというのが、「作品製作」の基本的構造になっている。草稿の段階で放棄されたり、推敲や校正刷りで削除訂正されたりしたものは、工程から排除され刊行されることはないから、一般の読者の眼に触れることはできない。

つまり工場においてさながら流れ作業のように製品化されていく間の作品製作の過程は、すべて「達成された水準」という意匠をまとった製品の完成のための一連の「作業」にほかならず、そうした「作業」はことごとく「印刷物」という最終形態に対して奉仕するものである、ととりあえずは認識される。

このことは現代においても、明治大正期においても、活字文化を考える上ではそれほど大きな違いはない。(もちろん、電子メディアの発達、普及によって印刷メディアに起こった革命的事態、作品生成と「印刷」との間に異なった地平が出現していることについては、今は触れない)

印刷技術の発達によって、人々が情報というものにひとしく触れることができ、一方渴望する事態となった近代とは、活字文化が繁栄を謳歌する時代として、一つの社会システムが出来上がった。「活字化されたもの」がいわばその表現の総体、すなわち作品の「本文」であり、最終的なゴールとみなされた。そこに至る道筋で生み出された様々な「字の連なり」、すなわち草案、手帖、手控え、メモ、草稿、ゲラなどは、レベルの差はあれ、すべて「本文」に奉仕するものとして理解された。作品内容が本文に到達すれば通常はすべて捨て去られる運命にあった。それは作者自身にとっても、編集者においても同じことで、仮にたまたまそうしたものが残されていたとしても、作品制作の階

梯を跡付けるために残しておこう、という意志に基づくものは極めて稀であり、恐らくそれはほとんどが別の理由による。

基本的には、「活字になる」(すなわち本文が誕生する)ということは、創作過程において燦然と輝く三角点に到達することであった。完成品に至る前に未完成のまま打ち捨てられたものは、その段階では完成品とは認められずに闇に葬られることになるのである。

我々は、こうして活字文化という社会システムの中に組み込まれることで、本文作成のための直線的作業の真实性を信じ、それに従事させられてきた。その間、活字によって提示された最終形態の姿こそある意味で絶対であると信じてきた。

文学研究において、初出誌や草稿などを精査するのも、実はこの本文確定という確信、つまり本文主義に基づいている。その段階においても、草稿の類は本文に奉仕している。

作品製作の過程で、創作者は常に「推敲」という営為を繰り返して来た。推敲は単に「本文」製作のための、つまり完成品到達のための一つの営為ととらえるのが一般的だが、果たしてそれでいいのか。作者の感性を通過して言語化されこの世に出現した文字の連なりは、とりあえず何らかの形で記録される。それが単なるメモであっても、下書きの類であっても、作者がそれを作品化しようと企図すればまず間違いなく「推敲」を試みる。それはいわば近代作家のみに許されたほとんど秘儀的といってもいい個人的な行為である。この行為は、個人の意思のもとに、その能力と力量によって行われるもので、他者や共同体の意思は基本的には入り込まない。別の観点から見れば、創作者であれば誰もが経験する「推敲」という行為は、作品が生み出されていく過程の中で作者が自らと自らにあるものを表現させている何者かとの間で繰り広げる、いわば無言の一人劇であるといっても過言ではない。作者はその舞台で作品に対してどのような行いも可能である。近代とはそれが作者個人に許された時代なのである。

もちろん作者の意識の中に「本文」製作、つまり印刷物作成という最終目標が応分に含まれているだろうことは予想されるが、しかしそれがすべてではないことはこれも自明である。「推敲」と「校正」という行為の間にある懸隔がそれを物語る。求められる水準とは、最終本文が要求するなにかと創作者が希求するなにかがせめぎ合った中で生まれてくる中間品に過ぎないはずである。しかし本文が出来上がった時、このせめぎあいの事実、つまり作者が個人劇の舞台でどのように演じたかといういきさつは生産過程の中に隠されてしまい、我々はそれを窺い知ることができない。活字にされた本文だけが「作者の意思を十分に生かした結果」として我々に提示されることになる。

一方近代以前の本文の誕生はどうか。たとえば、「平家物語」の様々な異本を眺めた時、そこには「写本」という営為によって誕生した様々なバリエーションの本文を認めることができる。しかしそれは「作品を作る」という個人的意志によって生み出されたものではない。師の語りを正しいものとしてある閉ざされたコミュニティにおいて、通時的または空間的に「伝達する」という目的の結果にすぎない。したがって、どれがより「平家」であるか、あるいはどれがより原態に近いかなどという議論は、あまり意味がない。「伝える」意志に支えられた「写す」という行為のみが基盤にあるからである。

折口が言うように、写本の途中でいくつかの意思や錯誤が偶然入り込むことで、あるいは文学発生の一つの現場を見ることはできようが、しかしそれは「写す」行為の本質を決定的に覆しはしない。写本は全て通時的、共時的に「残すため」に正しく写されなければならないという意志に支えられてきたのである。

このように語りや演劇といった要素を内包するテキストは、その生成の現場には必ずある一定のコミュニティにおける他者の意思が介在する。あるいは、口述筆記の場での口述者と筆記者、あるいは観客と演者というように少なくとも二人以上の人間が介在する。同じものを作ろうとすれば、別の他者が筆記をすることで、また異なったものが生み出される可能性は十分にあるが、こうして生み出されたテキストは、ところどころに変異を生じていても、それは

決して「推敲」という名の作業で統一化されることなく、それぞれが本文として通行する。

作品の完成ということよりも、作品の伝達だけが目的だからである。

つまりテキストの生成において、原体から同心円状に広がりを持つ形で生み出されていくテキストと、原体から直線的に生み出されていくテキスト、大きく分ければこの二つのテキスト生成の在り方が想定されるのである。

折口信夫は活字の持つ絶対性というものをあまり信じていなかった節がある。それは、彼の執筆の在り方、あるいは残された彼の原稿類、加筆資料類のありようを見れば容易に導き出される仮説である。

現存する折口関係資料には様々な位相のものが含まれているが、なかでも、活字化された雑誌や単行本の当該箇所を切り取って解体し、あらたにそこに加筆をして再び編集しなおすといった形態の資料が、多く残されている。同じように、折口文庫に架蔵されている折口所有の単行本や雑誌を開くと、自らが執筆した個所に加筆が施されている例が多い。

折口信夫のテキストについては、「折口学」という一種の完成品の枠組みが幻想されたために、著者によって常に「新しい」部品が付け加えられ完成に向かって組み上げられつつあったもの、つまり折口が最後に手を入れたものこそ折口学の完成品に近いテキストである、と信じられてきた。また全集等の編纂においても、そうした主義が踏襲された。しかし果たしてそうだろうか。この作者生前において、もともと最後に位置するテキストが、いわば作品の完成品であるという認識は、そのまま受け止めていいものだろうか。直線的な活字文化のシステムを作者の作品生成の場にそのままあてはめていいのか。これは決して折口だけの問題ではない。しかし折口は、いや折口が残していった様々なテキストはこうした課題を我々に切迫した形で我々に突きつけている。

例をあげてみよう。

大正五年に文會堂書店から刊行された『口訳万葉集』巻一、巻二に施された加筆は、原態をとどめないほど改稿されており、それぞれが全く別のテキストと違っていいほどの変貌ぶりを示している。しかも折口はそれでも飽き足らずに、数度に亘って訳しなおしをしている。

今管見する限りにおいて、「口訳万葉集」のうち巻一から三にかけてのテキストは以下の四種類が、それぞれレベルの差なく並立している状況が生まれているのである。

- (一)『口訳万葉集』文會堂版刊本⁽¹⁾
- (二)『口訳万葉集』文會堂版に加筆訂正されたもの—『新全集』では「口訳万葉集(改稿)」⁽²⁾
- (三)『定本万葉集』に加筆訂正したもの—新全集では「迢空万葉集」⁽³⁾
- (四)牛島軍平を相手に改めて口訳を口述筆記したもの—口訳万葉集(新訳)その他⁽⁴⁾

これらのテキストの位置づけを考えると、一般的には最後に訳された「新訳」がいわば作者の意思が入った最終本文ということになるのだが、事はそう簡単ではない。読解分析すればわかるが、これらはいわばバラテキストであり、ある完成に向けて進化しているものではない。ある時は元に戻り、ある時は全く別の発想に支配され、それはさながら、台本のない劇を見るかのようだ。「改稿」「推敲」という行為が、テキストの生成というメカニズムを考えたと同時に優れた決定稿へと直線的に進んでいくということにはならないということだ。折口にとって、活字として刊行されたものが最終的な「決定稿」ではなかったのである。それはある意味で、折口の作品生成のありようを考える上でかなり決定的なことのようにも思える。

作品生成の過程にある推敲、改稿という行為を、単に活字メディアのシステムの中で論じるのではなく、一つの作品生成のドラスティックな現場としてとらえる必要があるだろう。

すなわち、近代において、作品は社会的認知をされるまでは作者の所有物であり、作者はその所有物と一対一で対

峙しながら葛藤と試行錯誤を繰り返している。その現場が「推敲」「改稿」という行為であり、その結果として様々な草稿や加筆原稿が残されたのである。作品生成の過程にちりばめられた様々なパラテキストをそのままに読み込んで、そこに見え隠れする作者の葛藤を読み取ることこそ大事であろう。折口が残した様々なテキストは先に述べた終わりのない無言の一人劇であり、それぞれの場において作者と作者を突き動かすなにかとの間のせめぎあいの記録なのである。仮に、こうした行為が最終的に活字という社会的認知を得るための過程であったとしても、それはもう一つの創作の場面として見、輻輳するテキストの評価をきちんと行い、その作者と作品との葛藤のシナリオをきちんと復元することが求められよう。⁽⁵⁾

折口信夫が残こしたテキストは、そうしたことを切実に欲していると私には思われるし、またそれに耐える堅固なテキスト群であると考ええる。

これだけの膨大な一次資料を残してしまった我々にとつて、これからの折口信夫研究は、こうしたテキストとの闘いになるだろう。

注

(1)「口訳万葉集」は、『国文口訳叢書』の第三・四・五巻に、『万葉集』上・中・下巻として、東京神田尾小川町の文會堂書店から、情感は大正五年九月一八日、中巻は大正六年五月一七日、下巻は同年五月一八日に刊行された。定価は上・中巻が一円五〇銭、下巻が一円であった。当初は、下巻の巻末に一五〇ページほどの「万葉集事典」を付ける予定であったが、本編の分量が多くなったために別冊となった。

著者が口訳のために使用したのは、東京博文館より刊行されていた『日本歌学全書 万葉集』第九・十・十一編の三巻本であった。このほかに注釈書の類は一切使われていなかった。『日本歌学全書 万葉集』は、佐々木弘綱、佐々木信

綱の口中で、万葉集の巻一から巻六までが第九編に、巻七から巻一三までが第十編に、巻十四から巻二十までが第十一編に収録されている。欠落している歌が幾首かある。

- (2) 「口訳万葉集」(改稿)は、『国文口訳叢書 万葉集』初版本(上巻と下巻のみ)の余白に著者自らが書きこんだ加筆訂正で、上巻、冒頭から一二八頁、国歌大観番号の巻一・一番歌から巻三・四一四番歌までを収録した。巻一への加筆はそれほど多くなく、二十九首のみに黒インク或いは緑インクで加筆されている。巻二・三はほとんどの歌に加筆が施されている。使用されているインクは、八五番歌から三三七番歌までは赤、黒、茜色のインクで、三三八番歌から三五七番歌までは橙のインク、黒鉛筆、三五八番から三五九番歌までが黒鉛筆のみ、三六二番歌から三七四番歌までが黒インクとピンクの色鉛筆、それ以降は橙色のインクとピンクの色鉛筆が使用されている。歌の頭に国歌大観番号が記入されているものもあり、それも一番歌から三六五番歌までが黒インクで、それ以降はピンクの色鉛筆で書き込まれている。このことは加筆訂正が数次にわたって行われたことを物語っている。

また、文會堂初版本で抜けている歌を補っているほか、左注、題詞、一云などについても補っている。こうした増補は、余白に余裕がない場合、二百字詰の緑罫原稿用紙を切り抜いて貼り付けてある。

歌に直接かわる加筆訂正のほかに、歌の語句、内容に関しての覚え書きが、数箇所書き入れられている。

- (3) 「逍空万葉集」は、佐佐木信綱、武田祐吉編『定本万葉集』一(岩波書店・昭和十五年二月二十八日発行)の巻一・二の白文及び訓みに句読点と著者独自の訓みを加筆し、その余白に口訳を書き入れたものである。余白に余裕がない場合は、無地紙、罫紙、グラフ用紙など様々な用紙に口訳を記入し、当該頁に貼り付けてある。

ペンは、白文・訓みへの加筆には橙色のインクを使用、口訳には紫と黒のインクを使用している。時代を反映して、天皇・天子・皇后などの上を一字空けるように指示がなされている。

そのうえで、加筆をした『定本万葉集』を解体して、その扉から六六頁までを和綴じにし、表紙には厚い光沢紙を用い、

裏紙を付けて自装してある。

そのおもて表紙には、上部に飛鳥時代の寺院と思われる建造物が赤インクで、中央に狼が黒インクで、下部に二上山を背景にした当麻寺の風景が黒と紫のインクでそれぞれ描かれている。さらに中央に大きく「迢空万葉集」と縦書きで墨書してある。裏表紙には、正面遠方に大きな島、手前に二本の松の生えた砂山を配し、波打ち際に三人の赤裳を引いた女官が描かれている。さらに、背景全体を黒く塗って、絵が明るく浮き出るような工夫がなされている。おそらく万葉の歌を絵画化したものと考えられる。

この書き入れ本の加筆は、巻一・一番歌から巻三・二三八番歌まで、口訳は巻一・一番歌から巻一・一二八番歌までに施されている。

(4) 原稿用紙の種類、筆跡の違いなどから分類して、三種類現存する。すべて浄書原稿の如くであるが、著者の手が入る以前の口述筆記原稿である可能性もある。これらの原稿はすべて國學院大學折口博士記念古代研究所に保存されている。

(一) 上部を糊綴じされた緑野二百字詰原稿用紙百枚一冊分を、切り離さず使用したもの。三冊現存する。三冊とも表紙がついている。筆跡はすべて同一人物のもの。

(a) 表紙に〈改造社「改造文庫」 昭和訓万葉集 第一〉と黒インクで筆記されている。四十一枚目までの用紙を使用し、万葉集巻一・一番歌から六一番歌までの訓みのみを筆記している。

(b) 表紙に〈改造社版 改造文庫 昭和訓万葉集 第三〉と黒インクで記されている。用紙は、途中一枚飛ばして九十七枚目までを使用し、万葉集巻三・二三五番歌から四八三番歌までの訓みのみを筆記している。

(c) 表紙に〈折口信夫先生 昭和訓万葉集 巻第五〉と黒インクで記されている。用紙は七十四枚目までを使用し、万葉集巻五・七九三番歌から九〇六番歌までの訓みのみを筆記している。

筆記の内容から考えて、昭和四年頃に刊行が計画されていた改造文庫『万葉集』のために用意されたものと推定される

原稿である。

昭和四年五月二十三日に改造社文庫の一冊として発行された著者の処女歌集『海やまのあひだ』巻末の目録を見ると、「改造文庫第二部目録」として、

第二篇 万葉集（上巻） 折口信夫校訂 （近刊）

第三篇 万葉集（下巻） 折口信夫校訂 （近刊）

とある。また当時大森の家に著者と同居していた牛島軍平が、この時期に著者が改造社から口訳万葉集の改訂版を出すことを意図して、牛島相手に口訳を進めていたという証言（牛島軍平「その時から」）を残していることから、この改造文庫『万葉集』は、著者にとって恐らく「口訳万葉集」の改訂版として位置づけられていたとも考えられる。

(5) この考えのステップに至るまでに、松澤和宏『生成論の探究』（平成十五年六月、名古屋大学出版会）に多くの教示をうけている。

初出一覧

第一章

第一節 「旅―短歌と学問とを架橋するもの」

『釈迢空・折口信夫―その人と学問』（小川直之編 折口博士記念古代

研究所 平成十七年四月 おうふう）

第二節・第三節 「「叙事詩」と「語部」について―折口語彙の相対化―「詩の形式と内容」

歌誌『白鳥』第十二卷

第一号（平成十七年一月）から第十五卷第四号（平成二十年四月）まで連載していた「折口信夫研究」に加筆・修正を施したもの。

第四節 「釈迢空「非短歌」の意味」書き下ろし

第五節 「「非短歌」と東北探訪」

『遠野物語と21世紀―東北日本の古層へ』（石井正巳・遠野物語研究所編、平成

二十二年四月、三弥井書店）に「折口信夫の「非短歌」と東北探訪」と題して発表したものに加筆修正を加えたもの。

第六節 「「うみやまのあひだ」の変相」

『國學院雑誌』第一〇五卷第十一号（平成十六年十一月）に「うみやまの

あひだ」の変相」と題して発表したものに加筆修正を加えたもの。

第七節 「分節する歌集―『天地に宣る』論

『芸術至上主義文芸』第二十六号【特集：戦争文学】（平成十二年十一月）

に同題で発表したものに修正を加えたもの。

第八節 「未刊行本『歌虚言』―「虚構」の問題」

歌誌『白鳥』第十七卷第一号（平成二十二年一月）から『同』第

二十卷第一号（平成二十五年八月）まで断続的に連載した「折口信夫研究―生成論の地平へ」を大幅修正したもの。

第二章

第一節 「生き口を問ふ女」の構想 『國學院雜誌』第九十三卷第三号（平成四年三月）

第二節 「自伝的小説の系譜」書き下ろし

第三節・第四節 「生き口を問ふ女」の続稿 「生き口を問ふ女」と「神の嫁」 歌誌『白鳥』第十五卷第十号（平成二十年十月）から同第十六卷第七号（平成二十一年七月）まで連載した「折口信夫研究―初期小説の位相」の修正を加えたもの。

第五節 「死者の書」のテキストとその生成 『古典評論』第二次第二号（平成十年九月）に「死者の書」のテキストとその生成（一）として掲載したもの。

第三章

第一節 「語部論」の揺籃―折口信夫の発生 『折口博士記念古代研究所紀要』第八輯（平成十七年三月）に「折

口信夫 語部論の周辺」と題して掲載した論考に修正を加えたもの。

第二節 「わかしとおゆと」―折口信夫と金沢庄三郎 『芸術至上主義文芸』第二十号（平成六年十一月）に同題で掲載したもの。

第三節 「古代研究」と国学の再興―折口信夫と柳田國男 『文学・語学』第二〇七号（平成二十五年十一月）に「柳田國男・折口信夫と国文学研究」と題して掲載した論考に修正を加えたもの。

第四節 「昭和五年の折口信夫―東北・新野探訪の意味―」 『國學院雜誌』第九十九卷第十一号（平成十年十一月）。

第五節 「柳田國男の「郷土」と折口信夫の「郷土」」 『岩手郷土文学の研究』第二号（平成十三年三月）に「郷土」から「郷土研究」そして「郷土文学」へ（二）―柳田國男の「郷土」と折口信夫の「郷土」と題して掲載したもの。

第六節 「古代生活の研究」本文成立をめぐって 『國學院雜誌』第一〇八卷第一号（平成二十一年一月）に、「折口信夫『古代生活の研究』本文成立をめぐって―『古代研究』試論（1）」と題して掲載した論考に加筆修正を加えたもの。

終章 「生成論研究の地平へ」 『白鳥』第十六卷第十号（平成二十一年十月）に「折口信夫研究―生成論へ」と題して掲載した論考に大幅な加筆修正を施したもの。

【著者略歴】

松本 博明（まつもと ひろあき）

1956年 埼玉県川越市生まれ。

國學院大學文学部卒業。同大学院博士課程後期単位取得満期退学。

現在、岩手県立大学盛岡短期大学部教授

現住所 〒020-0015 盛岡市本町通1-7-1-908

折口信夫の生成

2015年3月20日 初版印刷

2015年3月25日 初版発行 定価は、カバーに表示してあります。

著者 ©松本博明

発行者 坂倉良一

印刷所 電算印刷(株)

発行所 (株)おうふう

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-54

Tel. 03-3295-8771 (営業)

03-3295-8774 (編集)

(振替) 00140-2-665242

造本には充分注意しておりますが、落丁・乱丁などございましたら、小社かお買い上げ書店にておとりかえいたします。

ISBN978-4-273-03741-3 C3092